

魂魄妖夢  
四番勝負

折葉坂三番地



# あらすじ

---

冥界白玉楼の庭師にして、西行寺家  
剣術指南役、魂魄妖夢。楼観剣、白  
楼剣の庭師の双剣を手に、少女は並  
み居る強敵に立ち向かう。

地底に赴き、旧地獄街道の鬼との決  
闘に向かう「魂魄妖夢鬼退治」。

黒雲を呼び雷鳴を起こし、人里を脅  
かす鶴と戦う「妖夢討夜鳥事」。

かつて師・妖忌に敗北を刻んだ聖尼  
公との決戦「命蓮寺六道問答」。

咲かぬ妖怪桜西行妖を巡り、死神に  
挑む「華胥の櫻 墨染の君」。

以上四編のほか、白玉楼の日常を描  
く閑話・三編を収録。

## 1 魂魄妖夢四番勝負

## 目次

魂魄妖夢鬼退治	3
◆閑話・一	56
妖夢討夜鳥事	61
◆閑話・二	120
命蓮寺六道問答	125
◆閑話・三	197
華胥の櫻 墨染の君	203



魂魄妖夢鬼退治

## ▼ 一

常冬の地底には、今日も変わらず雪が舞う。

辺りに籠る澱んだ土の匂いは、地の下に積もり積もった怨讐がもたらしたもののか。見上げた頭上に空はなく、ただ苔むした岩肌が天を塞いでいる。

ここは地の底。忘却の旧都。

忌み嫌われ、地上より追い遣られた妖怪達が住まう、旧き地獄街道。その終端、宿場の繁華街からも遠く離れた一角の、廃屋だけが立ち並ぶ寂れた通りに、ぼつぼつと鬼火が舞う。

雪舞う中に青白く燃える炎は、朽ちかけた街並みの中にふたつの影を浮かび上がらせていた。

片や、朽ちた巨木の根元にどつかと腰を下ろし、大きな朱杯を掲げた一角巨躯の鬼。

片や、腰と背に大小の二刀を帯び、ひと抱えほどの幽霊半身

を隣に漂わせた、小柄な半人半霊の少女。

「なあ。どうだ、たまにや刃物は仕舞って一杯付き合わないかい？ こっちは年中地面の下だから、肴なんて雪くらいしかないがねえ」

朱塗りの大杯をぐいと干し、星熊勇儀はにいつと牙を覗かせる。肌蹴た羽織の下に手を入れて、まるで緊張感のない姿だ。

が、対峙する少女は些かも気を緩めることはなかった。  
「……いえ、申し訳ありませんが、遠慮します」

静かに告げ、白玉楼の庭師、魂魄妖夢は静かに楼観剣を抜き放った。鞘を腰に納め、刃渡り四尺七寸の大太刀を澱みなくひたりと正眼に構え、真っ直ぐに勇儀に相對する。

一見、まだ幼く手足も伸び足りていない少女の体躯は、しかし正確に宙に刃先を定め、その切っ先を僅かなりともぶれさせることはなかった。

すらりと伸びた反りの浅い刀身の峰に、降り積む雪の結晶が触れてはすうと溶けてゆく。

「そうかい。残念だねえ」

それでもなお、勇儀は動きを見せずにいた。立て膝のまま、背後にもたれかかる酒樽から、ざぱりと大杯に酒を掬いあげ、ぐい、と一息にそれを呷る。

およそ、妖夢の知る鬼というものは、暇さえ有れば四六時中酔っ払っている底なしの酒好きであったが——地底の鬼もこれまた、負けず劣らずの酒豪であるらしい。

一つ、違つとすれば。

「どうしたい、来ないのかい？」

星熊勇儀はそれに輪をかけ、こうした力比べを好むということ。

「——参ります」

片目をつぶり、牙を覗かせての挑発の言葉に、妖夢は静かに身を沈め、地を蹴った。

小さな体軀の中に、引き絞り蓄えられていた力を解き放つ。踏み出す足はわずか三步で疾駆となり、妖夢は放たれた矢のごとく勇儀の元へ駆け翔んでゆく。

迎え撃つ勇儀は、立て膝のまま身を起こし、振り被つ

た腕を力任せに薙ぎ払った。さして力を籠めたとも見えない腕の一振りは、鬼の桁外れな臂力を示すかのように、大地を深々と抉り剥がす。

ごう、と月をも砕く剛腕が迫る中、妖夢はさらに速度を上げた。深く踏み込み、真横に打ち振るわれる勇儀の爪の下を、低い姿勢でくぐり抜ける。

同時、なみなみと酒を湛えていた酒樽が真二つに裂け、鬼の至宝たる紅の大杯が、酒を零しながら宙に舞った。

一閃十滅の楼観剣が白刃を煌めかせ、勇儀の喉元へと跳ね上がる。

「あっはっはっは!! いいねえ、そうさ、そうでなくちゃあ困る!!」

巨木の下より跳ね起きた勇儀は、宙に身を躍らせると同時に、真下から掬い上げるようにもう一方の爪を振るっていた。

どん、と空気が真二つに引き裂かれ、廃墟をびりびりと震わせる。

五本の爪が地を割り砕き、白く水蒸気を棚引かせて妖

夢の頭をがち割らんとする。

頭蓋を真下から狙う勇儀の剛腕の前に、妖夢はさらに深く足を踏み出し、腰を落としていた。

地面に腹這いに伏せるような超低空の姿勢を保ち、なお速度は緩めない。一段と低くなった少女の頭上を、鬼の臂力がわずかにかすめた。髪留めのリボンが千切れ、風圧に揺れる銀髪がはらりと揺れる。

「そこだっ!!」

爪の先が頬を擦るのにも構わず。大地を支えに紙一重で鬼の一撃を躲し、妖夢は勇儀の懐へ飛び込んでいた。握る一刃を深く突き出すと同時に、鈍い手応えが庭師の腕を震わせる。

だが、次の瞬間には少女の双眸は驚きに見開かれていた。

「っ!？」

右腿を狙って斬り付けた楼観剣の切っ先が、あろうことか、勇儀の片掌でがっきと掴み取られていたのだ。

恐るべきは鬼の臂力。およそ剣術には在り得ない手筋

に、思わず楼観剣を引き戻さんとする妖夢。

が、それを阻むように少女の腕に鬼の嵌める手枷が絡みついていていた。軋る金音を響かせ、庭師の身体はそのま宙を舞った。

「はっはア!!」

哄笑と共に、勇儀は苦輪の鎖に繋がれた妖夢の身体を振り回した。まるで頭陀袋ずだぐろのように妖夢の身体は宙を踊り、地面へと容赦なく叩き付けられる。

「——ぐあ、っ!!」

剥き出しの岩盤に背中から叩き付けられ、息が途切れる。背中の激痛に咳き込んで身を起こせば、

「いくよ」

そこには既に、拳を固めた勇儀の姿。

構えをとるよりも早く、妖夢の鳩尾に、ギリリと握り込まれた鬼の拳が撃ち込まれる。

ごん、と腹に大穴を開けるような衝撃。勇儀の拳は深々と少女の腹にめり込んで、刹那に肋あばらをへし折って脊髄までを貫き、妖夢の意識を刈り取った。

咄嗟に跳ね上げた鞘の上から馬鹿力でぶん殴られ、妖夢は地下の都の街の外れまで、水平に地面を跳ね飛ばされてゆく。

庭師の小さな身体は二つばかり倒壊寸前の廃屋を貫いて、瓦礫に激突し、なおも高く跳ね転がる。

「……が、っ」

意識を失っていたのは数瞬のことであつたらしい。自分を受けとめて倒壊した瓦礫の中から這い出した妖夢は、喉奥に込み上げてくる血と鉄の味に思い切り顔をしかめ、咳き込んだ。

覚束ない手足に活を入れ、刀を杖に身を起こす。

その前にはすでに勇儀の姿があつた。手にした杯に残る酒精の雫を舐めとって、いささか呆れた風に表情を緩める。

「——あたしも大概、他のやつのかんじえやしないが、頑丈だねえ」

「鍛えていますので」

虚勢を張って立ち上がる。

脳髓の揺れを堪え、頬の血を拭って。妖夢は額に力を込めてぼやける視界の中に勇儀の巨軀を見据える。

半人半霊という種族には、痛みになんにも耐性があった。手酷く痛めつけられている側の人の身体は妖夢の半身であり、普通の人間に比べれば痛みも傷も半分換算となる。

それでもなお、受けた傷は決して少なくない。ふわりと隣に浮かぶ半身にそっと背中を預け、妖夢はゆっくりと楼観剣を構えなおす。

「で、今日はこのへんでお仕舞いにしとくかい？」

ぺろりと手指についた酒を舐め、勇儀は言う。先程の攻防などまるで意に介していない。彼女にとってはこの程度の受け攻めなど精々じゃれ合いのようなものなのかもしれない。

事実、酒を一樽ばかり無駄にされた以外はまるで無傷の勇儀に対し、妖夢には頬に血をこぼす深い裂傷をはじめ、手足にも数え切れぬほどの擦過傷、打撲傷が見て取れる。傍らを浮かぶ半霊までも、心なしかその色合いを

薄くしているようだった。

さながら、満身創痍の乙女を嘲りいたぶる地の底の悪鬼の体である。

だが。

「いえ、まだ、やれますっ」

こつも明白な実力差を前に、妖夢の心は、いまだ、些かも揺らいでなどいなかった。

よろめく足を踏みしめ、荒れていた呼吸を一息で丹田の底へと押し込み、余った呼吸を一気に吐き出す。

大きな吐息が旧都の街並みに白い靄をつくる中、妖夢は手にした大太刀をぱちんと鞘へと納めた。

その、刹那。

「――人符『現世斬』」

静かに、その声は――剣閃の後から飛んできた。

ほんのわずか、妖夢の身体が前に沈み込んだと見えた瞬間。庭師の姿は勇儀の遥か背後へと駆け抜けており、楼観剣は静かな鐸鳴りだけを響かせて、再び鞘へとおさまっている。

斬撃の余波が、一拍遅れて旧都の街並みに閃光を刻む。

抜く手も見せぬ居合い一閃。二百由旬の庭を駆け抜けた鍛えた脚力が可能にする、半人半霊の庭師最速の剣。

神速の一閃は、狙い違わず勇儀の脇腹から胸にかけて深々と斬り込んでいた。

が――

「ぐ……!!」

眉を寄せ、わずかな苦悶を上げたのは、斬られた勇儀ではなく、斬ったはずの妖夢のほう。

およそ斬撃の手応えとはかけ離れた、鉄棒で大岩を殴りつけたごとく衝撃だった。痙攣する手指で辛うじて刀を取り落とすことだけは避け、妖夢は奥歯に苦い鉄の味を噛み締める。

「今のがとっておきかい？ ま、確かに速い。」

……けど、それだけだ」

残心を取る妖夢の前で、勇儀はぱんぱんと脇腹を叩いてみせる。まともに楼観剣に切り込まれたはずの、裂けた羽織の下から覗く鬼の肌は、傷一つなく綺麗なものだ。

その身は鐵くろがね、あるいは緋金あかがね。

鬼の肌は、鋼よりもお硬いという。が——この鬼の桁外れの頑強さは、岩を、鋼鉄を斬ったことのある妖夢をして、いまだ触れざる頑強さを誇っていた。

妖夢が動揺を表に出していたのはほんのわずかな時間であつたろうが、それを黙って見逃す勇儀ではない。笑みを見せながらがつきと牙を噛み合わせ、虚空をつかむように手を広げた。

渾身の力をそこに握り込むように、みりりと骨を軋ませ拳をつくと、振りかぶった一撃を打ち放つ。

——鬼符「怪力乱神」

地底の天蓋すらも揺るがす爆音が、轟く。

符名の宣言こそあつたものの、そも、それは技と呼べるものであつたろうか。語られる怪力乱神、星熊勇儀にとってはその一撃一撃すべてが、まさしく必殺なのだ。

重ね卍を描く弾幕の群れと共に、立ち並ぶ廃屋が根こ

そぎ吹き飛ぶ。視界を埋める弾幕の中、爆音を伴い、雪崩をうって押し寄せる瓦礫の前に、妖夢の反応がわずかに遅れた。

刹那。

「——ッ」

恐ろしく早く鋭い蹴爪が、ざくりと妖夢の額を抉る。咄嗟に身体を仰け反らせた妖夢の顎先を、勇儀の蹴足がかすめていた。

あと一瞬、反応が遅れていれば頭が案山子のようにもぎ落とされていただろう。勇儀は切り札にもなるであろう高威力、殲滅型の広域破壊スペルカードを、無造作に四にして妖夢との間合いを詰めていたのだ。

底知れぬ鬼の怪力に、ぞくりと、少女の背筋を悪寒が走る。

その恐れが、庭師の動きを硬くした。

あ、と思った瞬間には、土埃を裂いてぬうと突き出した鬼の手が、妖夢の頭をみしりと掴んでいた。

繰り出された丸太のような膝が、鼻先に炸裂。鉄と炎

の味が、少女の喉奥に散る。

「ッあ……っ」

口中に血の味がこみ上げ、遠のく意識の中、妖夢はじやらんと軋む鎖の音を聞く。

激痛に、胃の腑に氷のような怖気が流れ込む。

「……まだ、っ」

薄れる意識を懸命に繋ぎとめ、妖夢は鬼の拘束を脱し身を翻す。

今度は大きく距離を取ることはしない。勇儀の左へ踏み込むと共に、見開いた両眼で前を見る。

迎撃のため、大きく拳を振り上げた鬼の巨軀へと。

額から流れる血に、紅く霞む視界の中、心の中に芽生えかけた畏怖の心をねじ伏せて、さらに前へと、深く踏み込む。

(疾さを選べば威力で劣る。鬼相手じゃ通じないっ！)

胸中で確認するよつに、息吹を吸い込み、楼観剣を正眼に構え、脇を締めて柄尻に小指を絡める。

爪先から頭の先まで、全身を巡らせて練り上げた剣気

を四尺余寸の太刀刀へと澱みなく注ぎ込み、

「——なら、これだ!!」

吐き溜めた息吹と共に、妖夢は大上段に振りかぶった太刀を、太鉈のように斬り下ろす。

——断迷剣「迷津慈航斬」

それは、魂魄妖夢の剣において、まさに必殺最強の一撃。

その名の如く一切の迷いを断ち、真っ向斬り捨てる、小細工も打算も無視した、馬鹿正直な太刀筋だ。

だが、そうして単純明快であるがゆえに、その剣はもともとよく妖夢の性根を<sup>あらわ</sup>顕した技でもあった。

ゆえに、その一太刀に斬れぬものは、殆どない。

ず、がんツツ!!

地底を揺るがす爆音を響かせて——



渾身の一太刀が振り下ろされる。

「……そん、な」

妖夢の驚愕は、果たしてこの日何度目であつたろうか。

そこにあつたのは、楼観の一刀をその身に受けた鬼の屍——ではなく。

にいと口元を緩めた、勇儀の姿。

「成る程、ねえ」

鋼鉄の手枷がじやらりと鎖を鳴らす。

勇儀はまたも、その巨きな掌で必殺の切っ尖を受けとめていた。四尺七寸の刃先を、鬼の指がみりりと掴みあげる。

ありったけを籠めた一撃すらも捌かれたことに、妖夢は動揺を隠せなかった。

なぜ、と叫んでこいかなかったが、その問いは表情に出ていたのだらう。勇儀は楽しそうに、空いた手の親指でとん、と自分の胸を示し、笑う。

「鬼が力比で負けちゃ、格好がつかないだらう？」

妖夢はその時、楼観剣の柄を離せずにいる。

師が遺したこの刀は、彼女にとって命と同等に大切な、自分と不可分の存在だった。

楼観、白楼の双剣と共に己の技を磨く事を誓った日から、この二振りは妖夢にとって唯一無二の愛刀なのである。

楼観剣を失うことを恐れ、手離す事を一瞬躊躇したことは、悪手とは言え決して責められるものではない。

そしてまた、勇儀が敢えてそのような防御を選んだのは、妖夢を逃がさぬためでもあった。

「さて、そんじゃこつちも見せてやらなきゃね」

そう言い、鬼が一步を踏み出したと同時に。

ずずん、と地殻が揺れた。

旧都の一角には勇儀を中心にして同心円状に亀裂が走り、地面が陥没して深々と大穴を穿つ。

まさに、灼熱地獄の底を踏み抜かんばかり。比喻抜きで地底を揺るがすほどの一步を、星熊勇儀はその地に刻んだ。

「一撃必殺つてのは、こうやるのさ」

思わず見上げる妖夢の眼前、まるで天を衝くばかりに巨大に、迫る鬼の姿があった。

割れた大地から噴き上がる溶岩の上、額の一角を振りかざし、みしりと肉を軋ませ骨をたわませ、固めた拳が高々と振りがぶられる。

——四天王奥義「三步必殺」

「——っ!？」

慌てて腰裏の短刀、白楼剣を抜き放ち、構えを立て直す妖夢だが——

「遅い」

二歩めの踏み出しが、妖夢の目前へと迫り、

あ、と声を上げる暇もなく、じやらりと手枷に残る短い鎖を鳴らして、勇儀の巨きな手爪が視界を埋める。

ずん、と大地を揺るがす三歩めの踏み込みと共に、地底の都を閃光が染め。

妖夢の意識は、そこで闇に落ちた。

## ▼ 二

微かな水音に眼を覚ませば、背中は板の上でぎしぎしと軋みを上げている。全身が鉛を流し込まれたように重く、鈍い痛みを訴えていた。半分は人、半分は霊。全人零霊のただの人間よりはましたが、それでもやはり痛いものは痛い。

「う……」

こみ上げる咳に数度身体を丸め、固まりかけた血の混じった唾を吐いて、妖夢はようやくその場に身を起す。もはや見慣れてしまった旧都への入り口となる大きな橋。そのたもとに、いつものように妖夢の身体は投げ出されていた。

地底をとんとと流れる河は、変わらず静かな水面を薄闇の中に覗かせている。

「……ぐ、っ……」

鬱血した打撲に、痣の痕。痛む四肢が熱を持ち、脈動するようにずきんずきんと腫れ上がる。手足のあちこちで新しい傷が服の布地に張り付き、ぱりぱりと不快な音を立てる。

欄干に背中を預けて痛む身体を休め、少しずつ呼吸を整える。全身をまさぐって傷をあらため、手足の骨折や特に酷い怪我がないことを確認すると、妖夢は這うようにして河原に降りた。

流れる河面に、まだ腫れの引いていない顔が映る。

「……酷い様だ」

傷口に染みるのを我慢しながら、妖夢はざぶざぶと河に踏み入って、血と汚れを落とすはじめた。かつては顕界と地獄を隔てた彼岸の河瀬だが、半人半霊の身にはただの清流である。

肋は兎も角、手脚の骨や腱は無事で、まったく動けないわけではない。が、満身創痍なのは間違いない。数日は治療に専念せねばならないだろう。傷を洗い、包帯を巻き、特に怪我の酷い部位には荷物の中から膏薬を取り

出して貼り付けてゆく。

(一人で包帯を巻くのが、だいぶ上達したな……)

なんとも締まらない話に、思わず苦笑が漏れる。

「ふう……」

手当てを終え、一息をついて。最後に土埃と汗に塗れた顔を洗い、手拭いを額に押し当てる。ひんやりとした冷たい水が頬に心地よい。

嗽<sup>うがい</sup>をすれば口内の傷がちりちりと染みた。

続いて妖夢は腰から外した二振り、楼観剣、白楼剣の点検を始めた。もともと妖怪を斬る為に鍛えられた刀、容易く痛むものではないが、それでもあらためるに越したことはない。

脆くなっていた目釘を取り替えて、打粉<sup>うちこ</sup>を払い、丁子油<sup>あぶら</sup>を引く。さらさらと流れゆく河面を眺めていると、ようやく余裕の出来た心に先刻の手筋が蘇<sup>よみがえ</sup>ってくる。

「うーん、あれでも敵わないか……」

口元の懷紙を丸めてぱちんと双剣を鞘に納め、腕組みをして妖夢は唸った。

妖怪の山の四天王、怪力無双の“力”の勇儀。

鬼がとにかく強い生き物だとは解っていたつもりだが、改めて格の違いを見せつけられた格好だ。彼我の実力差をあそこまではっきりと思い知らされてしまえば、悔恨よりも感心が先にあった。

痛む肋骨に顔をしかめつつも、石の転がる河縁から、橋のたもとに引かれた莫塵<sup>もじん</sup>(ごき)の上へと腰を下ろす。

そこには、暦代わりに日付を刻んでいる岩があった。

既に三十を超えた傷の下に、今日の分を刻みつけ、妖夢は嘆息する。

「参ったな。あんまり長居もできない……はずだったんだけど」

「……また負けたのね」

頭上からの声にふと妖夢が振り仰げば、いつのまにか、橋の欄干に寄りかかる影が一つ。

常冬の旧都の橋守る、嫉妬を操る橋姫。水橋バルスイ。限の浮いて病んだ目元をさらに陰鬱にしかめた彼女は、ひたすらに不機嫌に口元を歪めたまま妖夢を見下ろして

いた。

「……パルスィさん」

「もう阿保らしくて妬む気にもなれないわ」

包帯だらけの妖夢に視線を移し、パルスィは見せ付けるように大きく溜息。

「ねえ、これで何度目?」

「……十四度目、です」

「いいかげん諦めたら?」

「そういう訳にもいかないんです。その、いろいろ事情があります」

自分の不甲斐無さに、妖夢は静かに吐息した。

勇儀との果たし合いは、これまでの十四戦すべてが妖夢の完敗という結果に終わっている。勝ち星どころか一矢報いることすら果たせていないのが現状であり、地底の妖怪達の賭けの対象は、すでに勝負の行方から、妖夢の黒星がどこまで増えるかに移っていた。

妖夢は現在、この橋のたもとに間借りをしている。

これまでも数度、勇儀からは旧都の宿への滞在を勧

められていたが、鬼退治に來た自分がそれでは格好がつかないと、妖夢はそれを断り続けていた。

ならばと紹介されたのがこの旧都の大橋であり、パルスィなのだが——鬼との決闘には一向に進展がなく、嫉妬の橋姫の視線は日に日に険しくなるばかりだ。

「……馬鹿馬鹿しいくらいに糞真面目ね」

「それしか取り得がありませんから」

「馬鹿にしているのよ?」

解ってるの? とばかりに半眼で言ってくるパルスィ。妖夢の鍛錬を日がな一日こうして彼女が眺めているのも、ここしばらくの日常になっていた。

橋上で呆れた顔をする橋姫は、しかし憎まれ口を叩きながらも、あれこれと妖夢の世話を焼いてくれた。余所者の自分が妖怪ばかりの旧都に馴染めているのも、彼女の計らいによるものである。不思議に思った妖夢が理由を聞いてみても、帰ってくるのは実に不機嫌な表情と、

『……貴方、私がここから離れられないのが解ってて言

ってるの？　ねえ。そう言ってるのよね？」

という苛立ち混じりの言葉。そのくせ妖夢が橋を出て行こうとすれば、パルスィはますます不機嫌になって引きとめるのだ。

(……どういふ心境なんだろう?)

その態度の理由が、妖夢にはいまち解らない。

「……ああ、もうっ」

パルスィはごしごしとこめかみを擦りながら毒づく、欄干を飛び降りた。そのまま無造作に河原を歩いて、座り込んだままの妖夢へと歩み寄ると、真新しい膏藥の貼られた頬をべちんと手のひらで叩く。

「うくっ……!？」

傷の痛みに妖夢が思わず呻きをあげれば、パルスィは見なさいとばかりに眉を振って妖夢を睨んだ。

「いい加減気付きなさいよ。なんなのそのザマは」

「……これは私の未熟ゆえです。幸いにして、ひどい怪我もありませんし、何日かすれば——」

「当たり前よ。手加減されてるに決まってるじゃない。

今時、鬼退治なんて酔狂なこと言い出す人間、あいつが見逃すはずないじゃないの」

「はあ」

半分は幽霊ですけどね、と付け足した妖夢をまるで無視して、パルスィは小さく首を振った。

「鬼なんてね、ロクな妖怪じゃないのよ。周りの事は考えないし、こっちの都合なんか考えずに好き放題だし。

文句付けてやろうにもまともに話も通じない。あいつらはね、楽しいかそうでないかくらいしか感じないのよ」

「そんなことはないと思いますけど。いつも私の我儘に付き合っていて頂いています」

「……それが馬鹿馬鹿しいってのよ。つくづくお目出度いわね、貴方って。……いい？　鬼ってのは、勝負を挑んでくる相手を放っておく訳ないの。

貴方は何度も諦めずに挑んでるつもりなんだろうけど、逆なのよ。あいつが飽きるまで勝負に付き合わされてるだけ。そのうち適当なところで負けてくれるわ。」見事だ、人間にしては良くやるな」って、上から目線のまま

ね」

だから馬鹿なのよ、と。

殊更に憎まれ口を強めて、パルスィはぼつりと続ける。

「……嫌われたくないのよ、人間に。あんなに何度も何度にも裏切られて、こんな地の底まで逃げておいて、それでもまだ、人間を信じたがってる。

……本當、馬鹿みたい」

爪を噛みながら。パルスィはまるで自分のことのように、辛そうな表情でそう口にして、妬ましいわ、と最後に付け加えた。

ちらりと横目で妖夢を睨むと、嫉妬の橋姫は再び橋の上へと戻り、くるりと踵を返す。

「どんなに卑怯な手を使われても、裏切られても、それを受け止めてやるのが度量だなんて馬鹿なこと考えて、勝手に決めて一人で背負いこむのよ。本當に馬鹿。不意打ち騙し討ち上等でいつでもかかって来いなんて、どれだけお人好しなのよ。

……だから、貴方のやってる事は全部無駄。一人相撲

もいいところなの。わかったらさっさと諦めなさい」

言いたいことを一方的に言い捨てて。反駁など聞く耳持たぬとばかり、パルスィは背を向けて橋の向こうへと去ってゆく。

「あ……」

妖夢は思わずその背中に手を伸ばしかけ——無駄な。とか、と諦めて続く言葉を飲み込んだ。

実際、酔狂なことをしているなという自覚は、妖夢にもある。なぜ自分がここに来ているかといえは、それは至極単純な理由で、しかも共感も得られないだろうことも確実な、いまさら説明するのもどうかと思われる程度のものである。

それでもあえて語るのならば、その始まりはこんなふうだった。



冥界は白玉楼。輪廻を待つ死後の魂が訪れるこの地で

も、顕界と変わらず季節は巡る。長い階段を昇った先の庭で、日毎柔らかなる土の下から、緩む寒さとともに若芽がその芽を膨らませていた。

近づく春の足音を感じさせる穏やかな午後。主居室の縁側でお茶を傍にうつらうつらと目を細めるのは白玉楼の主、西行寺幽々子。妖夢はそんな主人の様子を脇目に、二刀を手に東庭の剪定をしていた。

その広さ二百由旬を誇る冥界の庭の管理は、西行寺家の剣術指南役とともに、妖夢が師から受け継いだ役目である。

「……………」

たった一人でこの広大な庭を世話するのには、想像以上の体力を使う。これも鍛錬の一つなのだ。朝から晩までかかってもまるで終わりの見えない庭を前に、妖夢はただひたすらに無心となって双剣を振るい、手早く伸びた庭木を刈り落としてゆく。

そんな時だった。

「……ねえ妖夢」

「はい？」

池脇の石を組み直し、樹齢四百の幽霊椿の枝を整えていた妖夢へ、ふわあ、と気の抜けた欠伸とともに、幽々子の声がかかる。

「その枝は残しておきなさいな」

「え」

ぴくりと、両の手に構えていた刀を止めて、妖夢は思わず身を竦ませた。けれどまさに今、深い考えもなしに切り落とそうとしていた枝のすれすれを、薄く楼観剣の刃が撫でる。

あ、と思った時にはもう遅かった。一振りで幽霊十匹を斬る鋭い切っ先が、椿の枝をほとんど抵抗もなく切り落とす

ざん、と地面に落ちた梢を前に、

「あらあら」

幽々子は相変わらず、どこを見ているのか分からないふわふわとした口調でそう言う、はむり、と美味しそうにお茶受けの雪見大福を口へと運んだ。



数秒の沈黙の後、妖夢は幽々子へと向き直り、頭を下げる。

「……も、申し訳ありませんっ」

「駄目ねえ、妖夢」

呆れたように吐息を挟み、幽々子はのんびりとお茶を啜った。

「今日のお昼ご飯も、少し塩が濃かったかしら」

「……う。……すみませんでした。幽々子様」

立て続けに失態を指摘され、妖夢はますます小さくなるばかり。

亡霊らしくふわふわと、何も気にせず辺りを漂っている様でありながら、幽々子の言動はいつも真理を突いている。特に今日は妖夢自身、疎かになっている部分があることを自覚していたゆえ、その重さはなおさら際立っていた。

「本当、妖夢は何をやらせても半人前なのねえ」

「うぐっ」

痛いところを突かれ、思わず苦悶が漏れる。

半人半霊、という自分の出自にかけて、白玉楼の主がそう評するのは常日頃からのことだ。

これは不満ではなく、従者の不出来を問い詰めているわけでも、反省を促しているわけでもなかった。幽々子が言うのはいつも事実そのままで、だからどうしろ、ということと言外に含めることをしない。だからその言葉を受け取り、どうするかはあくまでも妖夢自身の判断になる。

そこを測り損ねると、空回りするのは自分だ。

春雪異変、三日置きの百鬼夜行、永夜異変、六十年周期の大結界の綻び、緋色の霧の異常気象。繰り返された騒動の中で、妖夢はそのことによりやく気付いていた。

「……修業中の身ゆえ、ご迷惑をおかけします」

「そうねえ。もっとしっかりしてくれないと困るわ」

さして気にした風もなくそう言いながら、残る大福を口へと運び、幽々子はお茶を啜る。

自覚はしていても、やはり仕える主に面と向かってそう言われると、堪えるものはあった。

師・妖忌があれだけ鍛錬を積んでなお、自身を道半ばと言っていたのだから——その小指にも満たない自分の歳で、それを悔いても仕方のないことだ、とは思つ。

思いはするが、それで今の不足が補えるわけではない。

(……………)

西行妖を巡る、春雪異変の後より、妖夢は深く、己の未熟を感じるようになっていた。

自分の力が及ばぬゆえ、自分の思慮が及ばぬゆえ。幽々子の重荷となっているのではないか。その迷いは、いくら鍛錬を重ね、日々の役目をこなし、異変に臨み、問答を繰り返しても、必ず妖夢の心のうちに残った。

幽々子はそれすらも楽しんでるそぶりを見せていたが、それに甘えてはならないのだらうと、妖夢はそう考えている。

「そうだ!」

妖夢がひとり物思いに沈んでいると、突然、幽々子はぱあつ、と顔を輝かせて立ち上がった。空色の袖をぽんと打ち合わせ、無邪気な顔で妖夢を見やる。

「ねえ妖夢、いいことを思いついたわ」

「……何でしょうか?」

「妖夢に、早く一人前(オトナ)になってもらうのよ」

「は、はあ……」

ウインクを伴う微妙に怪しげな言い回しに、返答がつい胡乱げなものになってしまったのは、仕方のないことだらう。

こういう時は大抵、幽々子が脈絡もなく突拍子もないことを言い出すのだと、妖夢は経験上、嫌と言うほど思いつ知っている。

「妖夢、鬼を斬ってきなさい!」

……そして今回。ぱっと扇子を広げて幽々子の下した命もまた、やはり例に漏れずその通りだった。



忌み嫌われた地底に住む鬼のことは、妖夢も人伝に耳にしていた。

妖怪の賢者にして神出鬼没のすきま妖怪を友人に持つ西行寺幽々子が、幻想郷についてのことで知らないということは少ない。

地底の旧地獄に住むかつての山の四天王、星熊勇儀。幽々子は彼女をさして、妖夢の修練に丁度いい相手だと言つてのけたのである。

(鶴の一声、というのはああいうのを言つたんだろうなあ)  
思い返しながら、妖夢は静かに苦笑する。

——古来より、武士は怪異を斬つて名をあげる。

源頼光に渡辺綱、俵藤太、源三位頼政。有名どころを上げるだけでもきりが無い。彼らもまた、妖異を斬つてその勇名を轟かせ、知らぬもののなき英傑となつた。

ちようど都合のいい相手がいるんだから、是非そうないそれがいいわと一人盛り上がる幽々子の言葉に従い、妖夢は地底に赴き——以来一月以上も、勇儀に挑み続けているのであった。

その成果は、御世辞にも芳しいとは言えない。

鬼を斬る。冷静に考えればかなりの無理難題であつた

はずのそれを、さして気にもせずすんなりと受け入れてしまつたのは、油断もあつたのだろう。

(……自惚れていたのかもしれない)

妖夢は幻想郷に名のあるもう一人の鬼、小さな百鬼夜行、伊吹萃香と、三日おきの宴会騒ぎで戦つた経験がある。それをもつて鬼というものを見切つたつもりになつていたのは間違いない。

だが、かつての大江山の四天王、星熊勇儀は、妖夢の想像の埒外にある強大な相手だったのである。

「勝手に侮つて、負けたんだ。誇られたって仕方ないよね……」

今にしてみれば、宴会異変の時の立ち会いは命名決闘法スベルカトルルに基づき、異変解決の一環としての儀礼のような意味合いが強い。

幽々子が命じたのはそれではなく、古来より鬼が好み人が挑んだ、鬼と人との力比べであつた。

地底との交流は長期間にわたり禁じられ、相互の行き来も長らく途絶えていたが——昨年の間欠泉の異変をき

っかけに地上との折衝が持たれ、徐々に規制緩和が始まっていた。

妖夢の来訪はその一環と位置付けられ、冥界という所屬と幽々子の推挙もあってさして苦勞なく地底まで赴くことができたのである。

妖夢は、まず初めに勇儀との面会のために彼女が逗留しているという旅籠を訪れた。

恨み骨髓の敵討ちでもあるまいし、であればこちらから日時や場所を一方的に指定するわけにもいかない。まずはそれらを取り決めることが必要で、勝負を申し込む側が出向くのが筋だろうと考えたのだが――

「はっは、そんなもん、決めることなんかないだろう。お前さんが好きな時にかかってきな。行住坐臥、いつだって相手になってやるよ」

旧都街道の宿場街を根城にする一角鬼は、酒盛りに賑わう座敷の一番奥に陣取って、大杯片手にぶは、と酒氣漂う息を吐いて豪氣にそう言い放った。

「いちいち真面目だねえ。融通が利かないってえぼうが

近いかもしれないが。鬼退治に筋を通そうなんぞ、頼光達に見せてやりたいもんだ」

からからと豪快に笑ったかと思うと、勇儀は口元に牙を覗かせて剣呑な笑みを浮かべる。

その豪放磊落な氣性は、妖夢の眼にも好ましいものに映りはしたが、妖夢とて劍士の端くれ。夜駆け不意打ちなど不本意である。もとは勇名のためとはいえ、あくまで自分は腕試しに赴いたのだ。

「その、お心遣いは嬉しいですが、さすがにそう言う訳にも――」

騙し打ちのような真似はしたくない。そう言いかけた妖夢を、勇儀の双眸が強烈な殺氣と共に打ちすえたのはその時だった。

凄まじい視線に射竦められ、身動きの取れなくなった妖夢の頬から顎へ、つうと汗の雫が滴り落ちる。

「それともなにかい。あたしは、お前さんに正々堂々真っ向から、さあ今からお前を斬るぞとお報せしてもらわにやならんほど、腑抜けて見えるのかい。

……いやあ、あたしも舐められたもんだねえ？」



(……我ながらなんという浅薄だ)

結局その日が、妖夢が勇儀に対して最初の一敗を刻んだ日となった。分をわきまえない己の振る舞いは今思い出しても頬が熱くなるほどで、妖夢は気恥ずかしさに転げ回りそうになる。

己が未熟であることは、常日頃自身に言い聞かせていることだというのに、このさまで鬼を討ち果たせると思いい込んでいたのだから笑えもしない。

さあ果たし合いだ、いざ尋常に勝負………と言えは聞こえはいいが、自分の腕も弁えず、遙か格上にそれを求めることは、どれほど相手の誇りを貶めていることになるだろう。剣を握って三日の若造が思い上がりの果てに、天下無双の剣豪に真剣勝負を挑み、命があるだけでも大温情ではないのか。

妖夢が仕合いを申し入れ、勇儀は何時でも何処でも構わないと答えた。ならば、挑む側がそれ以上何を付け加えられるというのか。

鬼とは、そうして戦いの中、自らの誇りを築いてきたもののだから。

(器が、違つんだな……)

勇儀は数多の裏切りや卑劣悪業も構わず飲み込んで、その言葉を枉げず、堂々正面から相対し打ち破ってきた。行住坐臥、常にもって強者であるとは、そういう事なのかもしれない。鮮烈なまでの鬼の生き方に、痛む頬をそっと擦りながら、妖夢はふと、そんなことを思った。

## ▼ 三

暗く湿った地の底にも、変わらず朝はやってくる。太陽を臨むことはできないこの地でも、どこからか薄明かりが差し、鬼火が薄れてゆくことで、妖怪達は自分たちの時間が終わることを知るのだ。

「さて」

河の畔で目を覚ました妖夢は、いつものように手早く干飯と梅漬けの朝餉を済ませ、日課の型取り五千回を始めた。

まだ包帯の取れない身体は当然ながら本調子ではなく、動かした手足には痛みを伴う。それに顔をしかめながらも、しかし妖夢は愚直に同じことを繰り返してゆく。

じっと横になって傷の治りを待っていると、身体はその姿勢に相応しい形に固まってしまふ。だから、少々痛んでも身体は動かしていたほうがいい、と。師にはそう

教わっていた。

指折り数えるでもなく、日常になるまで馴染んでしまつたここでの毎日。

「もうひと月になるのか……」

ふとした拍子に自分のいない白玉楼を思い描き、あれこれと氣を揉んではみる妖夢だったが、基本的にはあれこれとそつなくこなす亡霊の姫は、案外庭師が居なくても変わらない日常を過ごしているのかもしれない。そろそろ紫も冬眠から目覚めるころだ。久々の再会を楽しんでいることだろう。

「……………」

あまり愉快ではない想像が脳裏をよぎり、妖夢は雑念をふり払って型取りに集中する。

剣の道とは繰り返す。日々の修練、欠かさぬ鍛錬。ただひたすらに剣をふるい、それを飽きることなくひたすらに繰り返す。師より教わった技と心、その一つ一つを、自分自身の血肉へと変えるために。

己が身こそがひと振りの刀であるようにと、妖夢は忘

我の中でそれに没頭してゆく。

斬ればわかる——

それが、師の教えの中でも一際深く妖夢の記憶に刻まれている言葉だった。先代の剣術指南役、魂魄妖忌は孫への数多くの教えの中に、ただの比喩としてそれを語ったに過ぎないのだろうが——妖夢にとってその言葉は何よりも強く心に残り、己の剣の根幹となっている。

もっとも、以前にその言葉の上っ面だけを真似て、手酷い目に遭ったこともある。思えばそれがあの騒がしき百万鬼夜行、伊吹萃香との出会いだった。

「……………ん？」

一心不乱に素振りをしていた妖夢だが、ふと違和感を覚えて手を止める。

全身はすでに湯気を吐くほどに温まり、爪先までが汗に塗れていた。ほう、と吐いた息が雪の散る河原に真っ白く凝り、ほどなくして水音に溶け消えてゆく。

「……ねえ」

汗をぬぐう妖夢の視線の先。いつの間にか橋の上には、

欄干に背中あずけ、斜視をさらに険しくして爪を噛む橋姫の姿があった。

「いい加減、嫌にならないの？ 貴方。主人のわがままで、こんなことさせられてるんでしょ？」

これまでよりもさらに強く。言葉にも態度にも、鋭い棘を込めるようにして、パルスィは妖夢を睨みつける。その視線にいつもと違う気配があることを悟り、妖夢は眉を潜める。

これまでもパルスィが呆れや軽蔑に近い感情を垣間見せる事はあったが、今日のそれは敵意と呼ばれるものに近い。

地の底に深く澱む、忌み嫌われた気配が、呪詛となつて橋の上を満たしてゆく。

「全然解ってないようだからはっきり言っておげる。貴方は馴染んでるつもりかも知れないけど、邪魔なの。鬱陶しいのよ。……事情だかなんだか知らないけど、早く出て行って欲しいの。貴方だって、こんなとこに居るのなんか嫌でしょ？」

「ご自分の守る場所を、こんなところなんて言うのはどうかと思います。パルスィさん」

「……呆れるくらいおめでたい頭ね。半分しか分からないからかしら。私が好きでこんなところに居るとでも思ってるの？ 妬ましいわね」

土蜘蛛。橋姫。彼女達は共に、歴史の中で鬼と呼ばれた妖怪たちだ。

人間が「自分とは違う」ものを排斥することで生まれた妖怪。そんな彼等は、忘れられたものが流れ着く幻想郷においても、疎まれ怖れられ、地底へと追いやられた。旧地獄はそんな嫌われ者たちの集まりなのだ、かつてパルスィは妖夢に語ったことがあった。

「……いいわ。そんなに鈍いなら、きちんといい知らせをあげてもいいのよ？ 私たちが何なのか」

呆れたように嘆息して、パルスィは陰鬱に呟いた。

ゆらりと、橋の上に満ちた呪詛の気配が膨れ上がる。

パルスィの背後で、緑色の眼をした怪物がおもむろにその眼を見開いた。

——妬符「グリーンアイドモンスター」

橋姫の執念を核に膨れ上がった緑眼の怪物は、低く唸り声をあげながら滑るように妖夢へと迫る。

その小柄な身体を噛み砕かんと、顎（あぎと）を開く緑眼の怪物を前に、妖夢は反射的に腰の刀へと手を伸ばし

「——、」

ひたりと、白楼剣の柄尻を、抜刀はせぬままに怪物の鼻先へと突き付けていた。

「やめてください、パルスィさん」

気迫と視線だけで唸る緑眼の怪物を制し、その場へと押し留める。

「……なんのつもり？」

「私が命じられたのは、鬼を斬ることです。恩義ある方に刃は向けられません」

「恩義？ 憐れみの間違いじゃないの？」



嘲るようにパルスィは唇を歪める。しかし妖夢は静かに首を振った。

「……いえ。それに、こうしたやり方は好みませんから」  
パルスィが何か言うよりも早く、妖夢は剣の柄から手を離し、待ち構える緑眼の怪物へと、自ら一步を踏み出した。

途端、緑の怪物は大きく顎を開いたまま、まるで霧散するように弾け、妖夢を傷つけぬまま消え失せてゆく。

スペルの意味を看破され、パルスィが息を飲む。

「——自惚れでなければ。パルスィさんは、私だって鬼だと、そう言ってくださっているんですね?」

「っ——!!」

その、橋姫の絶句が、全ての答えだった。

鬼を討って来いという主の命に背くものではないから、勇儀の代わりに私を討てと。パルスィはそう言っているのだ。

橋姫とは、橋が壊れぬよう橋脚の下に埋められた人柱でもある。パルスィがことさらに捻くれた物言いをする

のは、嫉妬心だけからではなく、自己犠牲がその内にあるからだと思っていた。

「ば、馬っ鹿じゃないの!? お人好しにも程があるわ、貴方っ。あいつに勝てるわけないから、忠告してあげてるんじゃないのっ。それをっ——思いあがらないでよね、妬ましいっ!!」

誤魔化すように言葉を継いで、パルスィはぶいと妖夢に背を向けた。

……そう。パルスィは、決して勇儀の名前を口にしない。会話の上でそれがどれだけ不自然であってもだ。

まさか知らない訳もないだろう。そうやって勇儀の名を呼ぶのを避けるということは、常から彼女の名について気を払っているのと同じことだ。聞いていてこれほど分かりやすいこともない。

嫉妬の橋姫という身において、それがどれだけ大切なことか。枕を並べる程度の事など、比べ物にもなるまい。色恋沙汰にはとんと鈍いと自他ともに認める妖夢でも、それくらいことは察することができた。

もっとも、当人はその自覚はないようだし、認めることなどもないだろうが。

(ひよっとしたら、私も——)

同じように。いつしか、あの、勇儀の人柄(?)に魅せられてしまっているのかもしれない。

そんなことを思い、妖夢は苦笑する。

二の句を次げぬままのパルスィを前に、妖夢は剣を下ろして、旧都の街を見上げた。空を覆う天蓋の下、ちらちらと白い雪が闇の中を舞ってゆく。

「鬼、というものがどうして疎まれなければならなかったのか。不思議に思います」

妖夢は、いつしか地底の妖怪たちに強い共感を覚えて、いる自分に気付いていた。

パルスィも、ヤマメも、勇儀も——そして、地霊殿の主たちも。彼女たちは皆、自分たちが忌み嫌われる妖怪であることを、些かも恥じていない。

自分たち地上の者が、彼女達を前に、後ろ暗い想いを覚えたというのならば。それはかつての彼らを地下に追

いやったことへの罪悪感に他ならないのだ。

人間が鬼を排斥したことで、彼等のそんな生き方が生まれたのだとしたら。半分だけの人の身とはいえ、その種としての責は妖夢にもあるのかもしれない。

(……だから勝てない勝負でも悔しくない……のかな?)  
自分の剣の師である祖父は、永らく漂泊の中に身を置いて、さまざまな戦いを経てきたという。

その弟子としての身の上ゆえか、白玉楼の剣術指南という肩書きで刀を握るゆえか。

かつて鬼と人とが戦いを繰り返した絵巻の時代の血が、鍛えられた剣の技や型という形で、妖夢にも受け継がれているのかもしれない。

「違うか。……自惚れだな。きっと」

負けた理由を探すならともかく、勝てない理由を探しては本末転倒だ。

またひとつ自分の未熟を知り、妖夢は修練を再開した。

## ▼ 四

さらさらと流れる川面が、地獄旧街道の明かりの中に揺れる。

今日も旧都の入り口となる河の畔に妖夢はいた。河原に腰をおろし、いまいち慣れない座禪を組んで心を落ち着ける。

そもそも座禪というのは考えるためにするものではないのだが——このあたり、半分は零囲気だ。剣はまずなんでもいいから、見様見真似ではじめることから一歩を歩む。

屁理屈は百も承知だ。しかし、今ここに師は居らず、だから妖夢は全てを自分一人で学んでいかなければならない。たとえ手探りでも遠回りでも、前に進むには先を探らねばならなかった。

師から庭師の双剣を受け継いで以来、妖夢は努めてそ

う考えるようにしている。

思案することは一つ。

星熊勇儀に勝つためには、どうすればいいか、だ。

(鬼は、強い。……解ってるつもりだったけど)

言葉通り行住坐臥、いついかなる時も勇儀は妖夢の挑戦を真つ向受け止め、その圧倒的な実力でねじ伏せてきた。挑むたびに彼我の力量、己の未熟を痛感させられるばかりだ。

(……勝てないのは、単純な屁屈)

妖夢の持つ最強の剣、最速の剣、そのいずれもが勇儀には通じなかった。

最強の剣は、その威力を出そうとするための力みが隙を生んで、相手に受け流されてしまう。

最速の剣は、隙を与えずに打ち込むところまでできるが、その速さ故に威力が損なわれ、赤金黒金の鬼の肌を貫けない。

つまり、妖夢にはどうやっても鬼は斬れない、ということになってしまふ。

(これじゃあ手詰まりだ……)

理屈が単純な分、結論も単純だった。

だが、だからこそ。諦めることなく妖夢はじつと思案を続ける。

勇儀は強い。桁外れに強い。中でもあの頑強さは、幻想郷でも群を抜いているだろう。なまかな手段では傷一つ付けることは叶わないかもしれない。妖夢があと十年、いや、五十年修練を続けたところで、届くことはないだろう。

(――師匠なら、どうするのか)

己の足元を固めるために、妖夢はじつと心を凝らし、その問いを巡らせる。

勇儀は極めて頑強な肉体を誇っている。鬼という種族だけではなく、その中であつてさらに“力の”称号を名乗るほどにその膂力剛力には自信があるのだろう。

だが、本当に、今の自分では勇儀を傷つけることはできないのだろうか？ 妖夢は瞑目の中、深く思案を巡らせる。

川面の音だけが静かにあたりに満ち、時が静かに過ぎてゆく。

――どれほどの時間が過ぎただろう。没我の中、ふいに、一筋の光明が差した。

(……いや、違う。そうじゃない……！)

もし、妖夢の剣がなにひとつ勇儀に通じないのであれば、そもそも勇儀は、妖夢が何をしようと一切構わず、相手せずにいればいい。だが勇儀は、妖夢の剣を手や角、爪で一度ならず防御していた。

それはつまり、ただ棒立ちになつて一太刀を食らうわけにはいかないということであり、

(あの、防御された太刀筋ならば、鬼の体でも、少なくとも身に受けることに躊躇が生じるんだ！)

それは逆説的に、妖夢が勇儀を傷つける攻撃をこれまでも放っているということを意味している。

「……………」

浮かび上がったわずかな光明を前に、はやる心を抑え、妖夢は何度も繰り返し返された勇儀との手筋を慎重に思い返

してゆく。ありったけの集中力を振り絞り、今まさにこの場で勇儀と対峙しているかのように、少女の身体に神経が張り詰める。

一手、二手、まるで詰将棋のように彼我の受け攻め、手筋を検討し、その全てを思い描いて、妖夢はやがて静かに確信した。

(……斬れる。斬れるんだ。私にも)

鬼は、嘘をつかない。だからこそあの戦いの中でも、勇儀はそれを偽らなかつたのだ。

「……でも、だからって」

どうすればいいというのか。理屈だけなら、ありったけの力で、完全に無防備なところに切り込めばいい。それで倒れなければ不死身が無敵だ。

確かに鬼はそのどちらでもない。それは彼等と人の歴史が証明している。

あの疎密を自在にする百万鬼夜行、伊吹萃香ですら、妖夢の剣で手足を斬り落とすことはできた(そしてそれは疎密を操るあの鬼にはまるで堪えた風でもなかった

が)。同じことが、勇儀にも言えるはずだった。だが、それが可能だとしても。

(それじゃ、鬼を斬っているとは言えない)

不意をうち、寝込みを襲い、鬼を倒すことは不可能ではない。けれど、それは岩や巻き藁を真つ二つにしているのとなにも変わらない。動けない相手を一刀両断したからと言って、それがなんの証になろうというのか。

鬼に横道なし。かの雷公源頼光たちは、大江山の一戦で、伊吹童子と四天王に毒酒をたらふく飲ませて不意打ちをしている。彼らには勝たねばならぬ理由があつたのだろう。

が、鬼がそれを指して卑怯だといったくなる理由もわかると思うものだ。

『——お前さんの、好きな時にかかって来な。』

「……………」

勇儀の振る舞いのひとつに答えを見たような気がして、

妖夢は静かに吐息をこぼす。

あの日。初めて旅籠を訪れた時、拒むことなく妖夢の挑戦を受けた勇儀は、そもその事のはじめから、その事実には気付いてすらいなかった妖夢にまで、真摯に向き合ってくれていたのだ。

(……勝ちたい……！)

改めてそれを自覚し、少女の体が身震いする。

胸の奥から、静かな闘志が湧きあがってくる。心のうちを震わせる強い想いに、妖夢は硬く拳を握りしめた。

たとえ、半人だけであろつと。鬼の真つ直ぐな想いに、人として向き合いたい。きつとそれが今の自分にすべき事だと、妖夢にはそう思えた。

そのためにも今、鬼を斬るための方策を見出さなければならぬだろう。妖夢は頭を振って再度、集中を高めてゆく。

(……考えろ。考えるんだ)

今の妖夢の力量でも、鬼を傷つけることは不可能ではない。それこそ手段を選ばなければ、勇儀を倒すことは

できるはずだ。

しかし、それが真正面からとなった時、勇儀としてそれを受け、あるいは躲けてみせる。

(私の剣には、まだ無駄があるんだ。疾さを求めれば威力が。威力を求めれば疾さが損なわれる……)

そも、最強と最速が二つに分かれていること自体が己の未熟の証だ。求める剣に答があるならば、妖夢の剣がいまだ道半ばであることの証左である。

それゆえの未熟。足りぬものがある故に、出来るはずのことが、出来ない。

しばし考えを巡らせ、妖夢はようやくそこに思い至る。最速と、最威。そのいずれもこの身体が繰り出すことができる技だ。だが、その両者を同時に成り立たせることができないのは——つまり。

(『私』が、邪魔なのか)

どちらもできるはずの自分が、二つを同時にできないということは、その両者を選び区別しているゆえだ。

己が『ある』ことによって、ひと振りの刀はいくつに

も割れ、それによる無駄が生じている。

——斬れば、分かる。

刀は腕で振るうものではない。まして手首や脚や、身体で振るうものではない。なによりもまず、斬らんとする意気で振るうものだ。

斬るのは人だ。人の意志だ。刀が鞘に納まっているのは、斬らんとする意志を封ずるため。ならば、意気さえあれば、相手を斬るのに、自分是要らない。

月が満ち欠けするように。波が寄せて返すように。花が開き散るように。

「意気より、発する刀」

——この身一つが、ひと振りの刃鋼。はがね

すつ、と目を開き、妖夢は心のうちに浮かぶその答えを口に出した。

ただそこにあり  
ただそれを斬る。  
無念、無想。

「……これだ」

辿り着いた静かな自信と共に、妖夢は深く頷いた。

## ▼五

妖夢が勇儀のもとを訪れたのは、それから数日を挟んだ時刻のことであった。

地底には太陽も月もないため、旧都に時刻を知らせるのは鐘の音と、燐光のように灯る鬼火だ。その陰気な青白い明かりに照らされて、街道沿いの店々が暖簾を上げ、街並みに賑わいが満ちてゆく。

旧都の繁華街、下落通<sup>ゲラク</sup>り。髑髏の燭台に獸脂を燃やし、墓石のような黒御影石の門柱が罰当たり<sup>しゅく</sup>に並ぶ卒塔婆<sup>そとば</sup>宿は、旧都でも一、二を争う名店である。

不吉に墓場めいたその装いのどこが鬼の眼鏡になつたか、星熊勇儀はここ暫く、この宿の二階座敷を氣に入り、長々と逗留を続けていた。

賑やかに奏でる楽の音と、陽氣に響く酒宴のざわめき。酒に歌に踊りに、底抜けに陽気な地底の都が、けれど

同時にどこか後ろ暗さを感じさせるのは、人から、そして同族からも忌み嫌われ、地下に放逐された彼等の怨嗟ゆえなのか。あるいは、かつて彼らを地の底に追いやった、地上に住む者たちの自責ゆえなのか。

そんな事を考えながら、宿の者に案内された妖夢は、勇儀の滞在する部屋へと通されていた。

「——あっはっは！　そうかい、じゃあいよいよお前さん達の大願も成就目前<sup>まへ</sup>ってわけだ。目出度いね！　鬼のあたしが仏門を祝うのも妙な具合だ<sup>が</sup>」

「そうなの！　もう駄目かと思つてたけど、寅丸と連絡も付いたし、これで聖の復活も目前なのよ！　あとは飛宝を集めるだけで——」

「勇儀さんには何から何まで手伝ってもらつて。感謝してるわ。ごめんね、いつもぬえが迷惑かけてばかりで」

「氣にしないよ。丁度いい退屈しのぎになるよ」

座敷の奥からは、知己らしき妖怪たちと話す勇儀の声も漏れ聞こえてきていた。以前、同じように宵の口に訪れた折には、間が悪く勇儀と橋姫との逢瀬に出くわして



気まずい思いをしたものだが——今日はそんな事はないらしい。

折角の時間を妨げてしまう事に少し心苦しさを覚えつつも、妖夢は静かに襖を明け放ち、杯を傾けていた勇儀の前に進み出る。

「失礼します」

開け放たれた襖の向こうに妖夢の姿を認めた勇儀は、ああ、と顔をほころばせた。ともに酒宴を囲んでいた水兵服や僧形の妖怪達も、揃って同じように振り向く。

「——ん、どうした、一杯付き合いに来たのかい？」

「いえ。……長らくお世話になりましたが、ようやく勝機が見つかりました。一手、お手合わせ願います」

妖夢はそう答え、静かに背の大太刀へと手をかけた。



妖怪達の悲鳴と怒号が上がる中、轟音とともに、卒塔婆宿の二階がぐくん、と斜めにずれ落ちてゆく。

真ふたつに断ち割られる屋根の中から、勇儀は近くの屋根へと飛び移り、がちゃんと屋根瓦を踏みしめた。背中を丸め、膝に手を載せて、時ならぬ騒ぎに騒然となる旧地獄街道を、まるで人ごとのように見下ろして唸る。

「おー、派手にやるねえ」

「遠慮は無用、と伺っていますので。……参ります」

勇儀を追って屋根に上がった妖夢は、短く告げると屋根瓦を蹴立てて勇儀の元へと疾る。

「決心が付いたんなら、確かに遠慮はいらんかね!!」

対する勇儀もまた叫び、その身に斬撃を浴びるのにも構わず、振り上げた拳を足元へと叩きつけた。

天より降る流星のごとき一撃が、屋根を砕き、建物を貫通して、二階建ての宿をべしゃんこに叩き潰す。

間一髪難を逃れた妖怪達が逃げ惑う中、乱れ飛ぶ楔弾があちこちを踏みつぶしてゆく。

「どっちが派手なんだか……」

倒壊から逃れるため飛びのいた妖夢は呆れたように小さく呟き、迎撃に弾幕を展開した。剣閃に沿って並び飛

ぶ楔弾の戦列が勇儀の弾幕と激突、相殺して消滅する。

旧き地獄街道を跨ぐように、交差する二色の弾幕が、  
 地底の闇に相殺の閃光を走らせる。

ほの暗き地底を煌々と照らす閃光と、そこらかしこで  
 響く破裂音。五感を乱す弾幕の中、勇儀は油断なく真横  
 に生じた気配に反応する。

「っは、不意打ちとは甘く見られたもんだ!!」

腰をひねって繰り出された剛拳はしかし、空を切り、  
 その先にあった妖夢の半身をつるんとすり抜けた。

同時、餅のように形を変えた半身は、勇儀の拳を包み  
 込むように変じてからめ取る。

「!？」

「もらったッ!!」

その時にはすでに、妖夢は勇儀の眼前にまで迫っていた。  
 地を蹴り体重を乗せた飛び蹴りで、もう一方の勇儀  
 の腕を蹴り飛ばし、無防備になった勇儀の懷に飛び込んで、  
 逆袈裟に楼観剣を斬り上げる。

顎を打ち抜くその一撃は、鬼として無視のできない致命

の攻撃。

が、なんと勇儀は大きく口を開け、牙でばくんとその  
 剣尖を噛み止めたのだ。

「——惜しいね」

べ、と口に咥えた楼観剣の刃先を吐き捨てた勇儀は、  
 凶暴に唇を歪ませた。

首の力だけで、庭師の小柄な身体を投げ飛ばし。半身  
 の拘束を力任せに引きちぎって、勇儀は追撃とばかりに  
 妖夢に迫る。

妖夢はそれを見据え、懷から符を引き抜く。

「——魂魄『幽明求聞持聡明の法』!!」

目にも止まらぬ速さで宙を飛んだ半身が、瞬間で妖夢  
 のもとへと舞い戻り、どろん、と煙とともに小さな爆発  
 を起こす。

その白い煙を蹴り出すようにそこから飛び出したのは、  
 二人の魂魄妖夢だった。

分け身や四、錯視ではなく、そのいずれもが真贋なく、  
 共に同じ白玉楼の庭師である。半人半霊の半霊部分を、

スベル  
符によつて人型へと変じさせたものだ。

二人の妖夢は、揃いの姿で二振りの楼観剣を構え、左右から、上下から、同時に勇儀へと斬りかかった。

「おうっ!？」

これまで見せずにいた奥の手の一つだ。さしもの勇儀も面喰ったか、わずかに動きが激む。

左右から交叉する鋼の流星が鬼を狙い打ち、その両手と打ち合わされた。

「まだまだ!」

さらに閃く白楼剣の剣閃がそこに加わった。左右に上下が加わり、蹴足体捌きまでも交えて、前後までもが塞がれてゆく。都合四振りの刃が、勇儀を二重三重に取り囲んだ。

「……つと。ふうむ。二刀流で足りなきや四刀流かい？悪かあない。けどね。半人前が倍になった程度じゃ、せいぜいが二半人前だ。一人前にやまだ足りないね」

だが、この猛攻を前になお四天王の一角は揺るがない。一旦慌てるそぶりは見せたものの、右の手のひら、左

の肘、牙、——さらに、ふるった角先で。妖夢が同時に繰り出した四つの剣尖を、勇儀はがきりと受け止めてみせた。

手甲や爪で撃ち落とすのではなく、抔げた手指で斬撃を『掴み取る』。およそ常軌を逸した手筋は、勇儀の並々ならぬ技量を知らせるものといえた。

「今更、ことどもだまし兎戯に付き合わされるのは御免だよ」

凶暴な笑みと共に、勇儀は思い切り胸を反らせ、大きく息を吸い込んだ。

その巨軀にすら納まり切らぬ怪力乱神が、鬼の身のうちに膨れ上がる。それを見た宿の妖怪たちが、悲鳴とともに両耳を塞いだ。

刹那、

轟、と地底を響かせて。勇儀の咆声が天蓋の底を叩きつけた。

——鬼声「壊滅の咆哮」

全方位を撃ち据える咆声が、街道の周囲を無差別に、辺り構わずなぎ倒す。通りの窓が軒並み割れ砕け、戸板は残らず吹き飛んだ。掘っ立て小屋はあえなく崩れ、このこ見物に集まってきた妖怪達もひとかたまりに弾き飛ばされ、旧都のそここで悲鳴が上がる。

スperlブレイクの白煙と共に、ふたりの妖夢うちの片方は、始まりと同じように煙を立てて半身の姿へと戻り、ひるひると旧地獄街道の屋根上へと飛んでゆく。

地底を揺るがす轟音に三半規管を貫かれ、ぐわんぐわんと揺れる頭を押さえる庭師を見上げ、勇儀は獣のような笑みを覗かせた。

「さて、次の出し物はなんだい？ 曲芸かい、手品かい？ 余裕があるのも結構だがね、お遊戯はつきりじゃあ——退屈だよ」

「ッ……」

言葉の最後を気魄にして、勇儀はみりりと拳を握る。暴虐なまでに膨れ上がる鬼の気配に撃ち抜かれ、妖夢の身体が軋みを上げる。

つつ、と滴る冷たい汗が、妖夢の顎を流れ落ちる。  
「……これでお仕舞いなら、ちいと、残念だったねえ」  
まるで、諦め。

吐き捨てるような、低いその一言と共に、勇儀は全てを打ち砕く拳を振りかぶった。

これまで何度か、勝負に敗北を刻んできた致命の一撃に、思わず少女の足が竦み、悲鳴が喉奥に膨れあがる。

（——退くな!!）

その恐れを噛み千切るように妖夢は確と前を見据え、奥歯をきつく噛み締めた。

（勇儀さんの、パルスィさんたちの心意気を、裏切るな!!）

震える脚を、思い切りその場に踏みしめて。その背に己の半霊を背負いながら、妖夢は己を叱咤し、深く鋭く前へ踏み込んだ。

両手で握り締めた楼観剣を、真っ向振り下ろす。瓦を叩き壊して斬り込んだ四尺七寸の切っ先が、がきりと勇儀の爪に食い込んだ。

「っふッ、」

ひゅうと肚に吸い込んだ息を、練り込むように溜め込んで。背に負った半霊で己の体を前に押し込む。勇儀と爪を噛み合わせたまま、妖夢の身体は下がることなく、更に前へと出た。一步に五回の割合で剣を重ね、勇儀の胸元へと斬り込んでゆく。

「っぐ、!?」

庭師の気配が変わったことに、勇儀も気付いただろう。呼吸をせずに立て続けに打ち込まれる切っ先が、剛力を誇る鬼の腕を圧倒してゆく。

その力の原動力となるのは、少女の剣に込められた強い意志と、妖夢の小柄な背を強く押し続ける半霊の力である。

「おおおおおおおッ!!」

肚の底から気合いを吐いて。妖夢の速度がさらに上がる。一步に五回の割合で放たれていた斬撃が十回になり、十五を数え、二十を超える。

これまで距離をとっては駿足頼りに斬りかかるばかり

だった庭師の剣は、脚を止め、真っ向真正面から、息つく暇もなく斬り込む剛剣へと姿を変えていた。

(人が、鬼と語るのには、闘いの中でこそだ!!)

半人と半霊がその力を支えあい、束ね、己が身ひとつを、一振りの刀にして。

白玉楼の双剣は、銀のきらめきを残して地を奔る。

「ああああああア!!」

顔面を狙って打ち込まれる勇儀の剛拳を、抜き放った白楼剣が受け止める。剣気を乗せた切っ先はそのまま鋭い軌跡を飛ばし、交叉した勇儀の腕を弾きあげた。

無防備になった勇儀の上半身めがけ、妖夢の楼観剣が、すいと地を滑る。

「っち、」

低い軌道から真上に跳ねあがった太刀を、勇儀は先程同様、脚の蹴爪で弾こうとする。

——が。鬼の右脇を逆袈裟に斬り割らんとしていた四尺七寸の刃は、その寸前でさらに軌道を変えた。

「ああああああ!!」

龍がその身を翻すかの如く。勇儀の目前で大きく跳ねた妖夢は、己の半身を足場に、宙空でさらに跳躍の向きを変え、頭上から勇儀を襲つた。

楼観剣を両逆手に握り変えての、天地逆の斬り落とし。見上げるほどの巨軀を持つ鬼の脳天めがけ、妖夢は全体重を乗せた両逆手の刃を斬り込んでゆく。

絶妙の間合いで撃ち込まれた兜割りの一撃は、勇儀の角の根元を、強烈に打ち据える。

「くあッ」

持ち前の鬼の頑強さゆえ、断ち割られることはなかったが、その痛みは久しく勇儀が感じたことのないものだった。

「こいつ、は——」

まるで——まるで、同じ鬼に一撃食らったかのような、強烈な衝撃。骨にまで染み入る激痛と、それ以上に言い様のない衝動が、勇儀の胸を打っていた。

勇儀はついに目を見開いて、眼前の庭師を見る。

「おおおおおおお!!」

裂帛の気合を響かせ、少女はなおも斬り込んでくる。

この細い身体のいったいどこに、こんな猛力があると言うのだろうか。確かに小柄な少女とは言え、日夜剣を振るい続け、鍛え上げられた妖夢の技量は勇儀も認めざるを得ない。

だが体格以前に半人半霊であるゆえ、彼女の剣の軽さは、生来のもののはずだった。いきおい、妖夢が十分な威力を出そうと思えば、地を蹴るか跳び上がったて全身で打ちかかるしかない。

それなのに——

「そこ、だッ!!」

ずどん、と。横薙ぎの胴払いが、勇儀をしたたかに打ち据え、不動と思われていた勇儀の身体をついに揺るがせた。そこへすかさず、返す刀を袈裟掛けに、妖夢が楼観剣を叩き付ける。

その気迫は如何なるものか。童のよつに小さな身体で、妖夢は一步も退こうとしない。ただ真っ直ぐに、勇儀に立ち向かう。



心の底から、笑っていた。



時ならぬ大騒ぎに、旧都の市街には何事かと駆け付けた妖怪達が溢れていた。街道の屋根を駆け、派手に剣を交わし弾幕を打ち合う二人の大立ち回りが歓声を沸かせ、さらに見物人を呼び集める。

鬼と人と。この大勝負の白黒をめぐる賭けを煽る声が増り上げられる。これまでの掛け率などどこへやら。妖夢と勇儀、両者の白星に積み上がる金額はほぼ互角。

一進二退の攻防に沸く人垣の中、勇儀と斬り合う妖夢の姿を見上げ、パルスィは苛立ちを覚えながら爪を噛む。

「何やってるのよ……」

あれだけ何度も言っただけなのに、懲りる様子もなく鬼に挑む馬鹿正直な庭師の少女。

もう、関わるのは止めにしようと思ったはずなのに、なぜかその姿をパルスィは追ってしまう。

「心配かい？」

ふいに脇からの声にはたと顔を上げれば、そこに土蜘蛛、黒谷ヤマメの姿があった。

胸元にはおっかなびっくり顔を覗かせている釣瓶落としのキスメを抱え、土蜘蛛はパルスィの隣へと並ぶ。

「……何？」

殊更に不機嫌なパルスィの視線に、キスメは身を竦ませて、桶の中に引っ込んでしまう。そんな彼女をよしよしとだめつつ、ヤマメは人懐こい笑顔を覗かせた。

「橋にだって居ないから、どうしたのかと思ってたけど。やっぱりパルスィも見に来てたんだねえ」

「あんたこそ、なんでここに居るのよ」

病毒を操るヤマメは、地底に繋がる大穴の入り口近くを棲家にして、人混みに出る事を避けながら暮らしている。キスメにしても似たようなもので、パルスィだけがこの場に居ることにとにかく言われる筋合いはない。

橋姫がちくりと語尾に棘を交えてそう問えば、ヤマメはあっけらかんと、



「そりゃあ、こんなお祭り騒ぎは久々だからさ。見逃がしちゃ損だよ」

「あのね……」

言いかけたパルスィは、ヤマメの表情に口をつぐむ。街道を揺るがし、打ち鳴らされる戦の火花を見上げ、ヤマメはそっと目を細めていたのだ。

「だってさ。あんなに真っ向から私たちと戦ってくれる相手なんて、もう長らくここにやいなかったろう？ ……まったくもう、楽しくてしょうがないさ。そう思わないかい、パルスィ」



轟音と輝きが、雪散る旧都の空に響く。

「そおらー！」

鬼の手元でじゃらりと鎖が揺れ、光線の檻が妖夢を逃げ場なく包み込む。地を穿ち空を裂き、交叉する赤青の光の帯は上下左右の安地を削り、妖夢の足をその場へと

縫い止める。

動きを止めたそこへ狙い済ましたように放たれる、白く輝く光弾。

妖夢はそこまで見て取ると、腰からもう一方の短刀、白楼剣を抜き打った。眼前に刃鏡をかざし、光線の中へと身を躍らせる。

磨き抜かれた迷いを断つ刃は、一点の曇りなく輝いて、鬼の放つ閃光を受け止めていた。

「おotto?」

これは流石に予想の外か。跳ね返った己の光線に脇腹を打たれ、さしもの勇儀も声を上げた。その隙をついて乱れた光線の檻から抜けた妖夢は、勇儀の懐へと一跳びに迫り、裂帛の気合と共に魂魄の双剣を振るう。

がきりと噛み合う剣と爪、鬼と人は近付いては離れ、剣を刃を打ち合わせ、旧都の空に雪を散らす。

「はあ、つ……」

荒い息、火照る身体。顎先から滴る汗もそのままに、妖夢は静かに、勇儀を見た。

その口元にもいつしか、緩やかな笑みがある。

戦いにわくわくと胸を躍らせる自分があることを、妖夢は今日初めて知った。

「ありがとうございます勇儀さん。ここに来てから、自分の未熟を思い知らされることばかりです」

「そいつは結構。……正直ね、お前さんがここまで粘るとは思わなかったよ」

ちらり、と。街道にひしめく群衆の中に、橋姫の姿を見、勇儀は軽く肩をすくめた。

「ったく、妙な仏心出すもんじゃないねえ。このまま退治されたら、あたしの大事なモンまで全部持ってかれちまいそうだ」

「……はい?」

いまいち解っていない様子の妖夢に、勇儀は苦笑。

「気にしなさんな。ただの愚痴さ。……んじゃあ、景気良く暖まったところで、そろそろ千秋楽と行こうか!!」

だだん、と地を蹴った勇儀は、握った拳を高々と天へかち上げ、地底を揺るがさんばかりの大音声を上げる。

「天よ地よ、乱れに乱れよ語れに語れ、この名を耳にし怖れるがいい!! 人の咎にて悪鬼羅刹と誹られようが、鬼の正道に横道なし!!」

我こそは三千世界に比類無き、剛力無双、妖怪の山が四天王、怪力乱神、力の勇儀!! いざや腕に覚えのある者は、名乗りを上げて参られいッ!! 地獄の鬼の慰みに、素っ首引いて並べてやろうッ!!」

高らかな鬼の一咆哮に、地底はなお激しく震えた。

地底の天蓋に亀裂が走る中、勇儀はばしん! と拳を手のひらに打ち付ける。

「どうした、人間。臆したかい!!」

「……成程。そういう趣向ならば」

妖夢は頷くと、刀を鞘に納め、眼前に不敵に笑う鬼をきっと睨みつけた。

「怪力乱神大いに結構。人を恐れ地の底へと逃げ隠れた鬼が、猛勇を語るとは笑止千万!! しかし鬼よ見損なうな!! 道半ばなれど、冥界は白玉楼を守るこの双剣――」

お前の怪力乱神程度、相手するには十二分だっ!!

我が名は西行寺家剣術指南役、魂魄妖夢!! 師より受け継ぎ、二百由旬の庭にて磨いたこの双剣にて、見事その首、討ち取ってくれる!!」

勇儀にこたえる形で妖夢の名乗りが、静かな地底に響き渡った。勇儀は満足そうに牙を覗かせ、しっかりと両の拳を握り締める。

——そして。

ざわつく見物の中から、不意に音が響いた。

陽気な、歓声のような、軽やかに響く笛の音。それに鼓、太鼓に三味線、さらには手拍子までも加わった。いくつもの音が重なって、軽快なリズムを奏で始める。

騒然とざわつくだけだった雑踏の音が、いつしか二人への声援へと変わっていた。

負けるなと妖夢を励ます声。

叩き潰せと勇儀を叱咤する声。

街道に集った妖怪達の声が、次々と重なり、轟くように地底中に響いてゆく。

「なんだい。これじゃすっかり悪役じゃないか」

「……ありがとうございます」

「礼にや及ばんよ。あたしも大概、腑抜けちまってたのがわかったからね。派手にぶん殴られて思い出したよ」

額をさすり、勇儀はわずかに微笑んだ。

よおし、と呟いて、旧地獄街道の鬼は、思い切り吸い込んだ息をありったけ声に変えてさらに叫ぶ。

「さあ、見物してる連中、聞こえるかい!! あたしとこいつと、どっちが勝っても祝勝会だ!! 全員残らず潰れるまで、呑んで呑んで呑みまくるよッ!!」

……そら、返事はどうしたあッ!!」

威勢のいい勇儀の啖呵に、

一拍置いて、旧街道を揺るがすひとときわ大きな歓声がこだまする。

重なる声は、歓喜に満ち、熱狂の渦のように地底に響いてゆく。鬼と人と、遙か昔より繰り返された力試しが、妖怪たちの騒ぎ奏でる楽の音に囃し立てられる。

いくつもの声に背中を押され、二人は再び向かい合う。

「どうしたい。膝が笑ってるじゃないか」

「武者震いです」

「……ッは、言うねえ。いいさ、来なッ!!」

鬼と剣士は、どちらからともなく笑みを浮かべ、同時に地を蹴った。



飛び散る火花、轟く閃光、唸る爆音。

奏でられる祭囃子に、重なる歓声。

次々打ち上がる花火のごとく、旧地獄街道には祭の音が響いていた。

旧都の賑わいを離れ、さらに地下へと奥深く。

忌み嫌われた妖怪たちが、なお恐れ遠ざける地底の中心、地霊殿。

荘厳なステンドグラスに彩られた妖館の一室では、赤毛を三つ編みにした猫耳の少女が、地底の空に舞い散る閃光を見あげている。

隣には同じように、大きな黒翼をたたんだ黒髪の少女

がぼかんと口を開けて窓に張り付いている。

「ほえー……」

「綺麗ですねえ、さとりさま」

目をまんまるに輝かせ、窓の外の光景に夢中になっている霊鳥路空の隣で、火焰猫燐は主人のほうを見やる。

ペットに促され、古明地さとりは椅子を立った。

感情の薄い瞳をどこか眠たげに細めながら、ゆっくりと窓の傍まで歩み寄り、旧都の空を彩る閃光を見上げる。

雪の空に瞬き散る輝きは、巫女や魔法使い達が侵入してきた時のものに良く似ていた。

「……そうね」

綺麗ね、と小さく呟いて、さとりは空の頭をそっと撫でる。

「わあー……」

ガラスにべたりと額をくっつけて、お空はすっかりその彩りに魅入られている。そのうち私も混ざるなどと言いつつ出しそうな様子の彼女をさりげなく捕まえながら、燐はさとりに尋ねる。

「良かったんですか、見に行かなくて?」

「あんなに強い感情が溢れ返っている中じや、頭がどうにかなくなってしまっわ」

胸の第三眼をそっと押さえ、地霊殿の主はわずかに苦笑した。

それに、と呟いて窓の外を見上げる。

「これだけ離れていても、こんなにはっきり聞こえるくらいなもの」



閃光、並ぶ弾幕。打ち合わされる刃。

砕ける大地、とどろく轟音。

果てるともなく続く、鬼と人との戦いは、ますます激しさを増していた。妖夢も勇儀も、お互い至る所傷だらけで、汗と血と埃に塗れている。けれど二人の表情は、一点の曇りもなく晴れやかだ。

「さあて、まったくもって楽しくてしょうがないけど、

そろそろ仕舞いにしようじゃないか!!」

「……ええ、同感です」

同時に頷き、二人は叫び交わして対峙する。互いに何枚と切り合った符<sup>スベル</sup>は、もはやわずか数枚を残すのみ。

「——光鬼『金剛螺旋』ッ!!」

「——空観劍『六根清浄斬』!!」

勇儀が硬く握り込み、振り下ろした拳から、鬼力漲る不壊の螺旋が、竜巻の如く溢れ出した。

荒れ狂う輝きが地殻を削り、地底の中を見境なく無差別に薙ぎ払う。

渦巻く光の螺旋は、天地を構わず決り穿ち波打ち、ついでに地獄旧街道の街並みの一部までも巻き込んで、雪崩を打って押し寄せる。

鬼とは笑う嵐であり、酒を飲む災禍である。ただの剣士に、自然に抗うすべはない。

なれど妖夢はそれを斬る。揺るがぬ意志のまま、叩き付けられる破壊の渦に立ち向かう。

土砂の嵐を伴う金剛螺旋のわずかな間隙を見据え、楼

観剣を腰溜めに、崩れ来る閃光へと身体ごとぶつかっていった。

刹那の間に閃く七十二の太刀筋をもって、金剛の螺旋を一步も退かずに迎え撃つ。

「ここ、だッ!!」

雪崩寄せる土砂の最も脆い部分に突き立てた四尺七寸の大太刀の切っ先が、光の螺旋弾幕の先に、確かに開いた空間を捉える。

妖夢は、躊躇せずその奥へと無理矢理に身体をねじ込んだ。

砕かれた光の破片が肩を打ち、腿をえぐる。

が——苦痛を感じる身体を置き去りに、妖夢は土埃をたなびかせて、その向こうの鬼へとさらに一步を刻んでいた。

半霊を傍らに、庭師の剣は疾風の如く地を駆ける。

「おおおおおおおッ」

雄叫びと共に、勇儀の元へと迫る妖夢を、しかし鬼は盤石の姿で笑みと共に待ち構えていた。

「——四天王奥義、」

それは、山の四天王、星熊勇儀が最も得意とする一撃。あらゆる卑怯卑劣を受け止めて、真っ向打ち砕く馬鹿正直極まりない、鬼の誇り。

ぎり、と弓を射るように振り破られた拳が、高らかな叫びとともに構えられる。

剛力無双、怪力乱神の一撃にてわずか三步で死を刻む、必殺の拳。不壊なる金剛すらその余興とする、勇儀の力。

「……『三步、必殺』 ツッ!!」

ずずん、と一步。地を揺るがし踏み込まれた一足と共に、まだ放たれてもいないはずの一撃が、気魄となって妖夢を打ち据えた。

間を置かず、深く二歩目。その強烈無比な威力と共に、数多の武人を地に伏せてきた業力が轟く。

その真正面で、妖夢はしかし静かに、鞘に納めた楼観剣の柄に手をかけていた。

「……——、」

迫る必殺の拳を意識すらせずに。風に揺れる梢のごと

く、波打つ水面のごとく。ただ——あるがまま。

(……彼女を斬るのに、私は邪魔だ)

だから、その結果さえあればいい。

その過程に己は不要。

技量も業前もすべて不要。

無念、無想。

そこに在る、というそれだけが、斬る、という結果を生む。

ただ、極々、自然に。

日々繰り返し、重ね、飽きることなく愚直に続け、続け、続けた型へ。

——少女の身体は、流れるように意気を発する。

「——ッ!!」

鬼の致死の一撃が放たれ、届くよりもお速く。

舞った刹那の剣閃は、音よりも、あるいは光よりもさらに疾く。

さん、と静かに旧地獄街道を一足で駆け抜ける。

——劍伎「桜花閃々」

美しく、目を奪うかのような無駄のない太刀捌きは、華の咲き乱れるかのように流麗に。

はるか技量の高みを超えて。妖夢の剣は、勇儀の角先を二寸ばかり、見事に断ち割っていた。

からん、と地を跳ねる角が、決着の合図。

一瞬遅れての、歓声に——

地底は大きく震えた。

## ▼ 六

「いやあ、心底参ったよ。大したもんだ!!」

再建進む旧都宿場の二階座敷で、勇儀は豪快に笑い、ぐいと酒を呷る。約束の宴会場には、大一番の勝負を繰り広げた二人をねぎらい、湛えようと詰めかけた地底中の妖怪たちでこった返していた。囃し立てる声に合わせ、地底のアイドルを自称するヤマメが自慢の喉を披露し、歓声を浴びている。

馬鹿でかい卓上には肉に魚にと贅を尽くした料理が山と積み上げられては、その端から次々と一角鬼の胃袋へと納まっていく。

「はあ……恐れ入ります」

「そこで遠慮してどうするのさ、もっと誇りな妖夢。勝った方が縮こまってちゃ、あたしも負けた甲斐がないってもんだ」

がつがつと猪の串焼きを三口でたいたらげ、再度勇儀は愉快そうに笑う。

座敷で向かい合う勇儀と妖夢は、どちらも負けず劣らずの満身創痍。包帯に添え木に膏薬に、どこを見ても怪我のない場所などない。

妖夢も、顔の腫れは幾分引いているものの、実のところ口の中までずたずたで、料理の味も解らないほどだった。

旧都での決着から丸三日、お互いに寝込んでいたことから、あの激闘の凄まじさが分かるというものだろう。「そんな事より飲みな、せっかくこうして差し向かえるんだ。楽しく行こうじゃないか」

ぐいっ、と大きな紅杯を呷った勇儀だったが、病みあがり鬼の強すぎる酒精は刺激が強すぎたか、直後にごぼげほと派手にむせて俯く。

数度咳を繰り返し、畜生染みるねえ、と強がりながら口元をぬぐう勇儀の隣で、パルスィは甲斐甲斐しくも眉を吊り上げていた。



「ああもう、そんなにこぼして……ねえ。怪我してるんでしょ。少しは見栄張るのやめたらどうなの？」

「ん？ 何言ってるんだパルスィ。怪我してんだから食わなきゃ治らないじゃないか」

勇儀はいつもの羽織の下、吊った右手を添え木ごとぶらぶらと振ってみせる

見事に折れた腕の骨や、深々と唇に入った刀傷は見ていただけでも痛くてたまらないのだが、パルスィの忠告もどこ吹く風と、勇儀は構わずにがつがつと酒宴の料理を食らう。

幽々子も健啖家では有名であるが、鬼はそもそもその桁が違ふようだった。

「そんなに心配なら、お前さんが食べさせてくれるのかい？」

「っなッ……」

「ははあ、怒った顔も可愛いねえ」

「ッ何言ってるの、何言ってるのッ!？」

大事なことなので二回叫びながら、ぼつ、と顔を赤く

するパルスィ。

ああ、平和だなあ、と思いつつ妖夢も盃に口をつける。

もともとあまり酒は嗜む方ではないが、今日ばかりはこの騒がしさに心地よく酔えそうな気がした。

「……はあ。騒々しく大変結構。本日はお日柄もよく、ご決着おめでとうございます、とでも言えがいいんではないか」

不意に脇からの声。見れば、不景気な顔をした地霊殿の主が其のペットを引き連れてやってきたところだった。

「なんださとり、あんだも来てたのかい」

『珍しいこともあるもんだ』……ですか。あれだけ派手に暴れ回っておいて良く言いますね。壊すだけ壊して、後で直せばいいで済まされても困ります」

勇儀をちらりと見、さとりは吐息と共に妖夢へと向き直った。半眼に引き下ろした瞳で、彼女はまじまじと妖夢の顔を覗きこんでくる。

「……本当は、色々と言いたいこともあったのですが、止めにしましょう。何を言っても無粋なようです」

「へえ。こりゃ驚いた」

「『雨でも降るかね』……ですか。私もそれくらいの分別はありますよ。……部外者が何を言うよりも、お二人ともはつきりと語り合っているようですからね」

嘆息と共に目を瞑るさと。すっかり出来上がった様子の空と燐が、妖怪たちと共に騒ぎ始めていた。

暑いねえ、と呟いた勇儀は、後ろの窓を開け放った。

雪舞い賑わう旧都の街並みが、熱のこもった座敷に冷えた心地よい風を運んでくる。

一月余りの滞在で、すっかり馴染んだ街並みを見下ろし、妖夢も感慨と共に眼を閉じる。

「……さて」

杯の上に舞い降る雪の結晶をすくい、勇儀は妖夢の隣に腰を下ろした。

「折角こうやって一緒に酒も飲めるようになったのに、もう帰っちまうってのがつくづく勿体ないねえ。

……なあ妖夢。こっちに居着く気はないかい？ 飲み食いくらいは不自由はさせないよ？」

「って、ちょっと!? 何言いだすの、いきなりっ」

叫ぶパルスィだが、勇儀はすっかりその気のようだ。あれだけ殴り合った相手にも構わず、人懐っこい笑顔で無邪気に言ってくる彼女に、妖夢は思わず口元をほころばせる。

——しかし。

「ええ。折角のお誘いは有り難いですが——私には、役目がありますので」

す、と隣の刀に手を添えて、妖夢は静かに笑みを納め勇儀にこたえる。さり気なく目線を横にやれば、目を尖らせてじろつとこちらを睨む橘姫と視線があった。

「鬼退治の相手が、これ以上の長居はお邪魔でしょう」

「っは、そっかい」

振られちまったねえ、とぼやいて杯を口にした勇儀の脇腹に、膨れっ面のパルスィがどすつ、と鋭く肘鉄を入れる。

遠慮も会釈もない一撃だったが、頑強な鬼の身体にはさしたる影響もなかったらしく、勇儀は『ん?』と眉を

ひそめて周りを見回すばかり。

パルスィはほんのりと紅い顔を反らして、小さく『妬ましいわ』と呟くのだった。



「——しかし、本当にそんなものでいいのかい？」

妖夢の前に置かれた、縮緬の風呂敷包み——斬り落とされた己の角を示し、勇儀は言う。

「鬼退治の証拠にしちゃ、ちよいと寂しくないかい？ 折角掴んだ意気だろう。なんなら腕の一本も落としていきやいいじゃないか。あたしはいちいち追いかけて取り返そうなんて性質の悪い趣味はないよ？」

「……ねえ、嫌味？ 嫌味なの？」

二の腕を叩いて示してみせる勇儀の隣で、パルスィが露骨に嫌な顔をする。橋姫には斬り落とされた腕を一条橋で取り戻そうとした故事がある。不満も当然だろう。

気にした風もない勇儀に、妖夢は何と答えたものか曖昧

に表情を浮かべるしかない。

ちなみに、斬り落とされた勇儀の角は、すでに半ばほどまで新しいものが生えかけていた。どうやらしばらくすれば元に戻るらしい。

角と言えば鬼の誇りのようなもののはずだが、そんな筈のような扱いでいいのだろうか、妖夢は内心疑問で仕方がなかったのだが——他の誰も突っ込まないところを見るに、そういうもののようにうだ。

「なんなら、行きがけの駄賃にもうひと勝負したっていいさ。どうだい？」

「いえ、その……その事なんです」

できることならば有耶無耶にしておきたかったことなのだが、こうまではつきりと訊かれてしまえばもう誤魔化せない。妖夢はいよいよ覚悟を決めて、これまで黙っていた理由を話すことにした。

気恥ずかしさに思わず視線が落ち、俯いた頬が紅潮する。

「——げっ?!」

「うわあ汚っ!!」

「だ、大丈夫ですかさとり様っ!!」

突如、遠くからこちらを見ていたさとりが、口元を押さえて咳き込み始めた。うろたえたペット達が主の身体を抱えて走り回る中、妖夢は眉を寄せながら、もごもごと口の中で呟いた。

「……その、無念無想は良かったんですが……。真劍勝負だというのに、どうも、こんな時までいつもの癖が抜けなかったようで……」

「……あん?」

「あの、つまり。一番目に付いたところを、そのまま切り落としてしまった、と言いますか……」

「……………」

「……………」

妖夢の言葉に一度は呆気にとられたパルスィと勇儀は顔を見合わせ、それから同時に吹き出した。

「……っは、あっはっはっはっは!! そうかい、そりゃあ……まあ、難儀だったねえー!」

「大変申し訳ありませんっ!」

がばと伏して頭を下げる妖夢に、勇儀は目もとに涙すら浮かべ、足を投げ出して腹を抱える。

「つくつく、いいねえ、これまでさんざ剣の相手はしてきたけど、植木扱いは初めてだよ!!」

ふいと顔をそらせたパルスィも、良く見れば肩を細かく震わせている。

見れば背中を向けたさとりも、おろおろするペット達に囲まれながら、いまだ遠くで蹲っていた。どちらも間違ひなく笑うのを堪えているのだろう。

なんとも締まらない最後のオチとともに。

座敷に響く楽の音は、いつまでも陽気に、かつての地獄街道を賑わせていた。



## ◆閑話・一◆

「長らく庭を開けまして申し訳ありませんでした、幽々子様。ただいま戻りました」

「お帰りなさい、妖夢……なんだか薄汚れたわねえ」

旧地獄街道の鬼退治を見事成し遂げて。意気揚々と白玉楼に戻った妖夢を出迎えた幽々子の放った第一声は、それだった。

「そ、そうですか!？」

「女の子なんだから、もう少し気を使わなきゃダメよ。ほら」

「……は。はいっ」

慌てて自分の旅姿を見下ろす妖夢に口を尖らせ、幽々子は手づからぱんぱんと妖夢の服の埃をはたき落とす。主の手を煩わせることに少し後ろめたさを覚えつつも、

そのくすぐったいような不思議な感覚は、少女に拒絶を許さなかった。されるがまま、肩、胸と触れる幽々子の手のひらが、ひんやりと心地よい。

「さあ、とにかくお風呂に入ってらっしゃいな」

「え!? ああ、幽々子さま!？」

まずは仔細の報告をと口を開こうとしたのを遮るように。半ば強制的に、妖夢は湯殿へと引きずられていった。



かぼーん、と湯桶の音が響く浴室。

旅の汗と汚れを流し、ざばりと頭から湯をかぶってひと息をつく、と、妖夢はぶるっと濡れた髪を振ってから、湯船に身を沈めた。

半身はその隣で、温度を低めにした水桶の中に、同じように身体を沈めていた。湯船というのは自分の体温よりも暖かい湯を張るものだから、半霊は水桶に浸かるのが丁度良いのだ。

「ふう……」

こんな時刻から湯船を独り占めなんて、滅多にないことだ。

まだ陽の高い窓外を見上げ、妖夢は広い湯船の中に手足を伸ばす。いくらか残る生傷の跡に染みる湯の温かさが、身体の芯に残った疲れを溶かしてゆくようだった。

「……………」

伸ばした手ではしゃ、と湯を跳ねのけると、半身も水桶の中できると身をよじる。

手のひらをかざすようにぼんやりと天井を見つめっていると、ようやく帰ってきたという実感と共に、妖夢の胸にふと、空虚な想いが去来する。

（褒めて貰えるなんて思ってたわけじゃないけど……）

所望通り鬼を斬ってきたというのに、幽々子の態度は至っていつも通りだ。……そもそも、ひと月以上離れていたというのに、まるで買い物に行ったのを迎えるような口ぶり。自分が不満を述べるようなことではないと理解はできても、どうしても割り切れない気分のまま、妖

夢は湯船の中に半分顔を沈め、ぶくぶくと口から泡を登らせる。

それとも、あの結果では、幽々子には満足には値しないというのだろうか。

（まさか、忘れているなんて訳じゃ、ない……よね？）

ふわふわと定まらない主にはそれがいかにもありそうに思えてしまい、流石に不敬だと妖夢は首を振る。

確かにそうした面があるのは否定できないが、幽々子が意味のないこと、無駄になることをわざわざさせることはない。

だから、命じられた鬼退治という言葉にはなにか裏の意味があつて、自分がまったく見当違いのことをしてきたのではないかと考えたほうがまだ納得がいく。

「……はあ」

結局、自分は未熟者のままなのだろうか。及びもつかない幽々子の思慮に、妖夢は再度溜め息をついて、湯船の中に身を伸ばす。

湯の中で身体がほぐれてきたか、手足の先まで湯の熱

さが染み渡ってゆく。さして気にしてもいなかったが、いざこうして湯に浸かると、随分気を張り詰めていたのが実感できた。

ひと月にわたる地底行は、想像以上に少女の身体に感じ取れぬ疲労を蓄積させていたらしい。

(まあ、いいや……)

緊張のほぐれた頭では、次第に難しい事を考えるのが億劫になっていた。いつしか午睡のなかに意識がほどけ、妖夢の身体は口元まで湯船に沈んでゆく。眼を閉じれば、さらさらと聞こえる湯音だけが、耳の奥に心地よい。

しばらくそうしていただろうか。不意にどこからか声があった。

「妖夢、湯加減はどうかしら？」

「はい。良い心地です……」

「そう、良かった」

全身に染み渡るような温かさに、思わず顔を蕩けさせるようにそう答え——妖夢は、あまりにその問いかけが真近にあったことに気づいてがばと身を起こした。

「ゆ、ゆゆこ様っ!？」

「なあに、そんな驚いた顔をして」

眼を見開き、跳ね起きた妖夢の前。いつの間にか幽々子が湯殿に入ってきていた。一糸まとわぬ姿の主は、慌てる妖夢にきよとした顔をしている。

冷静に考えてみて、白玉楼のお嬢様が手づから湯を沸かしているわけがない。湯加減を訪ねる声は、湯殿の中の妖夢を外から案じるものではなく、自分が入るのに丁度いいかどうかを尋ねたものだったのだ。

「少し熱いわねえ」

反射的に前を隠してしまつ妖夢をまるで気にする様子もなく、ぱしゃり、と肩から湯を浴びて、幽々子は広い湯船に身体を浸す。

真白く柔らかそうな肌を、惜しげもなく曝し——というか、同性の上、従者の立場である妖夢の前でわざわざそんなことを気にすることもないのが普通なのだが——どういいうわけかひどくそれを意識していまい、妖夢の頭にはかあーと血が上ってゆく。



「ほら、妖夢も顔まっかじゃないの」

「あ、いえ、あの」

一気に頭に血が昇ったか、うまく舌が回らず返事もおぼつかないまま、妖夢はその場の空気に耐え切れず、急ぎ湯船を上がる。

「背中、洗ってあげましょうか?」

「け、結構ですっ」

後ろからの幽々子の声に、振りかえることもできないまま・半ば耳を塞ぐような気持ちで、妖夢はがしと身体を洗いはじめた。



浴衣姿になり、濡れた手拭いを額に乗せ、湯上りの火照った身体を縁側にごろんと横たえる。なんとも従者にあるまじき無様な姿ではあるが、すっかりのばせた妖夢にはもう取り繕う余裕もない。

結局あのあと、満足に受け答えもできないまま、這う

ようにして湯殿を出るので精一杯だった。着替えたところで貧血を起こし、現在に至る。

「だらしないわねえ、妖夢は」

「……う。すみません……」

団扇を動かしながら呆れた口調でそういう幽々子に、妖夢は情けなさで一杯になりながら答えた。明らかにのぼせた理由は他にあるような気がしたが、素直に口にすべきか迷い、妖夢は結局口を噤む。

そよぐ風にりん、と心地よい冥界の風が揺れる。

こんな時間から、湯あがりに縁側で涼を取るなんて、なんとも贅沢な話ではあった。まして白玉楼の主の手を煩わせているとなれば尚更である。

「ねえ、妖夢」

庭に面した部屋の机上には、まだほどこいていない庭師の旅装と、縮緬の風呂敷に包まれた鬼の角が置かれていた。そちらにちらと視線をやって、幽々子は妖夢の顔を覗き込む。

穏やかな、まるで今日の天気を訪ねるような口ぶりで。

「なにか、分かったことはあったかしら？」

「……はい」

妖夢が確りと、そう力を込めて頷くと。幽々子は静かに微笑んで、そっと妖夢の額を撫でた。

「そう」

まだいくらか湿った髪に、静かに触れるその心地よさに、静かな充足感が妖夢の胸の中を満たしてゆく。地底への旅の中、多くの出会いと共に確かな形となって残った自信と、やり遂げたことへの充実感。

もちろん、目指す場所への道はまだはるか遠く、ほんのわずかな一歩を進んだにすぎないのだけれど、それでも、こんな充足は久しぶりだった。

りん、と風鈴の音の下。

静かに団扇を動かしながら、そっと幽々子は微笑む。

「ねえ妖夢」

「はい」

「じゃあ次は、鶴を射ってきなさいな」

「えええー!？」

白玉楼の庭師の叫びは、晩春の冥界、白玉楼の二百由旬の庭に響くのだった。

妖夢討夜鳥事

悲しきかなや身は籠鳥

心を知れば盲亀の浮木

ただ闇中に埋木の

さらば埋もれも果てずして

亡心何に残るらん

浮き沈む涙の波のうつほ舟

こがれて堪えぬいにしへを

忍び果つべき隙ぞなき

▼  
一

生温い風が首筋を撫でるように吹き抜け、風雨に晒されて文字の薄れた卒塔婆がからからと鳴る。

薄暗い墓地は鬱蒼とした木々に囲まれ昼なお暗い。そ

ここに灯る青白い燈火の中に、羽虫が自ら飛び込んで短い命を終え、じじじと焦げ音を立てて小さな煙を上げた。

角型の墓石が規則正しく立ち並ぶ無縁墓地は、ただひたすらに広大だった。果ては遙として知れず、ふと氣を抜けば自分がどこを歩いていたのかも見失いかねない。傾いた墓石の陰から這い出した鬼火がふらふらと飛び交い、地に落ちた墓影を揺らめかせる。

生者と死者の住まう境、此岸と彼岸を隔てる川面、顕界と冥界が触れ合う世の狭間は、こうして人里に近い場所にも存在しているのだ。

「きゃあーっ?!」

幽玄の趣深い死廟の光景とは裏腹に、響く悲鳴はどうか間の抜けた色合いを帯びていた。……喻えるならば、絹ではなくて麻か木綿を裂くような。

空に響くのは撃破(スperlブレイク)の快音と閃光。天を塞ぐように枝を広げる木々の合間で、いくつかの影が交錯する。鬼火の間を飛び回る羽虫が驚いたように身を

震わせ、姿を消す。

小さな足音と共に、墓石の合間に少女が降り立った。額で揃えられた美しい銀髪に、活動的な膝上丈のスカート。その手には小柄な彼女の体躯に不釣り合いな、長尺の大太刀が握られている。白刃が鬼火の輝きを受けて青白くきらめいた。

一拍遅れて、ふわりと半透明の白い霊がその傍に寄り添う。

半人半霊の庭師、魂魄妖夢は、四尺七寸の楼観剣の露をひゆんと振るって落とし、瞑目と共に腰の鞘へとおさめる。

「ああ……」

そしてわずかに遅れて、先程の悲鳴の残滓を引きずりながら墜落してくるもう一つの影があった。

梢を激しく揺らし、煙を引いて落下してくるのは、青い服の少女。地面に激突する直前に墓石の角にぶつかって『ぐえっ』と鈍い呻きを上げ、倒れる墓石の地響きが苔むした燈籠を揺らす。

鬼火が一斉に揺らめき、わずかに火勢を強めた。

ほうと息を吐いた妖夢が残心を取ってそちらを見れば、一際ぼろぼろになった茄子色の傘を握り締め、被弾で黒焦げとなったお化け傘が目回していた。

目を回したまま動かない彼女——多々良小傘と、己の掌中の刀を見比べて、しかし妖夢は思案顔。眉を寄せて一人、納得のいかぬ表情で首を傾げる。

「うーん……」

……本日の対戦成績、六戦全勝。スベルカード・ルール命名決闘法に基づく規定は一死三符。残機一残ボム3いずれも小傘の繰り出したスベル全てを真っ向叩き斬ったの圧勝であったが、それでも妖夢の表情は晴れなかった。

「なんだかあんまり克服できた感じがしないなあ」

「いきなり斬りかかってきいてひどい言い草だなあっ！」

小傘はがばと身を起こして叫んだ。頭には真新しいたんこぶを作り、髪をちりちりと焦がし、涙目に煤だらけの顔と、もはやお化けの貫録は微塵もない愉快な姿だ。

日々、通りかかる者に見境なく襲いかかつては『うらめしやー！ おどろけー！』と繰り返している彼女とて、辻斬り同然に切りかかってこられた上でこの言われようは、流石に理不尽というものだろう。

「もぉー！ なによ、毎日毎日斬りかかってきてっ！ 何か私に恨みでもあるのっ!？」

「うーん……」

お化け傘に怨恨の動機を疑われるというのは割合と希有な経験かもしれないが——手足をばたつかせ、涙ぐみながら抗議の声を上げる小傘に、しかし妖夢はやはり難しい顔。しばし考え込んでから、口を開く。

「もうちよっと真面目におどかせない?」

「存在全否定のダメ出しされたっ!？」

六戦全敗の挙句、とどめとばかりにお化け傘のプライドもばつきりへし折られ、ついに小傘はいじめてその場に座り込んでしまった。ぐすぐすとすすり泣きながらいじめて地面に『の』の字を書き始める。

「うっう……ぐすっ。いいもん……どうせ私なんかいら

ない子なんだ……。最近はどこに顔出しても空気読めみたいなこと言われるし……」

「あ、そっちの方がまだ少しは怖いかも」

「うわぁー……んっ!」

無慈悲な追い打ちにととうとう大声まで上げて泣き出す小傘。付喪神の感情の高ぶりは涙と成り、弾幕へと変じる。

「うわっ、っと」

押し寄せる大粒の涙滴弾に、妖夢は反射的に腰の剣を抜き放っていた。迷いを断つ短刀の刃が宙空に旋回、白刃が残像を引き、鏡のごとき盾となって弾幕を弾き返す。

魂魄流、反射下界斬。鏡の如く輝く刃に反射された弾幕が、そのまま小傘に跳ね返った。

「もおやだー!」

自分の弾幕に被弾して、再度悲鳴を上げつつ吹き飛ばす小傘の悲鳴が、被弾音の連奏にかき消えてゆく。

「あ、えーと……ごめん」

流石に悪い事をしたかなと思う妖夢だが、焦げて突っ

伏し動かなくなった小傘にはもはや聞こえていないようだった。

なんとなく後ろめたい部分は覚えつつも、妖夢は手の中の二振りに視線を戻す。

「こんなことで特訓になってるのかなあ……」

そも、なぜこんな所に居るのかといえば、経緯は少しばかり複雑だ。

地底の鬼、星熊勇儀との一戦から戻った妖夢は、洩々ながら幽々子の申しつけ通りに鶴退治へと向かい、見事彼女を討ち果たした。

……そりやもう、呆気ない程にあっさりと。

先頃新しく出来たばかりの寺に棲み付く件の怪物、鶴とやらはやたらに可愛らしい格好をしていて、『お前はここで終わりだがな！』などと自信たっぷりにな意を打ってきたのだが――。

少しばかり奇をてらった程度の弾幕、地底で鬼の四天王との戦いに明け暮れ、勝負勘を研ぎ澄ませていた妖夢にとっては、欠伸の出るような子供騙しのものでしかな

かったのだ。

最後の一枚のスペルもさしたる不自由なく避けた妖夢が一気に間合いを詰めて楼観剣を振るうと、鶴はあっさり撃墜されて地面に転がり気を失う始末。

挙句、彼女の後見人らしい佐渡の化け狸が割って入り、あんまり苛めんでやってくれんかのうと釘を刺されるという、実に締まらない結末であった。

あんまりにも残念なオチであったため、詳細までは幽々子にも報告していない。思うような鶴は見つからなかったと告げた妖夢に対し、幽々子は『駄目ねえ妖夢は』と微笑むばかりだった。

「……うーん。いつも通りって言えば、いつもの通りだったけど」

ここ暫く、立て続けに妖怪退治を命じる幽々子の真意は、恐らく自分の苦手を克服しろという事なのだろうと妖夢は理解している。

確かに、地底での鬼との対峙に妖夢が学んだことは多かった。正々堂々、真っ向勝負、嘘を嫌うゆえの融通の

利かなさ。精強さの極致、力の象徴のような鬼ですら、その強さに大きな長短を抱えていたのだ。勇儀との一戦は、妖夢にとって自分の強さ、己の抱える欠点を見つめ返す良い契機となった。

だからこそ今回、こんなことを思い立ったとも言える。いまだ地面に伸びたままの小傘を見て、妖夢は吐息。

(……弱点、かあ)

お化けや怪談は、妖夢の苦手なものの一つだ。

昔からその事ではよく幽々子たちにからかわれていたものだ。永夜異変の余祿となった竹林の肝試しでは、すっかり怯えてしまつて酷い醜態をさらしたのはいまだに恥じ入るばかりである。

いまだ道半ばとはいえ飯にも白玉楼の剣術指南を預かる身。果たしていつまでもそんな甘えが許されるのかと思ふに至つて、妖夢はこの弱点の克服を決意したのであった。

と、言うわけでこうして毎日、墓場へ出向いて特訓に明け暮れている訳なのだが——どうにもこの愉快な忘れ

傘相手では修行になつていない気がしてならない。

(でも、他にいい相手も知らないし)

これまでは単に恐いの一言で片付けてしまつていたが、改めて考えてみれば、妖夢は幽霊が怖いのではない。

そもそも亡霊と幽霊だらけの冥界は白玉楼で、彼等の存在は日常である。そこで庭師を務める妖夢がそんなものを怖がる理由が無いのだ。それを言い出したら、半分は幽霊である自分の半分にも怖がらなければいけない理屈になる。

(いやまあ、自分の一部だつて暗い所でいきなり目の前に来たりすれば驚くのが普通だよ)

ちらと傍らの半霊を見、一人納得する。そういうのはたぶん、普通の人間でも同じだろうと考える妖夢であった。

そして、怪物が怖いのかと言うとまた少し違うような気もする。霊廟の異変で出会つた動く死体であるキョンシーも、おどろおどろしく現れるお化け傘も、いまいち自分の恐怖を呼び起こすようには思えなかった。



では一体、この恐怖の源はなんなのだろう。妖夢の疑念は目下そこに集中していた。

どちらかと言えば、妖夢が苦手なのは怪談話のたぐいだ。因縁めいて語られる凄惨な事件、そこに残る怨嗟、怨念。理不尽に無差別に襲いかかってくる正体不明の怪物。

ここがどこなのかも忘れて、色々と思い出しそうになり、妖夢は慌ててぶんぶんと首を振った。

「うーん……………」

考えてみれば、例の肝試しの時も、面白かった他の面子にいろいろと怪談を吹き込まれてしまったのがあの失態の原因だったように思う。

では一体、それらの怪談話と目の前のお化け傘、一体なにが違うのかと言われると良く分からないのだが……ともあれ、自分が捨てたわけでもない傘にうらめしやーなどと言われても、実際何が恨めしいものやらで、むしろどう反応していいものか困るのは確かである。

「……………」

とりあえず、せっかくロケーションまで気にして墓場にまで出向いているのに、どうにも小傘相手の特訓には手応えが感じられなかった。

それでも他に良い修業相手に心当たりはない。

「うん。いつの間にか克服できてたのかな」

結局、結論は出ないまま妖夢は前向きに領いた。どう見ても明らかに人選ミスだが、そのあたりのことはあまり気にしない妖夢である。

基本的には単純な娘であった。

ごおんと遠く寺の鐘が鳴る。後を追うように山彦の大声が時報を告げる。命蓮寺の妖怪達によって鐘は律儀に毎日同じ時刻に鳴らされ、最近では随分重宝されていた。

「いけない、もうこんな時間だ」

物思いに耽っていた妖夢は慌てて立ち上がった。楼観剣を背に、白楼剣を腰の定位置に戻し、ぴよんと倒れた墓石から飛び降りる。

相変わらず泣きべそをかいている小傘に軽く手を上げ、走り出す。

「じゃ、またね」

「もお二度と来るなあー！」

涙交じりの小傘の声を背に、妖夢は足早に墓場を後にした。

## ▼二

人里の商家が立ち並ぶ通りは、今日も喧騒に満ちていた。

食料品、呉服屋、小物問屋、茶店に質屋に両替商。里の経済の中心たる半町ばかりの大通りには様々な店が軒を並べ、月に三度は広場に市も立つほど。朝から晩まで客足が途絶えることは無い。

空を飛ぶ妖怪や魔法使い達の着陸路も兼ねる十間通りの人混みの中、両手に背中に、里の商店を巡って仕入れた雑貨や食糧を山と抱え、妖夢は買物に走り回っていた。

「……よつと。どうもありがとうございます」

「おうよ、毎度ありい」

雑貨店の店主に頭を下げ、買い込んだ荷物を背負う。

妖夢が特訓で通いつめている命蓮寺裏の墓地は人里に

近いため、最近はついでにここで用事を済ませることが多くなっていた。冥界の近くにもこうした品物を取り扱う商店が無い訳ではないが、やはり新鮮な食材や流行の品、安くて質の良いものはここでなければ揃わない。

中有の道の店は主として地獄で罪を償う魂が功德を積むためのもので、中には不心得者が質の悪い品を売り捌いたり、逆に職人が精魂込めた品を露店でただ同然で投げ売りしたりと、どうにも品揃えが読みにくい店ばかりなのである。

ぎつしりと中身を詰め込み、はち切れんばかりに膨らむ買い物袋はひとつ十キロをゆうに超えるものばかりだ。それを三袋ずつ手に提げてものともせず、さらには自分の数倍の大きさの荷物を背負いながら、妖夢は涼しい顔でたったかと通りを走ってゆく。

少し離れて眺めてみると、荷物の山が宙を飛んでいる隙間に妖夢が押し込められているようにも見えた。人混みの向こうからも見える巨大な荷物の山に、通りの人々も思わず道を譲る。

そんな妖夢のすぐ後ろを、お手製の背負い籠に溢れんばかりの雑貨を詰め込んだ半霊がくっついてゆく。荷物の分担であるが、どうせどちらも同じ自分なので相対的に負担は変わらない。

「ええと……次は、と」

用意した買い物リストに視線を落とし、人通りを避けて通りの端に身を寄せれば、

「あ、妖夢」

「鈴仙さん」

通りの向こうから現れたのは見知った顔だった。薬箱を背負った永遠亭の月兎、鈴仙・優曇華院・イナバ。暑いかからジャケットを腰に巻き、薄い布地のシャツの袖を肘までまくったラフな姿である。

竹林の賢者こと八意永琳が、永遠亭の名前で置き薬の商売をしているのは周知のことだ。永琳を師匠と仰ぐ薬師見習いの鈴仙は、週に一度ほど、里で契約している家を回って常備薬の更新販売をしている。ついでに辻でも薬売りをしているのだが、こちらも上々の評判だった。

いつも隣にいる小さいほうのウサギの姿が見えないことを珍しく思いながら、妖夢は挨拶を返す。

「今日はお一人なんですか？」

「そうなの。てゐの奴がサボったから時間がかっちゃって」

疲れた様子でぼやく鈴仙。長い兎耳はいつもよりも心持ちくたびれ気味だった。

鈴仙と妖夢は永夜異変以来の知己だ。あの終わらない夜の異変の最中に出現した真実の月の光に当てられ、狂気の眼を発症してしまった妖夢は、治療のため永遠亭へ通院することになった。鈴仙とはそれがきっかけで仲良くなり、気付けば幻想郷に住む数多くの人妖の中でも、一番気の合う話し相手となっていた。

よく永琳やてゐに振り回されてとばかりを受けている印象が強い鈴仙だが、彼女自身は決してそんな扱いを嫌っている風でもなく、無理難題を押しつけられたり、悪戯兎に騙されてぼやきながら懸命に走り回っている姿をよく見かけた。自分の事は棚に上げて、苦勞人だなあ

と思っている妖夢である。

鈴仙は里の一角を指さし、小さく口元を緩めた。

「妖夢も帰り？ ちょっとお茶してかない？」

「うーん……」

月のウサギの魅力的な誘いに、庭師の心は揺れる。ちらりと通りの時計を見れば、急いで戻らなければならぬというほど切羽詰まっていけないが、それほど余裕があるとも言えない時間だ。

とは言え妖夢だって女の子だ。乙女の端くれとして甘いものの魅力には抗いがたかった。

「……じゃあ、少しだけ」

「よし、じゃ決まりね」

にこりと微笑む鈴仙は、同性の妖夢からしても思わずどきりとするほどに可愛い。

この笑顔が忘れられず、最近ではわざと風邪をひいてまで永遠亭に行く理由を作ろうとする、後先を考えない若い男も出ているとか。

荷物を持つとうとしてくれる鈴仙に遠慮しつつ、二人は

つれだって里の大通りを抜け、一本奥に入った茶店の軒先へと腰を落ち着けることにした。

表通りには地底産の珈琲や紅茶を出し、レコードで音楽を利かせ、夜には舶来の酒を振舞うハイカラなカフェが軒を連ねるが、妖夢も鈴仙もあり洋風の甘味は好まないのだ。

顔馴染みとなった割烹着の店員に妖夢は素甘、鈴仙は葛餅と渋茶を頼み、軒先に出された長椅子に並んで座る。

「うんっ……」

山と積み上げられた妖夢の荷物の隣、背負っていた薬箱を下ろし、鈴仙も肩を回して伸びを一つ。スカートの裾を持ち上げて、ぱたぱたと扇ぐ。礼儀正しいお嬢様方にははしたないと眉を潜められそうな仕草だが、鈴仙がすると不思議と様になっていた。

「だいぶ暑くなったよねえ。ちょっと前まで妙に寒かったのに」

「そうですねえ。……ひゃんっ!!」

「んー……冷たくて気持ちいい……」

「れ、鈴仙さんっ」

答える妖夢の半霊を抱き寄せて頬を押し付け、そのひんやりとした触り心地に目を細める鈴仙。くすぐったいし、どうにも気恥ずかしいので妖夢は常々止めて欲しいと言っているのだが、当の鈴仙はあまり聞いてくれる様子がないのだった。

初夏の陽気の今日は半袖でも汗ばむほどだ。そのうち梅雨がくれば冥界でもじめじめと鬱陶しい日々が続くだろうが、今は空も高く、輪郭のはっきりした雲がこここに見える。

「お待ちしました」

「来た来たっ♪」

やって来たお茶に甘味をつまみながら、少女二人が集えば自然話も弾む。

主の話、天気の話、先日 of 三大宗教の会談に、妖怪の山の将棋の対戦。最近ちょっと話題になっている里の貸本屋と、そこに入入りしている粋な女商人。やがて来るだろう次の異変の話。とりとめもなく話題は流れ、やが

て妖夢の修行へと移った。

「……むぐ。……んー。恐怖心の克服ねえ……」

「お恥ずかしながら」

少し頬を赤らめつつ、妖夢は鈴仙に、最近取り組んでいる恐怖心克服のための特訓の説明をする。

「おかげが怖いなんて、可愛らしくていいと思うけど……って話じゃないか。ごめんね」

「いえ。本当のことですから。……でもなかなか思うようにいなくて。なにか、良い方法はないかなと思っていました」

「うーん……」

鈴仙は腕組みをし、赤い瞳を閉じてしばし瞑目する。

とても可愛らしい外見をした、苦労人の彼女だが、そんな鈴仙の言動の端々に、時折、訓練された兵士の仕草が覗くのを妖夢は知っている。

ある種の美学である剣士の戦い方とは違う、信条や心情など無視して効率よく相手を無力化せんとする合理的な暴力の振るい方。注意を怠らず、油断をせず、命も尊

敵も戦略に組み込んで、準備を整えて淡々と決行する、厳格な判断。

それは普段の鈴仙の性格からは似ても似つかないもので、彼女が黙して語ろうとしない過去に関係ある事なのかもしれない。気になりはしたが、妖夢は今のところそれを尋ねたことは無かった。

「難しい話だなあ。恐怖とか、怯えみたいな感情を強制的にねじ伏せる薬ってのはあるけど……妖夢が欲しいのはそういうのじゃないよね？」

問われ、妖夢はこくこくと首肯する。

鈴仙はゆっくり頷き、自分の眼を指差した。澄んだ寶石のような赤い瞳。彼女の目は狂気の眼だ。人の心や感情を走査し操作する能力をもっている。

「私の能力の話になっちゃうんだけど、恐怖に限らず、感情っていうのは心の波、心理の波長の乱れて言いかけることができるの。だから、私はある程度それを動かすこともできる。

……でもね、水面がいつも静まっていることがないよ

うに、心が波立たないってことは普通、ありえないことなんだ」

鈴仙は手の中の湯呑を傾けて示した。中で揺れる抹茶をじっと見下ろす。

風が吹いたり、小石が投げ込まれたり、魚が跳ねたり、大地そのものが揺れたり。外からの要因によって心は容易く乱され、揺れる。その刺激が強ければ水面は大きく波立ち、時には器から溢れる事もあるだろう。

手の中の湯呑みを傾けて、鈴仙はほうと息を吐く。

「それを揺らさないようにするっていうのは、不自然っていうか……どうしたってあまり良くないことなんだよね。例えば、水面を凍らせたりして、硝子みたいに硬く保っていれば、少しぐらいの刺激では心はびくともしなくなる。でも、もしそれに耐えきれないような大きな衝撃があれば、硬い心はそれを吸収しきれずに割れてしまいかもしれない。そうすると、内側に閉じ込められたものが一気に噴き出して、もっとひどいことになるの。いくら凍らせようとしたって、心を器の底まで完全に凍ら

せることはできないし、仮にそれが可能だったとしても、もしそれが割れるような激しい衝撃が来たら、今度は器そのものにまで影響が出るかもしれないんだ。

……それにね、揺れ動かない感情は、感情とは呼べないもの。正しいものじゃないから」

付け加えられた言葉は、強い実感のこもったものだった。あるいはこれも鈴仙の実体験なのだろうか。敢えて指摘することはせず、妖夢はじつと鈴仙の言葉に耳を傾ける。

「だから、外からの刺激に対して身を固めて、弾こうとするんじゃないくて、外部からの刺激を深く受け入れて、それによって起きた波や乱れを無理に抑えつけたりせずに、散らしてしまつのが正しいんじゃないかな。大きくて穏やかなうねりのイメージね。海の——って言っても分からないか、大きな湖の中に小石が落っこちても、岸の波の揺れは変わらないでしょ？ そんな感じかな」

「……なるほど」

鈴仙の薫陶に、妖夢は深く頷いた。

恐怖とは、翻せば生きたいという本能だ。怯えも恐れも、己を脅かす危機から自身の命を守ろうとする自然な心の働きである。無論、度を越せば恐怖で身動きすらできなくなることもあるが、個が自己を維持するための必須の感情であることは疑いようがない。

ゆえに、戦いにおいて何よりも大切なが、同時に酷く邪魔になるものでもある。何かを守ろうとする戦いであれば尚更だった。

「確かにそうかもしれませんが。言われてみれば幽々子様もそんな印象がありますね」

「うちの師匠と姫様もね」

くすりと微笑んで鈴仙。あー、あの境地は見習いたいわー、と赤い目と大きな耳を揺らして、鈴仙はなんとも味わい深い表情を覗かせた。

憧憬と共に、朱に交わりたくないという複雑な感情があるらしい。

「まあ、そんな感じかなあ。見習い判断で申し訳ないけど、参考になればってことで」



「そんなことないです。ありがとうございます！」

謙遜する鈴仙に、妖夢はしっかりと礼を述べる。自分だけでは意識することでもできなかった目的に、漠然としたものであれイメージが生まれたのだ。それだけでも大きな進歩と言えた。

ぺこりと頭を下げる妖夢に、鈴仙は少し顔を赤くし、  
ずずずとお茶を啜っていた。

## ▼ 三

「……ん？」

歓談の最中、鈴仙が怪訝な顔をして大きな耳を動かし、つられて妖夢も彼女の視線を追えば、空を仰ぐ赤い瞳の先、遠く雷の音が響く。

湯呑みにぼつりと波紋が広がった。

「雨？」

降り注いだ雫に顔を上げると、空には分厚い雲が立ち込めていた。地面にぼつぼつと雫が広がり、通りに落ちる水滴は見る間に連なって、ざあと強い音を立て始める。突然の雨は、たちまち通りの視界を霞ませる激しい夕立となった。荷物と薬箱を抱え、二人は慌てて茶店の軒下へと避難する。

「ひゃああ……降るなんて聞いて無かったのに」

鈴仙も悲鳴を上げながら、食べかけの葛餅の器と湯呑

みを持って軒下へと駆け込んでくる。

隣に立つ彼女の湿った髪からふわりと良い香りが妖夢の鼻をくすぐる。女の子らしいお洒落に關しては、妖夢よりも彼女の方がずっと得意だ。これまで修行と庭師の仕事に明け暮れる毎日でそんな事に興味を持たなかった妖夢が髪をいじるようになったのも、鈴仙の勧めがきっかけである。

「むぐ。夕立にしてはちょっと早いよつな気もしますね」

軒先から滴る雨雫から大荷物を濡れないようにしつつ、妖夢も残った素甘を頬張る。確か広場で見た龍神様の目の色は綺麗な白、予報では雨など降るはずはなかったはずなのだが――

通りを叩く雨音は激しく、空を覆う分厚い黒雲はみるみる空を薄暗く包み込む。里の上空に夜の切れ端が流れ込んできたのかと錯覚するほどだった。時ならぬ豪雨に、通りを歩いていた人々も足早に近くの店の軒下へと駆け込み、荷物を頭上に、背中を丸めて家路を急ぐ。

雲の渦巻く空を見上げ、鈴仙は吐息。

「ちょっと、すぐには止みそうにないわね、これ」

「そうですね」

「……仕方ないかな。すいません、お茶、もう一杯貰え  
ま——」

会話を遮るように、突如の閃光が瞬いた。

「ひゃああ!!」

稲光が明滅し、空が揺れ、低く垂れこめた黒雲を引き  
裂くように雷鳴が走る。数拍遅れて雷音が轟き、一瞬だ  
け雨音をかき消した。

ざあっと激しさを増す雨の中、耳を押さえた鈴仙が、  
目をつぶって恐る恐る様子を見上げる。どうやら彼女は  
雷が苦手らしい。

「これは、本格的に降って来たみたいですね」

「うー……やだなあ……」

二人が揃って雨空を見上げたその時。悲鳴のような、  
叫び声のような。甲高い不気味な声が里の空に響き渡っ  
た。

——ひゅおおおおおおおお……う……。

雷鳴唸る豪雨の中、なお強く。耳障りな鳴き声が鼓膜  
を震わせる。

「——つつ!!」

同時、訳もなく胸の中を冷たい手で掴まれたような衝  
撃が妖夢を襲った。

背筋が怖気立ち、手足が強張り、歯がちがちと震え  
出す。言い知れぬ恐怖が手足を縛り、その場に貼り付け  
る。

雨に煙る空の下、奔る雷光が焼きつく屋根の上に、音  
もなくそいつは姿を現していた。

渦巻く黒雲の空に、血塗れの紅玉のようにぬめる、二  
つの輝きが灯る。剥き出しの牙はおぞましい狒々のそれ。  
屋根瓦を踏み締める逞しい四肢は、鋭い爪を備える虎縞  
に覆われている。

胴体は分厚い焦げ茶の毛皮に覆われ、背中には甲殻類  
めいた爪鎌と、くねる鱗の蛇の頭が、三対非対称に生え

て歪な翼を模している。そしてその尾は、丸太よりも太い碧の鱗を生やした大蛇であった。

「なに、あれ……？」

不可解な姿を認め、鈴仙が低く唸る。

まるで獅子のような鬣を纏う、猿とも鳥ともつかぬ異形の獣の頭は、牙を剥き出しにして大きく喉を膨らませた。

「……っ!？」

(これって……!?)

屋根の上に黒い靄が立ち込める。

ひゅおおうと鳴り響く高い鳴き声に、胸を貫かれ、胎の中を掻き回されるような恐怖が湧き起こり、妖夢は思わず脚をもつれさせて後ずさる。足が茶店の卓にぶつかり、湯呑みが倒れて音をたてた。

雷鳴の中、吹き荒ぶ風雨の中に幾重もの輝きが生まれた。獣が鳴き声と共に弾幕を放ったのだ。

あ、と思うよりも早く飛来した光の鏃が、茶店の軒先にある日除けの傘を貫き、濡れた地面の土を深く穿つ。

「妖夢！」

即座に反応したのは鈴仙だ。手足が竦んで動けない妖夢の襟首を掴んでその場に引き倒し、流れるような動作で茶店の軒先で雨に濡れる長椅子を跳ねあげ、遮蔽を作る。

長椅子の脚がばしゃんと飛沫を上げるよりも早く、月兎は腰に巻いていたジャケットから無骨な拳銃を早抜きして、屋根の上の獣へと向けて引鉄を引いていた。

これは弾幕ごっこではない。咄嗟にそう判断した鈴仙の意識の底で、薬物催眠と睡眠学習で刷り込まれた自己暗示リミッターが解除され、弾幕の威力と速度に課せられた制限が外される。実銃と何ら遜色のない、音速を超える弾速は、射出と同時に凌的を無慈悲に噛み砕く鋼の牙だ。

鈴仙の弾幕は、月の科学力が産んだ最新鋭の銃器を基にしたものである。格好だけを真似した指鉄砲でも扱う事は出来るが、実戦においては彼女は弾幕の精神集中に引鉄を使っていた。

安全性の關係から携帯している拳銃は炸薬の光と音だけを出して薬莖を吐き出す弾幕専用のもの。それでも、使い慣れた銃を介して、鈴仙の弾幕はごっこ遊びとは段違いの素晴らしい破壊力と精度を叩きだすのだ。

油断なく長椅子の陰で遮蔽を取りながら、玉兎の狂気の眼が赤い光を放ち、閃く銃火が屋根上の黒い獣へと収束する。

が、獣はその巨軀を感じさせない俊敏さで屋根の上を鋭く跳ねた。屋根瓦が赤い弾幕の着弾に弾け、砕ける。

「ッ」

鈴仙の魔眼が輝きを増した。能力の出力を上げ、波長を読み取る目は雨の雫一滴一滴を解析し、その規則性と共に屋根伝いに跳ねる獣の着地点を正確に予測、軌道を修正し予測射撃を撃ちこむ。

深紅の輝きを纏い、銃弾の速度と威力が増幅する。

黒い獣の回避を上回り、带状に連なる弾幕の斉射が獣の表皮を捕えた。が、

「……硬い!？」

頭部に3発、胸に2発、左右の前足へ2発ずつ。容赦なく標的の行動力を削ぐ場所へ着弾を集めた弾幕は、獣の身体に触れる直前、黒い靄を放つ力場のようなものに囚われて弾ける。

獣は鈴仙を振り向き、吠え声と共に再び光の鏃を撒き散らした。咄嗟に鈴仙が撃ち放った弾幕のいくらかが鏃を撃ち落とすが、貫通力を持った鏃は長椅子を易々と貫いて砕く。

数発の着弾で椅子は木片に姿を変え、無残な残骸を晒した。その威力に鈴仙も顔色を変える。

「四十五口径より威力あるんじゃないの、これっ」

罵声を打ち消すかのように追撃の光の鏃が撃ち込まれる。獣の行動にスベルの宣言はなく、ただ能力を使って弾幕を撒き散らすばかり。現在の幻想郷において許容されることのない、規範を逸脱した攻撃だ。

空が唸る。俄かに強まった風が吹き付け、豪雨が鈴仙の顔を強く打った。思わず目を閉じかけた鈴仙のすぐ鼻先に、猛烈な落雷が叩きつけられる。

「ッ、きゃ……」

獸のシルエットが夜空に浮かび上がる。再度の鳴き声と共に、人里に瘴気が吹き付け、軒先の看板が割れ、暖簾が吹き飛び、積み上げられていた荷物が崩れ落ちる。

上空には黒い霧が溢れ出し、腹の底を震わせるような怖気が増す。気の弱っている者ならば、目にしただけで意識を失いかねない強烈な圧迫感だ。

鈴仙の悲鳴で、妖夢はようやく己を取り戻した。ほとんど無意識の動作で背中に手を回し、楼観剣の鞘で獸の放った弾幕を斬り払う。

「すみません！ 鈴仙さん、援護をっ！」

呆けていた事への後悔をねじ伏せ、妖夢は通りに飛び出した。

戦場へと躍り出た新たな標的に、獸はすぐに狙いを変えた。無数の光の鏢が呼び起こされ、庭師めがけて降り注ぐ。それを見事な足捌きで掻い潜り、妖夢はほとんど身体を動かさず跳躍した。

通りの中央でぱんと水飛沫が跳ねたかと思うと、少女

の姿は既に屋根上にあつた。

ひと飛びで屋根の上に飛び上がり、背中から外した楼観剣の鞘を腰に、妖夢は獸と対峙する。不機嫌に吼える獸を、鈴仙の弾幕が牽制した。

「……………こいつ……………」

巨きい。巨軀を誇る地底の鬼など問題にならぬほど、この獸は巨大だった。小柄な妖夢など前脚一つで押し潰されてしまいかねない。

背筋を這い上がる恐怖を堪え、妖夢は屋根上を走った。雨に濡れた屋根瓦の上を、足場の悪さを感じさせない見事な足捌きで疾駆し、鋭く身を沈めた庭師が腰のための太刀を一閃。

踏み込む爪先が二つ向こうの屋根上を滑り、一つ大きな波紋を刻むと同時に、吹き荒ぶ豪雨の雨粒が筒状にくり抜かれていた。

二百由旬の庭を縦横無尽に走る神速の踏み込みで居合いを放ち、少女は獸の背後へと駆け抜ける。ひと振り十殺の楼観剣が、四尺七寸の刃をもって怪物の肌を捕えた。

——だが。

「……ッ!？」

異様な手応えに妖夢は声を上げそうになった。確かに獣の根元に食い込んだはずの切っ先が、ぬるり、と泥の中に沈むように飲み込まれたのだ。

白刃が獣の首をすり抜け、虚しく空をかく。

間違はなく首を落としたはずの楼観の太刀は、獣にさしたる痛痒すら与えていなかったのである。

おもわぬ空振りに少女の体が傾いだ。怪物は狙い澄ましたように低く身を伏せ、撓ませた四肢に溜め込んだ力を漲らせて跳躍する。

「危ないっ!」

鈴仙の悲鳴が上がる。援護の銃火が叩き込まれるが、弾幕の着弾は獣を押しとどめるには役に立たなかった。迎撃に抜き打った楼観剣の切っ先も、黒い靄が絡め捕る。やはり獣には届かない。

黒い獣は身を撓めた。丸太のような前脚が瓦を踏み潰して跳躍。唾液まみれの牙を剥き出しにして、妖夢を丸

飲みにせんばかりに怪物が迫る。

汚れた牙が少女の肌に食い込む寸前、獣は真横から殴り飛ばされたように強い衝撃を受けて仰け反った。妖夢が渾身の力を込めて繰り出した半霊の体当たりが獣の体勢を崩したのだ。

ぐらりと身を傾がせた獣だが、吹き付ける雨をものともせずにしなやかな身体を翻し、宙をくるりと回って二つばかり向こうの屋根の棟瓦の上に着地する。見上げるほどの巨体をまるで感じさせない身のこなしであった。

「……………」

辛うじて難を逃れ、間合いを取る妖夢に、ざあ、と雨風が叩き付ける。視界を塞ぐ豪雨の中、妖夢は楼観剣を正眼に、切っ先を獣に向けたまま対峙する。

獣が再び不気味な鳴き声を上げた。すると見よ、突如として空から沸き起こるように黒雲がなびき、獣の体を包み込んでゆく。

低く垂れこめた分厚い黒雲にまぎれ、獣の姿が雨霞の向こうへ消えてゆく。

「待て！」

逃げられる。焦りの中、妖夢が獣を追って前に飛び出そうとしたその時だ。黒雲の奥から、これまでよりもさらに強く、ひゅおおおおおと不気味な鳴き声が響き渡る。

その得体の知れない声が、言い様の無い恐怖を引き起こし、少女の手足を凍ませた。こみ上げる恐れが冷たい鎖となって庭師の手足を縛りあげる。

その一瞬の隙を獣は見逃さない。一旦退くと見せかけた獣は身を翻し、黒雲の中から妖夢に飛びかかった。背中から生えたうねる蛇の群れが、鎌首をもたげて伸び、妖夢へと襲いかかる。

「っ」

わずかにタイミングをずらして牙を走らせる蛇の頭を、妖夢は咄嗟に楼観剣で切り飛ばした。刃が振り抜かれたその瞬間を狙い澄ましたかのように、獣の頭は弾幕を撃ち込んでくる。

鎌の連射は容赦なく妖夢の胸と頭を狙っていた。鞘を

跳ねあげて首と頭を守るが、全ては防ぎきれない。鈴仙も弾幕で牽制してくれたが、2発は避け切れず肩と脇腹を掠めた。

「……う、あっ？」

着弾の衝撃に呻く妖夢の足が、同時にぐんと引っぱられる。光の鎌が翼の生えた小さな蛇に姿を変え、妖夢の足を絡め取っていたのだ。脚を取られ、背中から倒れ込んだ妖夢へ獣が圧し掛かる。

「っぐ…ッ」

「妖夢！」

巨体の突進を押しとどめられず、妖夢は屋根瓦に押し倒された。背中を叩きつけられて一瞬、意識が遠のく瞬間に、虎の前脚が凄まじい重量で少女の体軀を押し潰し、猿じみた異形の頭が長い牙を覗かせて、喉笛を噛み切らんと眼前に迫る。

楼観剣を辛うじて獣と己の身体の間を滑り込ませる妖夢だが、一振り十殺の刃が首筋に食い込むのをまるで意に介さず、黒い獣は妖夢へ迫って来た。



ひゅおおおうと甲高い鳴き声を聞くと、妖夢の手足は強張り、激しい動悸に汗が噴き出す。踏ん張りの効かない両手に力を込め、懸命に刃を立てて、妖夢は叫ぶ。

「どういう、つもりですか——ぬえさんっ！」

「ふん、やっと気付いたのか？」

屋根の上に妖夢を押し倒しながら、獣が唸るような声で答えた。聞き覚えのある彼女の声とは全く違う——胎の底に響くような吠え声だ。

獣の姿を取り巻く、渦巻く赤黒い雲、わだかまる闇のような毛皮がモザイク模様に変み、その奥から一瞬、黒衣の少女の顔が覗く。それは間違いなく、封獣ぬえ——妖夢が先日、倒したばかりの妖怪、鶴であった。

「お望みどおり、本気で相手してやろうってんだ、感謝しな」

嘲るように口元を歪め、少女の姿はすぐに元通りの虎の四肢と貉の身体、猿の顔を持つ異形へと飲み込まれた。ぎしり、先程にも増して凄まじい力が、楼観剣を押し戻し、黒い獣の巨軀は妖夢を押し潰さんとする。

——これが、あの時あっさり負けて泣きべそをかいいた妖怪と同一人物だというのだろうか。

何故、どうして。混乱の中、脱出の隙を作ろうと半霊を繰り出す妖夢だが、ぬえは尻尾と翼を振ってそれをあつさりと振り払い、至近距離からの鈴仙の銃撃を喰らいながらも涼しい顔だ。

びようと吹き付ける風が、地面に散っていた落ち葉を舞いあげ、妖夢の顔に張り付いて視界を覆う。

「わぶっ……」

「さあ、正体不明の恐怖におびえて死ぬがいい！」

高らかな笑い声と共に、雷光が鳴り響いた。

ぎりぎりとして押し迫る獣の牙は、万力めいた力で妖夢の肌へと食い込み、ぷつりと皮膚を裂いて赤い血の玉を浮かべる。握る楼観剣の刃がねじって逸らされ、獣との間を隔てるものはなくなった。

獐猛な獣のあざとから吹きこぼれる生臭い吐息、頬に垂れる唾液に、妖夢は雨雲の入ってぼやける視界の中、今まさにぬえが自分の頭を食い千切らんとしていること

を悟る。獣の巨体が少女を引き裂かんと四肢を撓ませ、大きな顎を開いた。

刹那。

ぐにやりと周囲の視界が歪んだ。恐怖にめまいを起こしたかと訝る妖夢だが、いつまで待っても牙が肌に胸に食い込み引きちぎる感触がやってこない。

「……………」

痛む目元を擦ってみれば、押し掛かる獣の重圧もない。いつの間にか目の前に迫っていた獣は姿を消していた。それどころか吹き付ける風も、雨も、嘘のように収まっている。

「——助かつ、た？」

背筋を嫌な冷たさが這い降りてゆく。激しい耳鳴りに頭が揺れ、どくどくと胸が激しい鼓動を打ち、震える指先からは感覚が失せていた。

辛うじて楼観剣を取り落とすことだけはせずに、どつと溢れた汗をぬぐい、警戒を緩めぬままゆっくりと身を起す。

「妖夢、平気!!」

駆けつけてきた鈴仙が差し出した手を握り——妖夢はようやく、自分が血を滲ませるほど強く楼観剣の鞘を握り締めている事に気付く。強張った指を引き、震える脚を叱咤してどうにか立ち上がれば、里は不思議な静寂に包まれていた。

「——これは……………」

「心配には及ばない」

割り込んできた三つ目の声に、思わず身構える妖夢。鈴仙は落ち着いてと庭師の肩に手を置いた。

「無事か、二人とも」

「慧音先生!」

泥跳ねに汚れた綾目模様のスカートを翻し、大陸風の帽子は水滴をこぼし。紺の混じる白髪も濡れるままに、半人半獣の里の守護者が姿を見せた。



歴史喰いの半獸、上白沢慧音。里で寺小屋を営む自警団の一人だ。成程、彼女であればいち早く里の異常を察知し手を打つことが可能だっただろう。

「驚かせて悪かった。里の歴史を隠して、皆を避難させたんだ。あいつも別の歴史に放り込んでおいたが——おそらくは気休め程度だろうな」

今日が満月なら話は違っただろうが——と、ぬえの消えた屋根を見上げて、慧音は苦い表情を滲ませる。歴史を操る靈獸<sup>ハクタク</sup>白澤の力を持つ彼女だが、その身が示すように半人半獸である彼女には、それを自在に振るう事が出来る機会は非常に限られている。

「お前たちが食い止めていてくれて助かった。私ひとりでは手が足りなかっただろう」

深々と頭を下げる慧音に、しかし妖夢は情けない気持ちで一杯だった。アレは本来、妖夢が独力で対すべきものであったはずなのだ。

「……なんなの一体、今の？」

「見る限り、鵺と呼ばれる妖怪の特徴に酷似している。

恐らくは封獸ぬえ——彼女の本当の力なのだろうな」

腕組みと共に吐息して、慧音。白澤は、古今東西のあらゆる悪鬼妖魔の知識と、その辟邪法<sup>へきじや</sup>を教えるときされる靈獸である。ワーハクタクたる慧音は見事、里を襲った相手の正体を看破していた。

顔は猿、体は貉、尾は蛇、手足は虎。蠢き激む瘴気を纏い、その姿を不定形に霞ませる正体不明の化け物。

鵺は、二条帝と近衛帝の御世に京の都に現れた化物だ。名の由来は凶兆を呼ぶトラツグミのごとき鳴き声であり、聞く者を恐慌に陥れたという。

宮中に響くこの声によってついに帝も病に伏せるに至り、これを討たねばならぬと声が上がった。

選ばれたのは古今に比類なき射手と名高き、摂津源氏の棟梁、源頼政。

彼はわずかな供と雷上動なる弓、水破、兵破の二矢をもってこれに挑み、見事鵺の正体を見極め、黒雲に隠れたその身体を射抜いたのである。

かくして都を覆う黒雲も晴れ、討たれた鵺は頼政の従

者、猪早太によって首を落とされ九つに裂かれ、二度と甦らぬように空木船で海へと流されたと伝えられる。

「……そんな事が分かったところで、今は何の役にも立たないが」

悔しさを滲ませ、慧音は黒雲渦巻く空を見上げる。今回のぬえの凶行は慧音にも予想外であったようだ。

「以前から、里での悪戯は目に付いていたんだ。聖殿にも頼まれていたし、悪酔いした飲兵衛どもや餓鬼大将をからかうくらいの悪さなら大目に見るつもりでいたが——ここまで大仰に暴れられると、流石に捨て置けないな」

苦笑。慧音はこの騒動を、己の責任だと感じているらしい。いかにも妖怪と人との共存を目指す、里の守護者を自称する彼女らしい責任感だった。

「最近、妙に苛立っている様子だったが……こうなる前に気付けなかったのが悔やまれるな。」

先日も悪戯ウサギに騙されて、かなり荒れていたようだったが……

「あの馬鹿……」

慧音の独白に、今日里に来たがらなかったのはそれか、と鈴仙は呻いて顔を覆う。

「しかし、いくらなんでも遊び半分にこれはないだろう。せめて理由でも分かれば——」

慧音の話の遮って、妖夢は申し訳なさ一杯で小さく挙手をする。

「あの、慧音さん」

「ん？」

「……多分、私が原因です」

かいつまんで経緯を話す妖夢に、慧音は小さく唸り、波面を浮かべる。発端となった身としては心苦しいばかりだ。

黙考してしばし、里の守護者はゆっくりとかぶりを振った。

「いや、たとえ事情があるにせよ、これはやり過ぎだ。里を巻き込んで、命名決闘にも則らずに私闘を仕掛けるのはどう言い訳しても許容できる範疇を超えている」

本来、異変というのは人里を直接巻き込まないように

配慮するべきものだ。異変を起こす妖怪の側もそれを心得ていることが嗜みとされているが、反発が全くないというわけではない。

古くからの妖怪の中には何故人間である巫女の定めた規範などに従わねばならぬのかと公言する者も少数だが存在しているし、常に新参を招いている現在の幻想郷では、腹の底では不満を抱えている連中は少なくないのだ。「正体不明という能力の關係上、彼女が命名決闘そのものに馴染まないというのもあるかもしれないが……」

はあ、と深く吐息して慧音は頭を抱えた。

「すまないが二人とも、手を貸してもらえないか。彼女の能力と私の能力は相性が悪い。本音を言えば、できれば博麗の巫女が出張ってくる前にケリをつけてしまいたいんだ」

「先生……?」

人里に妖怪が襲来して大暴れした、などというのはそれだけでもスキャンダルだ。挙句、博麗の巫女が現れればそれは本当の異変となってしまう。できる事ならばそ

の手前で穩便に済ませたいというのが慧音の希望だった。

これは何もぬえの事を慮ってばかりではない。本来、妖怪が襲ってはならないとさせる人里に、命運寺の妖怪が攻撃を仕掛けたという事実は、他の不満分子たちを引き寄せるに十分だ。信仰を狙って対立を深めている宗教勢力達の問題もある。

危機を未然に防ぐため、全てを『なかったこと』にしたいと、慧音は言っているのだった。

「……解りました」

「妖夢、いいの?」

あっさり頷く妖夢に、鈴仙は目を丸くする。たった今、手も足も出ず仕留め掛けられたばかりではないかと、視線が強く語っていた。それは分かる。間違はなく、鈴仙の言っていることは正しかった。けれど。

この機会を逃せば、きつともうチャンスはない。

「私が原因みたいなのですし、それに……私も、ぬえさんとは戦ってみたいんです」

言い切る妖夢に一瞬、呆気にとられた様子の慧音だっ

たが、すぐに事情を察したのか、済まないと頭を下げた。

「私は里に被害が出ないようにするので精一杯だ。大した補佐は出来ないかもしれないが——」

「大丈夫ですよ、私は強いですからね」

努めて軽く——虚勢と悟られないように、妖夢は言う。

「頼む。最悪、博麗がやってくるまでの時間稼ぎでも構わない」

慧音の忠告にはいと頷いて、妖夢はゆっくりと身を起こす。気合いを入れるため、ぱしんと頬を叩き、ぐつと奥歯を噛んで、全身から怖れを追い出した

「……すみません、鈴仙さん、巻き込んだじゃったみたいで」

「いいって。どうせ乗り掛かった船だしね。……原因の一端はウチの性悪ウサギにもあるみたいだし、手伝っわよ」

諦めたようにちよこんと肩を竦めてみせる月兔。巻き込まれる事には慣れているとばかり、小さくウインクをしてくれる。出来の悪い妹分を庇うような口ぶりだが、

幻想郷でも屈指の長寿である当の本人には心外であるだろう。

「……………」

妖夢はまだ震えの残る指で腰の二刀の柄を握り、決意と共にじっと、黒雲渦巻く里の空を見上げた。

## ▼ 四

上白沢慧音の歴史を隠し改竄する能力は強力だが、それは決して万能ではない。強い力を持つ存在は別の世界線にあっても同様に歴史に影響を及ぼし、世の流れを己の元に引き寄せる。

英雄とは自身の意思で因果や宿命を捻じ曲げるものだが、こと幻想郷においては神話伝承の英雄や神霊、それに比する怪物が石を投げれば当たるほどにひしめいている。

加えて、ぬえの正体不明を操る能力は記述と記録を根源とする慧音の歴史干渉とは著しく相性が悪い。正体の定かでないものは正しく記録し留めておくことができないためだ。能力を操り自身の存在すら不確定としたぬえは、ほどなく元の歴史へと帰還した。

闇とも霧ともつかぬ黒靄を纏った獣の姿をとり、ぬえ

は里の広場の龍神像の上に陣取っていた。幻想郷の創設者たる一柱をも踏み付けて、平安京の夜を脅かした大妖怪は傲岸に周囲を睥睨する。

二刀を携えた庭師が、通りの間を駆け抜けて姿をみせたのはまさにその時だった。

「西行寺家剣術指南、魂魄妖夢。お相手します」

「ふん。逃げ出さずにやってきたのは褒めてやる」

改めて名乗る妖夢を睨みつけ、ぬえは喉を反らしてトラツグミの鳴き声を上げた。空に黒雲が呼び起こされ、雨の中に雷鳴が跳ねる。溢れだした瘴気が風雨となって妖夢に叩き付けられた。

凶兆を報せる鶴の鳴き声は、心を揺らす恐怖の声。一鳴は妖夢の決意をやすやすと貫いて恐れを呼び起こした。肌を這い上がる悪寒に少女の手足が竦む。

「く……ッ」

唇を噛んで、痛みをもって恐怖を押しとどめる。分かっているがやはり自分は臆病だ。自覚とともに気合を上げ、妖夢は櫟観剣を抜き放った。四尺七寸の白刃が閃

き、風雨に紛れて襲いかかる緑蛇の群れを斬り払う。

「そこだ！」

黒雲の中に身を隠そうとしたぬえを追いかけ、剣閃が宙を翔んだ。胎の底から絞り出した気迫と共に振るわれた雨粒が両断され、雲を斬り払って道をつくる。胸中の怖れを振り払い、妖夢は大きく前へと踏み込んだ。

ひと振り十殺の切っ先が路地から飛び出した化け物の喉を突く。裂帛の気合が渦巻く黒霧を吹き飛ばし、露わになるのは首を串刺しにされた鶴の姿。

――が。

喉を貫かれた獣の姿がぶれ、ぬえの表情が一瞬覗き、にやりと笑みを覗かせる。

同時、確かに仕留めたはずの手ごたえは、ぱきんと碎ける硬い衝撃と共に消し飛んだ。

――正体不明「紫鏡」

喉を刺し貫かれた鏡像が、破片になって碎け散る。刺

突の勢いを殺しきれず、妖夢は鏡の破片に突っ込んだ。碎けた破片から顔を庇い、妖夢は思わず目を閉じてしまった。

直後、横殴りの重い一撃が少女の身体を吹き飛ばした。水たまりを蹴散らし、庭師の身体は広場に面した雑貨屋の雨戸を突き破って店内に転がった。ずしんと突き抜ける衝撃と共に、商品を満載した棚が将棋倒しになって妖夢の上に倒れ込む。

「……ぐ……あ」

強烈な一撃に頭を揺さぶられる中、意識を手放さぬように妖夢はきつく唇を噛んだ。

げほ、と咳き込めば右のこめかみに激痛があった。ざくりと裂けた額から、血が溢れ出す。

咄嗟に楼観剣の鞘を跳ねあげて盾にしなければ、妖夢の頭は柘榴のように碎けていたに違いない。見事二つにへし折れた鞘に背筋が寒くなる。ぬえの前脚は、文字通り虎の脅力だった。

このまま閉じ込められたらあの鐵弾の餌食だ。妖夢は



倒れた商品棚を半霊で押し上げ、辛うじてできた隙間から痛みを堪えて身体を引き抜く。

店の入口へ駆け出そうとしたところで踏みとどまり、妖夢は素早く方向転換、店の裏口から路地へと飛び出した。

咄嗟の判断は正しかった。一瞬遅れて光の鏃が店の中へ叩き込まれる。

店を破壊する激しい着弾音を耳の後ろに聞きながら、路地をジグザグに走って壁を駆け上がり、側転と共に半鐘の吊るされた火の見櫓の上へ。

荒れ狂う嵐の中、ひゅおおおと不気味な鳴き声が風雨に混じって響く。上空には既にぬえの姿があった。雷鳴を背負い、うねる黒雲を纏って、咆哮と共に放たれる白い光弾が妖夢を取り囲む。櫓を足場に跳躍した妖夢の背後で、半鐘が着弾に打ち抜かれてけたたましく鳴り響いた。

「っあああああ!!」

渾身を込めた兜割りの一撃を、獣は後ろに退いてかわ

す。

刹那。

「——もらった!」

虚空に溶ける様に現れた鈴仙が、そこに出現した。波長をずらし自分にステルス迷彩を施して、気取らせずにぬえまで接近したのである。

彼女の構える銃口には、眩いほどの紅い輝きがある。

鈴仙はぬえの首の後ろに取りつき、零距离からの溜め撃ちを叩き込んだ。もはや砲撃に等しい口径の貫通弾が、轟音とともにぬえを地上に撃ち落とす。

だが、それも獣の身体を覆う不可解な靄を破るには至らない。唸るように背を捻ったぬえが、背の翼を広げて逆立てた。巨大な甲殻類の爪鎌が鈴仙の胴を薙ぎ払う。

「悪いけど、幻影はあんたの専売特許じゃないのよ!」

虚像がかき消された時には月兎の姿はぬえの真横にあった。見開かれた狂気の眼が出力を増し、閃光をもって離田の花冠を描く。重なる赤い光輪が、ぬえの喉に叩き付けられる。

光の輪の拘束に、ぬえの纏う黒い靄が激しく揺らぐ。

鈴仙は黒い獣の姿を形作る正体不明の能力を力づくで解析し、突破しようというのだ。

狂気の魔眼の輝きに黒靄は削られ、がりがりとした激しい火花を散らす。

このまま押し切れるか——妖夢が淡い期待を抱いた時だ。

「きゃ——!？」

空から突如吹き下ろした雨交じりの突風が、鈴仙を吹き飛ばす。風に舞う落ち葉のように屋根の上から吹き飛ばされた玉兎の視線が外れ、獣は狂気の魔眼から逃れていた。

不安定な姿勢から銃口を閃かせる鈴仙に対し、対するぬえの動作は単純なものだ。着弾など気にせず、黒い靄を纏う巨体をくねらせ、そのまま鈴仙を体当たりで吹き飛ばしたのだ。

「かはっ……」

ぬえの獣のごとき俊敏さに、悲しいかな射手の体術で

は追従しきれない。虎か戌亥か、巨大な肉食獣の体軀をもつ獣に突き飛ばされ、鈴仙の身体は梁上を転がる。

長い髪が水滴を散らし、身体ごと叩き付けられてなお瓦を砕くほどの強烈な一撃。屋根から転げ落ちそうになった鈴仙は上半身だけで庇に捕まって、なおもぬえに銃火の斉射を浴びせかけた。

しかしそれらも全て、黒い獣の身体には届かず弾かれる。

「……これでも、効かないの……ッ!？」

無理な挙動で肺を痛めたか、鈴仙が激しく咳き込んだ。弾幕が途切れ、照準が乱れる。

(まずい!)

鈴仙に迫らんとするぬえの前に、妖夢は強引に割り込んだ。

手首を返し楼観剣の切っ先を閃かせるが、黒い獣は閃光のような刃をするりと掻い潜り、反撃の牙を繰り出してくる。大きく開かれた大猿の顎が、妖夢の鼻先でがちんと噛み合わされる。半霊を割り込ませて距離をとった

すぐ眼前で、獣の牙ががりがり火花を散らす。

「ぐ……ッ」

屋根から滑り落ちそうになる鈴仙を庇い、妖夢は楼観剣の刃を獣の右肩にねじ込んだ。それでもなお獣の巨軀と小柄な妖夢では勝負にはならない。押し掛かってくる獣を、大太刀で支えるのが精一杯。

深々と食い込む刃をもつとせず、ぬえは大きくあぎとを開いた。

「ぐ、あ……ッ」

雨の打ちつける瓦の上では、思うように踏ん張りが聞かない。じりじりと押し込まれながら、凄まじい力でぬえの爪が、牙が眼前に迫る。

吹き付ける雨風が妖夢の視界を奪つ。雨の混じった血が右目にぬるりと入り込み、視界を紅く染める。濡れぼそった服は手足に張り付き、自由な動きを阻害した。泥を跳ねさせ、滑る屋根瓦を、濡れる戸板を蹴って走る度、手足には余分な負担がかかる。

「っ、あ、あああ!!」

がきりと楼観剣を捻り、妖夢はひざをかし上げて獣の喉に喰い込ませた。さらに加速させた半霊を叩きこんで、どうにかぬえの巨軀を跳ねのける。

「っ、は……、はあ、はあ、はあっ」

いつしか妖夢の身体は、雨の中湯気を発するほどに熱を籠らせていた。

荒い息が喉を突く。額の出血は弱まる様子を見せず、ぜいぜいと肩が上下し、濡れた口元が空気を求めて歪む。冷静さを欠いていると自覚こそすれ、思うように付いてこない手足が焦燥をさらに深くした。

押し返されたぬえは、再び黒雲の中に姿を消した。

身を丸めて咳き込む鈴仙を背に庇い、妖夢は油断なく周囲に気を配る。黒雲に覆われた空と激しい雨。薄闇の中、どこからともなく姿を消し、恐怖を糧とし現れる不定形の化け物に、妖夢の疲労は濃い。刀を振るう手足にも余計な力が入り、動きもぎこちないままだ。

「っ……はあ、っ」

髪をしたたる雫が目に入り、長尺の大太刀は雨に濡れ、

四尺七寸の切っ先がわずかにぶれる。

妖夢がその小柄な体格で楼観白楼の二刀を同時に扱えているのは、日々のたゆまぬ修練が為せる業であった。

それでも、この刀は本来、まだ手足の伸び切っていない少女の体躯には長大過ぎる得物だ。暴風の悪天候、雨風に晒されながら、いつ襲われるとも分からない状況で気を張り詰め、長時間の戦闘は激しい消耗を招き、白玉楼の守りの要たる彼女の剣の冴えを衰えさせていた。

顎を伝い落ちる雨雫、全身にまとわりつく服。額の傷は熱を持ち、溢れた血が頬を流れ、片目に入り込んでずきりと痛む。ぶれた楼観剣の切っ先を構え直し、妖夢は緩みそうになる意識を張り詰め、緊張を繋ぎ止めた。

ぬえの攻め手は周到で執拗だ。相手に緊張を強い、消耗させたところで襲いかかる。一つの動きにはいくつものフェイントが織り交ぜられ、隙をこじ開けて強烈な一撃をねじ込んでくる。刹那の油断が命取りとなる、真剣勝負——暴風雨の中の対峙は妖夢の一方的な消耗を招くばかりである。

加えて地の理は相手にあると云っている、無闇に追いかけてまわそうとも疲弊を招くだけだろう。迎え撃つのが一番の上策だと、妖夢は考える。

が、こうして気を張り詰め、襲撃に備えること自体がぬえの狙いであると、妖夢は気付いていた。

ぬえの力の源は、正体不明の恐怖に怯える心だ。どこから襲いかかってくるか分からない相手に心を張り詰め、疑心暗鬼を生じ、平静を乱せば乱すほど、彼女の力は増してゆく。惑わされてはならないと、妖夢は己を叱咤する。

（楼観剣じゃ、斬れない）

静かに認める。一振りで妖怪十人を斬り殺す刃は、鶴の纏う不可解にして正体不明の毛皮に全て阻まれ、その奥へと触れる事すら叶わなかった。

（斬れないのは、私が、相手を見極め切れていないからだ）

決断という言葉も、断定という言葉も、そこに断つという意味を含めている。すなわち、斬るとは相手を見極

め、ひとつのものをふたつに見切る手段であった。

見えず掴めず聞こえないものが、未熟者に斬れないように——妖夢はいまだ、ぬえという妖怪を見切れていない。ならばいかに剣を振り回そうとも、斬れる道理がない。

「……それなら」

妖夢は左手を楼観剣の柄から放し、腰の裏の短刀へと添えた。

湧き起る黒雲の隙間から稲光が迸る。閃光が一里を白黒に映し出す一瞬の中、鋭く突き出した楼観剣は、死角から蛇のように迫ったぬえの牙を受け止めていた。

がきりと牙と白刃が噛み合う中、吠える怪物の懷に身を寄せ、妖夢は腰から白楼剣を抜き放った。

普段の幕ではほとんど使用することのない、魂魄家の伝える剣、迷いを断つ短刀が、逆手に鶴の首元へと付き込まれる。

——魂魄流、炯眼剣。

本来は、白楼剣で受けて楼観剣で攻撃を返し、相手の

獲物をへし折る、攻防一体の因果の剣。妖夢は今それを左右逆の刀でこなしたのだ。カウンター

迷いを振り分ける魂魄家伝来の刀は、ぬえの首元に刃元まで深々と食い込んだ。

——食い込んだ、だけだった。

黒い獣の首元に穿たれたまま、白楼剣はびくりともしない。惑いを振り分ける刀と、ぬえの正体を不明にする力。二つの相反する能力はびたり拮抗し、それ以上びくりとも動かない。

「そんな……!?!」

まさかの結果に、妖夢は目を剥いて叫ぶ。思わぬ罅迫り合いに庭師は両目を見開いて叫ぶ。

「ふうん。そいつなら私を斬れると思ったのか？ 思い上がるなよ、未熟者ッ!」

それを見逃すぬえではない。獣は身体をくねらせ、首に食い込んだままの白楼剣を妖夢の腕から引っこ抜く。

雨に濡れた手が柄頭からすっぽ抜け、少女の身体は宙を泳いだ。

そこに——丸太のように太い、鶴の蛇の尾が叩き付けられた。

「っあ!？」

「……、妖夢っ!」

鈴仙が手を伸ばすが間に合わない。どしやり、屋根上から地面に叩き落とされ、頭から泥に突っ込んで、妖夢は地面を転がる。

反射的に跳ね起き、残る楼観剣を構えようとするが——太腿に走る激痛に、思わず刀を取り落としかけた。右の腿に深く、ふたつの孔が空いている。箸の先程の大きさの孔は、血を噴き出すことなく、見る見るどす黒く腫れ上がる。

（——毒、？）

見る間に冷たい痛みが右足を痺れさせてゆく。ぬえは、その尾から伸びる蛇の牙をあの手違いざまに妖夢の足に突き立てていたのだ。

楼観剣を支えに足を引きずるように懸命に起き上がる妖夢に、高らかな笑い声が響く。

「あつはっはっはっは！　なんだよそのザマは！　なにが剣術指南だ、その刀がなきゃ何にも出来ないくせに、よく抜かしたな!」

びようと、鏖弾を交えて瘴気を孕んだ重苦しい風が吹き付ける。傾いた家屋がみるみる朽ち腐り、妖夢を押し潰さんと崩れ出す。片足を引きずって辛うじて身をかわす妖夢だが、それでも避け切れず、鏖の数発が少女の背中を直撃した。呻く少女めがけ、雨霞と光の鏖弾幕が降り注ぐ。

「折角だ、もっと虐めてやる」

ぬえが言うと同時に、黒い獣の背中から小さな羽根を生やした蛇が飛び出した。

新たな攻撃に右足の痛みを堪え、懸命に避けようとした妖夢だが、蛇は最初から妖夢を狙ってはいなかった。妖夢が辛うじて握っていた楼観剣、地に転がった白楼剣の柄が、蛇によって思い切り跳ね飛ばされる。

「——しまった!!」

油断だった。汚れた視界を拭い、手放してしまった楼



根幹に根差した力であると、妖夢は瞬時に理解していた。しかし。

(……からだ、が、うごか、な)

天を埋め尽くす鏖が一斉に放たれる。

毒に侵された脚では放たれた赤黒い鏖を避ける事も敵わず、振るった竹竿は大きく狙いを外して空しく空をきった。

「あ……づ……ッ!？」

喉を締め上げるほどの激痛。呪詛の鏖が深く妖夢の肩に突き刺さる。弾幕で作られた矢は、本物と寸分たがわぬ鋭さと威力を持っていた。鏖が肩肉を貫通し、肩が持っていられそうな衝撃につんのめる。

——腕が千切れなかったのは、幸運と言っている。

赤黒い鏖が脇腹を掠めた途端、そこから急速に熱が奪われてゆく。強張った筋が痛み、傷の痛みが二回りほど増す。

雨の中の活動で動きを鈍らされた今、半分幽霊の妖夢にとってもそれは致命的な攻撃だった。呪詛にまみれた

鏖に付けられた傷はじゅうじゅうと焼けるように痛み、見る間に傷を広げてゆく。

(……………あ)

呆けたような声が出る。肩から、額から、脚から流れる血とともに、力まで抜け落ちてしまっているかのよう。勝ち誇るように、ひゅおおおと鶴鳥の鳴き声が空に響く。

——恨弓「源三位頼政の弓」

驕る平家の専横に心を痛め、絶望的な兵力差を前になお挙兵して義に準じた、三位入道源頼政、悔恨の強弓。怨念の呪詛を孕む無数の矢が、ぬえどりのなく空の下、もはや動けぬ妖夢の身体を捕えた。



## ▼ 五

「妖夢！」

痛む喉を押さえ、涙の滲む眼を擦って鈴仙が顔を上げれば、視界に入ったのは泥に塗れて二刀を失い、無数の矢にさらされる妖夢の姿であった。

雨霰と叩き付けられる呪詛の鏃を次々と受け、くずおれる少女の元へ、鈴仙は我を忘れて駆け出していた。

(……見え、ない……っ)

突き詰めれば光も音も波である。波長を操る程度の能力をもつ鈴仙にとって、いかなるものであろうとも自分の眼を通せば見定めることができるはずだった。

しかし、ぬえにはそれが通じない。彼女の纏う『正体不明』は常にその身に纏う波長を凄まじい速さで切り替え続けていた。

一瞬たりとて同じ波長に留まらず、振動数も波形も振

れ幅も変え、何重にも重なり合ってその本質を覆い隠す不可視の能力。瞬間瞬間の補足は可能でも、不連続に蠢く不定形の姿を、ひとつに定めることができないのだ。時に増幅し、時に打ち消し合って蠢く不定形の波長は、鈴仙の狂気の眼をもってしてもまったく無効化しきれなかった。

(変更の周期、規則性さえつかめれば——ッ)

鈴仙は能力を全開にして、赤い視線の先に正体不明のばけものを見定める。玉兔の視覚神経が活性化し、薬理活性が神経伝達を加速させる。

呪詛を乗せた矢が耳元を掠め、摩く髪が千切れる、ステルス迷彩のため自分の周囲の位相をずらすのは最小限にとどめ、鈴仙は正体不明の能力のデコードに全力を振り分ける。

ぬえの正体不明の能力は、彼女本人の統制に基づくものではなく、彼女が作り出した『種』によって自動で付与される類のものだ。対象に埋め込まれた種は機械のようになんとなく、解析できない不明の『場』を作り上げ、観

測者の認識を阻害する。

（自動無差別の無作為妨害。月面方面軍の軍用暗号にも勝る情報構造と暗号強度。リアルタイムの解説は事実上不可能……）

月面で叩き込まれた潜入工作・諜報活動の専門知識が、冷静に戦況を分析する。

「ああもうっ！ そんなこと解ってるのよー！」

焦れた鈴仙は、苛立ち任せにジャケットの内側から三本の試験管を引っ張り出した。

生薬「国土無双の薬」。月の頭脳、八意永琳が鈴仙に与えた、身体能力の劇的な向上をもたらす劇薬だ。使用者の身体に強力な活性を付与するが、身体にかかる負担もそれに比例して大きなものとなる。

服用からおおよそ数分間、使用者の能力は飛躍的に向上し、その増幅効果は重複する。しかし反復利用が可能なのは三服まで。四服目を摂取した瞬間、限界を越えた身体の方が魔力の暴発を起こして、服用者を含めた周辺に膨大な被害を及ぼすのだ。

鈴仙は躊躇わず、三服をまとめて摂取した。皮下注射と異なり経口による摂取は粘膜からの吸収が主となるため、まず血流を介して神経系の加速が先行して起こる。思考だけが加速し、身体の動作を置いてきぼりにして意識だけが吹っ飛んでゆく。時間が粘性を帯びたように鈍くなり、手足ももどかしいくらい遅くなる。

だがそれこそ、今の鈴仙にとって喉から手が出るほど欲しい、暗号解読のための思考時間だ。雨粒の一つ一つが識別できるほどに視覚が過剰に活性化し、耳は雨音一つ一つを区別する、国土無双の百倍加速の時間。それはまさに狂<sup>ルナティック</sup>気の領域。

薬理作用と思想教育で擦り込まれた脳の戦術野が活性化。高速稼働した玉兔の思考が、無数のシミュレートを開始する。

（……割と、身体張ってやってるんだけどなあ）

こんなものに頼らねばならない事自体、自分の力不足を際立たせる理由になるのだろう。そう思い鈴仙はわずかに自嘲する。

いくら比較しようともまったく自分の進歩を実感できないことがもどかしい。月における不世出の天才、八意永琳を師匠に持ってしまったことは、ある種鈴仙最大の不幸であった。

（よし、捉えた！）

相対的に百分の一に遅くなったぬえの能力に割り込みをかけ、強引に波長の制御を奪取。正体不明の種を隔離し、即座に致命的な波長を浴びせかけて焼却駆除。

見開いた魔眼を空に叩き付け、赤光とともにあったけの幻覚を叩きこみ、こじ開けたぬえの能力に狂気の波長を干渉させる。

同時、弾倉が空になるまで左右の拳銃を連射。

加速時間の中で引き延ばされた銃声と着弾音が、けたたましく響き渡る。ぬえの眉間と右眼、心臓と喉、そして脚。誤差一ミリで着弾をまとめて撃ち込んだ弾幕が、僅かばかり化け物の動作を遅くした。その間に、鈴仙は泥の中に滑り込むように倒れ込んだ妖夢の肩を抱えあげた。加速する意識に追従しきれない手足が悲鳴を上げる。

が、無視。

眼前に迫る呪詛の鎌を銃把で叩き落とし、気力を振り絞って、地面に散らばる竹竿の中からふた振りの刀を識別、指が切れるのも構わずに右手に掴んだ。

よろよろと浮かび上がった半霊が追隨するのを確認して、鈴仙は思い切り地を蹴る。月面を跳ねる玉兔の脚は、薬理活性のブーストの助けを借りて凄まじい初速を叩き出した。

砲弾めいて空へ跳ね、広場を離脱した鈴仙の背を追うように、ぬえの鳴き声と瘴気を纏う矢雨が降り注ぐ。

「こっちだー！」

吹き荒ぶ剣林弾雨の中、活性化された感覚は路地裏から顔を出した慧音の姿を捉えていた。彼女がわずかな余力で放ったスペルが発動し、ぬえの動きをわずかに留めている間に、鈴仙は妖夢を抱えたまま、路地へと駆け込んだ。

庇の下の乾いた地面に彼女を寝かし、その身体を検める。

「妖夢！　しっかりして！」

庭師の少女は、全身至る所傷だらけだった。右目の上が深く裂け、左右の腕は身体を庇っていくつもの着弾に焦げている。胴を薙ぐ爪の創傷はかろうじて内臓に届かない程度の深さ。裂けたスカートの奥、右の腿はどす黒く腫れ上がり、膝まで痛々しく腫んでいた。

中でも肩を貫通し骨を砕いた矢創が一番ひどい。脇腹にも二本、浅くない矢創があった。

本物の矢であれば引き抜こうにも肉がからまり、骨が矢軸に食い込んで悲惨な事になっていただろうが——呪詛でつくられた鏃は直撃と共に実体を失う。その心配はないが——その分傷が剥き出しとなり、むしろ出血は酷くなっていた。

「——ッ……！」

見る間に地面を赤く染めるほどの夥しい出血に、一瞬我を忘れかけ、鈴仙は懸命に悲鳴を喉奥に飲み込んだ。

実のところ、鈴仙は血や怪我を見るのが大の苦手である。そもそも穢れなき月に棲む玉兔は負傷や死と無縁で

あり、月の障りもない。血とは穢れの象徴であり、忌避されるべきおぞましいものでしかなかった。その上、月面戦争当時の事情もあって、鈴仙にとって重篤な負傷を目にするのは半ばトラウマである。

（落ち着け、意気地なし！）

失神しそうになる軟弱な自分の頬を思い切り張って、その痛みで理性を保つ。顔面蒼白、ほとんど無意識であったものの、玉兔の手はきちんと動いてくれた。師匠の厳しい仕込みは、混乱の中でも命を繋ぎ止める応急処置を可能にしていたのだ。

恨弓の名の通り、かつての恨みを核にしてぬえの放つ矢は、鏃の代わりに高濃度の呪詛を纏い、傷口にそれを押し込むものだ。国一つの中枢を傾けた呪詛は傷を深め発熱させ、負傷をじわじわと広げる効果も持ち、決して通常の手段での治癒を許さない。達人の魔法でも治療は難しいだろう。

鈴仙は妖夢の身体に喰い込んだ呪詛を、波長を操ってデコード。同じ要領で解毒も行う。次いで場所を絞って

魔眼を照射、波長を固定化して血を固化させ、大きな血管を塞いで傷口を覆う。さらに手持ちの造血剤と、脚の毒への血清を大量に投与。骨を砕かれた肩はどうしようもなかったので、袖を千切り、添え木と共に縛って固定する。

怪我也半分で済むし痛みも半分だけで済むという、半人半霊という妖夢の出自に頼った強引もいいところの処置だったが、それでもわずか九十秒の早業であった。国士無双の薬の薬効が残っていたのも、幸運に作用しただろう。

薬が切れ、反動でくらりと揺れる視界の中、鈴仙は懸命に意識をつなぎ止めた。

「……間に合ったか」

駆け付けてきた慧音に頷き、鈴仙は気付け薬を口に含み、口移しで妖夢の唇に流し込む。

「う」

妖夢がびくりと身体を竦ませ、呻きを上げる。自分がこんな怪我をすれば、まず十日は目を覚まさないだろう

が、普段からの鍛え方が違つのだろうか、妖夢は目を開けると、ほどなく状況を察したようだった。

「大丈夫？」

「……油断しました」

げげげと咳き込み、少なからぬ血の混じった痰を吐いて、妖夢は身を起こそうとする。目覚めるなり己の二刀を探そうとする彼女に、鈴仙は慌てて肩を押さえた。

「起きちゃダメ、絶対安静よ」

「それも、言ってられないんです。……彼女は、私と戦うために来てくれた。だから私も最後まで、それに応えなきゃ」

「無奈よ妖夢！ 別に、あなたじゃなかったっていいでしょ!? 巫女だって、他の誰かだって！」

「我が儘なのは分かってます。でも」

妖夢は強くかぶりを振った。しかしこれはもう、弾幕ごっここの範疇を超えている。確かに命やプライドをかけて挑む決闘だつてあるだろう。それは鈴仙だつて否定しない。

しかし、勝算も見えず、勝つことに利の無い相手に意地を通すことほど、無駄な事は無いのだ。

事実、路地裏にまで響く鶴の声に、今だって妖夢の手は震えている。

凶兆をもたらす鶴の鳴き声には恐怖を呼び起こす作用がある。鈴仙は自分能力で防壁を張り、音波を阻害しているのが被害を受けずにいるが、半分幽霊である妖夢には普通の人間以上に精神的な作用が強く影響を及ぼしているはずだ。

だが。

それでも妖夢は、愚直なまでに鶴に、正体不明の恐怖に向き合おうとしていた。

「妖夢」

そんな庭師の少女の隣に屈みこんで、慧音は諭すようにじっとその顔を覗き込む。

「恐怖に屈せず、決して諦めないというのは正しいことかもしれない。だが、お前のしていることはただの蛮勇だ。訳もなく命を危険に晒すのは、勇気でもなんでもな

い。もう、自分で分かっているんだろう。……あれは、お前には斬れない相手だと」

言われ、妖夢は口を噤む。吹き荒れる風と響く雷鳴。勝ち誇ったように繰り返される鶴の鳴き声。

「……はい」

長い沈黙ののち、妖夢は静かに頷いた。

「確かに、私には、形の無いものを斬るのがせいぜいです。正体の無いものは——斬れません」

見えるものに惑わされぬようにするということは、相手の本質を理解するということだ。

相手を見定めぬ事が出来ぬ以上、妖夢にはそれを討ち取ることはできない。理解の及ばない相手をそのまま斬る事は、あるいは彼女の師であれば可能であったのかもしれない。

「それでも、止めないのか」

「……………」

詰問のような口調の慧音に、しかし沈黙のまま、妖夢は刀から手を離さない。鈴仙の制止を払いのけ、ふらつ

く足を引きずって身体を起こす。

「すみません。……私の我が儘です」

「……理屈じゃないんだな。言っても無駄か」

慧音は深く吐息し、袖から一包の銀色の結晶を取り出して口に含んだ。わずかに彼女の姿がぶれ、荘厳な気配があたりに満ちる。

彼女が懷から広げた巻物を一瞥すると、気付けば妖夢の身体は淡い光に包まれ、時間が戻るように傷が塞がってゆく。脱げていた靴もいつの間にか戻り、避けたスカートも元通り、鉤裂きも泥染みも消えうせ、雨に濡れてすらいない。

なけなしの刻符と、月阿片——非常用に確保していた満月の力を用い、靈獸白澤の力をもって、妖夢の負傷の歴史を喰ったのだ。目を丸くしながら、妖夢は左右の手を握りしめる。

「一時的なものだ。あとで半月は寝込む事は覚悟しておけ」

「ありがとうございます、慧音先生」

「そういう性格との付き合いも長いからな。これでもう私には余力は無い。支援は期待するな。……ああ、それと鈴仙」

立ち上がり、二刀を腰に刷き直す妖夢の隣。呆けていた鈴仙は急に話を振られ、鈴仙は驚いたように顔を上げた。

「へ？ 私？」

「この、雨を止めてもらえないか」

「雨？ 別にいいけど……どうやって？」

きょとんと瞬きをする鈴仙に、慧音は腕組みをして黒雲渦巻く空を見上げた。

「妖夢の戦いを見ていて気付いた事なんだが、この雨、明らかに不自然だ」

雷の鳴り響く嵐の空。それは如何にも、鶴の故事に類するものだったが——それを語った当の慧音が、不審げに鼻の上に皺を寄せ、眉をしかめる。

「鶴は後の世に雷獸としても語られるが、それは正体不明の妖怪・鶴という妖怪と外見の似た雷獸という別個の

妖怪が混同し、習合された故に起きたものだ。本来、平家物語等に記された鶴に、雷鳴を呼ぶ力は無い。八雲の式の九尾などは積極的にこれと同じことを繰り返し、さまざまな宗派に絡む力を全て自分のものとしているようだが」

守矢の神様が、風の神であると同時に戦の神で、蛇だったり、祟り神であると同時に蛙だったりするのと同じことだ。多面性を備えることで、多くの畏れ、多くの信仰を得て、より大きな力を得ることが出来る。

「私の知る限り、封獣ぬえは己を正体不明の妖怪として定義し、そう振る舞っている。しかし、だとするならばこの嵐はいかにも不自然に過ぎるんだ。

この風雨や黒雲は明らかに彼女の力として機能しているにも関わらず、彼女は雷獣として力を振るおうとする様子がない」

つまり。

「この嵐を起こしている相手が、彼女の他に居るという事だ」

そこまで言われれば、鈴仙もすぐに彼女の意図を察する事ができた。残る一服の国士無双の薬を手に、脱ぎ捨てたジャケットから拳銃を抜く。

「そういうことね。……いいよ、任せて」

「頼みます、鈴仙さん」

深く頭を下げる妖夢に、鈴仙は軽く頷いた。銃の残弾を確認してリロード。明日からしばらく起き上がれないだろうが、乗り掛かった船だ。

口元を軽く緩め、鈴仙はすっと手を挙げる。一瞬呆けた様子の妖夢だったが、すぐに意図を察してくれたらしい。

ぱん、と掌を叩き合わせ、二人は頷いて路地裏を飛び出した。



暴風雨の中、鈴仙は宙へ高く飛び上がり、狂気の眼を見開いた。三百六十度を睥睨し、視界に収まる全てを捉



える。

存在さえ示唆されれば、鈴仙の眼はいかなる隠蔽すら看破する。黒雲に潜むなど、隠れているうちにも入らない。

「そこだ！」

赤い魔眼が光を放ち、構えた銃口が十字に砲火を閃かせた。

「きゃああ!？」

夜空の黒雲の中、高い声が響いた。降り続いていた雨、ごうごうとつねる風が不意に止まる。

大きな茄色の傘——そこにいくつも穴をあけて。付喪神、多々良小傘が虚空から突如出現し、鈴仙に向けて落ちてくる。

屋根の上に突っ伏して『むぎゅっ』と声を上げる彼女の懐から、羽根の生えた蛇がするりと這い出してどこかに消えていった。

「なんで!? ちゃんと隠れてたのに——」

「あいにくね。かくれんぼの鬼は得意なの。お友達の能

力は、さっき解き方のコツを掴んだわ」

さりげなく、空になった試験管を放り捨て、驚愕の声を上げるお化け傘に、ウインク一つを挟んで銃口を向ける。

即座に引かれた銃爪三連。緋色の銃弾から辛うじて身をかわしながら、小傘は悲鳴を上げた。

「ぬ、ぬえ、話が違ふよッ!？」

「——おっと。2対2なんだから、卑怯なんて言わせないわよ」

「っ——」

助けを求め逃げ出そうとする小傘の前に回り込み、鈴仙は油断なく銃を突き付ける。

突き付けられた鋼の銃口に、小傘は身を硬くした。空には変わらず黒雲が渦巻いているが、雨はぴたりと止んでいた。

「永遠亭の鈴仙・優曇華院・イナバが、あなたに命名決闘を申し込むわ。条件は零死二符<sup>残機無し2ボム</sup>。私が勝ったらこの勝負への手出しを止めて貰う。……どう?」

「……………」

小傘の能力では、命名決闘中に風雨を起こしてぬえの支援を行うほどの器用な真似はできない。

時間稼ぎが目的なのは見え見えだが、鈴仙が提示した条件に、小傘は不満を覗かせながらも受諾せざるを得なかった。

正体を暴かれた時点で小傘のアドバンテージは大きく削がれている。元々の実力も考えて、同条件で勝負できるならこの命名決闘、受けた方がまだ勝機があるのだ。

「ええいつ、兎なんかに黙ってやられるもんか！ お化け傘の底力、見せてやるわよっ！」

「オーケー、じゃあ行くわよ」

自棄になって叫ぶお化け傘に、鈴仙はウィンクを一つ。

——狂符「幻視調律」  
ビジョナリチユーニング

——傘符「パラソルスターシンフォニー」

双方合意完了。互いに用意したデッキの一枚目を切り

出して、同時にスペルを宣言。

空を割く弾幕は黒雲の空を揺るがした。

## ▼ 六

閃く刃、散る火花。斬り込んだ楼観劍の切っ先を背の爪羽根で払い、ぬえは口元に牙を覗かせて鬱陶しげに咆哮を上げる。

「諦めの悪い奴だな」

「性分ですから」

「……ふん。何度やっても無駄だ。猪武者に私は斬れないよ。怯えて、泣き喚いて、自分の無力を悔いて死ね！」

不機嫌そうに唸る正体不明の獣。上空では鈴仙と小傘の弾幕戦が幕を開けていた。派手なスペルの応酬が繰り広げる閃光と轟音を耳障りだとばかりに吼え、ぬえは前脚を地面に叩きつける。

地響きを合図に、視界を埋めるほどの呪詛の矢がざあと空を翻った。赤黒い怨念の鏃が、地を穿ち屋根を砕き、妖夢へと迫る。

気配を、風音を、鉄の匂いを感じて楼観劍を振るい、鏃を打ち払いながら、妖夢は一時も足を緩めずに走り続ける。

突如路地裏から現れ首を跳ねんと振り下ろされるぬえの爪鏃を半身になって避け、返す刃を黒い獣へと押し込んだ。しかし返ってくるのはやはり、これまでと同じむなしい空振りの手ごたえ。

迫る恐怖に惑わされないよう、妖夢は思わず目を閉じ

「……真っ暗だ」

小さく吐息。この土壇場で都合よく心眼開眼という訳にはいかないらしい。そう言えば昔にも似たような事があったなと思い出して、少女はわずかに微笑む。

曰く、雨を斬るのに三十年。空気を斬るのに五十年。時間を斬るのに二百年。妖夢の求める師の背中、その遥か先にある。

「刀がなきゃ何にも出来ないくせになー」

ぬえの嘲りが耳の奥に反響する。

悔しいがその通りだ。楼観剣、白楼剣の二刀とともに、白玉楼を預かる役目も受け継いだが、妖夢は刀に振り回されてばかり。師の境地はいまだ遠く、この刀がなんの意味を持ち、己がなんのために振るうのか。その答えの形すら掴めていない。

それは翻せば、己の腕が未熟なことの不安の裏返しだ。正体不明の妖怪、封獣ぬえ。正体不明を力として纏う彼女は、不安をその力の源とする。不意を打たれることを警戒すれば、正体不明の種は隙をついて襲いかかり、怪力を恐れば無双の剛力を、駿足を嫌えばその速度で襲いかかる姿を、見るものが勝手にそこに見出してしまふ。

楼観剣、白楼剣。ぬえの力で二刀を見失ってしまったのも、妖夢自身がどこかで、自分が白玉楼の剣術指南たる証に相応しくないと思っていたからだ。

そんな迷いを抱えたままでは、この手の中の刀でなに

ひとつ斬れることはないだろう。

「……そうか、私は」

ぬえと激しく斬り結ぶ中で、妖夢はふと思い至る。

魂魄妖夢は。自分は。

解らない事が。定まらない事が。

「答えを出せないでいるのが、怖いのか」

認めてしまえば、すっとその事実が胸の底へ落ちていった。

妖夢は己を器用だとは思ってはいない。難しいことは苦手だし、融通のきかない性格と思いつ込みの激しさを幽々子にも良くからかわれてばかりだ。それでも、自分にできるやり方の中で、最も性にあってるのが、迷いを振り捨て、愚直にまっすぐ突っ込んでいくことだ。

それこそが、妖夢の最たる短所なのだ。

諦めず、愚直に前に出る——そう言えば聞こえはいいが、それは解らぬものを許容せず、必要なものまでを無駄と切り捨て、性急に結論を急ぐことに他ならない。

斬れば、分かると、師の言葉を借りて結論を出そうと

する。短絡的に答えを求めようとする。

だが、己すら見定めることもできぬのに、そんな未熟者が振るう剣で、どうすれば鵠を斬れるというのか。

(そつだ。確かに、私には——正体不明 鵠は、斬れない)

妖夢は空に呪詛を巻き散らすぬえの姿を見上げて、もう一度己の未熟を認めた。

里を巻き込み荒ぶる、恐怖と凶兆の獣の、鳴き声のよ  
うな咆哮を聞く。かの大妖怪は、己の謎を解けぬ者には  
決して姿を晒さなかった。

あるいは、かつて二矢をもつて鵠の姿を見極めた、かの源三位頼政であれば、彼女に抗することもできるのか  
もしれないが——

「……ん?」

空を埋め尽くす呪詛の鎌を見上げ、ふと、妖夢の頭に  
閃くものがあった。

さても我 悪心外道の変化となって

仏法王法の障りとならんと

王城近く遍満して

東三條の林頭に暫く飛行し

丑三つばかりの夜な夜なに

御殿の上に飛び下がれば

平安京の夜を恐怖に陥れた怪物鵠は、源三位頼政の放  
った弓に射抜かれてその姿を晒し、討たれたという。

「だと、するなら——」

だとするなら。ぬえが今放っている矢は、いったい誰  
もののものだ?

己の叫びを気合いとして、妖夢は広場に躍り出ていた。  
無防備に身を晒す白玉楼の庭師へ、狙い定めたかのように  
呪詛の矢が降り注ぐ。

勝利を確信し、鵠の鳴き声は高らかに曇天に響き渡る。

千を超え万に迫る、悪鬼の鎌へ身を晒し——妖夢は惑  
わなかった。楼観剣の柄より手を離し、腰裏の鞘から迷  
いを断つ短刀を抜き放つ。

「懲りないやつだな! そんなもの効くか!」

嘲りを含むぬえの声。呪詛を纏う鏃が、一斉に庭師の少女へと降り注ぐ。

妖夢は鏃の雨を避けなかった。繰り出した白楼の刃が、虚空に残像を残し、輝く鏡を描き出す。

——魂魄流、反射下界斬。

弾幕を受け止め、弾き返す——若き日の妖忌が、地獄の至宝、浄玻璃鏡を元に編み出した技だ。

魔を暴く鏡は源三位頼政の弓を受け止め、同じ軌道を逆向きになぞって、鏃弾幕を弾き返す。

矢先にかかれば変身失せて

落々磊々と地に倒れ

忽ちに滅せし事

思えば頼政が矢先よりは 君の天罰と

妖夢を射抜かんとした恨弓の矢は、白楼の刃に反射され、そのまま鶴の身体を穿った。

「っが!？」

これまでいかな弾幕も刃も捕えられなかった彼女の身体を鎧う正体不明が、大きく揺らぐ。泰然と空を駆けていた黒い獣は、激しく身悶えし呻きを上げる。

激しく響き渡る甲高い悲鳴。

それは、鶴の断末魔。

弾き返された鏃の一本は、見事ぬえの纏う正体不明の澱みを貫き——彼女の肩を深く穿っていた。

長い戦いの果て、ついに正体不明の化物という神格を剥がされ、その身を纏う黒靄がモザイクのように乱れ、剥がれ、黒衣の少女の姿が露わになる。

「——おまえ、ッ」

ぎらぎらと。驚愕に満ちた目で妖夢を見降ろし、ぬえは肩に食い込んだ矢を引き抜いた。口元に鋭い牙を覗かせ、唸る。それを見据え、妖夢は断然と言いつ放った。

「これであなたの謎を斬った。次はあなたの名を、斬る！」

「——上等だッッ！」

ぬえは吹き散らされた闇霞を再び纏う。しかし名前を斬られた鶴を覆い尽くすには至らず、夜啼鳥の姿を半分

覆い隠すばかり。纏う闇の向こうには、短い槍を手にした少女の獯猛な笑顔が覗いている。

(……ああ)

答えは、ずっと前から示されていたのだ。

妖怪は人を襲い、人は妖怪を退治する。幻想郷の成立以前から、連綿と繰り返される人と妖怪のあり方。鬼と対峙し、妖夢はそれを学んだ。

半分だけでも人間であるならば、人として妖怪に相對し、その理不尽と恐怖、彼等の嘆き叫ぶあらぶりを見据え、真つ向相對せねばならない。

「……未熟なれど」

それが、迷いを断ち切り、妖怪を一振りで十匹斬るといふ、西行寺家劍術指南役、魂魄の剣だ。

「全力で、お相手しますー!」

「吠え面かくなよ、猪武者ッ!!」

ぬえは手にした短槍をひゅんと振るう。穂先をそのままに倍ほどの長さに伸びた槍を構え、ぬえは鋭利な切っ先で飛び来る奇び半身の弾幕を迎撃、背中の肢を広げて

そのまま妖夢へ襲いかかる。

一本が妖夢の楼観劍にも等しい長さの、甲殻類の爪の鎌。屋根瓦を断ち割り、避けた土壁ごと突き崩す威力だ。さらに弧を描いて絡み付く毒蛇が、妖夢の太腿に噛み付く。爪鎌と蛇の頭、六本の翼を交え、嵐のような連撃が襲つた。

「迅い……っ」

ぬえの槍さばきは凄まじいものだった。そもそも彼女は武士の源流、源平の争乱を直接知る古き妖怪なのだ。その穂先に込められた重さ、鋭さに、妖夢はぬえの積み上げた修練と、それを鍛えた彼女の持つ絆を確かに感じ取る。

これが、彼女が正体不明の奥に隠していた真実の己なのだろう。

六手三尾の甲殻の触手と蛇の牙を、二刀で受け、捌き、力の入らず柄を取り落としそうになる腕を半霊で包んで支えて、柄頭で防御を弾き、身体を返して蹴りを叩き込み、触腕を白楼劍で絡め受け止め、斬り上げる。

「っああああああ！」

喉元を狙う穂先に、妖夢は正眼に構えた楼観の切っ先を絡め、撃ち落とした。四尺七寸の太刀と、二間を超える槍。大業物が激しく打ち合される中、空では早々とスベルブレイクの快音。

玉兔の歓声と、お化け傘の悔しそうな声が響く。

（今なら、わかるかもしれない）

解らないことへの、恐怖。

正体不明の、本質。

慧音は言っていた。正体不明を操る能力は、歴史と極めて相性が悪いと。

では、何故正体不明のはずの彼女が、かつての都を騒がした大妖怪としてその名を歴史に残しているのだろうか？

その正体をだれも見極められないのなら。彼女が徹頭徹尾、正体不明を貫いたのなら、ただ怪異という現象だけが遺され、鶴という妖怪は存在すら認識されず、歴史にも記録にも残らなかったはずなのだ。

そうならなかったのは、彼女の正体を暴く者がいたからだ。怪異の正体がなんであったかを、明らかにする者がいたからだ。

そもそも、ぬえが本当に自分の正体を隠していたいのならば、己の出自に関わる憎き弓矢を己の最後の切り札とする理由がない。

自分を射殺した最大の恐怖を、己の力に取り込むため？

「――違う！」

正体不明。即ちそれは、人の真実を探る心と対になるものだ。謎とはそれを理解せんとする者がいるから謎として成立する。相手のいない場所で、謎も秘密も有り得ないのだ。

「正体不明は、暴かれるからこそ正体不明でいられるんだ！」

そう。命名決闘とは、そもそもそういうものではなかったか。己を表現する弾幕で、美しさを競う少女たちの遊戯。



妖夢はぬえの槍の穂先に楼観劍の切っ先を合わせて弾き挙げ、刹那の間に駆け込み、己の半霊を足場に反転して切り返す。

——魂魄流、心抄斬二連。一步の踏み込みで、前後から同時に楼観劍が斬撃を刻んだ。

二つの刃を避け切れず、ぬえの胴が深く薙がれる。が、

「甘いねッ!」

大妖怪の底力か。ぬえは身体を上下に断ち割られてなお平然と豪語し、妖夢を狙う。遠心力を乗せて叩きつけられた穂先が楼観劍の柄を貫いた。

同時、分割されたぬえの上半身と下半身で、共に異常が起きた。どろりとした闇のようなものを纏わせた切断面から、まるで泥が溢れるように——上半身からは下半身が、下半身からは上半身が生えたのだ。

二人になったぬえは、正反対の手に握った槍と、三対の羽根を妖夢へと繰り出す。

(惑わされるな、これは——)

さつきも見た幻術だ。鏡像によるスペル、正体不明「紫鏡」。左右のうちどちらかが偽物——

否。

「どっちも偽物だ!」

振り返らぬまま、妖夢は後ろ手に抜いた白楼観劍で背後を斬りつける。迷いを断つ劍が正体不明の種を狙いたが、わずに貫くと、投擲された槍に姿を変えていたぬえが、忌々しげに舌打ちした。

鶴は人を喰らう妖怪ではない。

都の夜闇を脅かし、恐怖を振りまく妖怪。逆に言えば、彼女はそれだけのことしかしないのだ。

混乱し、困惑し、戸惑えば戸惑うほど、ぬえの正体は闇の中に霞む。梢のざわめき鳥の鳴き声、風の唸りまでもが疑心暗鬼を生み、正体不明の怪物の力となる。

だからこそ鶴はことさらに怯えを煽り、恐怖を演出する。

鶴にとって力の根源とは、自分が何者かを知らせない正体不明の力であり、それを暴かれたが最後、力を失っ

てしまう。

（相手を騙そうとする力をもった妖怪は、相手の裏をかこうとする。思考の裏、逆、反対。それを狙おうとする）

それは妖怪の性質のようなものだ。ぬえはどこまでいっても、鬼のように馬鹿正直に殴り合う事をよしとしない。

本来は絡め手の中に正道も混ぜ、こちらが来るかどちらが来るか、疑心暗鬼を招いてその恐怖を糧に力を蓄えるのだ。だが、鶴はその名を斬られ、大きくその力を減じていた。

斬るということは、突き詰めればひとつ。

決断。判断。断ずるという言葉の示す通り、斬らんとする意志が全てだ。己をもって他を退け、迷いを断ち切り、前へと進む。

妖夢は己をひと振りの太刀にせんと、息吹を吸い込み、楼観剣を正眼に構えた。脇を締め、余計な力を解き、柄尻に小指を絡める。

「——ッ、い」

踏み込みとともに、全身に漲らせた剣気を四尺七寸の大太刀へと穏やかに注ぎ込む。

一振り十殺の楼観の太刀が、封じられていた本身を露にする。二回りも存在感を増し、大上段に掲げられて輝いた長大な刃を、そのまま躊躇なく、大蛇のように斬り下ろす。

——断迷剣「迷津慈航斬」

「イイイアアアアア————————ッッ！」

裂帛の気合いと共に、四尺七寸の刃が振り抜かれる。雨を、風を断ち割る楼観の剣は、正体不明をま二つに断ち切っていた。

——そしてなお、止まらない。

振り下ろした切っ先を跳ねあげ、旋回と共に横薙ぎへ一閃。ぎゅおうと風を裂いて逆袈裟、そこからさらに渾身の振り下ろし。

楼観剣が、翻り、踊り、跳ね、なお速く閃く。

瞬きを七十二に分割した刹那よりもお早く。間を置かぬ刃の風が、鶴を——京都の夜に君臨する正体不明の怪物を切り刻む。

暴風ではなく、春の訪れを知らせるかのごとく。庭師の双剣は空を斬った。

剣家精妙の処、識を要せば、電光影裏春風を斬る。

——奥義「西行春風斬」

冥界は白玉楼、二百由旬の庭。

そこを駆ける己を、一つの太刀として。

なお、鮮やかに閃く西行妖の華を散らす風が、ぬえの纏うその名、正体不明の鶴を、九つに裂いた。

## ▼七

さて、人里を突如襲った黒雲の嵐と不気味な鳴き声の怪異から、一夜が明けて。

「あ痛あー！」

「うぎゅう……」

縄でぐるぐる巻きにされた挙句、厳めしい顔の雲入道に「ごつんと巨大な拳骨を振り落とされ——ごちんというよりもずどんとかどかんという擬音が相応しく思えたが——小傘は目を回して倒れ、ぬえは背中の中羽根で頭を押さえて叫ぶ。

騒動の酒販たちを前に、水兵服の舟幽霊、村紗水蜜は呆れ顔で深く吐息した。

「勤行の途中で居なくなつた見えなくなつたと思つたらこんな悪さして……少しは聖の迷惑も考えなよ」

「なんだよもー、ムラサまで私が悪いっていうの？」

「はあ……やったことの反省くらいはしろって言ってるの。あんたのやった事は悪戯じゃ済まされないことなんだからね。小傘ちゃんまで巻き込んで」

真面目な顔で村紗に詰め寄られ、ぬえもようやく口を噤む。

ひたすらに謝り通しの白蓮と一輪に、里の者たちとはと言えば案外暢気なものだ。里の商店街に出た被害は決して過小とは言えぬものであったが、慧音が心配していたほどには深刻な様子は無い。里に出た被害の大半を補填するため、匿名で多額の寄付があったということも功を奏しているのだろう。

「まあ、お前さんはちときつく灸を据えてもらった方がためになるじゃろっなあ」

「うー……」

頭を下げ通しの白蓮のほうを見やり、化け狸が釘を刺す。ぬえもある程度は事態の深刻さを理解しているらしく、一応は神妙にしている。

人里で禁止されている戦闘をした事については何らか

の咎めはあるだろうし、他勢力の手前、妖怪の賢者もただ看過することは無いだろう。

しかし、里の異変を察知し嬉々として妖怪退治に訪れた仙人達や、山の神様の巫女達が到着する前に事態がおさめられ、彼女達が肩透かしを食らった結果となったのは僥倖でもあった。

案外これもまた、どこかのスキマ妖怪が暗躍した結果かもしれないが――

「ぬえさん」

「なんだよ」

鈴仙に肩を借りて歩み出た妖夢に、ぬえは不機嫌そうに唸る。

慧音の能力で消えていた負傷の歴史は夜明けとともに元に戻り、包帯に添え木だらけの酷い有様だ。

「良ければまた、手合わせをお願いします」

「ふんだ。やなことだ」

露骨に嫌な顔をして、ぷいと顔を反らす正体不明の妖怪。

「正体不明がウリの妖怪が、真っ向斬られるなんて恥、そうそう晒せるもんか」

そう言いながらも、ぬえの背中では、羽根が落ち着かない様子で動いている。

昨夜の豪雨が嘘のように空は青く、高い。

痛む手足は十全の体調とは程遠くあったけれど、妖夢は晴れやかな空を見上げ、初夏の息吹を胸に満たして微笑んだ。

## ◆閑話・二◆

「ううううううううううう……」

情景豊かに深緑萌える晩春の白玉楼に、地の底より響く怨嗟のごとき、不気味な呻き声が木霊する。

冥界の庭に遊ぶ幽霊たちをも怯えさせるおぞましい声は、主従の居室の一室から漏れ聞こえるものであった。

畳の上、すっかり根付いた床に伏せ、喉奥で唸るように呻くのは、庭師の少女——妖夢である。

全身、到る所包帯だらけの傷だらけ。膏藥を貼りたくり、塗り薬の匂いもさせて、寝返り一つ打つにも皺枯れた悲鳴を上げる有様だ。

隣では半霊も同じように自分の布団に横たわって、点滅しながら色を薄れさせていた。満身創痍といってこれ以上相応しい姿もないだろう。

「大丈夫？」

枕元で少女の顔を覗き込むのは鈴仙。見舞いと往診を兼ねての来訪である。

首だけを動かして縋るような視線を向けてくる妖夢に、永遠亭の玉兎は苦笑して額の濡れ手拭いを換えてやった。  
『……すみ、ません……傷の治りは、早いほうだと思っていたんですが……』

とてもまともには聞こえない皺枯れ声を、鈴仙は波長を読み取って聞き取っていた。

「慧音先生も言われたでしょ。妖夢の健康な時間を前借りしたようなものなんだって。普通に大怪我した時の何倍も治るのに時間はかかるわよ」

もともと瀕死の重傷に近かった状態を、慧音の能力でいったん『なかったこと』にして、そこからさらに激しい戦いをしてのけたのだ。

翌日、翌々日は大したことはなかったものの、その反動は数日を経て一気にぶり返し、見事ぶっ倒れる羽目になったのであった。

以後、妖夢は床から起き上がれないままにすでに十日が過ぎていた。

「私もまあ、人のことは言えなかったんだけどね」

ぺろっと舌を出して、ひとりごちる鈴仙。国士無双の薬の反動は、やはり彼女にも深刻な反動をもたらした。素知らぬ顔で見舞いに来ているが、おととい辺りまでは妖夢同様、永遠亭の自室で動けずに唸っていたのである。

『ご迷惑、おかけします……』

「妖夢は怪我人なんだから、そんな事に気を回さなくたっていいの。ゆっくり休んでなさい」

『……はい』

なおも済まなそうな顔をする妖夢。視線は窓の外の庭に向けられていた。多くの花が咲き、木々が豊かに枝ぶりを増すこの季節、庭師の仕事を放ったままであることへ罪悪感だろう。

鈴仙は手を止めて、手元の皿を持ち上げた。

「……リンゴ、剥いたけど食べれそう?」

『あ……はい!』

八つに割り、きちんと兎耳をつけて剥かれた、赤いリンゴに、妖夢がぱあと顔を輝かせる。

そそくさと布団の上に身を起こそうとした妖夢だが、上半身に力を入れたところで全身に走る痛みに硬直した。涙を滲ませて布団の上に転がるばかり。

「……ううううう」

「しょうがないなあ」

悶える妖夢に腰に手を当て吐息。鈴仙は小さく切り分けたリンゴを楊枝に刺して、そっと庭師の口へと運んだ。

「ほら、あーん」

『っ……!?!』

近づけた顔の先、庭師の少女がにわかに顔を赤くする。

『い、いいですっ、ひとりで食べれますから……っ!』

「いいですじゃないってば。起き上がれないんだから無理しちゃだめ。ちゃんと食べて、お薬飲んで。ゆっくり休まなきゃ、治るものも治らないわよ」

人差し指手おでこをつつかれ、妖夢はますます動揺する。

『で、ですが……っ』

「もう、四の五の言わない。ほら、あーん」

なおも強情に首を振ろうとした妖夢だが、眉を立てて玉兔の真摯な目に耐えかねてついに諦め、ゆっくりと小さな口を開いた。

「……………」

そっと唇の間に差し込まれたリンゴを、ゆっくりと噛む。しゃり、と奥歯にしみる甘い果汁が溢れ出し、渴いた喉に染み渡ってゆく。

口の中も傷だらけで、歯もまだあちこち痛んでいたが、口の中に広がり、疲れた胃の譜へと落ちてゆくリンゴの甘さは至福のものだった。

「おいひい……」

「良かった。……ほんと、無茶するんだから」

「ごめんな、さい」

「私に謝ることじゃないでしょ。心配かけるのが嫌だったら、頑張らなきゃね。……私だって、偉そうなこと言える立場じゃないけどさ」

顔を見合わせ、ふふっと笑い合う従者二人。

「まだ熱、引かないね」

玉兔がそっと手を伸ばし、妖夢の額に触れた。ほんのりと温かい指先に、妖夢は思わず頬を押しつけてしまふ。ふわりと鼻を掠める、甘い匂い。

「ん……」

さらり。鈴仙の長い髪が揺れ、滝のように流れ落ちる。袖をまくったブラウスの奥で、しなやかな手足が寄せられ、

「……………」

妖夢ははたと動きを止めた。痛みに顔をしかめながら眉を寄せ、じっと虚空を睨む。

「……妖夢？　どしたの？」

「……………」

無言のまま、妖夢は布団に納まっていた半霊を跳ねあげて、枕元の楼観剣を弾き飛ばした。

くるくると回った四尺七寸の太刀が、鞘に納まったまま宙を一閃。部屋の隅へと飛んでいく。



何もないはずの空間で、ぱしんと重い音が響き、楼観剣が弾かれた。

同時、邸の奥のほうから、聞き覚えのある複数のぐえつという悲鳴。

「……よし」

確かな手ごたえを感じ、半人半霊の庭師は口の中で小さく確認の声を上げる。

「……？」

「なんでもありません。……あの、もうひとつ、頂けますか」

出歯亀を決め込んでいた不埒ものを覆い払い、妖夢は改めて鈴仙を見上げる。

不思議そうに首をかしげる月兔の手から、「んあ」と雛鳥のように口を開き、また一切れ、リングを啄ばむのだった。



命蓮寺六道問答

▼  
一

——それは、幼き日の思い出。

高い空のさらに上、薄くなった空気と共に幽と現の狭間までもが曖昧となり、ついに姿を現すは、四方の柱に支えられた大扉。

幽明の境を閉ざす門の奥、さらに千数百段の階段を登った先に、白玉楼はその居を構える。

かの楼閣は、死後の世界の冥界にあつて、文武に才を成した徳高き魂が転生までの一時を過ぐす庭である。

枯山水に苔生す岩、花咲く梅や椿の蕾、力強い松の枝張り、さらさらと落ちる清水の流れ。二百由旬の広さをもつ庭園は、幻想郷にその名を知られる天下の名勝だ。

顕界よりなお鮮やかに四季が彩られ、折々の情動豊かに移りゆく。

死後の穏やかな安寧の中、魂たちは転生までの時間を思い思いに過ぐすのである。

大階段から表門をくぐり、白雲閣を右手に土蔵の間を抜ければ、客殿とともに道場が姿を見せる。往時の冥界無双の一門にも、現在となつては徒弟がなく、閉ざされた堂には静謐な気配が佇むのみ。

塵一つなく掃き清められた廊下を通り抜け、閑散とした道場の裏手にある奥庭の一角。砂利をよけて作られた無垢の土はこれ以上ないほど硬く、鏡のように踏み固められていた。

汗を流し清めるための井戸を近くに、打ち込み用の木杭も立てられ、この一隅が常日頃より鍛錬に用いられていることを示している。

そうした鍛錬所に面した縁側には、二つ——否、四つの影が並んでいた。

一方は老境に差し掛かった男性。顔には年月を重ねた深い皺が幾重にも刻まれ、長く伸ばした顎髭も、総髪も美しい白一色。薄墨の袖と緑の羽織に袖を通し、傍らに

は見事な拵えの短刀を一振り、置いていた。

男の体軀は幅こそないが、節くれ立った手指や四肢は力強く、無駄を削ぎ落として鍛え上げられた鋼を思わせる。特に目を引くのは左眼を斜めに抉られた古い傷痕だ。ただならぬ気配は傍らに置かれた大小二刀と併せ、彼が歴戦を潜り抜けここに至る一廉の剣士であることを知らせていた。

その隣、男の隣で神妙な顔をして座るのはまだ四、五歳とみえる幼い少女である。あどけない顔立ちながら年齢相応の無邪気さは影を潜め、頬や首にはべたべたと膏藥が張られ、袖の手首にも念入りに巻かれた包帯が覗く。隣には少女の背丈に似合わぬ、本身六尺にも余る大太刀があった。

並ぶ二人の傍には、寄り添うように半透明の白い靈魂が浮かぶ。冥界においては人が二人に幽霊が二人、都合四人とも見えるが、それは誤りだ。

彼等は半人半霊。人にして靈魂、半分が人、半分が幽霊。二つで一つの身体をもつ一族なのである。

男の名は魂魄妖忌。ここ、白玉楼の庭師兼守護役にして、冥界を治める西行寺家の剣術指南役を務める。

隣の少女は魂魄妖夢。妖忌の孫であり、いまは彼を師として剣を学ぶ最中にあつた。

「……………」

「……………」

日も出る前から続いた激しい鍛錬も一区切り。いまは湯呑みと茶菓子を傍らに休息の時間であるのだが——妖夢の表情は真剣そのもの。師の言葉、一挙手一投足を心に焼き付けんと、一時も気を抜かぬままに妖忌の傍で緊張を保っている。

幼いながらに一本気で愚直、思い込んだら回り道の出来ぬ気性の娘である。

そんな弟子の心中を知ってか知らずか、妖忌は一言も発さぬまま、茶を啜って湯呑みを傍らに置く。冥界の主も不在とあって、久し振りの祖父と孫の水入らずだというのに——もう随分と長くこんな様子が続いていた。

妖忌は寡黙な男だ。理由なければ口を開くことはしな

い。では己が何かを口にせねば。長い沈黙に耐え兼ね、妖夢の口からは自然と言葉が出ていた。

「お師匠様」

妖夢は祖父を師と呼ぶ。理由あって両親とは離れ、その代わりと常より祖父を慕っていた妖夢だが、数年前に彼が剣の師となつてからは公私の線を深く引き、常に緊張を保つよう努めていた。

彼女にとって妖忌は何よりも尊敬深く、目標とすべき剣士であつたからだ。

「うむ？」

長い沈黙を埋めようとしての咄嗟の問い。けれどそれは妖夢にとつて、長年の疑問でもあつた。

「お師匠様は、これまで多くの達人と戦つてきたと聞きます。その中で、一番強かつたのはどなたでしょうか？」

人よりも長命な半人半霊とて、妖夢はまだ幼い。見た目よりはいくらか歳をとっているものの、これまで白玉楼を出たことも数えるほどしかない。

だからこそ、無邪気な問いであつた。

妖忌はその冥界無双の剣をもって、白玉楼の主たる亡霊の姫、西行寺幽々子に仕えている。魂魄家に伝わる白楼、楼観の二刀とともに白玉楼を守り抜いてきた師は、妖夢にとつての誇りであり、憧れであつた。

その祖父に勝てぬ相手などいるはずがないと、妖夢は疑いもなくそう信じ込んでいたのである。

「……うむ」

しかし、妖夢の期待とは裏腹に、妖忌は苦い顔をつくる。

洪面と共に静かに首肯する師の姿。それは妖夢にとつて少なからぬ驚きであつた。

「魂魄の剣は、勝ちを得るための剣ではない。殺すための剣でもない。この冥界、白玉楼の安寧を守る剣だ」

「存じています！」

己の傍らにある大太刀に触れて答える妖夢。

一振十殺の楼観剣、迷断の白楼剣。魂魄の名によつて振るわれる二刀は白玉楼を侵し、主に害をなさんとする相手を駆逐するためのものだ。

「そうだな。だが、儼も若い時分にはそうした意味を解さず、未熟のままに仕合をし、己の技量を試すこともあった」

妖夢の知る限り、初めて語られる師の若き頃の記憶。

妖忌の年齢は妖夢も正確には把握していない。

半人半霊は人よりも遥かに成長が遅い。妖忌も少なくとも三百年前からずっと、ここ白玉楼で庭師をしていたという。

半人半霊としてすでに老境にさしかかりつつある妖忌は、この幻想郷ができるよりもはるかに以前より、途方もない年月を生き抜いてきたのである。

「その中で、見えた強敵は少なからずいた。力及ばず地を舐めたこともある。剣とは、勝負とはそうしたものだ」

「……はい」

神妙な顔で頷く妖夢。剣の道は遠く、そして険しい。当たり前のことを改めて噛み締めて、幼い顔が決意に引き締まる。

「だが——そうだな。その中で、一度、手も足も出ず、

成す術もなく負けたのは、あの一度だけだな」

「お師匠様が……？」

目を丸くして問い返す妖夢に、妖忌はそうだと頷いた。

「もう随分と、昔のことになるがな」

当時の妖忌は若く、また相手はあまりにも強大であった。それまで鍛えた一切の剣が通じず、妖忌はただ一方的に地に塗れたという。

魂魄の剣士は、その敗北の苦味を抱え、気の遠くなるほどの時間を、修業とともに年月を重ねて今に至る。

なれど、再度見えてもう一度剣を交え、勝てるかと問われれば、分らない、と。

そう口にする妖忌に、妖夢は身を固くする。

いくら鍛錬を積んでも、一向に縮まるどころか届く事すら思い描けない、師の背中。それを完膚なきまでに打ち負かした相手がいるのだと。

その事実は、幼い少女の心に鮮烈に焼き付くに十分だった。

「そのお方のお名前は」

緊張に固い唾を飲み込みながら、妖夢は師の答えを待つ。

しばしの静寂の後、妖忌は静かに茶を啜り、湯呑みを脇に戻して吐息する。

「——確か……白蓮、と言ったな」

それは。

後に白玉楼庭師兼、西行寺家剣術指南を継ぐ少女、魂魄妖夢が幼き日に見た、師との記憶——。



## ▼二

思えば、数奇な運命であつただろう。

遡ること千年の昔。大和国は信貴山朝護孫子寺において、毘沙門天の加護のもと、人妖平等の題目を掲げて多くの妖怪達を救済していた一人の僧侶がいた。

類稀な法力と、慈母のごとき優しさで、ひじりあまぎみ聖尼公と呼ばれた彼女であつたが——人に害なす妖怪すら御仏の慈悲によって救わんとする行いは、多くの人より疎まれ、恐れられるに十分だった。

繰り返される迫害と排斥。無理解と罵声。それでもなお妖怪救済をやめようとしなかった彼女は、ついに都の命で捕縛され、地の底の魔界に封じられた。

……そして千年。

彼女を慕った妖怪達の念願叶い、地底に封じられた聖輦船が幻想郷の空へ浮上したのは、今年の春も早い雪解

けの頃。

命運上人ゆかりの飛倉の魔力によって時空を超え、魔界へと航行する船により、聖尼公が長き封印より解き放たれ——これを異変と察知した巫女や魔法使いとの命名決闘を経てしばし。

人里の近隣に命運寺を建立した尼公——聖白蓮とその門徒の妖怪たちは、無事幻想郷の一員として迎えられることとなった。

毎度恒例となる異変解決後のお約束として、博麗神社で開かれた宴会の場で、妖夢は初めてこの尼公、聖白蓮に対面した。

八苦を滅した尼公などと呼ばれる彼女が、かつて師が相対し、苦い敗北を喫した相手であることには、妖夢も早い時期から気付いていた。天狗の新聞で異変のあらましを知ったときに、半ば確信していたと言っている。

彼女は美しかった。

柔和な笑顔と、慈母のごとき微笑み——紫雲になびく金の髪、妖夢よりも頭一つ半は高い背と、女性らしさに

富む体つき。すらりと長い手足は見惚れるほどに艶やかで、いくつもの仏相に彩られていた。

近づけばふわりと鼻をかすめる薔茉莉（グゼンツリ）の香り。清浄で美しく通る声音。彼女を慕う妖怪たちの信頼は厚く、その周囲には人妖が途切れない。

仏に男女の別はないが、騒乱の世に救済をもたらすのであれば、彼女を置いて他にはないと感じさせる。まさに東の樂園において仏門を率いるにふさわしい姿であった。

異変解決後のお決まりとして、新参となる彼女のもとには各地の人妖たちの来訪が絶えなかった。

霧の湖畔の紅き館の吸血鬼や、兎達を従えた竹林の姫、妖怪の山の天狗、地底の鬼たち、守矢の神々などが次々とやって来ては杯を交わし、言葉をかける。

そんな中、妖夢もまた冥界を治める幽々子の供として、白蓮への挨拶に伺っていた。

「はじめまして」

「ええ。お初ね。ここの生活には慣れたかしら？」

はじめは落ち着いた様子で応じていた白蓮であったが、西行寺の名を聞いて顔色を変える。

「失礼ですが、西行寺というのは——かの歌聖のお名前では」

「そうみたいね」

警戒をあらわにした白蓮に対し、幽々子の返事は捉えどころのないものだ。彼女は亡霊となって以来、生前の記憶の多くを失っている。白玉楼の幽冥分かつ妖怪校と、幽々子の関係を知るものは、幻想郷でも多くはいない。

巫女と魔法使いがわずかに視線をあげる。言い様のない緊張感が宴会場を走るが——白蓮はそれ以上深く追求する様子はなく、そうなのですかと穏やかに微笑むに留めていた。

幽々子が料理のお代りを求めて中座したため、妖夢も慌てて後を追いつ、そこでいったん話は途切れた。

が、しばらくして後。宴席の端に戻ってきた舟幽霊の少女が白蓮の傍に腰を下ろし、首を傾げて訊ねる。

「——聖、さっきの人、なんかあったの？」

「ええ。私の勘違いでなければですが。西行寺幽々子さん……生前の彼女と私は面識があります。……星は、覚えていますか」

「はい。……驚きました」

隣に控えていた毘沙門天代理の虎妖怪が、神妙な面持ちで頷き、それを肯定する。

思わず耳をそばだてる妖夢には気づかず、白蓮は訥々と語り始めた。

「私が封印される前……そうね、水蜜はまだ一緒ではなかったころです」

時は平安の末。源平が東西に分かれて合戦を繰り返していた時代。虐げられる妖怪たちを救う活動を始めていた白蓮は、生前の幽々子に会うため、摂津は弘川の庵を訪ねたことがあったのだと言う。

人を死に誘う妖怪桜——その美しさに魅入られ、人の境を踏み外した幽々子を救うために。

「その妖艶なる美しさで、多くの人々を魅了し、死へと誘った妖怪桜。歌聖の名と血肉を啜って、その力是人智

を超えるものとなりました。見境なく災禍をもたらし、惨劇を招くあの桜は、あまりにも恐ろしく、おぞましいものでした。幽々子さんもまたその桜に魅入られ、人を死に招く力を持っていたのです。幽冥の境を乱す死霊の能力——人の身に宿ったそれがいかなる悲劇をもたらすか。容易に想像できることでした」

忌まわしき思い出を巡らせ紡ぐがごとく、白蓮は静かに目を伏せる。

「あの時、私にもっと力があれば、彼女を助けられたのかもかもしれません。あのような亡霊の姿になって、迷うことがないように」

それは、仏道にあって彼女の真意、まごうことなき善意から出た言葉であっただろう。

輪廻と成仏をもって迷いを断つのが仏門の在り方だ。幽々子を救えなかったことへの悔恨は僧侶として当然のものであるし、幻想郷の流儀に慣れない白蓮にとって、死してなお亡霊と化し、生前を忘れて冥界に留まる幽々子は不自然なものに見えたとはいえない。

まったくもって、正しい理屈だ。

けれど。

「……とても、気の毒な事をしました」

それは妖夢にとって、決して看過できぬ主への侮辱であつた。

勢いよく席を立った妖夢は、脇に外していた二刀を手にすると、宴会場をずかずかと横切つて白蓮のもとへと歩み寄る。

「——なにか？」

「聖、白蓮どの」

駄々漏れの闘志から妖夢の意図を察したのだろう。舟幽霊、入道使い、虎妖、近くにいた妙蓮寺の門徒妖怪達が即座に立ち上がり、膳をひっくり返すのも気にせず妖夢を取り囲もうとする。

しかし彼女らの牽制も目に入れることなく、妖夢は腰の楼観剣を鞘ごと突き出し、白蓮に告げた。

「いまの言葉は聞き捨てなりません。白玉楼庭師兼、西行寺家剣術指南役、魂魄妖夢。あなたと立ち会いを所望

したい」

「お前、聖に何を——」

どこからか巨大な錨を振り上げ、割つて入ろうとした舟幽霊を制し、白蓮は静かに首を振った。静かに合掌し、頭を下げる。

「申し訳ありませんでした、妖夢さん。ご気分を害されてしまったことをお詫びいたします。……ですが、私は仏門の身。不殺戒により、争いを禁じています。そのお望みには——」

「魂魄妖忌」

白蓮の言葉をさえぎつて、妖夢はその名を告げた。白蓮が一度、大きく目を見開くのを見逃さない。

「私の、祖父の。……剣の師の名です」

それで理由は十分だとばかりに。妖夢はじつと白蓮を見下ろした。

「……………」

「……………」

静かな視線がぶつかり合い、譲れぬままに火花を散ら

す。

白蓮は小さく吐息をして、おもむろに席を立った。それこそ、法話を一席お願いされたとしても言うような穏やかさで。

「分かりました。……退けない理由がお在りなのですね」「聖!？」

入道使いが悲鳴を上げる。しかしこれを押しとどめたのは白蓮の隣にいた虎妖であった。険しい目付きながら、星と呼ばれていた彼女は取り乱すことなく、じっと妖夢の様子を窺っている。

ぶつかり合う視線の間に剣呑なる気配が満ちる。時ならぬ対峙に、宴会場にはたちまちざわめきが拡がっていた。

面白そうに見守るもの、オロオロと狼狽えるもの、いぞと歓声を上げるもの、実に様々だ。

「あなたの挑戦、お受けします。日時はいつがお望みですか」

「いまこの時、この場で」

皆の注視の中、妖夢は静かに言い切った。



博麗神社境内——参拝客の少ない神社には似合わないほど広い参道と広場に、白蓮と妖夢の二人は対峙する。

神社を壊すなという霊夢の意見は、ちゃっかり賭けの胴元に収まった魔理沙によって場所代二割をお賽銭として寄付することで封殺され、酒瓶に杯を抱えた人妖たちは十重二十重の見物の体だ。

見物人の中に混じって、料理に舌鼓を打つ幽々子が、ひらひらと妖夢に手を振る。ささやかな主の応援に身を引き締め、妖夢は背の楼観剣を腰へと佩き直す。

東西に伸びる参道を挟み、南に妖夢、北に白蓮。

殺気を滲ませる庭師に対し、尼公は穏やかな自然体で合掌し、静かに一礼して応えた。

宴会の座興という形こそ取っていたが、妖夢の闘志は本物だった。悪気は無いのだろうが、白蓮の先程の発言

は、妖夢と幽々子の出会いを、祖父より受け継いだ物事すべてを否定するものである。

そしてまた、これはまたとない、師への挑戦の機会であった。

（——こんな形で、巡ってくるなんて）

かつて、師を完膚なきまでに下したという相手。彼女の名を聞いて以来、いつか本気で手合わせをしたいという思いは、妖夢の心の中に燦っていたのである。

賭け金を集めながら、立会人を買って出る白黒の魔法使いが二人に命名決闘の条件を提示する。

「宴会の座頭だからな。派手に零死四符の総合戦でどうだ。お互い弾幕よりかは殴り合いのほうが得意だろう？」

決闘をだらだらと長引かせず、派手なものとするため残機なし、スペル数はふんだんに。その上で勝負を弾幕だけにとどめず、拳打斬戟も含めた決闘条件である。

スペルカードに慣れていない白蓮にはこのほうが馴染むものであったし、妖夢も剣士としてこちらのほうが得手である。両者ともに、静かに条件に揃えた符束<sup>カードデッキ</sup>を提

示する。

「こちらはいつでも大丈夫です。妖夢さんの準備が済み次第」

「……問題ありません」

「よし、両者合意ってことでいいな。いくぜ」

魔理沙が天に向けて八卦炉を構える中、妖夢は楼観剣の柄に手をかけ、白蓮に向き直る。

「応じていただいて、ありがとうございます」

あの瞬間、頭に血が上っていたとはいえず、妖夢は命運寺の門徒妖怪達に袋叩きにされてもおかしくなかった。

つい先日、千年の封印を解かれて復活したばかりの白蓮だ。彼女に害を成すとあれば、彼等は悪鬼となつて牙を剥くことも厭わぬだろう。

しかし白蓮は静かに首を振り、

「不殺戒の教えはありますが、断つても妖夢さんは納得されないはず。となれば、受けるほかはありません」

どこまでもまっすぐに、妖夢の善意を疑わぬ言葉である。聖母を思わせる白蓮を前に、妖夢の決意は揺らぐ。

（彼女が、本当に——？）

建前は主への侮辱を咎めてという形であれ、実際は八つ当たりに近い。難癖をつけて頭に血を上らせたこと自体が己の未熟に思え、妖夢は小さくかぶりを振ってその疑念を打ち消した。

「……師が」

萎えかけた心を奮い立たせ、妖夢は視線鋭く白蓮を睨む。しかしそうしていくら闘志を叩き付けても、彼女はあくまでも自然体、微塵も闘志を見せる様子もなくそれを受け流してしまう。

これが仏門の力なのだろうか。得体の知れない威圧感を前に、強張る喉に唾を飲み込む。

「お師匠様がかつてあなたに破れたと聞きました。……もう、随分と昔のことです」

「師の汚名を雪ぐため、ですか？」

白蓮の表情は変わらない。彼女は妖忌のことをどう覚えていたのか。外からそれを窺い知ることはできない。

「いえ」

妖夢は静かに首を振る。

「いまだ、志半ばの剣。師の雪辱は叶わないかもしれない。せん。なれど、未熟者ゆえ、不在の師の背中を追い続けています。あなたとの戦いで師が得たものがあるのなら、それを、ご教授願いたいのです」

「……ご期待には添えないかもしれませんが、せめて精一杯、お相手させて頂きます」

対する白蓮は、緊張感もなく会釈をするのみだ。油断するなと己に言い聞かせ、妖夢は静かに楼観劍の鐔に指を掛け、鯉口を切る。

「双方、用意はいいな？ —— はじめ！」

両者の様子を伺って、ミニ八卦炉を掲げ持った魔理沙が、放つ合図の魔砲とともに——

妖夢は太刀を手に地に蹴り、

白蓮が穏やかに合掌一礼する。

——直後。

少女の視界は、暗転した。



目を覚ました時は、日はすっかり暮れていた。

見覚えのない天井に顔を顰めて身を起こせば、ぐわんぐわんと頭の芯を揺らす衝撃がある。

「つぐ……っ!？」

目の前に突如壁が押し付けられた。いったい何かと混乱し、妖夢は自分がまともに起き上がれない状態であることを自覚する。

壁と見えたのは床の畳。妖夢は寢床に横たえられていた。ひっくり返った三半規管が平衡を欠いて、上下も分からぬ状態なのだ。

「……………く……………」

頭痛に呻き、眩暈に顔を押しさえ蹲る隣で、三色団子をはむりと口に運ぶ主の姿があった。

「——幽々子様」

「駄目ねえ、妖夢は」

呆れの混じった主の嘆息に、鈍痛を残す頭で妖夢は理解する。

脳裏をよぎるは、あの一瞬の出来事。

決闘の開始が告げられた、まさにその瞬間だった。

初手から居合いの一閃をもって踏み込まんとした妖夢に対し、それを遥かに上回る超高速の白蓮の掌が、妖夢の顎を打ち抜いたのである。

穏やかに合掌し一礼する白蓮の前で。

受け身どころか、その一撃を食らったことにすら気付けずに、妖夢は意識を手放した。

おぼろげな記憶の中でそれを思い出し、妖夢は信じられぬ思いで息をのむ。

(……そんな)

圧倒的。あまりにも圧倒的。

剣を振るい力を試すところではない。決闘開始直後の一瞬、手も足も出ないままの、一方的な敗北であった。

そうして半日も寝込んだ拳句、意識が揺さぶられて立てない以外、身体には怪我らしい怪我もない。



(ここまで……、ここまで、遠いの、か)

信じられぬ想いで、妖夢は己の両手を見下ろす。

師を打ち破った相手として。人智を超えた存在として。白蓮のことは十分に警戒していたつもりだった。死力を尽くし、戦い抜く相手として、微塵の油断もなく勝負に臨んだつもりだった。

それがこの結果だ。たとえ——たとえ勝てぬまでも、一矢報いるくらいのことではできると思っていたはずなのに。

「……………」

ろくに指も動かさぬ己の醜態に、猛烈な恥辱と後悔の念が押し寄せてくる。あれだけ堂々と決闘を吹っかけておいて、この様だ。

思い上がったていた。鬼と、鶴と、幾度かの戦いを経て、自分が強くなったと思ひ込んでいた。少しでも師に近づけたのだと慢心していた。

憧れ、追い続けた師の背中。

あまりにも——あまりにも、遠かった。

「幽々子、さっきのご飯の余り……なんだ、妖夢も起きたの」

割烹着姿の靈夢と、片付けを押し付けられた様子 of 魔理沙が襖の向こうから顔をのぞかせる。

気づけば空も白い。一夜を通しての宴会もお開きとなり、薄日の射す宴会場にはひっくり返った膳や崩れた座布団、空の酒瓶などがそこかしこに転がっていた。相変わらずの宴の後、いつも通りの惨状だ。

「そろそろ帰るわね」

「……片付けくらい手伝っていきなさいよ」

「そういうわけにもいかないもの。ねえ妖夢？」

「は、はい」

まるで何事もなかったかのように幽々子は言う。慌てて身を起こそうとした妖夢は、四肢を蟻が這い登ってくるような不快感を覚え、自由にならない手足を改めて自覚する。

どうにか起き上がることはできたものの、膝が震え手指の感覚も鈍い。

「さあ。行きましょう妖夢。お腹空いちゃったわ」

なおも文句を言う霊夢を押しやって、幽々子はふわりと宙に浮かぶ。後を追おうとした妖夢だが、平衡を欠いた身体は半霊ともども浮かぶのが精一杯、飛ぶなどとてもできそうになかった。

「……………」

半分泣きそうになって主を見上げる従者に、幽々子はあらあらと微笑んで妖夢の手を取った。

半人と半霊はそれぞれ主に手を引かれるまま、白玉楼への帰途に就く。

雲よりも高く空の上へと昇り、冥界と顕界を隔てる四柱が見えてきたところで、妖夢は喉奥から声を絞り出した。

「あの、……」

申し訳ありません。小さく口の中で言いかけ、けれど主は答えない。しばしの逡巡ののち、妖夢は再度口を開いた。

「……あの、幽々子様」

「なあに？」

「え、えっと……その」

いつもと変わらぬ様子の幽々子に、謝罪の言葉が口の中で溶けてしまふ。謝らなければならない。けれど、けれど、何を？ 誰に？

主の面目を潰し、失望させてしまった。自分の身も弁えずに思い上がっていた。そのことを省みなければならぬ。

けれど——幽々子は、常日頃から自分に、そこまでの期待をしてくれているのだろうか？

幽々子は白蓮を咎めたりはしなかった。自分に彼女を斬れとも命じなかった。

あれは完全な八つ当たり。妖夢が吹っ掛けたただの私闘だ。勝負も敗北も、その恥も、自分が一人で背負わねばならない責任ではないのか。

自分の増長がもたらした敗北を主に背負わせてしまふ、そのこと自体がよほど思い上がりではないのか？

ぐるぐると思考の渦に陥る妖夢の手を引きながら。

幽々子は何も言わぬまま、白玉楼へと続く階段を上っていくばかりだった。

## ▼ 三

苦い敗北から季節は巡り、初夏。

色とりどりの薔薇が咲き乱れる門前に、激しい剣戟の音がこだましていた。

赤煉瓦の門を構えるは、霧の湖の畔に建つ紅き館。紅き悪魔の名をほしいままにする吸血鬼、レミリア・スカーレットを主に頂く一大勢力の拠点である。

その門前には、激しくぶつかり合い切り結ぶ、二つの影がある。

裂帛の気合いから、楼観剣を正眼に構え、激しく斬り込むのは白玉楼庭師の魂魄妖夢。先頃の欲望異変で整えた前髪を靡かせ、四尺七寸の太太刀が流麗な銀線を刻む。

門前で彼女に対峙するは、紅魔館の門番を務める、<sup>ホア</sup>華<sup>レンシャオニ</sup>娘<sup>ン</sup>“紅美鈴”。

刀剣と徒手空拳。本来ならば一方向的試合運びとなる

はずだが、両者の戦いは拮抗していた。

門の前、悠然と構えた美鈴は、繰り出される妖夢の斬撃を素手で弾き、躲し、打ち落とし、隙あらば庭師へ鋭い踏み込みとともに拳打を、蹴足を叩き込む。

素手格闘において、美鈴は幻想郷屈指の実力者だ。楼観剣の刃を合わせれば妖夢のほうに間合いの有利があるが、美鈴は強烈な踏み込みと鋭く伸びる手足でそれに対し、互角以上に渡り合った。

かと思えば、太太刀の間合いの内側に身を滑り込ませ、長い手足をコンパクトに折り畳んで変幻自在の連撃を繰り出してくる。

槍のように鋭い中段蹴りを、大きく背後に飛び退って妖夢が躲せば、すかさず美鈴は蹴りの爪先に練り上げた気を渦にして撃ち放った。追撃と砂礫を巻き上げた虹の気流が、妖夢の眼前に迫る。

妖夢は腰裏の白楼剣を抜き打ってそれを迎撃。間髪入れず、指拳を打ち込んでくる美鈴に合わせ、片手逆袈裟で楼観剣を斬り上げた。

完全な間合いの切っ先を、しかし美鈴は猫科のような上半身の柔軟性で躲けてみせた。同時、のけぞった姿勢から決り上げるような掌打が庭師の鳩尾を狙う。

妖夢は慌てず柄に左手を添えなおし、即座に一刀に切り替えた四尺七寸の刃を返した。滑るような踏み込みで、ほぼ直角に軌道を変えた大太刀が、美鈴の胸を横薙ぎに払う。

一撃のため踏み込んだ彼女には対応不可能。仮に避けたにせよ、そのまま足を斬り飛ばせる。

これで詰み、勝負ありかと見えた刹那。

美鈴は躊躇いなく体を横倒しにし、素早く足を折り畳んで、横薙ぎの刃の下に身を滑り込ませた。振るわれる楼観剣の刃先を、右の靴の爪先でそっと押し遣り、蛇のような動きで太刀の間合いを潜り抜ける。

同時、地を割るような震脚が轟いた。鋭く伸びた虎拳が妖夢の脇腹を打ち抜かんとする。

そこに割って入るのは、妖夢の半霊である。

拳の直撃の瞬間、鍔弾幕をばら撒く半霊の撃ち返しに、

さしもの美鈴も被弾を免れずに吹き飛ばされた。

白玉楼の庭師と紅魔館の門番。名の通り髪の色彩も外見も対照的な二人は、お互いに距離を取って再度、対峙する。

「ありやりや」

器用に片足立ちをしながら右足を持ち上げ、穴のあいた靴先から覗く指先をぴこぴこと動かし、眉を下げる美鈴。そこに、膝から下を斬り飛ばすはずの一閃を凌いだことへの動揺は見られない。

「……お気に入りだったんですが、仕方ない。もうだいぶ長いこと履いてましたしね」

美鈴は落ち着き払って使いものにならなくなった靴を脱ぎ捨てた。片手間に妖夢の剣先から放たれる弾幕を捌きながら、続けて左靴の紐を解いて放り投げる。くるくると宙を舞った靴は、近くにあった木の枝に見事に引っかけた。

素足になった美鈴は、地面を踏み締め、二、三度確かめるようにその場に跳ねる。

「好し、久々にこっちの方を試しましょう」

言うが早いか、美鈴が前に出た。先程までの荒々しい震脚とは一転、地面を滑り這うような足運び。ざわりと妖夢のうなじが逆立つ。

(疾い——!?)

決して、弓矢や銃弾のような速さではない。だが、恐ろしく速い。砂地に水が染み込むように。草木が風になびくように。静かな速度が妖夢の間合いを侵食する。門番の姿がゆらりと地に沈んだ、と見えた瞬間。四尺七寸の切っ先を跳ねのけ、大太刀の間合いの遥か内側に、美鈴の身体が滑りこむ。

妖夢が反射的に身を固めると同時に、鋭い肘が妖夢の腹を抉る。ごく僅かの間において、肩、腰、そして膝。絶妙に打点をずらした四連続の当て身が、半人半霊の庭師を吹き飛ばした。

「つつ、あ——」

咄嗟に楼観劍の柄を滑り込ませ、衝撃を殺してなお、肺の中身が絞り出されるような衝撃。宙を舞う妖夢を、

しかし紅魔館の門番は逃さない。ヒョウと風を切って繰り出されるのは長い脚。美鈴の脚指が、仰け反る妖夢の髪を掴み、そのまま地面へと引き倒した。

「が、ぐ、っ……」

顔面から地面に落とされ、衝撃に呻く妖夢。庭師を地面に叩きつけた美鈴の脚指が、さらに翻ってその顔を狙う。これも単純に足裏で踏みつけるのではなく、爪先を丸めて作った拳で——こめかみを抉るような一撃だ。

ノックアウト確実の一撃を防いだのは、美鈴を背後から狙った半霊渾身の体当たりだ。残像を引いて追撃を叩き込む半霊の衝撃に、わずかにぶれた美鈴の脚拳から身を引いて、妖夢は素早く跳ね、剣を構え直す。

一方の美鈴は片足立ちから、掲げた膝をゆるりと地面に下ろす。攻撃の瞬間に背後から半霊の体当たりを食らってなお、吹き飛ぶどころか体勢を崩すこともなく、片足のまま持ちこたえていたのだ。驚異的な平衡感覚である。

「っ、ああああああ!!」

半身に構えて掌を向ける美鈴に、妖夢はすかさず前に出た。右に一度、左に二度牽制を混ぜ、脚元からの斬り上げ。隙の多い大振りに美鈴がするりと身をずらし、前に出る。狙うのは構えた崩拳による打点。

宙を震わせる一撃に対し、妖夢がとったのは後退ではなくさらなる前進である。半霊に自分の身体を引っ張らせることによって美鈴の拳から紙一重だけ身を逸らし、楼観剣の柄頭をもって美鈴の膝を打ち据える。

柄打が、がおん、と人体を叩いたとは思えない轟音を響かせる中、妖夢は宙で身をひねり、鋭く振った足裏で美鈴の顎を打ち抜く。

威力は微々たるものだが、妖夢が蹴足を出すのは予想外と見え、美鈴の気配がわずかに乱れた。

そこが狙い目。妖夢はさらに身をひねり、縦横を入れ替えて納刀からの即斬撃を撃ち放った。不規則に軌道を変化させる上から下への居合いの一閃を、攻撃動作の最中の美鈴は避けられない――

しかしここでも門番は驚異的な動きを見せた。両足を

付け根から開いた大開脚で、さらに上体を地面に伏せる。猫科肉食獣めいて柔軟な動作で地面にぴたりと身体を付け、地面すれすれまで深く斬り下げる致命の刃を掻い潜って躲す。

「っ!？」

美鈴は妖夢の動揺を見逃さなかった。瞬時に逆立ちになり、妖夢の鼻先に脚拳を一発。ぱあんと高い音が少女の意識を刈り取らんとする。

「スキあり」

同時、伸びた脚の指先が、楼観剣の峰を掴んで握り止めた。門番妖怪の手よりも巧みな脚の指が、しなやかな全身のバネを使い、逆立ちからの前方転回を持って、美鈴は妖夢から愛刀を奪い取らんとする。

以前の妖夢なら、ここで抵抗し――掌中の得物を失うことに執着していただろう。

だが、妖夢は咄嗟の判断で楼観剣を手放した。ただ離すだけではない。思い切り力を込めて放り投げる。思わぬ反応に美鈴の動作が一瞬遅れ――その隙こそが致命の

一瞬となる。

妖夢は空いた手で美鈴の胸元を掴み、強く前へと引き寄せた。同時、半霊を使って彼女の足を払つ。宙を舞う美鈴の腹に膝を入れ、全体重をかけて引き倒した。

魂魄流、折伏無間。西行寺家剣術指南が伝える技の中では数少ない、太刀を用いぬ当て身技である。

投げ飛ばされた美鈴の長身がどんと地面を揺らす中、妖夢は腰から抜き放った白楼剣の切っ先を、仰向けになつた美鈴の首筋に押し付けていた。

激しい攻防から一転。それまでの激戦が嘘のように、両者は静止した。美鈴の長い髪が、ぱさりと揺れて落ちる。

「参った、降参です」

仰向けのまま両手を上げ、負けを認める美鈴。そこで妖夢はようやく吐息し、静かに白楼剣を引いた。美鈴は背中のバネだけで地面から跳ね起き、楼観剣拾い上げて妖夢に返す。

「ありがとうございました」

「お見事。いやあ、だいぶ動きに迷いがなくなってきたと思いますよ」

相手への称賛を忘れずに、ズボンをはたきながら身を起こす美鈴には、呼吸の乱れひとつない。己の上気した頬と、汗ばむ首筋をぬぐい、妖夢は熱のこもった肺に新鮮な空気を入れるべく深呼吸を繰り返す。

紅魔館の門番は暇人だと噂だが、美鈴はこの門前で妖精や妖怪相手の遊び相手になったり、里の老人に体操を教えたり、モノ好きな腕自慢に拳法の手ほどきをしたりと、親しみやすいことで知られている。

紅魔館の邸内にある薔薇の世話も彼女の仕事であり、妖夢は同じ庭師として世間話することも多かった。

そしてここ半年ほど、門前での組手は、妖夢と美鈴の日課となっている。

「そろそろ私じゃ相手にならなくなってきましたねえ。組手がご所望というならいくらでもお相手しますが、正直私相手にいくらやっても白蓮さんには役不足なんじゃありませんか？」



「そんな。こちらこそすみません、お付き合い頂いているのに」

「いえいえ、私も鍛錬になってますから」

あっけらかんと言つ美鈴。実際のところ、彼女がまだ、腹の底に見通せない何かを隠していることは妖夢にもおぼろげながら理解できていたが——この場でそれを指摘して波風立てるのも大人げない。

実際のところ。美鈴の腕前はとんでもないものである。だが同じ徒手空拳の使い手とは言え、白蓮を想定した鍛錬相手としてどこまで役に立っているのかというと、だいぶ怪しいことも事実だ。

美鈴の技量が劣っているというのではない。むしろ逆だ。紅魔館の門番のそれは長年練り上げた鍛錬の末にある技巧の極地であるが、白蓮はむしろその対極。聖尼公の格闘の技量は、拙いとさえ言っている。彼女を最強たらしめているのは、もっと別の力である。

楼観剣を手にじっと黙り込んでしまった妖夢に、美鈴はばんと手を叩き。

「どうもややこしい話みたいですね」

片目を閉じて、場所を移しましょうかと妖夢を誘った。



所移して人里の大通り、賑やかな食堂で二人はテーブルを囲んでいた。結界ができる直前に大陸からやってきたという人間の料理人が開き、その孫にあたる夫婦が経営するここは、里でも珍しい中華料理店である。

「……うんっ。好吃♪」

見事な箸使いで中華蕎麦を啜り、肉野菜炒めを頬張って、好吃、好吃と眼を細める美鈴。故郷の味に舌鼓を打つ満面の笑顔は、同席する者たちの食欲も刺激するほどだ。

半分は人間である妖夢が言うのもなんだが、まるで妖怪とは思えないほどに、この紅魔館の門番は人間くさい。

「成程。妖忌さんと白蓮さんにそんな因縁が」

「はい。私も事の経緯を細かく知っているわけではない

んですけど」

憧憬のように浮かぶのは、道場で交わした会話の光景だ。あの時、妖忌は一体どんな思いで、幼き妖夢の問いに答えたのだろうか。

己の若さへの後悔か、敗北への苦渋か、敵わぬ強者への憧憬か、またあるいは諦観か。妖夢はそれを知らぬまま白蓮に挑み、今に至る。

「気になるのなら、もう一度再戦してみたらいかがです？ 聞いてますよ。妖夢さんも久々に異変解決に挑んで、だいぶ活躍だとか」

「——いえ、そんな」

霊廟での一件を思い出し、妖夢は慌てて話題を反らした。夢殿大祀廟の仙人たちが復活する騒動が起きたのは春のこと。欲霊異変は無事に解決し、彼らも今や幻想郷の一員として馴染んでいる。

が、その後に自分が仙人だと勘違いしての数々の行いは、黒歴史と呼ぶには少々記憶が生々しすぎた。

「と、ともかくー！」

照れ隠しにばくばくと炒飯を口に放り込み、鳥ガラのスープを飲みほして、妖夢はほんと咳払い。

「お師匠様の背中を追い続けて、剣を振って随分になりますが、どれだけ経っても、近付くどころかその背中までの遠さを思い知らされる毎日です。そんな未熟な私が、白蓮さんに勝てるのかと思うと……どうしても」

「ふうむ」

ちゅるんと麺を吸り、美鈴はしばしもごもごと口を動かしていたが、

「うーん。どう言えば良いのかな。こういうのは苦手なんです、えっと……そうですね、うちのお嬢様達の話なんですけどね」

紅魔館には二人の吸血鬼がいる。当主のレミリア・スカレットと、その妹フランドル・スカレット。よく似ていながら対照的な姉妹の関係は複雑であり、決して良好なものとはいえない。

「先日も、夕食のデザートを巡って言い争いになりました。お二人ともプリンは好物ですのでよくある話なん

ですけれど……。咲夜さんが作ったカラメルソースがまたま別の血液型でして」

甘味にどうして血液型が出てくるのかという不穏な話については、妖夢はあえて聞き流すことにした。

「それで、お嬢様はA型がお好きなんですけど、妹様はO型がお好みなんです。それなのに先に妹様がA型のプリンを食べてしまって、どっちが欲しい、そっちはいらないと大喧嘩です。こうなるとお二人ともお互い譲らないのです——」

笑っていた妖夢の前に、ずいとい指を一本立てて。美鈴は急に話の舵を本題へと切った。

「つまりは、そういう事なのではないかと思っんですよ。同じ吸血鬼だからと言って、姉妹だからと言って、お二人がそっくりそのまま同じであるわけは無いし、そうでなければならぬ理由もない」

ぱん、と胸の前で手のひらを打ち合わせ、門番妖怪は静かに目を閉じる。

「妖夢さんが、師である妖忌さんのことを尊敬し、目標

とされているのはわかります。けれど、妖夢さんは妖忌さんではないでしょう。目指す目標とはいえ、妖夢さんは何もそっくりそのまま妖忌さんと同じことを真似する必要はないはず」

「で、でも、お師匠様は——」

「驥<sup>き</sup>は一日にして千里なるも、驚馬<sup>どば</sup>も十駕すれば之に及ぶ。自分の功夫を疑っては駄目です。強さというのは単に力がある、速いということだけを比べるものではありませんから」

「はあ……」

いまいち、美鈴が何を言わんとしているのかつかめず、生返事の妖夢。門番は井を抱えてスープを旨そうに飲み干し、満足とばかりに口元を拭った。

「妖夢さんは、強くなりたいと考えているんですよね。とすれば、妖忌さんの真似ばかりをしていたら、いずれは困ることになるんじゃないですか？」

「え？」

「だって、妖夢さんがこのまま修行をつづけて、いつか

目標とする妖忌さんと同じことができるようになったとしますよね。その時、そこから先はどうしたらいいか分からなくなったりしませんか?」

「……それは」

考えもしなかったことだと、妖夢は二の句が継げずにいた。自分は、何のために強くなりたいのか。己の原点ともいえるその問いを、突き付けられた格好である。

美鈴は微笑み、ぱしんと自分の手を拳に添える。

「武の道というのは果てがなく、終わりのないものです。妖夢さんも、当面の目標は妖忌さんを目指すとして、その先のことを今から考えておくのは大事なことはずすよ」

それは、美鈴が外の世界の武術家から教わったことであるという。幻想郷にやってくるよりも、紅魔館の門番になるよりも前のことだと、華人小娘は頬を掻いて付け足し、話を締めくくった。

空になった食器を脇に片付け、勘定をテーブルの上において、美鈴はこほんと一つ咳払い。

「その上で、白蓮さんとの対戦において、お節介ながら秘策を一つ」

「は、はい!」

膝をそろえてぴんと背筋を伸ばす妖夢に、美鈴はからりと笑い、

「そんなに緊張しないでください。何か必殺技を教えようなんて話じゃないんですから」

そう言われたところで、気楽に寛ぐことなどできず、妖夢は一字一句を聞きもらさぬようにと耳を澄ませる。

「白蓮さんの身体強化魔法は脅威です。純粋に力量だけを比べても、鬼に比肩しうるでしょう」

口ぶりからして、美鈴は過去に鬼と打ち合った経験があるようだった。詳しい話を聞いてみたい気もしたが、今は集中すべきと妖夢は首を振ってその誘惑を捨てる。

「鬼は、人に対してその挑戦を受ける側です。彼らの力比べとはそうしたものであり、必然、挑む側が打ちかかることになるわけですね。とすると、鬼の剛力はいくかで、挑むこちらを迎撃するためのものになります。戦い

の主導権を握るのはあくまで挑んだ側。間合いも戦運びも、挑戦者が決めることができるわけですね。

これ対して白蓮さんはまったく逆。鬼と遜色ない強力をもって、鬼よりも遥かに速い速度で攻め込んできます。それに追従できなければ必然、妖夢さんのほうが受け側にされる。鬼と同じ破壊力を、遥かに高速の間合いで捌き切らなければならない」

「……なるほど」

言われてみて、それが途方もない難題であることは理解できた。俯く妖夢とともに、半霊も張りを失ってへいんと地面に落ちる。

それを見て美鈴は言葉をつづけた。

「ただ、絶対に太刀打ちができないかというとなんな事は無いはずですよ。確かに白蓮さんの拳はとんでもなく速いものですが——」

美鈴の手が霞む。突如突き出された拳が妖夢の目の前を掠め、すぐに離れてゆく。

「今の、見えませんか？」

「——はい。指の数ですよな」

最初が二本、次が三本、四本、一本、もう一度二本。答えた妖夢に、見事な射眼です、と美鈴は素直に拍手。

「それが分かる妖夢さんが、いくら速いとは言っても白蓮さんの動きを見切れないはずがないんです。幻想郷で最速の天狗とだって戦った経験もありなんですから。身体強化の魔法を使った白蓮さんの全力は未知数ですが、影も形も見えなかった、というのは間違いです」

「……で、でも、目の前だったのに全然見えませんでしたよ？ 私が見落としていたんですか？」

「うーん。……そこがちゃんと伝わるかどうかかわからないですよな。ところで妖夢さん」

美鈴はそっと手を伸ばし、あくしゅあくしゅと手を握り開いて示してみせた。

怪訝な顔をしつつも妖夢はそれに応じる。大きく温かな掌に握られて、半人半霊の身体は自分のひんやりとしているのが少し恥ずかしかった。

「これ、ですかね」

「はい？」

握ったままの手を示し、美鈴は微笑む。

「いま、妖夢さんは私の手を斬ろうとはしませんでしたよね。何故ですか？」

「え……」

問われ、妖夢は困惑する。そんな理由がないではないかと。

（その、確かに前は、とりあえず出会い頭に斬ってみようとするこゝろばかり考えていたけれど、今更そんなことを持ち出されても——）

またも黒歴史をつつかれたと思い、言い訳をしようとした妖夢に、美鈴は握った妖夢の手をぶんぶんと上下に振って見せる。

「つまり、これです。私が握手をしようとすることに、妖夢さんは敵意を抱かなかった。……子供は母親が自分を抱き上げるのに、警戒することはない。草が風になびくのを厭わないように。夏に心地いい風を避ける気が起きないように、こちらを害する訳がないというのが明瞭

な行為は、避けることができないものです」

「はあ」

「武術の極意というのは、突き詰めてしまえば自分に掛かる危害を一切受けずにおくことです。攻撃も防御も、極論すれば相手の無力化のためという結論に行き付いてしまつ。

武術を修めれば修めるほど、これは顕著だといいます。真の達人ともなれば、争いの方から自然と避けていくとか。武に通じたもののほど、己に害を成そうとする気配にはとりわけ敏感なんです」

「——ッ!？」

美鈴が言葉を切った瞬間、妖夢は反射的に彼女の手を振り払っていた。

握られた手首を噛み千切らんとする、鋭い牙の鮮烈なイメージが脳裏をよぎったのだ。椅子を跳ね飛ばし、テーブルを激しく揺らして一問ばかり飛び退き、背の楼観剣に手をかける。

そこまでして、ようやく半人半霊の庭師は、美鈴が諸

手をあげて害意のないことを示しているのに気づいた。

「え……、いま、の……?」

「今のはだいたい露骨でしたが、そういうことですよ。武芸に通じる者ほどその殺気、殺意を敏感に感じ取る。ちょうど今の妖夢さんのように。……あまりドタバタするとお店の人に迷惑ですので、どうぞ座ってください」

「あ、……は、はい」

美鈴に促され、妖夢は倒れた椅子を起こして、恐る恐る腰かける。

ぞわりと手首を這い上がる恐怖がまだ染みついているようで、妖夢は怪訝な顔で手首をさする。

「攻撃というものには多かれ少なかれ、相手を倒してやろう、ぶっ飛ばしてやろうという意思が籠るものです。それを察知してやれば、見えずとも避けることは難しくありません。」

……では、ここで問題です。その害意や敵意が一切ない攻撃があるとしたら?」

美鈴はひらひらと手を振って、ゆっくりと胸の前で合

掌してみせた。

「白蓮さんのあれはそういうものです。御仏が慈悲を持って差し出す救いの手。あらゆる衆生を救世する遍く愛。争いや闘いの否定と言ってもいいんでしょうねえ。万人を救う菩薩の掌。辛く苦しい戦いなどはやめにしてしまおう。この攻撃を食らって倒れてしまふのは、この上もない幸せだ——そんなふうに思わせてしまふ、優しい一撃なんですよ」

「……だから、避けることも、防御することも、できない……?」

「ご名答」

頷き、ぱちぱちと拍手をしてみせる美鈴。妖夢は呆然とその言葉を繰り返す。

(殺意なき、菩薩の掌……)

それは妖夢の理解の外側にある技法だった。そんなものが存在することなど考えた事もない。考え込んでしまふ妖夢に、美鈴はお代りのお茶を啜って大きく吐息。

「もうお分かりかと思いますが。妖夢さんが白蓮さんに

勝つには、この攻略が不可欠です。つまりはこれから、妖夢さんは妖忌さんにもできなかったことをしなければいけない」

「お師匠様、の……」

そっだ。

妖忌は、白蓮に勝てなかった。妖夢が彼女に勝つためには、それを超えていかねばならない。

師を超える。改めて突き付けられた言葉に、妖夢はただ、その重みを静かに噛み締めるほかなかった。



## ▼ 四

庭の手入れに剣術の鍛錬、マヨヒガへのお使いに里への買い出し。夕餉の支度、湯浴みの用意、夜の見回りと戸締りと一通りの仕事を終え、妖夢は自室へと引き上げていた。

寝巻に着替え、布団の上に正座して。

楼観剣、白楼剣の二刀を前に、妖夢は己の掌をじっと見つめる。

(菩薩の繰り出す慈悲の掌、か)

握り開いた手のひらを、幽行燈の明りに透かし、妖夢は頭に染み込んだ美鈴の言葉を反芻する。

紅魔館門番の助言で白蓮の力の一端を知ることができたが、さりとてそれで打開策が見つかったわけでもない。救済の掌。それはこれまで、妖夢が見たことも聞いたこともない理合だった。相手を打ち倒すのではなく救う

ために振るわれる拳など、およそ武の中において異質の概念である。

「……お祖父ちゃんでも、避けられなかった」

その場に居合わせたわけではないけれど、おそらくそういうことなのだろう。

見えず、聞こえず、害意なく。菩薩の掌は闘争を否定し救済を成す。白蓮に挑むには、その避けることのできない攻撃を、避けねばならない。

(できるのか……? いや、やらなきゃいけないんだ。

……けど)

まるで禅問答だ。まる半日、ずっと首をひねって見たものの、それで答えが見つかるわけもない。

しばし考え込んだ後、妖夢はぐしゃぐしゃと自分の髪を掻きまわし、吐息とともに部屋の隅にある文机へと手を伸ばした。

庭の手入れや頼まれた用事の備忘録、趣味で続けている切り絵を保存した帳面に交じって、一冊の古びた冊子がある。

表題も擦れて読めぬこの冊子は、以前の大掃除で物置の奥から見つけた妖忌が残したものであった。

頁はわずかに八十とすこし。書かれているのは日々の出来事の記録だが、日記というよりも二言三言の短い語句が、備忘のために記されているだけの簡素なものだ。それでも、妖夢にとっては数少ない祖父の言葉。

こうして、迷った時には助言を求め、何度も何度も読み返した冊子である。

「……………」

ゆっくりと視線を巡らせる。祖父の人柄を偲ばせる、無駄のない達筆な記録。妖忌はあまり筆まめな性質ではなかったと見え、頁をまたぐごとに数年、十数年と時間が飛んでいることが多かった。初めの数頁は幻想郷の結界ができるよりも以前に記されたものであるらしい。素っ気ない記録の中に、妖夢はふと目を止める。

「……あれ？」

妖忌が庭師の仕事をはじめて間もなく、庭の垣根の修繕のための道具を買い求めたときの記録だ。走り書きの

中に気になる記述を見つけ、妖夢は半霊と一緒に買って頁を覗きこむ。

買い出しの品を並べた下に書き加えられた一文は、中有の道に店を構える古物商から、妖忌が経文を数冊、買い求めた時のものと思われた。

「お祖父ちゃんが、仏典を……？」

そうして口にし、改めて思い返してみれば。

妖忌が啓き、妖夢が学んだ魂魄の剣は、その多くが六道や悟入といった、仏門に関する用語を用いている。

今更ながらにそのことを意識し、妖夢はこれまで、その理由について深く考えたことがなかったのに思い至る。これまでは単純に、師も自分と同じ半人半霊であるがゆえに。あるいは、西行寺の娘という亡霊の姫に仕え、冥界の鎮護を命じられるがゆえに、その名に仏門を冠しているのだろうかと思っていた。

しかし、魂魄の剣は妖忌が若かりし頃に、楼観白楼の二刀とともに磨いた技だ。流派として広めることも、伝えることも考えられておらず、妖夢には見様見真似でし

か真似できないものも多くあった。

そんな師が、なぜ？

(もしかして……！)

ふと、美鈴の言葉が蘇る。

武とは、はるか先を見据えて、一歩ずつ着実に歩くもので、あれば。若き日の妖忌が目指したものは、一体なんであつたのか。

白玉楼を守るためのはずの剣で、武を競い、技を力を比べようとしたのは、何故だつたのか。

その背中があまりにも偉大で、憧れであつた故に。妖夢はこれまで考えもしなかつた。

しかし。妖忌とて未熟だつた。幾度もの敗北を繰り返し、悩み、苦悩していたのだ。

偉大なる師にも、魂魄の剣を振るう先に、目指すものがあつたとしたなら。

地に塗れ、泥を舐めた苦い敗北の後に、敵わぬ相手に少しでも近づこうとしていたのなら。

「お祖父ちゃんも、同じだつたんだ……!!」

仏典を捲り、禪に打ち込み、枯山水をつくり、庭木を剪定して求めた境地は、己の剣を敗北に塗れさせた相手への探求があつたからではないのか。

かつて己に敗北を刻んだ相手について、少しでも多くを知ろうとしたからではなかつたか。

つまりはその鍛錬も。経文を手にしたのも。

己の目標、尼公・聖白蓮を倒すために。

(敵を知り、己を知れば――)

きつと目を見開いて、妖夢は静かに枕元の楼観剣、白楼剣を手にとつた。

毎日のように素振りを繰り返し、何十万、何百万と振るつた鍛錬とともに、これまで何度も窮地を潜り抜け、強敵を打倒してきた魂魄の二刀。

手に馴染む柄を握つたころには、もう決意は固まつていた。

「よしっ」

思い立ったが即実行が、妖夢の信条である。

がばと布団に身を起こし、行李を引っ張り出して手早

く身支度を済ませ、妖夢は廊下へと駆け出して行った。



翌日。

「あらー……？」

すっかり日も昇り、縁側には早くも夏の日差し。いつまで経っても起こしに来る気配のない従者に、痺れを切らせた春の亡霊、西行寺幽々子が妖夢の居室を覗いてみれば、そこはすっかり蛻<sup>もゆけ</sup>の殻。

庫裏を覗いてみれば、朝食の支度は整い、昼食の用意も終わっている。庭には洗濯物が陽光を浴びてはためき、指示を残された幽霊たちが忙しく働いていた。

卓上、幽々子の膳のそばには、妖夢の字で書置きが一枚残されている。

『本日より、命蓮寺に体験入信をいたしますので、しばしお暇をいただきます』

「あらあらー……？」

放り出された白玉楼の主は、一人分のお膳の前に、首を傾げるばかりであった。



さて。

この日の早朝、里に近しき妖怪寺を訪れ、入信の門を叩いた白玉楼の庭師に、命蓮寺の門徒たちが面食ったのは言うまでもない。

この寺には人妖問わず在家信者も多いが、これまで縁もゆかりもなかった冥界の庭師が突如住み込みで入信したいと言いつ出したのであるから、当然の反応であろう。

なにしろ、妖夢には白蓮の復活直後に決闘を申し込んだ経緯がある。本心を隠して白蓮を害する心算——あるいは、もっと姑息に寺の評判を落とすに來たのではないかといった心配まであった。

折しも、神靈廟道場の仙人たちとの確執が表面化してきた時期である。比較的穏当な立場の星や一輪も首を傾げ、水蜜やナズーリンは猜疑心もあらわに何かしらの陰謀、あるいは裏があるのではないかと疑念を口にして憚らなかった。対応としては真っ当であり、責められるには当たらないだろう。

白蓮への面会もかなわず、妖夢の入門がすげなく断わられんとしたその矢先。助け舟は思わぬところからやってきた。

「いいじゃん、好きにさせてやれば」

寺の食客である封獣ぬえである。以前に妖夢と一戦交えた経験のある彼女が、後見人の二ツ岩マミゾウと連れ立って現れ、妖夢の身元を保証したことで事態は一転。白紙に戻っての議論がしばし続いた後、結局妖夢は白蓮に直接面会して入信を請うこととなったのである。

無論、公正無私な寺の化主がこれを厭うことはなかった。白蓮は妖夢の入門を快く許可し、寺の同胞として迎えたのであった。

ぬえとマミゾウの温情、白蓮の慈悲に深い感謝を示し、妖夢は己の覚悟を示さんとばかりに、早速その日から住み込みで修業を始めた。

その打ち込みようは、熱心な門徒である一輪、水蜜らをして唸らせるものであった。

朝は誰よりも早くから起き、広い境内の掃除を済ませ、門徒たちの大量の洗濯を片づけ、交代制となっている食事の用意にも手を抜かず勤しむ。勤行の時間となれば山彦の隣で負けずに読経し、座禅にも深く打ち込み打擲も進んで受け、聖の語る法話に真摯に耳を傾ける。

はじめのうちは彼女を胡散臭く見ていた門徒たちも、ひたむきに修業に打ち込む妖夢の姿を見て、その考えを改めざるを得なかった。

師の背中をがむしやりに追い、形ばかりを真似た程度のものであったとはいえ、妖夢が打ち込んだ剣の修業は仏門に基づいたものになっていた。その素養は妖夢が命蓮寺に溶け込むなかで大きな力となったのである。

かくして見る間に十日が経ち二十日が過ぎ、妖夢はい

つしか、妖怪寺の面々とも打ち解けていったのであった。



そうして。

寺の一員として誰よりも近い場所で白蓮を見て。妖夢がまずはじめに感じたことは、彼女が度を越した博愛主義者であり、空恐ろしくなるほどの公正無私であることだった。

常に、いかなる時も穏やかに。争いを避け、あまねく人妖を差別せず——いささか人よりも妖怪を鼻屑する傾向はあったが——誰に対しても誠実に、平等に接する。

この幻想郷において、仏門を率いるに相応しき、八苦を滅した尼公の名に恥じぬ真摯な姿勢は、ただただ感服のほかはない。

だが、そんな彼女の振る舞いに、同時に妖夢はどこか拭いされぬ疑念、かすかな違和感を覚えていた。

たとえば、午後の鍛錬の時間。

信徒の中に妖怪が多くあることから、命蓮寺では行の一環として武術の鍛錬が取り入れられていた。人間の信徒は鍛錬を通じて心と身体を鍛えることを。妖怪に対しては、人よりも強い力を自覚的に動かすことで人との違いを実感し、不慮の事故を減らそうという意図である。

発案は入道使いの一輪であり、これは彼女が長らく地底で過ごした時の実体験に基づいていた。適度な運動とストレス発散は健全な精神を保つのに不可欠だという持論である。

あれだけの腕前だ。妖夢はてっきり白蓮が彼らの指導に当たっているのだらうと思っていたのだが、音頭をとるのは一輪に水蜜。たまに星が顔を出す程度で、白蓮は境内の離れた場所からその様子を見ているだけ。組手どころか、声をかけることも避けているようだった。

疑問に思って訊ねてみれば、一輪は腕組みをして難しい顔。

「姐さんが？ ……うーん。そうねえ、ナズーリンとか響子がこういうの苦手だからじゃないかな。ぬえもマミ

ゾウもあんまり顔出さないし」

妖怪とても誰も彼もが腕っぷし自慢という訳でもない。鍛錬に積極的に参加しているのは一輪や水蜜、星といった精強な肉体を持つ者たちで、それ以外の妖怪は距離を置き気味であるという。

そのように参加者が偏っている中で、寺の代表である白蓮が皆の指導に当たるのはよろしくない——と、そういった理由であるという。

「……まあ、それにはつきり言えば、姐さんはこういうの嫌いだと思うのよ。私たちが鍛錬することも、本当はよく思っていないんじゃないかな」

「ちよっと、一輪」

咎めるように言う水蜜に、一輪はホントの事じゃないと吐息する。

「昔のこともあるしねえ。姐さんはあんまり暴力とか、そういうのにいい思い出ないのよ。できれば仲良く一緒に、穏やかにいて欲しいっていうのが本音かしらね。まあ、姐さんの気持ちはわかるし、できるならそうしたい

けどさ。なかなか簡単にはね。なんたってみんな妖怪なんだから。遊びたいしお酒も飲みたい……っと、今は内緒ね」

悪戯っぽく片目を閉じて指を立てる一輪。その後ろで雲山が重々しく頷いていた。一輪もそうだが、この入道親父も、実は案外と俗っぽい。

錨を地面に突き立て、そこに寄りかかって水蜜もそうだと応じた。

「そもそも、聖が相手じゃ勝負にならないよ。みんな一発で負けちゃうんだからさ」

「確かにねえ。私としては、姐さんも一緒にやりたいんだけどな」

左右の拳を振るってみせる一輪に、皆も追隨する。たとえば、こんなところにも白蓮の博愛は現れているらしかった。

評判に違わぬ慈母のふるまい。彼女はだれかを特別扱いする事はなく、誰にも平等に接している。

御仏はあまねく平等であり、悪人も善人も、その罪の

多寡に関わらず等しく救う。

まさに救世の権化——荒ぶる妖怪たちを鎮め、彼らの導きとなる姿。

「——でも」

それは、果たして良いことなのか。

談笑する彼女達から離れ、穏やかに見守る白蓮の姿が、妖夢にはなぜか、ひどく寂しげに見えてならなかった。



## ▼ 五

その日は見事な日本晴れ。午後の勤行が終わり、自由時間となった中で、門徒たちはめいめいに本堂を出てゆく。庫裏に向かつておやつを用意する者、里に出かけるもの、寺の事務の整理に戻るもの。思い思いに過ぎる午後の時間の中、庭で静かに剣を構え、瞑想をしていた妖夢に声がかかる。

柔和な笑顔を見せる、聖尼公である。

「すみません、お邪魔でしたか？」

「いえ。ちょうど休もうかと思っていたところですよ」

「少し、よろしいですか」

妖夢は招かれるまま、彼女に連れられて、堂の縁側隣に腰を下ろした。

「今日で妖夢さんがいらしてから、ひと月になりますが……どうですか。ここの暮しには慣れましたか？」

「はい。良くしていただいています」

勧められるままに湯呑に口をつける。自分の淹れるよりもだいたい渋く、熱いお茶にわずかに眉をしかめ、小さく舌を出す。

白蓮はそれを見て穏やかに眉を緩め、今日の天気の話でもするように先を続ける。

「……私に勝つ算段は、整いましたか？」

さらりと核心を突かれ、妖夢が驚いて横を向くと、白蓮は悪戯っぽく微笑んでいた。

決まりの悪さを感じながら、妖夢はおそろおそろ聞き返す。

「あの……やっぱ、お見通しでしたか？」

「あれだけ毎日、熱心に見つめられているのですから、嫌でもわかってしまいます」

にこりと笑顔の白蓮に、妖夢はさらに渋い顔。状況はどうあれ、偽って入信をしていたのは確かなのだ。

けれどそんな妖夢を慮るところか、白蓮は静かに妖夢に正対し、深々と頭を下げた。

「随分時間が過ぎてしまいましたが一以前の宴会でのこと、改めてお詫びいたします。お二人の事情も知らないまま、幽々子さんと妖夢さんを傷付けるような事を口にしてしまい、申し訳ありませんでした。許していただけるとは思いませんが、できる限りのことはしたいと思っています」

謝罪の言葉を口に、聖尼公はどこまでも真摯だ。

さらさらと風に揺れる新緑の梢。五月の空はなお高く、日差しが人のまばらな庭に照らされる。遠く境内の参道では、山彦の挨拶が聞こえてくる。

妖夢は困惑と共に頬を掻いて、

「参ったな、そんな風に思われてたんですか」

あの場では、一時の怒りに身を任せてしまったのは間違いないけれど。

今は、妖夢を動かす原動力は、ほかにある。

「ここに来たのは、遺恨や雪辱が理由じゃないんです」

白蓮はきよんととしていた。予想だにしていなかったという顔だ。

「では、何故？」

「知りたかったからです」

楼観剣、白楼剣。物心ついてから自分とずっと共にあり、片時も手放さずにいた、魂魄の二刀。それを手に、妖夢は言う。

「これまでずっと、お師匠様の——お祖父ちゃんの背中を追いかけてきました。お祖父ちゃんは、私に何も言わずに居なくなってしまったから。私がその代わりにならなければならないと思って。……幽々子様をお守りするために、強くならなければならないと思っていました」

一息。ゆっくりと湯呑をそばに置く。

「お師匠様が破れたというあなたに勝てば、私は少しでもあの背中に追い付けるんだって、そう思っていました」

それでは、駄目だと——気付いたのだ。

多くの人に教わり、気付かせてもらった。

ここから先は、言葉ではない。己の力で示さなければならぬことだ。

静かに立ち上がった妖夢に、白蓮はゆるりと空を振り仰ぐ。

「いずれにせよ、再戦を諦めるつもりはないということですね」

「はい。……今一度、お願いします」

「……わかりました。それが妖夢さんのお望みであれば」  
瞑目し、白蓮はゆっくりと頷く。

「日時は、いつにしますか」

「——いま、この場で」

いつかと同じような問いに、妖夢のまっすぐな視線がぶつかる。静かに吐息し、白蓮はいいでしょうと緩やかに応じた。

彼女はそういう人物だ。真っ向から向かってくる相手に対し、否を言わない。己の身を犠牲と投げ出しても、誠心誠意を尽くそうとする。

だからこそ、妖夢は彼女を誤解していたのだ。

縁側から腰を上げ、白蓮は庭の真ん中へと進んでゆく。白い玉砂利を照らす青い空の下、妖夢も二刀を腰と背中

に納め、それに続いた。



俄かに本堂がざわつきはじめ、どたとたと廊下を走る足音が響く。入道の雲山と一緒に庫裏でおやつを用意をしていた一輪は、駆け込んだきた水蜜に首を傾げる。

「どうしたのムラサ？ 丁度よかったわ、これ運ぶの手伝ってくれない？」

「そんな呑気なこと言ってる場合じゃないよ一輪！ 新入りと聖が、また一戦やるって!! やっぱりあいつ、諦めてなかったんだよ!!」

「えええ!? なんで!? 今になってそんな……」

「いいから、一輪も早く来て!!」

雲山と一輪を引き連れ、水蜜が境内へ駆け戻った時、すでにその場には数名の妖怪たちがいた。おろおろと見守る響子の隣で、真剣な表情の本尊代理がじっと成り行きを見守っている。

「ムラサ、一輪」

「星！ どうなってるの!？」

「見ての通りだよ。敵の懷で、聖への対抗策を探っていたんだろう。……こんなことだろうと思っただけだ、白昼堂々大胆なことだね」

星の隣でナズーリンが嘆息してみせる。門徒たちが遠巻きに見守るなか、白蓮と妖夢は境内の中央ですでに対峙していた。

「と、止めなくていいの?」

「聖はやる気です。下手に邪魔したらまとめて吹っ飛ばされかねない」

「そんな……」

うろたえる響子の隣で、一輪は眉をよじって腕組みをする。

「ねえ、それって妖夢がずっと聖の隙を窺ってたってこと? ……なんか、あんまりそんな感じはしなかったけどなあ」

「うん。あの子、そういう隠し事とか苦手よね。騙し討

ちとかできないタイプ」

「……否定しかねるが、真意を伏せていたことには違いないだろう。誰かさんをはじめ、皆もすっかり絆されていたようだし。どう扱うかは聖次第ではあるけれどね」

ナズーリンが見上げる先には少し離れた堂の屋根がある。その上には、羽織袴のマミゾウに、つまらなそうに頬を膨らませるぬえの姿があった。

堂の近くにはマミゾウ配下の化け狸たちが集まり、ちやっかりと特等席を陣取っている。

「かかか。酷い言われようじゃのう。……のう、ぬえよ」

「……知らないってば」

「さて、どうなるかはちと興味深い。まともに考えれば聖の勝ちで胴元は成り立たんかのう」

屋根の一隅、化け狸の膝に広げられた賭証の上には、榆の葉が山と積み上げられていた。賭けの比率は圧倒的に白蓮に偏り、勝負としては不成立である。配下の狸たちがそうだそうだと頷くなか、マミゾウは片目を瞑って煙管を吹かす。

「……………」

その隣。ぬえは無言で、背中の蛇に飲み込ませていた銀粒を五つばかり、マミゾウの反対側の手に吐き出した。目を丸くする狸たちに、ぬえは顔をそっぽに向けたまままだ。しかし、その手に絡みついた羽根つきの蛇は、横目でこちらちらと境内を見下ろしている。

「かかか。成程、成程。買われておるのう」

カンと煙管を鳴らし、マミゾウは手の中の銀粒を握り、懷から三枚、書き付けを取り出した。首のおくれ毛を筆に化けさせ、すらすらと一文を認めて屋根上に並べる。

「三体七で白蓮の優勢、と。他に乗るものはおらんかね!」  
「……困ったものです」

いつの間にか周囲に集まってきた見物の人混みに、白蓮は、少し困ったような表情であたりを見まわし、諦めたように吐息した。

両の手を静かに合掌し、目を閉じる。

改めて静かに見開かれた瞳は、青い蓮華のごとき真青眼相に染まっていた。背中には丈光相たる四方一丈の光

明を光背と背負い、毛上向相の紫雲を纏う金髪がふわりと揺れ、薔茉莉の香りが立ち昇る。

いくつもの仏性を孕み、顕現した聖尼の慈悲深き視線が、圧倒的な存在感で妖夢を見据える。

これぞ、これこそ八苦を滅した聖尼公。

かつての敗北の苦みが庭師の少女の胸をよぎる。それに負けじと、妖夢は楼観剣を抜刀し、正眼に構えた。

「よろしいですか」

「ええ、いつでも」

短く言葉を交わし――

開始の合図と同時に起きた状況を、正確に把握できたものはその場に誰も居なかった。



二百由旬を駆け抜ける、鍛え上げられた庭師の俊足は、音も置き去りにしてなお速い。楼観剣を低く構え、地を蹴って踏み出すその動作の起こり際に、しかし白蓮がし

たことはひどく単純だった。

白蓮は、静かにその両の手を合わせたのである。

合掌、仏への祈りの所作。

手と手を合わせる行動は、およそ、立ち合いの場には相応しくない。不殺戒の教えに基づいた、暴力を否定し、非武装を示すにも似た動作。

だが、あまりにも緩やかなその動作の全ては、妖夢の反射神経をしてなお捉えきれぬ、有り得ない速度で行われていた。

その刹那。

距離と、時間と、全てを無視して。妖夢の胸へと、救済の掌が打ち込まれる。

大地が抉れ大気が弾け、爆音が轟き土煙が舞い上がる。それらは全て、半人半霊の庭師が吹き飛ばされて生じたものだ。

静かに伸びるは菩薩の掌。

無慈悲なまでに慈悲深き大日如来の輝きは、人と幽霊の狭間で惑う半人半霊を、剣の妄執より救い上げたので

ある。

二百由旬には及ばなくとも、十分に広い命蓮寺の庭。その端から端までを飛ばされ、妖夢は地の上に倒れ伏す。動かない彼女をじっと見降ろして、白蓮は静かに瞑目し、再度の合掌をして深く一礼した。

「え」

左右の耳をバタバタと振って、響子が左右を見まわし、驚いたように声を上げる。

「い、いまのって……え？ あれ？」

決闘開始からわずかに一秒。しかも白蓮はその場を一步も動いていない。

あまりにも迅速な決着だ。山彦妖怪が信じられないのも無理はない。入門して日の浅い彼女は、まだこのように、命蓮寺の化主が誰かと対峙する場に居合わせたことが無かったのだ。

あつけない幕切れに、皆が言葉を失っている中。

「誰か、手当てを——」

そう言いかけた白蓮はしかし、最後まで喋ることはで

きなかった。

妖夢が咳き込みながらも息を吹き返し、楼観剣に縋りついて身を起こしたからだ。

「嘘……!」

一輪が口元を覆い、水蜜が目を剥く。星が我を忘れて立ち上がった。

古くから白蓮を知っているものほど、その驚きは大きかった。

思い起こせば千年の昔より、白蓮を疎むものは後を絶たなかった。己の性業のままに振舞う邪悪な妖怪たち、妖怪救済を恐れる人間たち。聖尼公を亡き者にせんと襲い掛かった狼藉者は数知れない。

白蓮はそれらを余すところなく、この救済の掌で退けてきたのである。

聖尼公は徒に戦いを引き伸ばすことを嫌った。不殺戒の教えからだけではない。争いは苦痛や怨讐を齎し、禍根を残して更なる争乱を生む。ならばそれらを断ち切り、ただの一撃のもとに終わらせることこそ、より善き術だ

と信じたのだ。

無慈悲に、遍く愛のままに。

けれど。

(——見えなかった)

肩を大きく上下させ、息を荒げてえずく妖夢。口中の激痛に吐き気すら催し、喉奥がひゅうと嫌な音を立てる。肺が絞り上げられ、呼吸のたびに臓腑がひきつるようだ。大人しく気を失っておけばこんな辛い目には合わない。と囁く誘惑の心を断ちきって、苦い血を吐き捨て喘ぐ息を深く吐き出す。肺の中に残る息を全て吐き切り、さらに呼気として絞りだして。

ゆっくりと息を吸うと、鈍い痛みと共に衝撃は過ぎ去ってゆく。

(参ったな、本当に見えない)

かは、と息を絞り、妖夢は奔る。終了の合図はない。日々二百由旬を走る健脚は、吹き飛ばされた距離を瞬く間に零とした。

わずかに呆けていた白蓮の右脇から斜め前へ、四尺七

寸の剣閃が翻る。

(……………!!)

ばきん。響いたのは鋼同士が打ち合われたような音。逆袈裟から刃を翻して横薙ぎの切っ先を、白蓮はその手で容易く弾いた。身体強化の魔法が練り上げた尼僧の身体は、いまや金剛石よりも硬く、剛い。

妖夢が楼観の刃から練り上げて放つ斬撃の衝撃波も、そよ風を払うように散らされた。

そして即座に、反撃が来る。

攻撃の前触れすら知覚できず、右肩を扶る菩薩の掌。今度は衝撃を逃がさぬよう、真上から押し潰さんばかりの角度だ。大地に大穴が穿たれ、ひび割れた地面が反動にせり上がる。

またも成すすべなく一撃を食らう妖夢。が、庭師は衝撃に仰け反りながらも踏みとどまり、倒れない。その背に半霊を背負い、弾き飛ばされるのを堪えて銀線を閃かせる。

楼観剣の切っ先は閃光となって放たれ、深々と白蓮の

胴を薙ぐ。しかし聖尼公の強固な肉体は、一振りで幽霊十体を切り裂く刃をもともしない。

「————」

三度の合掌。

反射的に歯を食いしばる妖夢の顔面に、容赦なく追撃が撃ち込まれた。もはや白蓮も戸惑わない。殺意なき無慈悲な慈愛が追撃となって、少女の顎を真上に撃ち抜く。怒涛の連撃。大岩が砕かれんばかりの轟音が、大気を震わせる衝撃を伴って伝播する。

が。

「——なんで、倒れないの?！」

水蜜の疑念はもはや悲鳴のようだった。

千年前より今に至るまで、あらゆる仏敵を一撃のもとに無力化してきた白蓮の拳。聖尼公の法力は、見上げるほどの巨人も、巖のような鬼も、容易く下してきた。

回避も防御も不可能の、慈悲の掌。争いを厭い諍いを終わらせる救済の一撃。

たとえにそれに抗おうとも、それは自ら御仏の慈悲を



厭うことと同義である。反逆者は己の業によって自らの身体を傷つけ、罪によって自滅するのだ。

それなのに。だと、いうのに。

体格でも、身体能力でも遥かに劣るはずの妖夢が、何度となく大日如來の救済の掌を受けて、なおも倒れず、立ち上がる。

境内狭しと打ち合う二人を見つめ、信じられぬ思いで一輪が頭巾の端を握る。

「……姐さん、手加減してる、とか？」

「んなわけないだろ」

屋根の上、宙に浮く三叉槍の上に寝そべて足をぶらつかせるぬえが、面白くもなさそうに頬杖をついて口を尖らせる。

「見なよ。みっともなく本気出して。一番焦ってんの白蓮じゃないか」

立て続けに振るわれる菩薩の掌——それらは余すところなく妖夢を打ち据え、容赦なく打擲した。それでもなお倒れることなく起き上がる妖夢に、白蓮の攻撃は一撃

ごとに威力を増し、更なる破壊の余波を撒き散らしている。境内が揺れ、石畳は跳ねて木々が轟音にたわむ。

ぬえは槍の上に身を起こし、くるんと身を回して腰かけた。激しい掌打を繰り出す白蓮を見、眉を寄せて呻く。

「あれが一番やばいのは、白蓮に戦う気が無いからだよ。それが乱れたらただの拳骨だ。そんなことしてる余裕もないのさ」

「じゃあ、どうして！ あいつ、あんなに何発も食らって——なんで無事なのよ！」

「まったくじゃない。不器用にも程があるのう。あつという間に満身創痍。とても見ちゃおれん」

ぬえの隣でくわえ煙管を上下に動かし、マミゾウが紫煙を吐きだした。

「至極、単純なからくりじゃよ。どうしたって避けれるのなら、当たってからどうにかするしかない。じゃろう？」

煙管の雁首を、爪に押し当て、マミゾウは眼鏡を光らせた。

——そう。

妖夢がしているのは紙一重、どころですらない。紙零重の見切りである。

直撃することが避けられぬのならと、妖夢は回避を捨てた。ただ足を止め、打たれるに任せ。白蓮の掌が接触したまさにその瞬間、衝撃が打ち込まれるまでの、刹那よりもなお短い時間に、打点をずらし、あるいは身を反らして威力を殺し、衝撃を緩和しているのだ。

いかな殺意なき拳とは言え、天上から御仏の裁きを振り注がせて叩きのめすわけではない。撃ち込む動作があり、放たれる拳がある。

ならば、抗する手段はある。刹那の見切りを可能にする妖夢の技量あつての神業であつた。

「言つのとやるのではえらい差じゃが……しかし、えげつないことをするのお」

妖夢の口元から血が伝う。初見から、直撃覚悟の見切りなど成功するはずがない。意識を狩り取る優しき一撃から意識を保つため、妖夢はわざと奥歯に舌を挟んで殴られているのだ。

その痛みをもって、己の危機意識を奮い立たせ、白蓮の攻撃を殺意あるものへと変えて、意識を保っているのである。

激しい打撃を受け続け、みるみる腫れ上がる少女の頬に、マミゾウは眉をしかめた。

「で、でも……いくら倒れないって限度があるわ。あいつ、全然やり返せてないし。一方的に聖のペースじゃない!」

「じゃなあ。……しかし、苦しんでおるのはどっちか、一目瞭然ではないかね?」

何度打つても倒れない妖夢に対し、焦りのままに拳を振るう白蓮。

それを受け、何度でも立ち上がる妖夢。

攻守は変わらぬまま続く中、両者の間には確かな差があつた。

「さて。白蓮どのの法力は疑うまでもないが——斃すでなく、害すでなく——ただ立ち合うことを望むという相手は、さしもの聖尼公もちと不慣れじゃろうなあ」

面白げに目を細めた視線の先。

白蓮の頬を、一筋の冷たい汗が伝うのを見逃さず、化け狸は愉快そうに煙管を吹かした。



同時刻。

妖怪寺の境内を離れた樹上。木陰にその身を隠すように、宙に浮かぶ岩舟がふわりと停泊していた。舟上には二つの影が並び、遠く眼下の決戦を見下ろしている。

博麗神社の地下、折り畳まれた空間の中に道場を構える、神霊廟の仙人たちだ。

「なかなか苦戦しておるようですね、あの僧侶」

丸めた指の輪の向こうに妖怪寺の喧騒を眺め、ふむりと袖を手繰るのは古代日本の戸解仙、物部布都。

その隣で聖徳道士、豊聡耳神子は重々しく首を横に振った。

「立ち向かう魂魄嬢の覚悟、見事なものです。簡単に抗

せる相手ではないでしょうね」

「まったくです。あの剣は実に厄介ですぞ太子様。特に短いほうがいかん。私も酷い目に遭いました」

寿命を延ばすことに執着し、道を究めんとする仙人にとって、迷いを払う白楼剣は時に致命の刃となるものだ。本来あんなものは地獄が管理すべきで、冥界にあるのが不思議とも思えるほどに。

「けれど、聖白蓮。彼女は強い。あの、一種歪ともいえる仏への信仰が、彼女の鋼の精神を支えている。同じ条件であれば、私は彼女に勝てなかったでしょうね」

今は事情が違いますが、と神子は補足を忘れない。聖徳道士の強さは為政者としての側面を強く含む。信仰と肉体強化という個の強さを保持する白蓮に対し、人の十欲を聞き取る神子の力は、知名度やその行いによる人気が大きく能力を左右した。

千年以上の封印を経た復活直後の状況では、両者の差は歴然としていたことであらう。

「大日の輝き——あの無慈悲な一撃は、彼女が妖怪救済

という、困難な道を歩むゆえに生まれたものでしょう。

仏とは遍く慈悲をもたらずものだ。たとえ己を殺さんと敵意を向けてくる相手であっても、敵意を向け返してはならない。その罪を、業を赦し、慈愛をもって接さねばならない。時に、その身を犠牲と差し出してさえも」

「然り。まったくもって、仏教とは死狂<sup>しくくる</sup>なり。正気の沙汰ではありませんな」

「ええ。しかし、ただ無防備であるだけでは、そこに矛盾が生まれます。彼女には目的があった。己を犠牲にしているのは届かぬ、果たさねばならない大願が、それを成すまで、彼女は死んではならなかった」

妖夢の太刀筋をかくぐり、放たれる掌底が、庭師の身体を弾き飛ばす。が、吹き飛ばされながらも妖夢は身を丸めて着地、太刀の切っ先が白蓮の肩を捉えた。

身体強化魔法で増幅・強化された白蓮の身体はそれをもつものでもないが、打ち込まれた太刀の勢いは彼女の追撃を押しとどめるに十分だった。

「それがあの歪な力を生んだのです。平穏を望みながら、

誰よりも強い願望を秘めた矛盾が、辿り着いた一つの境地。

敵意なく、殺意なく、ただただ一方的に相手の戦闘力を失わせ無力化させる菩薩の掌。それをもって彼女はこれまで、あらゆる害意を跳ねのけてきた。広大無辺なる仏の慈悲としてね。しかしそれはひとえに、相手との対話を一方的に打ち切る、拒絶に他ならない」

手にした杓を口元に掲げ、神子は静かに瞑目した。彼女の強すぎる能力を緩和するヘッドホン越しに、場に満ちる欲壺をとらえ、そのなかから白蓮の欲を聞き分ける。

「かつて聖白蓮が退けた者達は、敵意、暴力という形ではあれ、彼女と対話を望んでいました。お前が恐ろしい、お前が気に入らない、だから死ね、とね。それは、下劣で残忍なものであったとしても、間違いなく他者との交流、対話なのです」

仏教という理想に身を投じたからこそ、苦難の現実に直面し、それを否定せねばならなかった白蓮の苦悩。

十欲を聞き分ける聖徳道士の耳は、尼公の矛盾を暴い

てゆく。

「彼女はそれに相対することなく、回答を拒絶し、態度を先送りしていた。抵抗することをしなかった。それが彼女の過ちです。」

あるいは——彼女が全力をもって、彼等に対抗していれば、千年前にあのような形で幕切れは無かったのかもしれない」

妖戒寺の決闘はなお苛烈さを増す。しかし、様子を見守る星や一輪達は、白蓮の苦戦にも割って入る様子はない。彼女が負けないと信じているのか。あるいは。

「彼女には一度、その思い上がりを分かせてやりたいとは思っていたけれど、どうやら先を越されてしまったみたいだね」

岩舟の上で杓を弄び、神子は愉快そうに肩を震わせた。



決闘は新たな局面を迎えようとしていた。

大きく肩を上下させ、全身を傷だらけにしながらなお起き上がる妖夢に。いまだ圧倒的な力を保ちながら、白蓮はじりじりと押されていく。

放たれる御仏の慈悲に打たれ、碎かれ、吹き飛ばされ。それでもなお、小さな庭師は血の混じった唾を吐いて立ち上がる。いったい何度打ち倒されただろう。もはや白蓮の拳に慈悲はなく、明王のごとき剛力が容赦なく妖夢を打ち飛ばす。奥歯まで激しく痛み、噛み締めるたびに激しい激痛が走るが、なお妖夢は膝を折らなかつた。

（聖白蓮——お師匠様が、勝てなかつた相手）

だから、自分にも勝てないのではないかと。妖夢はそれを恐れた。

魂魄妖忌。先代西行寺家剣術指南役——妖夢にとって、あまりにも大きすぎ、目標として高すぎた師の名前。

それがゆえに、妖夢はその先を見つめることをしなかった。師に追い付き、少しでも未熟な自分を埋めることだけを考えていた。

けれど。

（いま、ここにいるのは、私なんだ）

軋む体に入活を入れ、かつて師を倒した相手の前に立ち上がる。

不死身めいて起き上がる妖夢の前に、白蓮は明らかに焦りを滲ませていた。遮二無二振るわれる救済の掌は、既に本来の意義を失い、ただ無尽蔵な破壊だけを撒き散らす。

そうなれば、対処は以前よりも容易であった。白玉楼の庭師には、怪力無双の鬼とも、正体不明の鶴とも、刃を交えた経験がある。

「そんな、ものか」

腹の底から声を絞り出し、妖夢は楼観剣を構え、撃ち込まれる菩薩の一撃を弾き返す。

はじめて、白蓮がはつきりと表情を変えた。

菩薩の掌。救済の御手。争いをなくし、闘いを封じるそれは、確かに素晴らしいものであろう。

だが、それは戦いそのものの否定だ。

問答無用で相手を無力化するということは、殴ること

で相手を傷つける業を嫌い、厭うのに等しい。

「そんなものが、聖白蓮!!」

今この場で妖夢と白蓮、二人が合意の上、挑み身を投じるのは、遊戯とは言え決闘なのだ。

己の誇りをかけ、相手と死力を尽くす対決なのだ。

その場にあつて、争いを否定してなにとする。相對する相手の理想をねじ伏せ、打ち倒し、前に進む。その覚悟なくして、どうして決闘ができれば。

ふらつく足を堪え、魂魄の二刀を手に、半人半霊の庭師は超人の前に立ちふさがる。

「ッ——……」

焦りをにじませた白蓮が、一際力を込めて、合掌の所作を取る。

即座に放たれるは、これまでとはケタ違いの、三千世界をねじ伏せる日輪の一撃。

その仏陀の打擲こそ——妖夢が待ち望んだ絶好の機会。鮮やかに翻るのは、四尺七寸の楼観の刃。

空を駆ける燕を捉え両断し、妖の軀をひっくり返す白

刃一閃——否、二閃。

交わる銀の閃きに、白蓮の左腕、肘から下が切断されて宙を舞う。

——人智劍「天女返し」

「聖!!」

門徒たちの悲鳴が上がる。ただちに聖尼公の身を膨大なチャクラが巡り、強化された再生魔力が傷の修復と再生を始めるが——一振り十殺の刃は、血肉や骨だけではなく白蓮の霊髄にまで損傷を与えていた。

聖尼公の絶大な法力をしてなお、その再生・治癒は瞬時とはいかない。

「おおおおおおおお!!」

妖夢が吼えた。この瞬間のため密かに溜め込んだ力を吐き出し、全速力で地を駆ける。玉砂利が爆発するかのよう跳ね、銀光が境内を駆け巡っては綾紋を結び揺れ踊る。

「く……」

片手では祈りの所作には届かない。白蓮は顔をしかめ、拳を固めて、視線鋭く庭師を迎え撃った。

鬼神のごとき一撃を、妖夢は避けなかった。衝撃に逆らわず、打たれるがままに身を反転。宙空で身体をよじって威力を逃がし、その勢いを殺さず加速して白蓮の腕をからめ取り、引き落とすように投げ切った。

魂魄の剣は、剣のみにあらず。折伏無間と、少女の柔が冴えわたる。

白蓮の長身が鮮やかに宙を舞い、地面へと叩きつけられた。

地響きの中、宙を跳ね跳ぶ半霊が奇し魂の波紋を引いて、聖尼公の顔面に打ち込まれる。

「つく、……ッ」

「まだっ!」

妖夢が油断なく剣を振るって追撃の鎧弾幕を繰り出す中、白蓮はふらつきながらも素早く呪文をとえ、同時に砲座を備えた蓮台を呼び起こす。

判断は遅れたが、それでお砲撃戦は圧倒的に白蓮に分があった。放たれる赤光が奇し魂を消し飛ばし、鏃弾幕を蒸発させる。

光線はその密度を増し、なおも庭師を取り囲むように降り注いだ。

(——駄目だ、距離を離されたら相手にならない！)

妖夢の判断もまた素早かった。灯籠を足場に鋭く飛び、宙空を駆けて聖へと迫る。追尾する光線を抜き放った白楼剣で斬り飛ばし、火線を巻き込むように蓮台に肉薄。いまだ片手の白蓮の懷へと斬り込んだのだ。

丹田に気合を込め、練り上げた氣勢を放って、降り注ぐ光線の雨を吹き飛ばす。

白蓮は、驚きながらも法力を込めた右の掌で、妖夢の太刀筋を防ぎ受け止めた。

(——ここだ！)

一度、低く沈み込ませた楼観剣の切っ先を、刃筋を返して跳ねあげる。逆袈裟の斬り上げを防がんとした白蓮の腕ごと、彼女の身体を宙へと跳ね上げた。

同時。身を撓め、庭師は渾身の一步を踏み込む。

生と死の狭間、その先へ。だん、という猛烈な足音を最後に、妖夢の剣は音を置き去りにした。

まさに閃光。神速の踏み込みと、極限の集中が生み出す、刹那の間の十六連撃。

——人鬼「未来永劫斬」

人鬼一体となって、時間すら断ち切る、魂魄妖夢最高の剣。

金剛不壊の防御を砕かんと、四尺七寸の大太刀が雷光の如き連撃を打ち込んでゆく。

「聖！」

境内に、信徒たちの悲鳴が響き渡る。



その場の誰もが尼公の敗北を思い描き、身を乗り出し



て目を見開く中。

「——なんだ」

激戦を見下ろす空の上。密かに洩らされた欲霊の囁きを聴き取って、聖徳道士はくすりと微笑んだ。

「そんな笑い方もできるのね」



緩やかに。穏やかに。世界に淡き光が満ちる。

魂魄の剣の奥義。十六蓮の致命の刃が織りなす、未来永劫斬をまともに浴びて、なお。

聖尼公の闘志は、依然健在であった。

「……ああ」

陶酔とともに、白蓮の唇を震わせるのは、長らく封じ続けてきた感慨か。

溢れ出した呪力と法力の光の紋が、聖人の体を緩やかに取り巻いて循環する。背負う光背は蓮の花へと姿を変え、白蓮の三昧耶形を形作った。  
さんまいぎよう

全身に紫雲を纏い、曼荼羅を踏みしめ、法力の雷を掲げながら。霊長類を超えた阿闍梨が目を開く。その手を取り巻く強化魔法の文様は、救済を志しながら魔道に身を堕とした彼女を絡める咎人の鎖か。

——超人「聖白蓮」

それは、八苦を滅した尼公のもつ大魔法。鍛えに鍛え、身体強化の極致へと至った大魔法使いの超反応は、妖夢の符の宣言の後で発動し、必殺の十六連撃をなお回避せしめたのだ。

【*ei dharmā*】

大気が震え、空が揺れる。一音節の真言をもって示されるのは不動明王。ビージャークンシャラ種子真言を唱え、白蓮は全身に力を漲らせた。踏み締めた足が地に沈む。

次の瞬間、白蓮は曼荼羅を足場に宙を跳んでいた。その神速は韋駄天の脚。肩からの当て身の衝撃で一瞬、息を途切れさせた妖夢の視界に、鮮やかな金と紫が広がる。

体を崩した妖夢の頭上から、素早く身を翻した白蓮の蹴足が叩き込まれた。

仏に現れる仏性三十二相の第二。仏足跡を刻まれた仏の功德に身代わりになった半霊が大きくはじけ飛んだ。膨大な功德を流し込まれ、強制成仏しかけた半身を執念で繋ぎ止め、妖夢は歯を食いしばって抵抗する。

【ち >bnai>】

続く種子字は薬師如来。衆生の疾病を治癒して寿命を延べ、災禍を消去せんとする大願である。瑠璃の光が白蓮の欠けた肘から下を包み込み、見る間にその傷を癒していった。取り戻した両腕をもって、白蓮はさらなる法印を結ぶ。

【ま >E:V】

次なる種子字は帝釈天。四天王を従えて須弥山の頂に住まう天部の護法善神である。

緩やかに合わされた尼公の掌が、みしりと異様な音をたてた。合掌の中に生成されるのは光を纏う金剛杵。煩惱を滅ぼす菩提心を象徴する法具である。

おお、見よ。いまこそここにその姿を目にし、焼き付けるがいい。

八苦を滅した尼公のまとう仏性は、虚空より仏の打擲を形として顕現させることが可能なのだ！

「いざ——南無三!!」

両の手に掴み出した帝釈天インドドラの天の法具を、白蓮は腕をしならせ投擲する。

その激しさ鋭さ、まさに雷霆の如し。

衆生を遍く救い上げる仏の掌。ゆえにその手にある独鈷杵もまた途方もなく巨大であった。

飛来する法具を受け流さんと楼観剣を振るう妖夢だが、そこに籠められたのは仏陀千斤の重み。半人半霊の身に断ち割ることは叶わず、弾くなど以ての外である。

辛うじて軌道を逸らすことこそできたが、雷光纏う金剛の打擲は妖夢の身体を激しく軋ませた。

「っ——」

【ち >bniiH>】

ひとつの手で足りなければ、百の慈悲を。百の慈悲で

足りぬならば、千の功德を。

それが仏の教えの第一歩。<sup>フツダインストクシヤンワ</sup>

一心なる祈りを糧とし、数多の衆生を救う千手千眼。種子字が示すは千手観音。白蓮の手より、放たれるは千条の光。嵐のごとき法具の雨が、妖夢へと降り注ぐ。

「おおおおあああああああああ!!」

少女は吠えた。己を律し叫ぶは魂の咆哮。

嵐とばかりに楼観剣を振るい、そのことごとくを打ち払い、断ち割る妖夢だが——億千万と降り注ぐ仏の慈悲は果てしなく、どこまでもただ広大無比。いかに抗おうとも、無限の仏心を前には無意味であった。

受け損ねた独鈷杵が半人半霊を地へと縫いとめ、流星の如く降り注いで、その煩惱を打ち砕かんとする。

「……ああ」

法悦の中、白蓮は手にした金剛杵を深く握り締め、肩上へと大きく担ぎ上げた。光の帯が連なり、法具を中心に輝きを凝縮させてゆく。

「法の世界に、光が満ちる——」

——おお、爛華、<sup>ランガ</sup> 劫爛華。<sup>ゴウランガ</sup>

三千大千世界を救う慈悲は、絶大なる聖の法力を集束させ、その手に束ねて刃とした。

その輝きこそは劍鎧護法の導き。西方浄土にて天を守護せし星辰劍<sup>スターソード</sup>の護法。

光の刃を掲げ、白蓮は妖夢に斬りかかる。

力場をまとった法光は、楼観剣の刃先とぶつかり合い、火花を立てる。

深い横薙ぎを柄で打ち据え、波濤のごとき光の刃をかくぐり、罅迫り合いからの重合。鎬を削り、踏み込む足場を崩し、打ち合う刃が轟音を鳴らす。

白蓮には剣術の心得などない。

けれど、劍鎧護法の加護をその身に宿し、法力で生成した星剣を手に、白蓮は妖夢と互角以上に打ち合っている。法力の刃が防御の上から庭師を打ち崩し、轟音とともに小さな体が地面を跳ねる。

もはや白蓮は躊躇わない。拳を固め、曼荼羅を足場に宙空を駆ける。片印を結ぶ掌が、妖夢の胸を深々と穿つ。

弾けるのは功德の燐光、護摩壇の煙。

炸裂は一度で終わらない。超高速で切り返した裏拳が、ほぼ同時に庭師の身体を跳ねあげた。

遍く慈悲の残光だけを視界に残し、往復し、旋回し、蹂躪し、法印を纏う掌底が、仏足が、半人半霊を千々に引き裂いていく。

「——まだ、ッ」

しかし。この絶大なる超人の法力を前に、妖夢もまた成す術なく翻弄されるばかりではなかった。

蹂躪されるままにみえた庭師の姿が、ゆらりと霞む。

白玉楼の庭師、その小さな体が秘めた力の最も恐るべきは、剣の冴えでも、鍛え抜かれた脚でも、半人半霊の絆でもない。

ただただ愚直に日々をこなし、繰り返した末に手に入れた力。何度打たれ、斬られても、なお立ち上がる。

鬼や、鶴と対峙するものともしない、その身からは想像もつかないほどの、耐久力だ。

閃光となって奔る白蓮の、鼻先へ。楼観剣を手に走る

庭師の姿が並ぶ。

——六道剣「一念無量劫」

まさに執念。鬼気迫る集中力が、人を超越した速度、臂力、極致の先へと、半人半霊の少女を誘う。

交叉する刃と拳、放たれる楔弾と光線。響く轟音、閃く輝き。

まばゆい光を散らして飛び交う弾幕を、いつしか皆は声も忘れて見上げていた。

## ▼ 六

「……ねえ」

こくり。誰も立ち入ることのできなくなった激戦を見守る最前席で、固い唾を飲み下し、水蜜がつぶやく。

「聖、なんだか楽しそう……」

答える者はいなかったが、その場の誰もが同じことを感じていた。

白蓮はいつも笑顔とともにあった。穏やかに、心から。皆の幸せと融和を求める優しき微笑み。

けれど。

けれど、それは。

「白蓮はさ」

激戦を見上げる屋根の上。化け狸の大きな尻尾に回した腕にそっと力を込め、ぬえはぼつりと独白する。

「白蓮は、私が悪さをした時も、見捨てないで赦してく

れるけど。……それはきっと、私じゃなかったって同じなんだ。ムラサだって、一輪だって。この皆だって、ほかのどんな奴だって。同じように助けてくれるし、見捨てないでいてくれる。……でもさ」

遍く注がれる慈愛。他者の善性を疑うことなく、誰にも平等に、公正無私に接する姿。それは、聖白蓮の何よりの美德であろう。

けれど。それが本当に、誰にも彼にも、遍く、等しく平等であるならば。そこに聖白蓮という人は、必要なのだろうか？

あらゆるものに平等に優しく、あらゆるものを平等に慈しむ。

それは対話ではなく、そこに個性は無い。救世の存在とはつまり公正無私、そこに聖白蓮と言う個は存在しないのと同義。

まるで、全自動の人類救済機構だ。

「そんなのは、嫌だよ。私はさ、白蓮はそんな奴にはなあってはしくない。私はこんなだから。……迷惑かけてば

っかりかもしれないけど。

でも、誰にも同じことしかしてくれないなら、そんなのは寂しいよ。私は、顔も知らない仏なんかのためじゃなく、白蓮の役に立ちたかったんだ」

長き歳月を過ごし、苦楽を共にした家族同然の相手と、凶器を手にした家族を人質にとり金を出せと要求する狼藉者を、同じように愛し尊く大切なものと並べる。それは、仏門にある身として何よりも尊いことであろう。けれど。

「そんなの、私は、嫌だ」

ひねくれ者の鶴は、はつきりとそう口にする。

「ほ、お前さんも言うようになったのう」

「うるさい、マミぞー」

ぶいと顔をそらすぬえの先。大きな尻尾を揺らして屋根の上に立ち上がり、化け狸はかかかと高らかに笑う。

「さて。……そろそろ良からう、皆」

「え？」

「せっかくの大一番、大詰めじゃ。このまま黙って見守

って居るだけでよいのかね？」

茶目っ気を含ませてウインク一つ。顔を見合す皆の中、いち早く飛び出したのは響子だった。ずっと我慢していたとばかり、尻尾を振りたてながら、胸一杯に息を吸い込む。

「聖さま、頑張れーっ!!」

響き渡る大音声。山彦の大声は境内一杯に広がって、びりびりと伽藍を震わせた。

それをきっかけに、沈黙を破って皆が応援の声を上げ始める。

興味無いふりをしながらも、見物の化け狸たちに交じってこっ所りと応援に混じるぬえの姿をちらと見ながら、マミゾウは愉快そうに煙管をカンと打ち鳴らし、声援の中に加わった。



聖白蓮。魔界にて魔法使いとなった、かつての聖尼公。

彼女が魔道に身を染めたのは、死を厭い、老いから逃れんとする私欲のためであったという。

しかし、そこで彼女が執着したのは、はたして人に非ざる長き生を求める魔道の力だけだったのか。魔界神の叡智の一端すら解きはぐしたその研鑽は、彼女にとってなんら意味を持たぬものだったのかというのか。

否。

断じて否だと、妖夢は言い切る。

愛別離苦、生老病苦。誰よりも死を恐れ、離別を恐れたからこそ、白蓮は救済の道を選んだ。同じように疎まれ、虐げられた妖怪たちを、自らに重ねて考えたのだ。

それ故に、彼女は嫌ったのだらう。人を傷つけ、害する力を。

けれどここには、この東の楽園には、誰も傷つけることなく、誰も害することなく、存分に力を振るう方法がある。己の限界を解き放ち、心ゆくまで技を、力を披露する場がある。

幻想郷の、命名決闘法として。

だから、それは。

(きつと、お祖父ちゃんにはできなかったことだ！)

確信とともに、妖夢は忘我の中、無我夢中で魂魄の双剣を振るう。

白玉楼の庭を守る者として。

長き封印の果て、幻想郷に辿り着いた聖尼公を、最初に迎える者として相応しくあるために。

「ッ、おおおおおおおおおおおッ!!」

「南無三ッ!!」

一体、何合を打ち合い続けたらうか。残機などつくに尽き果て、符を納めたデッキも空っぽに近い。

激しい交錯から一転、両者は距離をとり、静かに対峙する。

頬に煤を付け、大きく肩を上下させながら、白蓮は穏やかに合掌した。何度も斬撃を浴びて僧衣は千切れ、あちこちから肌も覗いているが、その表情は晴れやかだ。

「妖夢さん」

深く頭を下げ、霊長類を超えた阿闍梨は半人半霊の庭

師に謝意を示す。

「ありがとうございます。——とても、大事なことを教えていただいたこと、感謝いたします」

「私は」

対する妖夢は、二刀を手に腫れた口中に顔をしかめ、砂埃で汚れた頬を拭って、答える。

「自分のやりたいようにやっただけです。斬れば、わかる——他に、やりかたを知りませんから」

そうですか、と白蓮は答え、静かに懐へと手を伸ばした。その手に握られるのは魔界の至宝『魔神経巻』。かの地に満ちる膨大な魔の知識を詰め込み、自在に引き出すことのできる禁書である。

白蓮は、魔界での修業を修めた証に、魔界神から直々にこれを貸与されていた。

「私も、それに誠意を尽くしたいと思います。全身全霊——」

白蓮が経巻を開く。巻物の中身は紙ではなく、輝く光で編まれた高密度の呪文流である。虹色の輝面が緩やか

に広がり、浮かび上がらせた呪文の束を高速で展開し始める。

「一切の手加減抜きで。お相手をさせてください」

虹色の輝面に経文を巡らせるたび、魔神経巻は所有者の魔力を倍加させる。祈伏車と同様の自動読経システムが、読破に十年を必要とする経典を、わずか半秒で読了可能としているのだ。

読み込みの了印が表示されるたび、白蓮の身を取り巻く仏性が荘嚴さを増してゆく。光背の蓮はなお美しく咲き乱れ、炊き込めた護摩が火花を散らし、その身からは紫雲が立ち上る。

膨れ上がる魔力に、法力に。大気が震え、大地が揺れる。もはやこれは異変に変わりのない。ほどなく巫女がすっ飛んでくるだろう。

人智を超えた仏法の極致。その身を一つの信仰と成す、大魔法使いの極致。

——超人「聖白蓮」



再びの符名宣言のなか、聖尼公は瞑目とともに、静かに合掌した。

【ア△△】

煩惱を打ち碎き、大悟と共に衆生を救う救世の掌。余すことなく妄念を晴らし、現世への執着を解き放つ仏心の掌。

大日如来の輝きが、青空の下に顕現した。



「どう見ます、布都」

「……あの庭師も存外にやりますが、やはり勝ち目はありません」

神子にそう訊ねられて。片目を閉じ、顎に手を当ててしばしの思案ののち、布都は答えた。

「かの剣閃、まさに雷光の如し。鬼神すら打ち碎いたというのも、あながち偽りではないかと。ですが、それで

もなおあの僧侶を討ち取るには遅い」

速度と。殺意と。

妖夢が白蓮を捉えるには二つの壁があると、布都は指摘した。

「太子様には言うまでもないことでしょうが、剣というものは構えて振らねば斬れぬものです。この三つは不可分であり、いずれを欠いても刃はものを斬れぬ道理。あの居合いという技は、鞘に納めた刀身をもって『構え』と『振り』を兼ねるものとし、三つの段階を一つ飛ばして神速を実現するものでしょう。本来は安全装置である鞘に納めた剣を、一挙動のみで抜刀し相手を制する技術と見ました。おそらくは、剣術においても最速の技。

だが、あの僧侶はそれすら躲けてみせた。破られた技以上の速度を捻りだす手段が、あの庭師に残されているか否か」

こう見えて、布都は蘇我と物部の大乱を引き起こし、複雑な権力闘争と盤面で起きたすべてを掌握して見せた稀代の兵略家である。

彼女の戰略眼は、このわずかな時間の中で、両者の武の本質を看過していた。

「そしてもう一つ。優れた武人は、見るよりも先に害意を捉えて危機を避けるもの。私の扱う風水の原理でもあり、太子様も仰ったとおりです。あの庭師にそれができるなら、あちらの僧侶にも同じことができぬはずがない」

白蓮は、己の死を厭って邪法に身を染め、不老の肉体を得たほどの業深さを持つ。何よりも己に迫る死の気配には敏感であろう。

「つまり、雷光では、雷光に追い付くことはできぬ道理。

自明のことですな」

「成程。見事です、布都」

「光栄の極み」

恭しく一札する布都に、神子は手の中の杓を弄び、すうと目を細めた。ヘッドホンの下、激しい決闘に誘われて銀河の如く集まる欲霊に意識を向け、その声を片時も聞き洩らさぬよう耳を澄ます。

「……さて、どうなりますか」

大日を掲げた白蓮を前に、楼観剣を鞘に納めて対峙する妖夢を、期待を込めて見下ろして。

聖徳道士は愉快そうに口元を緩めた。



法力を満たし、魔力を漲らせ。際限なく膨れ上がる白蓮の威圧感を前にして。絶望的なまでに突き付けられる、己の圧倒的な不利。

手足は痛み、疲弊に全身があえいでいる。しかし妖夢は己の心が高揚し、感覚がなお研ぎ澄まされ、遙かな高みへと昇っていくのを感じていた。

楼観剣は鞘へと納め、腰に。

構えは極界剣。二百由旬を駆け抜ける、魂魄流最速の一閃である。だが、

（——これじゃ、駄目だ）

魔神経巻を最大限に用いて、増幅された状態での超人「聖白蓮」。シンプルゆえに単純な速度と破壊力の極致。

ゆえに、それに抗する事は途方もなく難しかった。

最初に思いつくのは、白蓮よりも速く斬り込むこと。

だが、今の彼女を上回ることが果たしてできるのか。己の剣と修練に迷いはないが、最速の攻撃手段も、不意打ちでの一撃も。白蓮はそれを見てから避けることができる。

迦楼羅天の飛翔と、韋駄天の速度。明王の剛力に大日如来の威光。それら全てが彼女の力だ。

では。先に斬り込むことができないなら、一度、攻撃を受けてからの反撃に望みを託すか？

(いや、駄目だ)

威力を殺すにも限度がある。万全の状態ではない菩薩掌ですら、妖夢には耐えるのがやっとだった。あの一撃を食らった後で、反撃するだけの余力が残るか、果てしなく怪しい。

受け流す——のもの、おそらくは不可能だ。仏性を込めた金剛杵は四海を納めた器よりもなお重い。防御の上から叩き潰され、楼観剣ごとべしやんこになってしまふ。

白玉楼の庭を任され、数十年。ひたすらに打ち込み、学び続けてきた魂魄の剣。そのどれをもつてしても、白蓮には通じない。

ならば。

(——考えろ。どうすれば、あれに勝てるか)

圧倒的な振りを前にして、妖夢はなお諦めない。

半人と、半霊と。二人で一つの心と体で、ずっと、抗い続けてきた。絶望的な差をひっくり返して、ここまで来た。あと一步。もうあと一步で、彼女に手が届く。

追いかけた続けた背中の、その先へ。

ここまで来て、悔いの残る終わり方なんて、死んでも御免だ。まだ、何か試していないことがあるはずだ。そう信じ、妖夢は集中を研ぎ澄ませてゆく。

簡単な話だ。己の知る、あらゆる剣が、師より教わった魂魄の剣の全てが、今の白蓮には通じない。

(それなら、できるのはひとつだけだ)

ちゃきり。楼観剣の柄に手をかけ、妖夢は静かに足を踏み出す。肩幅より心持ち広く、体を前に沈み込ませ、

おもむろに腰を捻って力を撓める。

「――」

「――」

命を賭した決闘の場には、あまりにも似つかわしくない青い空の下。誰もが息を飲み見守る境内。

一転静寂の対峙となった局面の中へ、ひらひらと舞う一頭の蝶が現れた。

白い蝶は白砂利の庭をゆるやかに横切って、手水場へと飛んでゆく。

小さな羽根が水面に触れ、波紋を描いた刹那。

妖夢は風よりも疾く地を蹴った。

師と、主と、友と。

ここまで多くの人妖に出会い、たくさんのお助言に、その背中を押されて。幾度となく繰り返し、強敵との対峙の先に、妖夢はこうして今、ここに立っている。

ならば、この先に踏み出すのは、己の足だ。

「――ツツ!!」

裂帛の気合すら、外に放つことなく腹の奥で力に変え

て。疾駆とともに、腰に構えた刃を抜き放つ。

――否。

奔るのは刃ではなく、柄。

妖夢は楼観剣を抜き打つと同時に、その柄から手を放し、左手で握り込んだ鞘を鋭く前に突き出した。

音よりも、光よりも速く。

踏み出した足が、理合を超える。

師より授かった魂魄の剣。その先へ。

――悟入剣「天地夢想」

この極限状態の中、妖夢が至った答え。

妖夢が斬ったのは、斬るという行為に必要な要素そのものであった。

構えから斬撃に至る要素、三挙動のうち二挙動を切り捨て、構えそれ自体が即攻撃となる、神速のさらに一歩先。

斬るとは、腕ではなく、技でもない。そこに己は不要

であり、ただ、意志を持ってそうあればいい。

ゆえに、この太刀に刃は不要。

刃そのものを斬る手段と成す、いわば峰打ちの究極形。神速の抜刀で抜き打った太刀の柄頭は、雷光よりもお速く、そのまま標的を打ち抜く。

抜かぬ刃は殺気を持たず、ゆえに白蓮の警戒をかいぐり、予想を超えた速さとなって聖尼公の鳩尾に突き刺さる。

轟音とともに衝撃が、白蓮の体を揺るがした。

「決まった……!？」

「いや」

観客たちがざわめく。

浅い。一撃を放ったその直後、手ごたえの鈍さを妖夢は実感していた。咄嗟の判断で繰り出した土壇場の一撃ゆえ、完璧なものには至らなかったのだ。

聖尼公を打ち倒すには、わずかに不十分。ぎりぎりのところで白蓮は踏みとどまり、意識を保っていた。慈母のごとき穏やかな表情は吹き飛び、額からは血をにじま

せ、歯を食いしばりまさに必死。明王のごとき憤怒の形相だ。これもまた執念。負けられぬ己の信仰の証か。

みしりと振り上げられた掌が、金色の光を放つ。

慈悲をもって煩惱を打ち碎き、悪のすべてを折伏する、救済の手。折り重なる魔神経巻、百万度の祈念をもって、それは無二なる釈迦の一撃となった。傲慢なる者に封印の五行山を投げおろす仏陀の掌が、一切の抵抗を許さずに振り下ろされる。

救世の威光は半人半霊の庭師を微塵と地面にたたき伏せた。地面に穿たれた大穴の中、がらん、と地面を跳ねる楼観剣。

「妖夢っ!」

庭師を呼ぶ声上がる。御仏の前には、いかなる足掻きも所詮は掌の上。無駄であったというのか。

否。

むろん、否である。

どろん。大きな煙とともに、倒れ伏す庭師の姿がぼやけて消える。力を失って地面に転がるのは、丸く白い半

霊だ。

「え」

一振り十殺の楼観劍、迷断の白楼劍、魂魄の劍はこの二刀を束ねて成る。そしてまた、白玉楼の庭師は、人と霊と、半分ずつの半人半霊だ、

先に斬り込んだのは己の半身。そしてまた、そこに続くのも己の半身。全身全霊の宣言通り、妖夢はまっすぐに刀を抜き放つ。

「っおおおおおおおおおおお！」

この身を一つの刃として。迷いを断つ白楼劍が、一字に解き放たれた。神速をも超える一挙動。今度こそ完全な形で放たれた悟入劍に、白蓮はもはや反応できない。

——直後。

聖尼公を打ち据える打擲の音が、快音となって走り抜けた。

余韻が残る静寂の中。

一時、水面の上に羽根を休めていた蝶が、緩やかに飛び立つ。

白楼劍の柄頭が、阿闍梨の喉を深々と抉り、その息吹を止めて意識を刈り取る。

ぐらあり。

金剛不壊、金城鉄壁を思われた聖人の身体が大きく傾ぎ、あっけなくも膝からすとんと崩れた。

ざり、と白い砂利の上に膝をついて。しかし妖夢は踏みとどまる。

「……………ッ！」

額から滲む血をぬぐい。

文字通りの満身創痍。自分の半身を打ちのめされた苦しみに、ぜいぜいと息を荒げながらもなお。

妖夢は、会心の笑みで、鞘に納めたままの白楼劍を高々と掲げて見せた。

## ▼ 六

「聖！… こんどは私と一手お願いします！」

「ちよっと！… 私のほうが先だってば！」

「はいはい、順番ですよ」

門徒たちに囲まれ、尼公は苦笑を見せながらも、順に皆の間を回ってゆく。命運寺の化主自らの指導とあって、妖怪寺の境内はこれまでにない賑わいを見せていた。

背中の入道ともども、すでに意気揚々とやる気満々の一輪。水蜜も既に鎧を背負って準備万端だ。やれやれと首をすくめてみせるナズーリンの隣では、響子までもうずうずと身体を震わせている。

星との稽古の汗をぬぐう妖夢の隣に腰を下ろし、マミゾウはふうむと腕組みを一つ。

「成程のう。ただ、言葉を交わすことばかりが分かり合ったための手段ではない、というわけか」

「……はい」

白玉楼の庭師は、二刀を手にはつきりと領いた。

戦いとは、相手のことをより良く知ろうとすることだ。得手はなにか、どのような技を振るい、どのような能力を持ち、何を考え、どんな受け攻めを好み、どんな手筋をもつのか。

好意というものが、相手の望むことを叶えるのである。戦闘とはその逆——相手の苦手とすることを繰り返すことである。両者は表裏一体にして同根。ゆえに戦いとは譲れない己のぶつけ合いであり、その極致は互いの理解である。

佐渡の二ッ岩は懷を漁り、数枚の符を取り出した。己の能力と業に名前を付け、形にして書き表した符、スペルカード。

自己表現と戦闘を、美しさという基準で彩り、譲れない己の意志を載せて放つ弾幕。それがこの東の果ての樂園の決闘である。

「つくづくよく出来た代物じゃなあ。お互いを傷つける

ことを目的としてではなく、どれだけ己のやり方に拘れるかが勝敗を分ける。時には生来の強弱すらもひっくり返す要素まである。なんとも儂らにお誂え向きの代物というわけじゃ」

マミゾウは手元の符をしげしげと眺めて、大きく頭上を振り仰ぐ。

「ぬえよ。おぬしはこれを、白蓮に分かつて欲しかったということかの」

「……別に。いつだったかの恩返しが、まだ済んでないと思ったからさ」

「おうおう、可愛いのお。一人前に照れおって」  
「うっさいなあマミゾウ！ 頭撫でんって！」

どっと笑いが起こる。触手めいた器用な動きで体を絡め捕ろうとしてくるマミゾウの尻尾から、ぬえが暴れもがいて抜け出そうとしていた時だ。

南で派手な爆発音。山門を派手に打ち破り、一隻の岩舟が境内になだれ込む。

「頼もう！ 異味魍魎の邪教どもよ！ 今日という今日

こそ覚悟するが良い！ いよいよ太子様自らが引導を渡しにきてくださったぞ!!」

「布都、そう敵意ばかりを前に出すものではありませんよ」

舟の上に連れ立つのは、ご存じ神霊廟の道士たちである。弓を構えた物部の風水使いに聖徳道士、不機嫌な目つきの怨霊に、さらに少し離れて邪仙にキョンシーの姿まである。

「なんの御用です、大勢で」

「そういえば春のご挨拶がまだだったと思ってね。君の布教が順調なのは結構だが、本来、臣民を治めるための手段である宗教が独自に力を持つのは、統治者として見過ごせない」

「——そのようなことはありません。他の宗派はともかく、仏の教えを徒に貶め、歪めるような輩の言動、看過しかねます」

「ははは、これは滑稽だ。私利私欲に仏の教えを利用しているのはあなたも同じだろう、聖白蓮。自覚のない善



意の占有は、悪政よりもなお性質たちが悪い」

「……統治者というのは千年を過ぎても何も変わりませぬね。まことに醜く、傲岸不遜である」

お互いの胸が触れ合うほどに顔を近づけ、睨みあう二人。激しく散る火花はまさに一触即発の様である。そうなれば、当然彼女達を慕う者たちも黙っている訳がない。

「おのれ、邪教の者風情が太子様を愚弄するか!! 屠自古、いくぞ!」

「……やってやんよ」

素焼きの皿を構える布都の隣で、雷鳴を纏いながら屠自古が拳を鳴らす。

「ご主人、油断は禁物だぞ」

「分かっています。ナズーリンも気を付けて」

槍を構え宝塔を掲げた星に、ナズーリンが油断なく口ツドを振るい追随する。山彦の砲声が応援を奏で、境内は俄かに騒然となった。

割れ砕ける皿の中を巧みに位置取りし、風水の恩恵で弾幕を避けながら、布都が空に叫ぶ。

「よろしいですな青娥どの、今回はかりは加勢していただきますぞ!!」

「ええー? 見物でいいと仰っていたじゃありませんの、物部様」

「そうなさるのは勝手ですが、そこで観客を決め込んでいられれば、ですな」

羽衣に乗ってふわふわと漂い、眼下を睥睨していた邪仙の頭上に影が落ちる。振り下ろされる大錨と入道の拳。跳ね飛ぶ大波の飛沫に巨大な拳を避けながら、青娥は不機嫌に眉を潜める。

「もう、スマートじゃありませんのねえ!! 来なさい芳香!!」

「おう、いくぞ青娥!!」

たちまち起こる大乱戦。惜しみなくスペルが乱れ飛び、派手に弾幕が天を焦がす。

「あ、あの……?」

どうしたものかと狼狽える妖夢に、入道使いと取っ組みあいながら、布都が目ざとく声をかけた。

「おお！　そこに見えるのはいつぞやの弟子候補者ではないか！　丁度いい、この悪鬼邪教の輩どもを焼き払うのだ！　加勢してくれ！」

「ちよっと！　妖夢はうちの入信者よ。勝手に勧誘しないでくれる？」

「あん？　馬鹿言うな。こっちが先だ」

割って入った一輪に、不機嫌に雷を飛ばしながら屠自古。そこへ水蜜が大波を浴びせかけ、毘沙門天代理主従が連携を仕掛ける。

「あーあ、仙人どもは柄悪いねえ。そんなんだから弟子も居付かないんですよ」

「のべつ幕無しに節操無いのはどうかな。才能あるものしか志せない道だからね」

「そつして弱者を振り分ける。それが為政者のやり方ですか。実に醜い」

「言いおったな！　そこに直れ！」

もはやなし崩し。見境なく投げ放たれる素焼きの皿が割れ、雷光があたりを焼き焦がした。

妖夢を完全においてきばりにしてぶつかり合う二大勢力の激突の中。

「いやはや、今日も見事な弾幕日和じゃなあ」

一人ちゃっかりと上空に避難したマミゾウは、懷から煙管を取り出して大きく煙を吐き出した。



## ◆閑話・三◆

「……………」

太めに縫り合せた芯から赤く立ち昇る炎に、慎重に鋏を差し入れる。

蜜蝋の赤い炎が刃の表裏を炙るのを確認してから、妖夢は刃先を火から引き出し、傍らの桜の幹へと向き直った。

半霊と共に樹の枝上へ浮かび上がり、あらかじめ見当を付けておいた枝へ鋏を向ける。

「ん……」

片目を閉じて背中を反らし、矯めつ眇めつ。左右から枝張りを確認してから、意を込めて剪定鋏の刃を閉じる。

強風で無惨に折れた枝が、根元からきちんと切り落とされて地面に転がる。むき出しになった切断部に病気が

入らぬよう、腰の墨壺から濃く擦った墨を塗ってゆく。ぱちん、ぱちん。

時折距離を取って枝の形を確認しながら、妖夢は慎重に折れた枝の剪定を続けた。

桜は手入れの難しい樹木だ。桜折る馬鹿梅折らぬ馬鹿とも言われるように、迂闊な扱いが原因で樹全体を腐らせることも少なくない。その扱いには細心の注意を要する必要がある。

最後に落とした枝をまとめて縛り、妖夢は大きく息を吐く。

「……………」

わずかに上気した頬に、薄くのこる泥の痕。作業着の袖をまくりあげて、白玉楼の庭師は額の汗をぬぐう。

昨夜の風で、桜もすっかり散ってしまった。間もなく春も過ぎ、やがて夏が来るのだろう。隣で半霊に抱えさせた籠の中に枝を放り込み、鋏と園芸道具を革帯に戻して、妖夢はぐっと背を伸ばした。

「んんっ……」

冥界の庭は果てなく広く、小さな庭師が毎日朝から晩まで駆け回っても尽きることはない。一つの区画を整えたと思った頃には以前に手入れを済ませていた場所がすっかり荒れてしまっていることも少なくなかった。

「……師匠は鼻歌交じりでこなしていた気がするんだけど」

うんざりと溜息をついて、妖夢は果てしなく続く伸び放題の垣根を見やった。

白玉楼の先代庭師を務めていた祖父——魂魄妖忌の仕事ぶりを思い出そうとして、妖夢は軽く頭痛を覚える。

幼い頃、師を手伝って植木の枝を落としたり、岩の苔を整えたりした経験がない訳ではないが、妖忌がこの広大な二百由旬の庭を、日頃いったいどうやって管理していたのか、改めて考えてみるとまったく解らないのだ。

ひとことで庭師と言っても、その仕事は多岐に渡る。植木の他にも地面の石畳、垣根の手入れ、砂利を敷いて岩を並べ、苔を置いて灯籠を整える。端から数え上げても切りがない。

さらに妖夢の場合、西行寺家の剣術指南役という立場もあり、その役目はなぜか白玉楼の家事やら掃除やらにも及んでいた。

しかし妖夢の記憶にある師の姿は、いつも厳しく稽古をつけるか、道場で座禅を組む後ろ姿ばかり。

それなのに、白玉楼の庭はいつも瑕疵なく整えられていたようにしか思えない。

「——最近、お祖父ちゃんに聞きたいことばかり増えていく気がするなあ」

ここにはいない師の姿を想い浮かべ、軽い苦笑と共に、半人半霊の庭師は止まっていた手を動かし始めた。延びた垣根の枝を落とし、混み過ぎた葉に鉢を入れてゆく。

「妖夢？ ようむー？」

そんな庭師を呼ぶのは、ふらふらとした足取りでの（幽霊だから仕方ないのだろう）の幽々子である。起きたばかりか、眠そうに眼を擦る彼女の前で、妖夢は慌てて鉢を下ろし、頭を下げる。

「おはようございます、幽々子様」

「ん、今日も早いねえ」

おはようというには随分遅い時間だったが、幽々子はそれでもなお眠そうに眼を擦ってふわあと大きく欠伸をした。まったくもって行儀の良くない姿だが、不思議と咎める気にはなれないのは、やはり仁徳ということなのだろうか。

「んー……」

どこか寝惚け眼で、幽々子はついと手を伸ばし、近くを漂っていた妖夢の半霊をむぎゆと掴む。

「ひゃんっ!？」

いきなりのくすぐったさに妖夢は跳ね上がった。半人半霊の名に恥じず、半霊と人の部分はどちらが本体と言う訳でもない。二人で一つ、どちらも等しく妖夢である。無防備なところを掴まれればくすぐったいのは当然で、

「あむっ」

「幽々子様！ た、食べないでくださいっ!!」

妖夢の叫びも半分は聞こえていないのか、いまだ夢うつつのまま、幽々子はふよふよとした半霊を抱き締める

ように顔をうずめ、ぱくりと口を寄せた。

「ひあっ!? やあ、う……」

己の半身を甘く噛まれるくすぐったさに、妖夢はたまたらず半霊を主の手から引つ張り上げ、顔を赤くして叫ぶ。

「ゆ、ゆゆこさまっ!!」

「だって、なんだかふわふわして美味しそうなんだもの。こんなに大きな半霊を何のために付けているの?」

「非常食のためじゃないです!」

なおも半霊に手を伸ばそうとする食いしん坊の亡霊の手から逃れ、盛んに尻尾を振る半霊を抱きしめて、妖夢はようやく自分を取り戻す。

「はあ……もう、何をするんですか、一体……」

「お腹が空いたのよー」

息を荒げながら眉を立てるが、主はいつもの通りどこ吹く風だ。扇を広げてひらひらと手を振って見せる幽々子に、妖夢は短く息を吐いた。

「ご飯にしましょうか。すぐに支度します」

「……そうね。ああ妖夢、今日のお昼はお蕎麦が良いわ

ね」

「はい」

朝食の話をしたつもりだったが、幽々子の心は既に昼の献立に飛んでいた。白玉楼の主の健啖ぶりは幻想郷でも有名である。

抜けるような空の下。どこから迷い込んだか、雲雀の鳴き声が遠く聞こえた。

「ねえ妖夢。今日のお昼は、外で食べましょうか」

「はい」

お互いの顔を見合せてそっと笑いあい、冥界の主従は、肩を並べて白玉の楼へと戻って行った。





華胥の櫻  
墨染の君

## ▼ 序

めいきゆう  
鳴鳩もその羽を払う四月の末。冥界にも遅い春が訪れる。

麓より続く長い階段の両隣を埋める桜の木は千を超えて万に迫り、罪なき白に彩られた花を咲かせていた。彼岸の園で転生を待つ多くの幽霊たちも、咲き散る桜の中にふわふわと漂いながら遅い花見を楽しんでいる。

しかし、そんな賑わいからも遠く離れた二百由旬の庭の片隅に、彩りの抜け落ちたかのような空隙があった。萌え出づる草木もそこにだけは近寄らず、春の訪れすらも寄せ付けまいと肌寒い風が満ちる。

その中心には、四季の巡りからも取り残された、一本の古木があった。

——西行妖。  
さいぎょうあやし

かつて、幻想郷から春の訪れを奪う異変の契機となった、樹齢千数百年の古桜だ。現世にあっては偉大な歌聖を死へと誘い、以来千年以上にも渡って、その幽玄の美しさにて多くの生者を惹き寄せ、死に至らしめてきた木霊である。

死を招くその性質ゆえ、厭われ嫌われ、顕界から彼岸の地へと追いやられて。西行妖は今年も変わらす朽木のように乾いた枝だけを空に広げていた。

そして今。そこには春雪異変のもう一つの要因となったものの姿がある。

空色と紫の着物に身を包み、憂いを含んだ表情で巨木を見上げるのは、冥界の管理人にしてこの白玉楼の主、西行寺幽々子。一見人とは変わらぬ明瞭な姿かたちをしていても、辺りを漂う霊の気質は隠せない。天冠を模した帽子からも分かる通り、彼女もまた亡霊。既に彼岸の者である。

幽々子は西行妖の傍に歩み寄ると、物言わず聳える妖

怪桜の幹に手を添え、そっと目を閉じ額を触れさせた。

静かな風が吹き、細い枝がひゅーと揺れた。春の庭に残る冬の残滓の中、季節外れの虎落笛<sup>もがりぶえ</sup>が響く。

「――」

少女の形の良い小さな唇が、かすかな吐息に震えると同時に。

ゆるゆると開かれた幽々子の手のひらから、青い輝きがこぼれ出した。ほどけた幽々子の白い指の先に、一頭の蝶が生まれ出で、はらりと翅を震わせる。

薄く透け光る青い燐粉を溢れさせながら、蝶は少女の指から飛び立った。

翅を広げるのは一頭だけではない。続けて二頭、三頭と、青い輝きが西行妖の周囲を取り巻いてゆく。

華胥の国、胡蝶の夢のごとき莊嚴で優美なる情景。しかし、そこにはあまりにも多く死が満ちていた。

幽々子にもまた、人を死へと誘う能力がある。魂を運ぶ蝶はその象徴であり、彼女が冥界に住み、成仏することなくその管理を任されている理由なのだ。

無数の死を、終焉を運び舞う蝶の群れ。

もしこの場に生者が迷いこめば、この世のものと思えぬ光景の美しさに目を奪われ、魅入られながら静かに事切れてゆくことだろう。

あるいは――こここそが。死者の園、冥界の本当の姿なのかもしれない。

己と同じ力を持つ桜の幹に、華胥の亡霊はそっと寄り添う。永劫の時を共に過ごした伴侶に身を委ねるように、幽々子は穏やかな笑顔で眼を閉じた。

冥界の庭、妖怪桜のたもと。

四季彩り鮮やかな白玉楼の庭の中、ここには命の芽吹く春の彩りはなく。

ただ、喪つことだけの悲しみに満ちた、永劫なる冬の墨染があった。

――かさり。

ふと。木々の隙間に幽かに揺れる気配を感じ、幽々子

はそっと目を開けた。桜色の髪を揺らし、物憂げな瞳を  
そちらへと向ける。

「――、」

しかし。亡霊の少女が呼ぶ名に答える声はなく。

群れ飛ぶ蝶翅の燐光の先に、密かな気配は掻き消えて  
いった。

## ▼ 一

洋燈には鬼火めいた青い炎がぼくと点り、燐の煤を燻らせる。窓のない屋内は昼中でもなお薄暗く、複雑に折れ曲がった長く紅い回廊は、揺らめく影の奥に侵入者を誘っていた。

霧の畔に建つ紅魔の館——吸血鬼の胎の底。

冥界白玉楼の庭師、魂魄妖夢は四尺七寸の楼観剣を手に、この騙し絵のような空間のゆがみを生む張本人と対峙していた。

アルカイックスマイルを浮かべ、妖夢の行く手に立ち塞がるは、吸血鬼の忠実な従者、十六夜咲夜。

銀糸のような美しい髪、すらりと伸びた長い手足を仕立てのよい給仕服に包んで。紅い館の侍従長の整った顔立ち、異国の西洋妖怪に仕えるに相応しい怜悧な美しさをたたえていた。

一説には彼女もまたこの国の出身ではなく、異国から館の主に連れられてこの幻想郷へとやってきたのだともいう。

「——!!」

音もなく放たれた銀刃の群れが、洋燈の明りに煌めいた。メイドのしなやかな指先が投じるナイフは、銃弾よりも速く得物を縫い止める致命の刃だ。腿へ、脾腹へ、心臓へと吸い込まれるように飛来するナイフを、妖夢は足捌きで躲し、楼観剣で打ち払う。

弾かれたナイフが回転しながら廊下を跳ねる。甲高い鋼の音が廊下を反響する中、妖夢が反撃と振るった四尺七寸の刃が空を裂き、楔弾が咲夜を囲む。

が、瀟洒なメイド長は悠然とそれに対峙した。奇術のようにどこからともなくナイフを取り出し、迎撃に投げ放つ。投じられた刃は見る間に百を超え、楔弾幕の戦列を物量でかき消した。

咲夜が投じるナイフは、物理的な質量を伴う鋼の刃だ。弾幕としての質はとても強い。遠距離で撃ち合う限りに

おいて、弾幕は咲夜に一日の長があった。

妖夢とて騎射刃拳一通りの心得はあるが、無尽蔵とも思えるナイフの群れには抗しきれない。銀の戦列に進行を阻まれ、防戦の中で後退を余儀なくされる。

だが、メイドを前に退がりながらの防御は、そのまま廊下の奥へ奥へと追いつまれて示していることを示していた。この紅き闇が潜む万魔殿、底知れぬ深奥の更なる深みへ。

「……………」

追撃のナイフを避け、着地した刹那——じわりと足元に這い寄る冷たくおぞましい感触に、妖夢は背筋を震わせた。

廊下に敷き詰められた紅い絨毯は、まるで館を浸す血潮の沼。沈み込む足が、ずぶりと澱みの奥に踏み入れたような錯覚さえ覚えさせた。そこを狙い過ぎず、ナイフの群れが放たれる。

「っあああああ!!」

妖夢の判断は迅速だった。委縮しかけた心を打ち払い、ひゅーと吸い込んだ息吹を、丹田に込めた気合とともに

撃ち放つ。霊撃が妖夢の周囲を奔り、展開していたナイフの群列を弾き飛ばした。

けたたましい金属音を響かせ跳ね回る鋼の中をすり抜けて、庭師の身体が地を奔る。廊下をくまなく削り抉る銀刃の隙間を掻い潜り、壁の洋燈を足場に反転、大太刀を手にメイドへと肉薄。

素早く折り畳まれた腕を返し、四尺七寸の楼観剣が楔のようない撃を叩き込む。

——断命剣「冥想斬」

高コストをつぎ込んだ必殺の一撃。一振十殺の斬魔の刃が、その本身を取り戻し、吠えた。

身を振りながらの庭師の一太刀は、紅い館の廊下を斜めに切り裂き、そのまま勢いを衰えさせることなく竜巻めいて旋回。

白刃の煌めきとともに、メイドの姿は永い廊下もろとも両断され、ばきりと軋みを上げる。

が。

(ダメか……!!)

切っ先を感じるのには、肉や骨ではなく鋼を砕く手応え。両断されたナイフの破片が宙に舞う。咲夜は妖夢の剣尖に合わせ、何本ものナイフを押し当ててその威力を殺したのだ。

楼観剣の切っ先はわずかにメイドの着衣を切り裂いたのみ。奥に覗く珠の肌には傷一つ見られない。

恐るべきは、その卓越した刃物使いの技巧。

吸血鬼のメイドは不死でも無敵でもない。生きて死ぬ、ごく普通の人間である。だが彼女は、そのナイフ捌きひとつで、人妖轟めく幻想郷においても屈指の弾幕巧者の地位にあった。

乱れた自身の胸元を見下ろし、咲夜は吐息。

「お客様の前で、見苦しい姿はお見せできませんわね」

次の瞬間には、彼女の着衣は何事もなかったかのようによに元に戻っていた。それが意味することを理解し、表情を強張らせる妖夢の前で。

咲夜はその手に古びた懐中時計を握り——わずかに口の端を持ち上げてみせた。

(まずい……ッ)

背筋がざわつき、飛び切りの警鐘を鳴らす。反射的に身を反らす妖夢の眼前に、何の前触れもなく刃の群れが出現した。捻った首と頬、鼻先をナイフが掠め、衝撃が庭師の皮膚を貫く。

辛うじて身を投げ出し、廊下に転がるように刃を避けた庭師の伏せたその背中へ。狙いすましたかのように両刃の短剣が突き込まれる。

「あら、残念」

さしたる落胆も見せぬ咲夜の声。妖器たる銀剣に貫かれ、絨毯の上に縫いとめられたのは、少女の身体ではなく。妖夢の背中を守るように傍らに浮く半透明の霊体であった。

半分は幽霊で半分は人間。それが妖夢の半人半霊という種族の特徴である。無防備になる背中を守るため、半人半霊は互いにその背中を守るようにして警戒を続けて

いた。突然の奇襲に対し、半霊は身を挺して人の部分を致命の刃から身を挺して庇ったのである。

「……………」

半霊がメイドの銀剣に貫かれたままじたばたともがくを見て、妖夢は焦りをにじませた。

霊体である妖夢の半身は、通常の冷たい鋼や剣によって傷つくことはない。しかし咲夜の刃は半霊を床に縫い止めたままその動きを封じていた。あの古びた銀の剣は、幽霊を切り裂き貫くに十分な謂れを持っているに違いなかった。

人と霊を半分ずつ。半人半霊という生まれは、どちらかが深く傷ついても、実質はその半分の傷で済むという利点を持つと同時に、片方が傷を負えば、一見無事に見える側までも動きが鈍る弱点も備えていた。

半霊の自由を奪われ、全身を包む痛みと鈍い痺れに、妖夢は唇を噛み締めて振り仰ぐ。

咲夜は廊下の中央に静止していた。彼女がその手に握る懐中時計が、かちりと秒針の音を響かせる。同時、再

び妖夢の眼前にナイフの群れが出現した。

「つく……ッ」

楼観剣を振るって弾き飛ばすが、庭師の鍛えられた反射神経をもってしても、そのすべてを防ぐには足りない。切っ先が妖夢の脚をかすめ、腕を裂き、腹に食い込む。

これぞ、悪魔のメイド十六夜咲夜の真価。

紅魔館のメイドは、時間を操る能力を持つ。時間と空間は同一のものであり、霧の湖の畔の屋敷が外観とは大きく異なった広さを持つのも彼女の能力の一端である。そして、咲夜の能力が最も端的にその威力を顕わにするのが、こうした弾幕勝負の時だ。

停止した時間の中、時の外側から投射されるナイフは、どれだけ気配を凝らし、予兆を探ろうとも察知できない。何の前触れもなくそこに出現し、無慈悲に標的を仕留めるのだ。

だが、見よ。

「……………」

対峙の中、疑念に表情を揺らすのは妖夢ではなく咲夜



の側だ。

時間を操り、心理と意識の裏側を突いて放たれるナイフの群れは、誰にも避けることはできない。

——そう、運命すら意のままと豪語する、彼女の主の吸血鬼でさえも。

その、はずであった。

だが見よ。廊下を駆け回り、走り、必死に剣を振るう庭師は、察知できぬはずのナイフを躲し、弾き、打ち落としていた。手も足も傷だらけ、駆け回って服は乱れ、髪も千切れてひどい有様だ。しかしそうして手傷こそ増え続けているものの、致命打となる一撃だけは、ことごとく避け続けているのである。

仮に弾幕という形をとっていようと、そこに込められた殺意や威力は本物である。命名決闘であろうとも、咲夜は決して手加減しない。

己の弾幕を防がれることの焦りからか。苛立ちこそ表に見せはしなかったか、咲夜はエプロンドレスの上、懐中時計を握り締める。

刹那の間をおかず、妖夢の眼前に、数百の銀刃が迫っていた。時間の外側から投擲されたナイフの群れを、妖夢は楼観剣を振るって弾き飛ばす。

雨霰と降り注ぐ銀の刃と、旋回する大太刀がぶつかりあい、激しい剣劇に火花が散る。

直後。疾駆する妖夢のこめかみに、狙いましたかのようなナイフの一投。奇符「ミスディレクション」。ナイフの包囲網と咲夜自身の姿を使って注意を逸らし、意識の外側から本命の一撃を見舞う高度な技術弾幕だ。

しかし妖夢はこれも見切った。額を擦る刃先を感じながら、体をひねって直撃をかわす。

肌に食い込む冷たい切っ先、眉の上を擦る金属の刃先を感じながら、妖夢はなおメイドから視線を切らない。

「……………」

執拗なまでにその姿を追うこちらの意図に気づいたか。咲夜が明らかに表情を変えた。彼女には珍しい焦燥と憤り。端正な眉を歪ませるその感情に、妖夢は小さな達成感を覚える。

(——よし、っ)

視界に走るわずかなブレ。常ならば見逃してしまつたろう。些細な違和感を、極限の緊張感の中で妖夢は敏感に察知する。

吸血鬼の従者は時間を停め、その中で自在に動くことができる。より正確に言うならば、咲夜は彼女だけが所有する『もう一つの時間』へと出入りできるのだ。

そして、十六夜咲夜の能力には制限が少なくとも二つ。時間を停めておく行為自体に制限時間があること。時間停止中は、直接他者に影響を与えられないこと。

それが命名決闘という場における彼女なりの自主規制なのか、実際の能力の限界なのかまでは分からない。いずれにせよ咲夜の弾幕は最大限譲歩して『刺さる直前』のナイフを『まともには避けきれないほど多く』配置するところまでだ。

であれば、その攻略法は皆無ではない。

(——今!!)

脳天をがち割らん勢いで投射された音速を超えるナイ

フに、楼観剣の柄頭をぶち当てて防御。見開かれた庭師の双眸は、死の流星をも見切る程に研ぎ澄まされていた。衝突の威力で煙を上げるナイフを爪先で蹴り上げ、掴んで逆に投げ返す。密になったナイフの群れをそれで崩し、妖夢は跳躍。銀弾の隙間に身体をねじ込む。

「く……」

鞘走る剣閃から、メイドは時間を跳んで回避した。

「そこだー!」

わずかの躊躇もなく、妖夢はそれを追尾する。殺人メイドが時間を停めた時に生じる能力の発動気配を、庭師の射眼は見逃さない。

弾幕を構築し、ナイフを投げ。停まった時間の外側で、咲夜は動き続けている。ならば時間停止の前後で、彼女の姿はまったく同じものということはありえない。いかに美しく取り繕おうとも、袖の乱れ、スカートの揺れ、翻る髪的位置。努めて感情を隠す伶俐な表情、それらに確実な差異が生まれる。

そのわずかな差異を見逃さずにいれば、少なくとも時

間を停められたことは察知できる。

それができれば、刺さる直前のナイフの中から致命となる被弾のみに警戒を絞って、最低限の防御を行うことは可能だった。

完全に瀟洒な従者の火力はあくまでナイフの投擲による弾幕。培った技術と磨いた能力で、銃弾を超える速度と威力を備えてはいるものの、白黒魔法使いや地底の鬼のように、無差別に広範囲を殲滅するような破壊力を備えてはいない。

ゆえに、妖夢の剣はそれを防いだ。極限の集中の中で異状を拾い上げ、的確な対処を繰り返す。

幾重にも重ねた刃の群れで標的の動きを制限し、死角と心理の裏側にとどめの一刀を潜り込ませる。これまで多くの侵入者を撃退してきたであろう吸血鬼のメイドの戦術は、静かに揺らぎ始めていた。

「……甘い！」

火花を散らし、打ち合わされる刃に、メイドの表情が苦悶に歪む。

後頭部を狙うマチエットを、振り返りもせずに楼観剣の鞘で打ち払い、妖夢はさらに加速。

繰り出されるのは神速の居合い。音を置き去りにした庭師の剣が咲夜に肉薄する。鮮やかな桜花散華を思わせる銀線が宙を刻む刹那、メイドの姿は虚空へと消えた。

咲夜の手にした懐中時計の文字盤で、秒針が忙しく時間を刻む。

消失と同時に出現し、妖夢の右脇下に回り込んだ咲夜が伸び上がるようにヒールを翻し、足払いとともにナイフを振るう。額を打ち抜くその斬撃はのけぞった庭師の前髪をかすめて過ぎた。

回避の動作をそのままに、妖夢は強烈な踏み込みを廊下に刻み、驚異的な脚力で切り返した。速度を殺さぬままに大太刀の刃を返し、逆手に握って突き返す。再び秒針が時を刻み、メイドの姿は廊下の奥、数メートル離れた場所へ出現した。

進む庭師、下がるメイド。いつしか戦局は逆転し、妖夢が場を支配してゆく。

同時に放たれていた片刃ダガーを、妖夢は楼観劍の峰で撃ち落とした。はじき返された銀の刃は、庭師へと撃ち込まれた軌道を正反対にそっくりそのままなぞって咲夜へと反射される。

三度、秒針の音。時間の狭間を潜り抜け、飛び退いた咲夜のすぐ眼前に、庭師の姿はすでに迫っていた。人符「現世斬」。踏み込みとともに振りかぶった太太刀が廊下ごとメイドの身体を捉える。

時間を停めようが、奪おうが、二百由旬を駆け巡る俊足は止めた時間すら侵食して追隨する。驚嘆すべき速度と執念。そこそは妄執の劍が、修羅の血がなせる業か。妖夢の踏み込みが、焦燥に目を見開く咲夜の胸を薙ぎ払う。

雷鳴のごとき一閃が白い柔肌に触れた刹那、スベルの宣言がそれに割り込んだ。



侍従服の布地を裂き、肌に浅く食い込んだ太太刀から、よろめくように身を引いて、咲夜は荒い息を吐いた。

「……はあ、ッ……」

——幻世「ザ・ワールド」

被弾の直前で弾いた懷中時計の竜頭。それに連動して、文字盤の中を三本の針が本来とは逆の向きに回り始めていた。

時間停止の能力は咲夜個人のものだが、それを制御し、増幅するのがこの懷中時計だ。といっても時計自体に大した力はない。標準時を常に把握できる簡単な魔法が仕込まれているだけだ。

咲夜が時間を停めている間にも、この時計だけは正確に時間を刻む。

それまで任意で扱つこともできず、明瞭な形を持たなかった咲夜の能力は、この時計を得たことによって方向性を得て力を増した。使用頻度や時間制限も大きく向上

したし、いざと言う時にはこうして『貯めた』時間を使って、停止時間の中で長期の活動すらも可能にする。

大図書館の魔女は、この時計を睡蓮ロータス・サイトの眼と呼び、内部機構に月の寶石が組み込まれているのだと言っていた。

幻世「ザ・ワールド」。本来なら切り札の大技となるスperlを無駄打ち同然の緊急避難とさせられたのは業腹だが、こうでもしなければ無様に胴を薙がれていた。紅魔の館のメイドの矜持として、主以外の牙に傷を負うなど、以ての外である。

「……厄介ね」

ようやく息を落ち着け、咲夜は脇腹に触れて傷を確かめた。肌に食い込む打ち身に顔をしかめる。あと数十分の一秒でも判断が遅れていれば、白玉楼の太刀の鋭さを身をもって体験するところだった。グレイズで済むのは幸いだ、もう替えの服はない。

いちいち時間を停めて着替えに戻るのも面倒だと諦めて、咲夜は吐息を一つ。廊下の向こうへと視線を送る。そこには、無数のナイフに囲まれた庭師の姿がある。

同時多面的に撃ち込んだナイフの弾幕のうち、妖夢は右の十四本をすべて打ち落とし、弾いた数本で左斜め前の四本を迎撃、足元に散らばった残弾を蹴りあげて後頭部の二本の勢いを殺していた。

同時の体捌きで加速、追撃からはほぼ回避し、斜め上から弧を描いて襲う七本は壁の洋燈を足場にして跳ぶことで避ける算段だろう。確かに『詰み』となるに十分な数の刃の包围を、独力で脱しつつあることになる。

時間を停めて打ち込んだナイフに、その直後の動作でこれだけ反応できるのは驚嘆という他はない。以前に会ったときは余裕のない子供だと思っていたのに、いつのまにここまで優れた技巧を練り上げたのか。

宴会の席では、主の無茶ぶりに振り回されている姿しか覚えがないが——特異な能力をもたず、身一つの剣術でここまで咲夜に迫るとは、驚嘆のほかはない。

「——たいしたものだね」

少女の頬に残るいくつもの小さな傷跡を眺め、咲夜は停まった時間の中、誰にも聞こえない称賛を送る。

この小さな庭師は、目の前の困難を前に、ただ我武者羅に前を斬り拓くことしか考えていない。猪めいた愚鈍さといえど否定はできないだろう。それでもなお、彼女は幾度となく失敗を繰り返し、過ちと勘違いを繰り返し、ひたすらに愚直に前に進んできたのだ。

ほんのわずか、口元を緩めて悪魔のメイドは吐息。

「そういうのは、嫌いじゃないのだけど」

時間を操るといふ題目から、およそ反則中の反則めいた評価をされる咲夜能力ではあるが、これもまた万能ではない。

悪魔のメイドの時間操作では、起きてしまった過去をさかのぼることはできないのだ。選択を巻き戻し、後悔を取り戻すことはできず、選んだ結果のもしもを覗くことは許されない。無限の猶予の中で少しでも良い選択肢を見出すものであり、レミリアの能力と対を成すものだと、日陰の魔女が言っていたのを思い出す。

「でも。申し訳ないけれど、ここまでね」

これは弾幕の規則としては反則だ。誹りを受けても仕

方のないことだろう。けれど、勝負としては譲れない。同じ従者として——敗北が許されない時というのはあるものだ。久しく実感のなかったプライドを刺激され、咲夜の眼は静かに高揚する。

地面に転がる半霊に歩み寄り、貫いた銀剣を引き抜いた。すっかり手に馴染んだ柄を逆手に握り、殺人メイドはゆっくりと妖夢の前に歩み寄る。

黙祷はしない。吸血鬼に仕える身が、誰に祈るといふのだろう。

「ここまでよ。あなたの時間も、私のもの」

無慈悲に振るわれた一刃が、半人半霊の庭師の首を狩り落とさんとした、その刹那。

「……いえ」

停止しているはずの時間の中で。落ち着いたその言葉はやけにはっきりと咲夜の耳に届く。

「その時間は、半秒前に私が斬りました」

同時、ちん、と涼やかな鏗鳴りの音があつた。

「な——!？」

停止しているはずの時間の中で、聞こえないはずの音が聞こえ、動かないはずのものが動いている。

ありえない事態に、完璧なメイドの反応が遅れる。

「――時間を斬ったのは、初めてでしたけど」

紅潮した頬と共に、庭師が納めた楼観の太刀。それが咲夜の『停めようとした時間』の開始地点ごと、この半秒の時間を斬り飛ばしたのだ――と、ついに咲夜には気付かなかった。

滑るような踏み込みとともに、強烈な峰打ちの一撃を、胸元に受けながら。

今度こそ、紅魔館のメイドの両目が、驚愕に見開かれてゆく。

## ▼ 二

頬と額に張り付けられた膏藥に、三角巾で吊り下げられた石腕が痛々しい。服の下で包帯だらけになった手足が湿布に鈍く引きつり、肩の打ち身はまだ腫れて熱を持ったまま。怪我だらけの半人の隣、半霊も背中に大きな絆創膏を貼られて、どこか顔色（？）悪く動きも鈍い。

幸い、怪我の程度は深刻ではなく、動かすのに支障はなかったが、しばらくは十全とは言えないだろう。

生傷の痕も癒えぬまま、庭師の少女が外を歩くことは珍しくはなかったが、それでも賑やかな人里で、彼女が人目を引くのは当然と言えた。

夕食時も近いとあって、長屋からは煮炊きの煙が立ち上り、家路へと急ぐ人々目当ての辻売りが雑踏を賑わせる。紅魔館のメイドとの互いの矜持をかけた一戦から数日。妖夢の姿は人里の西通りにあった。

「——えっと」

もともとポケットを漁り、メモを見比べて首を捻る。丁寧な地図はありがたいものの、目指す目的と見回す周囲の光景がいまいち結びつかない。普段あまり来ない区画とあって、ますます本当にここで合っているんだろうかという疑念は深まるばかりだ。

柳の運河を通り過ぎ、細い辻の先を折れ、狭い幅の水路に掛かった石橋を超えて。西日に照らされる長屋の屋根を、ひとつ、ふたつと順に数え——

「ここ、かな？」

立ち止まったのは、何の変哲もない長屋の一角。障子の孔を塞がれた引き戸には、特段目を引くようなものはなく、左右の部屋と大差ない。目につくものと言え、軒先にぶら下げられた雨傘くらいか。

いたってごくごく普通の家屋である。せめて『そういう類の』看板でも出ているのではないかと思っていた想像も外れ、妖夢は再度首を傾げる。

念のために二度、三度とメモに目を落とす。咲夜お手



製の地図が間違はなくここを指していることを確認し、妖夢は一度大きく深呼吸。わずかに固い口の中の唾を飲み込んで、引き戸を叩く。

「ごめんください！ どなたかいらっしゃいますか？」  
「はい？」

反応はすぐにあった。奥から物音とともに、返答の聲が帰ってくる。多少慌てた様子でがらがらと引き開けられた戸の奥から覗くのは、春の空のように明るい青髪と、左右で色違いの瞳。

「どなた……で……え？」

「あ」

妖夢を前に、にこにこ笑顔が瞬く間に凍り付く。

長屋から顔を出した、愉快な忘れ傘——多々良小傘の悲鳴が夕焼け空にこだましたのは、その直後であった。



「な、なんなの!? 墓場の辻斬りだけじゃ飽き足らずね

ぐらにまで押しかけてくるとか、執念深いにも程があるんじゃないっ!? 慎重しやかに人を脅かして暮らしてゐるわちきを叩きのめして、いやらしくて非道な麻薬窟にでも放り込む気なんでしょ!! 艶草紙みたいいに!! 艶草紙みたいいに!! 知ってるんだからね!!」

小傘は怯えながら引き戸のすぐ内側に立てかけてあった茄子色の傘を手取る。傘はぎよろんと大きな一つ目を剥きだし、口を開けて長い舌を飛び出させた。びかびか怪しい光を放つ傘を突き出して威嚇する小傘に、妖夢はあわてて両手を上げて叫ぶ。

「ちょ、ちょっと待ってください!! 違います!! 違うんです!!」

「何が違うってのよ!! 問答無用、くらえ!!」  
放たれる唐傘の閃光に、やむなく妖夢は背の楼観剣に手を伸ばした。

爆発するように膨れ上がる閃光が、長屋の間をまばゆく照らす。

「——え？」

ちん、と涼やかな鏗鳴りが、小傘の声をかき消した。

閃光は嘘のように消え失せ、傘を突き出したまま、小傘はぽかんと口を開けていた。色違いの眼を零れ落ちんばばかりに見開いて、何度も瞬きする。

「い、いま……え？」

「違うんです！ 今日はお願いがあって来たんです。話を——」

やむなく抜刀してしまったことに後悔を覚える妖夢だが、そんな場合ではなかった。騒ぎを聞きつけたか、長屋のそこかしこから住人たちが顔を覗かせる。

「なんだあ……!? いま、なんかすげえ光が」

「熊公、おめえも見たのか？ お、こりやご隠居まで。」

どうしたんですそんなに泡食って」

「どうしたんですじゃないだろうよ、なんだい今のは。」

こんないい天気だってえのに、雷様でも落っこちてきたのかい。くわばらくわばら」

「やだなあご隠居、雷様じゃあもつと喧しいでしょうよ。どんがらどんがらってな塩梅にね。そんな音はちいとも

しなかったですぞ。なあ？」

「っ……すみません、中に入らせてください!!」

「な、なにをするの!? やっぱりわちに酷いことするつもりなんだ……!! こ、こんな長屋の中で、声出したら隣に聞こえちゃうからねぐへへみたいな展開でしょ!! 艷草紙みたいに!!」

「それはもういいですから!!」

埒が明かない。小傘を押しつけるように妖夢は部屋の中に押し入る。慌てて土間に躓いた拍子に、戸板に思い切り頭をぶつけた。

痛みに堪えながら、暴れる小傘の口を塞いで、短く言い聞かせる。

「静かにしてください！ あなたも正体とか知られたくないんでしょ!!」

「はっ……!? そうだった!!」

ようやく気付いたか、やっと抵抗をやめる小傘。しばし表のざわつきは続いていた。やがて、住人の一人が空いたままの引き戸からちらりと中をのぞき込んでくる。

「小傘ちゃん、今のだけど——」

恰幅のよさそうな婦人であった。長屋の板の間にもつれ合ったまま、妖夢と小傘はひきつった笑みを覗かせる。

「……………」

「……………」

「……………」

三者三様の、実に気まずい沈黙しばし。婦人は一つ大きく手を打つと、ごゆっくり、とばかりに何度もうなずいて、引き戸を閉めて去っていった。

最後にぐっと親指を立てて。

「……………」

がつくりと肩を落とし、妖夢は吐息。何か盛大に酷い勘違いをされた気がするが、そのことは努めて考えないようにしつつ、妖夢は板の間に身を起こす。

「……………」

妖夢の身体の下。小傘は何を勘違いしたか、抵抗をやめていまだ身を強張らせながら、目を閉じわずかに口元を突き出していた。

何をされるつもりでいたのかと、改めて妖夢は額を押さえる。

「……小傘さん。もう大丈夫です」

「はっ!? な、なに!? いったいなんなの!? 人の家」  
にまで押しかけてきて、何をたくらんでるの!？」

「あーもう!! 話が進まないっ!!」

妖夢は憤りとともに、小傘の眼前に手紙を突き付けた。便箋にインクでつづられた宛名に、確かな封蠟。印章は紅魔館の侍従公式のもの。

ぱちくりと瞬きをしてしばし、小傘はそれを受け取り裏返して、差出人に目を丸くする。

「……紹介状?」

「そうです。あなたにお願いがあつて来たんです。小傘さん」

驚く小傘の前に正座して、妖夢は深く頭を下げた。



妖夢が紅魔館のメイドに私闘を持ち掛けてまで聞き出したかったこと。それは、彼女が弾幕で扱うナイフの仕入先である。

完璧で瀟洒な従者たる咲夜は、家事全般、侵入者の排除に庭の手入れ、刃物の手入れもそつなくこなす。が、いくら彼女とて、弾幕のたびに消費される何百何千という数のナイフを一本一本手作りで賄うことは流石に考えにくい。まして妖怪妖精の跋扈する紅魔の館で、ただの鉄の刃など武器としては割り箸にも等しいものである。

あの銀刃の弾幕の陰には、不埒な侵入者を打ち碎くに相応しい謂れを備えた業物をしつらえる、職人の存在があるはずだった。

穩当に訊ねても咲夜はかたくなにその場所を口にせず、その理由すらも伏せようとした。結果として妖夢も引くに引けなくなり、その在り処をかけての弾幕勝負となったのである。

「最初に聞いたときには、嘘なんじゃないかと思ったんですけど……」

そうして咲夜から聞き出した、妖怪鍛冶の居所がこの、人里の長屋の一室なのだった。

本音を言えばまだ半信半疑だ。不貞腐れて頬を膨らませる小傘の様子は、とても妖夢が探し求めた相手とは思えない。

「当り前よ。私だってこんなことしてるって知られたら、他の妖怪たちに何されるか分かったものじゃないもの。絶対に喋るなって約束した相手としか商売はしてないんだからね」

「……はあ」

確かに、妖怪の身でありながら妖怪退治の道具を鍛えているなどと知られたら、どんな目に遭わされてもおかしきはない。身内に人間の味方など、妖怪の沽券にかかわる問題だろう。

多々良は、文字通り踏鞴に通じる。そしてまた一つ目お化けも遡ればその祖は天目一箇神。アマツノマヒツツノカミかつて刀斧鉄鐸、神鏡を鑄造し鍛えた古き隻眼の神である。小傘はそれらの系譜を受け継ぐ、妖怪鍛冶なのであるという。

いざそうやって説明されれば、そのあたりの理屈は分からなくもない。とは言え、信じられるかといえはまた別の問題であって。

「……………」

小傘を上から下まで眺めつつ、妖夢は疑念を隠せない。里の子供を驚かそうとして逆に懐かれたり、墓場に潜んで老婆を狙えば無縁仏を供養しているのだと感心されてお菓子を貰ったりと、彼女にお化け傘の実績がまるでないことは広く知られている。

「正直、いまもあんまり納得いきませんが」

まるで信じる気になれないでいる妖夢に、小傘はきいーっと歯を見せて叫んだ。

「むー!! 信じなさいってば!! 剣士のくせに一本多々良の鍛冶の腕を知らないの? もう頭きた、待ってなさい!!」

小傘は憤慨しながら立ち上がると、奥の戸棚を引き開け、その奥から刃物の束を持ち出してきた。ふんと鼻を鳴らしながら、妖夢の前にずらりとそれら並べる。

「これは……」

「どう?」

どれも小刀や包丁といった生活用品、あるいは鑿や鋸などの工具だ。

手に取るまでもなく、それらすべてが見事な出来栄であるのは妖夢にもすぐに理解できた。包丁一本とってみても、手にびたりと馴染み、そっと触れた刃面は指に吸い付くよう。背の端まで、妥協なく作り込まれていることがはつきりと感じられる。

感嘆の表情をみせる妖夢に、ふふんと胸を反らしてみせる小傘。ちらちらと庭師に視線を送っては、もっと褒めてもいいのよとばかりのドヤ顔である。

「うーん……」

ここまで確かな証拠を出されれば認めざるを得なかった。答えあぐねる妖夢の隣で、悦に入っていた小傘はむ、と顔をしかめる。

その視線は妖夢が背に負う太刀に注がれていた。

「……それ、ひよっとして十夜斬?」

「知ってるんですか?!」

「当たり前よ。鍛えたのはわちきの<sup>ご</sup>先祖さまだもの」

「えええ!!」

冥界は白玉楼にあって、妖怪が鍛えた<sup>とやぎりろうかん</sup>と伝えられる楼観劍。その正式な銘は十夜斬楼観<sup>とやぎりろうかん</sup>という。

驚く妖夢にさらりと衝撃の告白をして、小傘は妖夢の太刀をひよいと手に取った。拵えを一瞥し、お化け傘は眉を潜め、視線を陰しくする。

「だいぶ無茶な使い方してるなあ……ちゃんと手入れしてるの?」

「え、あ、……は、はい。一応……むぐっ!」

小傘は無を言わず取り出した懷紙を妖夢の口に突っ込んだ。自分も同じように懷紙を食んで、すらりと四尺七寸の太刀を抜く。刃先を確かめ、刃紋、鍔に目を凝らし、小傘はますます眉を陰しくした。

「ちよっといひ?」

許可を得るよりも早く、小傘は土間に下りて荷物を広げ始めた。砥石をいくつかと、汲み置きの水。細かな砂

を取り出して、袖をまくりどっかと腰を下ろす。裸足の

足を使って砥石を支え、水を吸わせて具合を確かめ、さいて布で大太刀の刃をくるむ。慣れた手つきで手早く楼観劍を柄から外し、目釘を抜いて刀身と柄に分解。

掴んだ大太刀の刀身を持ち上げ、片目を閉じてじっと青い目を凝らす。

しばし、真劍に太刀を見つめてから。砥石に水を引いて、小傘は静かにその刃筋を砥ぎ始めた。

慎重に、しかし慣れた手つきで、お化け傘は大太刀の刀身を砥いでゆく。

「元々ね、この太刀は一手で使うものなの。騎乗で振るうものだからね。片手は手綱で埋まってるでしょ。だから、そうして使いやすいように刃筋も砥ぎ上げてある」

「……………」

妖夢は思わず息を呑んだ。師、魂魄妖忌は確かにこの長大な楼観劍を、こともなげに片手で振るっていた。

「でも、あなたの使い方はそれに合っていない。まっすぐ斬ってるつもりなのに、刃筋が右に流れるんじゃない?

そこを無理に直そうとするから、刀身全体に無理がかかっている」

妖忌は楼観剣と白楼剣を左右の手で二刀として扱い、それを冥界無双の剣とした。妖夢にはない恵まれた体軀がそれを可能にしたのだ。しかし小柄な妖夢の身体では、いかに修練を積もっても師と同じ二刀の魂魄流は振るうのが難しい。

加えて、迷いを断ち霊を成仏させるという特性から、白楼剣は是非曲直片直々の通達で使用を大きく制限されてしまっていた。

いきおい、現在の妖夢の戦い方は楼観剣の一刀に偏っている。小傘の指摘はことごとくそれを言い当てていた。「ご先祖様も生半な鍛え方はしてないし、これ自体が九十九の歳を経てるから、鞘に納めて靈気を吸わせれば、大抵の傷は直るだけだね。——無茶させればさせるほど、刀に無理は溜まるのよ」

そこまで言うとは、砥ぎの手を止め、小傘は、左右の眼を交互に閉じて刃筋を確かめる。そうして一つ頷くと、

砥石をひとつ目の細かいものに変え、砥ぎを再開した。

そこからじつに一刻余り、じつくりと砥ぎに手をかけて——小傘はひとまず満足したように頷いた。元通りに拵えを整え、目釘と柄も新しいものに取り換えて、楼観剣を妖夢に返す。

「はい、これで良し。細かい癖までは直ってないけど、前より良くなってるはず。……くれぐれも無茶はさせないこと。いい？」

「は、はい」

赤青の色違いの眼に詰め寄られて、妖夢はこくこくと頷いた。

「で？ ……あ、ひょっとして頼みって、十夜斬の手入れってこと？」

ぽんと手を打つ小傘。しかし妖夢は首を振って、がばりとその場に身を伏せた。床に手を突き、深々と小傘に頭を下げる。

「数々のご無礼申し訳ありませんでした！ 多々良小傘さん。どうか、私を弟子にしてください！」

「へ……?」

またも目を丸くする小傘である。

「弟子? わちきが?」

きよろきよろと周りを見回し、妖夢と自分を交互に指さして。何度か同じことを繰り返してから、途端に彼女の顔がだらしなく緩んだ。

「へへえ。弟子?。へーえええ……弟子、弟子ねえ? い

やあ。そりゃ最近ほ、わちきもちよつとは名前も知られてきたし、お化け傘としての活動もこれで長いし? 化け術の師匠としてのきやりああつぶも考えてたところだからねえ。そつかそつか、あなたも半分は幽霊だもんね! 弟子入りして人を驚かす修業がしたいっていうその心意気、よくわかったわ! 幽霊として私を師匠に選んだのもなかなかいい心がけよね!!」

「あ、いえそういうのいいですから」

「しくしく……」

さすがに話の流れは分かっていたか。くねくね身悶えしたまま崩れ落ち、よよよと目元をぬぐう小傘。隣で茄

子色のお化け傘も、一つ目の大目玉と同じ幅の涙を流している。

「……まあ、冗談は置いといて。正直弟子入りとか言われてもよくわからないんだけど……。いったいなにがどうしてそんなことになるの」

問われ、妖夢は改めて居住まいを正し、小傘の前に向き直る。

「作りたいものが、あるんです」

「……ふむ?」

そうして白玉楼の庭師は、長らく自分の胸の内だけに秘めていたことを語りだした。斯く斯く然々と説明を聞き、小傘はこくと首を傾げる。

「えー? それくらいならすぐに作れるけど?」

「いえ」

妖夢は静かに首を振る。

「これは、私の手で作らねばならないものなんです。お願いするわけにはいきません。ですから、どうか! 私に刀の打ち方を教えていただけないでしょうか!」



「うーん……いや、そんな事言われても……」

再度頭を下げる妖夢に、小傘は難しい顔で腕組みするばかりだ。

「どうして私に？ あんたなら……ほら、冥界の途中にあるあそこ、なんだっけ……なんとかって道のところにも、幽霊の鍛冶屋はいるんじゃないっけ。そっちに頼むほうが確実でしょ？ 弟子にしてくれるかは置いてだけど」

「あそこでは駄目なんです。冥界の住人は未練を持ちませんから。里の鍛冶屋さんにもお願いしましたが駄目でした。……どうか、お願いします！ 小傘さんっ！」

「うー……だけど、このことは秘密で、人間に知られちゃったら私だって暮らしていけないし、いくら頼まれてもさあ……」

長い思案の後。本体(?)の傘と視線を交わし。さらに腕組みをしておしぼし。ついにぷすぷすと頭から煙を噴き始めて。

「ええい、もういいや！ なんだかわからないけど、好

きにしない！」

「ありがとうございます！」

ついにはぐるぐるを目を回しながら、小傘は妖夢の弟子入りを許可したのだった。

## ▼ 三

小傘の工房は、里から離れた森の奥。玄武の沢の支流となる小さな流れのそばにひっそりと設けられていた。何代も前の一本踏鞴が、河童の協力を得て立てた小屋であるらしい。

森の木々が作る静寂、澄んだ沢の湧水の脇には、亀甲のように規則正しく並んだ六角形の岩の群れ。

玄武の沢の名の由来ともなるこの六角注の石柱群は、かつて地面から湧き出した溶岩が冷えて固まったことを示しており、特定の方法で石柱を剥がすと、いまもその熱が顔を出す。

一説には地脈の具合で噴き出す、灼熱地獄の残り火だともいうが——小傘も詳しいことまでは知らないらしい。

「そっち、もっと強く」

「……はい!」

いつもの服から白装束に着替え、小傘は金床へ槌を振る。妖夢もその傍で同じ装束に身を包み、彼女の手伝いを始めていた。

煌々と燃える炎に熱された鉄を前に、大きな槌を振る続ける小傘。汗ひとつかく様子のない彼女とは対照的に、妖夢の顔には玉のような汗が浮かぶ。

熱した鋼を打つ槌の音は、朝から晩まで耐えることもなく続いていた。

あれ以来。小傘との約束で、妖夢は里に出かけている時間の大半を彼女のもとで過ごし、その作業の手伝いに費やしている。

いつにもまして朝早く起き、白玉楼の仕事をこなし、庭の手入れに見回りを済ませ、昼前からの時間を工房で過ごし、夕暮れには戻る。

「正直、弟子とか言っても教え方なんか分からないから、見て覚えてもらうしかないと思うのよね」

そう言われて従っているものの、見様見真似でするにはあまりにも繊細で複雑な作業。地道に見えながら、ひ

と槌ひと槌が出来栄えを左右する、ややこしい作業の積み重ねだ。

ただひたすらに、炎の中から鉄を打つ。雑念など以ての外だが、さりとて何も考えずにはいては、出来上がるものはからっぽのなまくらだ。道具に籠められた作り手の情念こそが、その成否を分けるのだと、お化け傘は熱っぽく妖夢に語った。

どれも単純で地道な作業。けれどそのひとつひとつが、最終的な出来栄えを大きく左右する。ひと槌を振るうのも、焼きを入れるのも、ひと砥ぎの力加減も。そのすべてが、最終的な完成形に至る大切な要素だ。どれを欠いてもうまくいかないし、たった一つの失敗が、後に大きな影響を及ぼす。

(庭の手入れと、似てるかもしれない……)

妖夢の抱いた感想は、そんなものだった。

妖怪刀鍛冶の工程は人間の鍛冶のそれに比べると遙かに速い。もとは鍛冶の神々に連なるとあって、小傘は実に巧みに火を操り、槌を繰った。それはまた、彼女が付

喪神として道具の声を聴くことができることにも依るのかもしれない。

小傘が打つ刃は平均して日に数十を超え、多い時には百本以上を一晚で仕上げた。そこには普段、人を脅かしては失敗ばかりのお化け傘の面影は見えず、ただ真摯に道具に向かう匠の顔があるばかりである。

その一方で、ある日には訊ねた工房でいくら待てど暮らせど小傘が現れなかったこともあった。不思議に思っ  
て長屋を訪ねれば、お札と針まみれになって黒焦げの小傘が寝込んでいたのである。

夜中にお化け傘の「本業」で待ち伏せていたところ、出くわしたのが運悪く博麗の巫女であったそうで、脅かすどころか返り討ちにあったのだとか。頼りになるのかならないのかいまいち解らない師匠である。

かと思えば、里の子供たちを集めて面倒をみたりと世話焼きな一面もある。妖夢は改めて、彼らの知られざる一面に驚きを新たにするのであった。

もともと、台所仕事や剣術の鍛錬、庭木の剪定と、刃

物を扱うことには一日の長があったためか。いくつかの工程においては、小傘も驚くほどの上達を見せ、妖夢は着実にコツを掴み、腕を伸ばしていった。

初夏の前に始まった弟子入りが、盛夏を過ぎ、秋を経て。やがて冬の足音を聞くころには、妖夢の作刀はおぼろげながらその形を成そうとしていた。



「っ」

額に玉の汗を浮かべ、力を込めて打ち付けた槌から火花が散る。装束の裾は黒く汚れ、いくら洗っても落ちぬほどに鋼と煤油に染まっていた。

赤熱した鋼を叩きだし、丹念に鍛造した刃を、沢から汲み置いた冷水に突き入れる。擦れて爆ぜるように沸き立つ水面を眺め、妖夢は吐息。

火造りと焼き入れを終え、引き上げられたのは二尺余りの刀である。蹈鞴の炎に炙られた熱気を肌に感じなが

ら、妖夢は集中を途切れさせぬように手を動かした。歪みを打ち直し、反りを整えてから、冷えた刃をさいて布で包み押さえて荒砥ぎに移る。

劍術における残心と同じ。ひとつでも油断し気を抜けば、すぐにそれが刃に現れる。

妖夢が作るのは実用刀、美術品としての砥ぎとはやや趣が違ふ。鍛冶造りがそのまま荒砥となるものだ。ものを斬り、己の力となる刀を目指し、妖夢は額に汗を浮かべ、一心に刃を砥ぎ上げてゆく。

砥ぎに二日をかけ、匂うように際立った波紋を浮かべた刀身二尺三寸を見上げ、少女は額の汗をぬぐう。

「……できた」

地金濃く、沸は僅かの砂流し。得弟子入り半年で打ったには見事な出来栄であったが——雪のごとき刀身を目にしても、妖夢の心は定まることなく、千々に乱れるばかりであった。

砥石を片付けた妖夢は、出来たばかりの刀身を真新しい白木の柄に刀を納めて腰を上げた。小屋を出、近くの

木立の中へと踏み入れる。

森の中の小さな広場には、即席の鍛錬場が設けられていた。作刀の出来を確かめるとともに、白玉楼との往復時間を節約するための日々の修練の場である。

その中央に立った妖夢は、おもむろに抜刀して巻き藁に向かい、切っ先をひたりと正眼に据えた。

息吹とともに剣閃一閃。竹を包んで束ねた藁は、少女剣士の振るう刃に見事両断される。返す刀が翻り、さらに閃光。瞬時に巻き藁を四つに断ち割り、けれど、妖夢の表情は晴れない。

「……違う。……これじゃ、ない」

残心を取って後、疑念を振り払うようにして妖夢は刀を拭い、鞘へと納めた。

小屋へと戻った妖夢は、できたばかりの刀の手入れもそこそこに絹袋へと包み、再度炉へと向かう。小割にした玉鋼を梃子皿に積み、鞆を押して火を強め、紙と藁灰で包んで火床に入れる。

ほどなく赤熱した鋼を引き出し、妖夢は再び下鍛えの

槌を振るい始めた。火花を散らし、打ち付けられる槌の音が高く響く。飛び散る輝きが白い装束を焦がし、肌を焼いても手を緩めない。

「……………っ!」

「やめて」

遮二無二槌を振るう少女を、そっと制し、細い手を握ったのはいつの間にかやってきた小傘であった。色違いの瞳を細め、お化け傘は悲しげな顔で首を振る。

「いまはそれ以上やっても、その子はきちんと出来上がらないよ。作ってる妖夢がそんなじゃ、その子たちが可哀想だ」

「……はい」

力なく槌を下ろし、肩を落とす妖夢。下鍛えの途中で打ちかけとなった鋼と、白木の鞘の刀たち。既に二十振りを数える妖夢の「練習作」を交互に見比べて、小傘はほうと吐息する。

「上手くいかないねえ」

「……すみません」

深く首を垂れる妖夢に、小傘も悲しげに眉を下げる。何度繰り返しても満足のかぬまま、妖夢の作刀は行き詰まっていた。

「あのね、妖夢。自分が納得できるまで妥協なく、道具を作るのは悪いことじゃないと思う。でも、中途半端な気持ちのまま、きちんと満足いかないのに続けたって、使ってもらえない子が増えるだけだよ。……そんなのは、私は許せない」

モノ言わぬ刀達を背に、付喪神の赤青の瞳が、真摯に妖夢を見つめる。その前で妖夢はただ、己の未熟を恥じ入るばかりだった。

妖夢が小傘に弟子入りし、求めていたのは、自分のための新たな刀を作ることだった。

誰のためでもない、自分のために打つ刀。それが目的であるからこそ、己にさえ扱えればよいと、甘く見ていたことは確かだろう。

その浅慮を、いま妖夢は痛感していた。秋から冬まで、妖夢の作刀は二十以上に及んでいるが、そのどれも

が満足のいく出来とは程遠いものだった。

小傘の言葉を借りるのであれば、それらは皆、道具に至っていないという。形こそ刀の姿をしているが、何のために作られたかが定まらない、曖昧な存在。

斬ることに、守ることに使えない、中途半端な刀。(私の心に、迷いがあるからだ)

梃子皿の上、ゆっくりと冷えていく玉鋼を見下ろして、妖夢はそれを思い知る。

「ねえ妖夢。あなたが一生懸命だから黙ってたけどさ。あなたが本当に作りたいと思ってるのは、本当にその刀なの？」

「それは……」

もちろんです、と喉元まで出かけた言葉を、妖夢はじっと飲み込む。何本となく鍛え上げられては、使われることなくしまい込まれたままになっている刀達が、反駁の余地を失わせていた。

白木の鞘に包まれた刀身を抱き、色違いの瞳が真摯に妖夢を見つめてくる。生まれですぐ、使われぬままに捨

て置かれる刀たち。

忘れ傘の指摘は、妖夢の胸を鋭く穿つ。

「わちきは、こんな傘だから。どんなものにだって使い道はあるし、大事にされて欲しいと思う。……でも、できることなら、妖夢は、妖夢が本当に必要なものと一緒にあってほしいな」

「……………」

「……いいや。今日はこれくらいにしておく。もう夕方だよ。妖夢もお使いあるんでしょ」

「はい。……ありがとうございます」

力なく項垂れ、静かに頭を下げて。

妖夢は、小傘の工房を辞した。



沈んだ心のまま、妖夢は里の通りを歩く。

顫界の季節はすっかり冬だ。賑わう声に厚着の人並み。木枯らしの中、元気に走り回る子供たち。迫る年の瀬の

足音が、忙しく里の雑踏を歩き来していた。

(このままじゃ、間に合わないかもしれない……)

楼観剣、白楼剣。師より受け継いだ二刀に加え、もう一振り。さつき打ち上げたばかりの刀を携え、庭師の少女は雑踏を歩む。いつもと違うバランスに、人混みを裂けきれずに三度ほど躓いた。

二尺三寸。短刀でも、大太刀でもなく、小柄な己の身の丈に合った刀。師の後を継いで冥界の守護を務めるために、自分に必要だと思ったもの。

自分だけの、刃。

妖夢が欲していたのは、それだ。

けれど。

小傘の元に弟子入りし、槌を振るい鋼を打ち続ける中で、妖夢の迷いは徐々に膨らんでいった。

(認めたく……なかった、のかな)

魂魄妖忌の二刀流は、彼がその生涯の中で身につけ鍛え上げた剣。ゆえにその技は一代限り。いかに修練を積もうと、体格で劣る妖夢がそっくりそのまま扱うことは

できないものだ。

ならば。師の代わりとしてではなく、紛れもない自身のために。魂魄妖夢が、冥界白玉楼にあって、西行寺幽々子を守るための、新たな刃を。

——そう考えて、小傘の元を訪ねたのに。

その考えが甘えであったことを、そろそろ妖夢は認めなければならなかった。

自分の力量に相応しい刀——そう言えば聞こえはいいが、それで満足することは、師から受け継いだ白楼剣、楼観剣の二刀を、師の築き上げた魂魄の剣を継ぐための努力を諦めたことになってしまう。

妖夢は心のどこかで、それを認め切れていない。

「未練……ううん、言い訳だ」

魂魄妖夢は。師・妖忌のようにはなれない。

そんなことは、白蓮との手合わせの中で何度も思い知ったはずだというのに。いまだ自分は迷っている。

敵わないと知りながら、師の背中を追い続けている。

そのことを改めて理解し、妖夢は深く吐息した。

『うーん。そりゃね？　どんなものでも作れるのが一流だと思っけど、妖夢はそうなりたくないわけじゃないよね？　まだはつきりとは分からないけど、なにか、作りたいものがある。そういう顔してる』

なんととなく失敗を繰り返し、気落ちする妖夢に、小傘はそう言っただけで聞かせた。

『これでも百年、傘やってるからね。道具のことはわかるよ。……せっかく私の弟子になったんだからさ、妖夢にはそういうのをちゃんとわかってほしい。一通りいろんなものをやってみて、一番うまくいくものが、あなたの作りたいものじゃないかな』

こちらを案じるように慰めようとする小傘の顔を思い出し、思わず苦笑。つくづく、人を脅かすのには向いていないお化けだなと思う。

「あいよ、毎度ありい」

考え事をしていた顔が、どんと大きな背中にぶつかる。

「うおっ、なんだ危ねえなあ」

「わ、ごめんなさいっ」



景気のいい顔に声を上げれば、市場には人ばかり。正月飾りに鏡餅、星を乗せたモミの木がそこそこで売られ、年越しの準備に大荷物を抱えた人々がぎゅうぎゅう詰めとなつて路地に押しかけていた。

そういえば、年越しの支度もまだだ。道行く人々を眺め、妖夢がしばし呆けていると。

「おやおやどうしたい、そんな暗い顔して」

「……？」

「——こっちさ、こっち」

呑気な声に視線を上げれば、茶店の椅子でくつろいだ様子の赤毛の死神が一人。

彼岸の水先案内人、小野塚小町は団子の串を口へと運び、ひらひらと手を振ってみせる。

すでに日も傾き、昼休みと言うには明らかに遅すぎる時間だというのに、どっしり構えた様子は貫録十分。商売道具の大鎌を脇に立てかけ、その堂に入った様は、まるでそうしてそこでサボっていることの方が正しいのだとでも言わんばかり。

「奇遇だねえ、こんな所で」

「……どう見てもそうは見えませんが」

明らかに顔見知りを通るのを待っていたとしか思えず、半眼になつて見つめる妖夢だが、しか小町はどこ吹く風。「まあまあ、そんな邪険にしなさんな。あたいん所とお前さんのところは、お隣さんみたいなもんじゃないか。ちつとは仲良くしたつて罰は当たらんだろうさ」

「いえ、ですが」

お使いの途中なので——と言いかけた妖夢だったが、小町はそれを遮つて茶店の奥へ声をかける。

「おばちゃん、追加頼む」

「はいな」

気付けば目の前には新しい桜餅を載せた皿があり、淹れたばかりのお茶まで用意されている。茶店の店主らしき老婆は、にこにこ座布団を示していた。

「ほら、遠慮しなさんな。割り勘なんて吝嗇臭いことは言わないからさ」

「……では、少しくらいなら」

こと、商売に関しては生きている人間の方が上手であるらしい。死神ですら差別なく客に迎えている店主に半ば呆れ、半ば感心しつつも妖夢は小町の隣に腰を下ろす。

「頂きます」

丁度、小腹が空いていたのも確かだった。

妖夢は手を合わせ、桜餅へと手を伸ばす。店主が進めるのも確かで、桜餅は見事なものだった。程よい甘さの餡が薄く塩味の付いた桜の葉と合わさり、その風味はなかなかのものだ。

あとで幽々子様の分も買っていこう、と思いながら湯呑みに口を付けた妖夢だが、その渋さに軽く眉を潜めて舌を出してしまう。小町はそれを見て小さく微笑み、

「いやあ、一人じやいい加減退屈だね。そろそろ話し相手が欲しかった所なのさ。四季様は出来た人だけど、どうも下っ端の苦勞に理解がなくてねえ」

「サボリと休憩は違ふ気がしますわ」

「……むう。四季様みたいな事言わないでくれよ。ささやかな楽しみじゃないか」

小町はそうぼやくが、妖夢にしてみればこの部下にしてこの上司ありだ。もっとも、こうしてやけに人間臭い彼女だからこそ、小野塚小町は死神という忌み嫌われる存在ながら、多くの者に慕われるのだろう。

「で、まあここで寛いでたら、やけに不景氣な顔してお前さんが通りかかったと、そう言う訳さ」

「そ、そうですか？」

思い悩んでいるのは確かだが、そこまではっきりと顔に出しているつもりはなかった。思わず頬を引っ張ってみたりする妖夢に、小町は苦笑いしつつ団子の皿を片づける。

「……やれやれだ。商売繁盛も結構だけど、仕事ばっかりじゃ息が詰まるってもんだね、お互い」

「ええ、まあ」

さりげなくサボリ仲間に混ぜられているあたりに引っかけつつも、妖夢は曖昧に相槌を打つ。地獄の景氣の良さについては、果たして同調していいものかどうかという疑問もあったが、さて置くべきだろう。

「またしょうもないことで悩んでたんだろう？ そんなおでこに皺はつきりつけて、そのうち取れなくなっちゃうよ」

「そんな、簡単に……」

まるで他人事と一言で片付けられて、流石に妖夢も憤慨する。立ち上がりかけた妖夢の口に、小町は桜餅を押し込んだ。むぐと言葉を詰まらせる妖夢に、小町はからからと笑い、

「まったく、そういうところは爺様にそっくりだねえ。糞真面目っていうか、融通が利かないっていうか。思い込んで周りのが全然見えてないとかね。そのくせ、凶星指されるとすぐへソ曲げてさあ」

「……………」

小町が妖忌と親交があったというのは六十年目の結界騒動の後に知らされたことだ。小町が評したように、冥界の守護を任された魂魄家は、妖怪桜西行妖の管理などを含めて是非曲直と深い関係にある。

なかでも妖忌は幻想郷の成立前後にかけ、死神代行と

して是非曲直の任に着いていたこともあるという。「もうちっと気楽に構えたらいいのさ。なるようになるさってね」

ふわあと大欠伸をして、赤毛の死神。だが、桜餅を頬張ってもなお妖夢の顔が晴れないのを見、小町は仕方ないねえと後ろ頭をかいた。

「妖夢。あんたはやたらに、自分がなにも知らないことを引け目に感じてるようだけどさ。妖忌の奴はそんなあなただからこそ、幽々子の傍にて欲しいって思ってるんじゃないかね。考えようだよ。……知らないことに引け目を感じる必要はないさ」

「ですが……」

「あせらないあせらない。一休み、だ」

立ち上がりかけた妖夢の頭に、ぼんぼんと優しく手のひらが載せられる。まるで子供のような扱いだけれど、小町の手はとても優しくかった。

「まだお前さんは若いんだ。もっとじっくり余裕を持って、大いに遊んで大いに学んで。悩むのはそれからでも

構わないだろう？　なにも急いで決めちまうことはない。噂じゃ鬼でさえ一目置いてるって腕前なんだ。研ぐ前から植木鉢代わりにしちまうのは勿体ない」

「……………」

「だから、あんまり思いつめるもんじゃないよ。あの妖怪桜に手を出すのはやめときな」

さりと。小町の言葉は核心を突いた。

そと胸中に秘めていたはずのことを言い当てられ、妖夢は思わず胸元を抑えていた。辛うじて動揺を抑えながら、小町を振り仰ぐ。死神は変わらず、のんびりと笑うばかりだ。

「……ご存じ、なんですか？」

「死神舐めてもらっちゃ困る。人の生き死にに関わるすべで、それをどうにかするのがあたいの役目さ」

長い指で妖夢の胸をトンとつつき。

桜餅を頬張り、ずず、と茶を啜って、小町はのんびりと答えた。

「まあ、ちょっとばかりの悪戯ならお目ごぼしだってで

きるけどねえ。いつだったかの春が来ないようなことになれば、どうやったって言い訳はきかない。何しろあんたらにや前科があるからねえ。今度こそこわーい閻魔様のお裁きが下るよ」

両手の人差し指で、頭の上に角をつくり、小町は冗談めかして言ってくる。

「だから、悪戯で済むうちにやめとくことだね。あたいだって面倒はごめんだからさ」

「……………」

赤毛の死神が諭す言葉はもっともだ。馬鹿な事をしているという自覚もある。

けれど。

「……私、は」

それ以上。じっとしているとなにかを言い返してしまいうそで。妖夢はむぐむぐと桜餅を口の中に詰め込んだ。

## ▼ 四

陽の落ちた白玉楼の中庭で、鋭く剣が振るわれる。

誘魂灯の明りに導かれ、集う幽霊たちがぼんやりと放つ光の中。道場裏手の広場で、道着姿の妖夢は一心不乱に剣の型取りを繰り返していた。

師が遺した庭師の双剣を己のものとするため始めた日課の鍛錬だ。日に三千と決めて始めた素振りには、歳月と共にその数を増し、今では一万を数えるようになっていく。

夜気を斬り裂く白刃が踊り、月明かりを照らして輝く。舞い踊るように煌く銀の剣尖は、眼にも止まらぬ速さで振るい続けられる。

(……………)

が、その動きはどこかちぐはぐでぎこちないものだった。熱を帯びた吐息が、少女の噛み締めた奥歯の隙間か

ら洩れる。

言いようのない焦りのようなものが妖夢の胸の奥に燦り、剣先に乱れを呼んでいた。

(いけない……)

集中が途切れかけているのを感じ、妖夢は雑念を振り払おうと、更に速度を上げた。が、迷いを胸に残したまま、無理に修正を試みたせいで却って無駄な力が入り、刃筋の乱れはさらに大きくなる。手首の筋に、鈍い痛みが走った。

刃渡り四尺七寸、柄尻まで含めれば六尺近い大業物だ。たゆまぬ修練を重ねたとて、本来、妖夢の体格では扱い切れぬ代物である。いまだ伸びきらぬ少女の手足で無理をすれば、身体を痛めるのは必然だった。

「痛……っ」

手首の返しに伴う鈍痛に眉をしかめ、しかし妖夢はなお手を止めない。胸の内の焦燥に衝き動かされるまま、遮二無二剣を振るい続けた。

だが、そんな無茶が長く続くはずもない。地面すれす

れに落ちた楼観劍の切っ先が砂利を擦り、大きく刃筋をぶれさせる。勢いのままに泳いだ長刀は、不様に空を掻き、近くにあった桜の枝へと喰い込んでしまふ。

緩んでいた指から柄がもぎ取られ、妖夢はそのまま砂利の上へと倒れ込んだ。

「——ッ、はッ、はあ、っ、はあっ」

ぜいぜいと呼吸が乱れ、全身からどつと汗が噴き出す。身体は蒸気を噴きそつに熱く、鼓動が早鐘のように高鳴っていた。玉のような汗の滴が細い顎を伝い落ち、地面に散ってゆく。

肩で息をつきながら、妖夢はふらつきそつになる脚に喝を入れ、近くの大岩に背中を預けた。

全身に余計な力が入ったまま、無駄な動きを繰り返したため、身体は焼け付くほどの熱をたぎらせる。

(——駄目だ)

雑念に塗れた己の劍に、荒い息の中、妖夢は拳を握りしめる。

極限まで無駄のない動きをすれば、身体にかかる負担

も最低限のものとなる。あらゆる雑念をうちはらい、己が身ひとつをひと振りの鋼とし、一念入魂の劍と振るつ。それが魂魄の劍のありかただ。……そのはずだった。

地底の鬼、黒雲の鶴、紫雲の阿闍梨との戦いで掴んだはずの理合は、砂がこぼれるように指の間をすり抜けてゆく。

「……これじゃ、鉄の方がよっぽどましだな……」

桜の枝に喰い込んだ楼観劍を引き抜き、妖夢は自嘲と共に膝を起こした。心身を伴わない修練などいくら続けても時間の無駄。迷いのままに振るわれた未熟な劍では、この程度の細枝も斬れないのだ。

・ 太刀 銘 楼観 (名物十夜斬楼観)

・ 短刀 無銘 伝白楼 (迷喰 並 青楼)

白楼劍。楼観劍。白玉楼の庭師の証であり、今は妖夢のものである二振りの刀を、じっと見下ろす。

師の遺してくれた双剣に相応しい使い手となるために、妖夢は来る日も来る日もこの刀を振るい続けてきた。

——斬れば、わかる。

師の口癖だった言葉そのままに、いつか自分もその境地に立てるのだと信じて。

けれど。師の背中はいまだ遠く、己が知らぬことばかりが増えてゆく。

頓悟と共に姿を消した妖忌が、何を考え、己に後を託したのかを妖夢は知らない。妖夢がそう思い込んでいただけで、ただ邪魔だから捨て去った、それだけのことなのかもしれない。

この冥界の庭に数百年という時を生きて、祖父はそこに何かを見出したのだろうか。無責任にも思えるその行いには、やはり深遠な意図が含まれていて、半人前の自分にはまだ理解が及ばないだけなのだろうか。

焦らない焦らない。一休み。急がず構えて、ゆっくり

進め。小町はそう言って、論してくれた。

解らないことに対してじっとしておられず、性急に結論を出そうとするのが妖夢の悪い癖だ。剣の道を歩み、師の背中を追うには、その迷いも必然と、呑み込まねばならないのかもしれない。

(でも……)

二百由旬の冥界の庭、西行妖の傍らに在る主の姿が、妖夢の脳裏をよぎる。

千年を超えてなお死と静寂に佇む妖怪桜のもと、永遠に訪れない春を待ち続ける、華胥の君。

ふわふわ、ゆらゆらと気の向くまま、何事にも深く立ち入らず、何を考えているのかも定かではないのに、結局は何もかもを見通している。

文字通り、地に足のつかない亡霊の姫。

そんな幽々子がたった一つだけ固執したのが、あの妖怪桜だったのだ。

あの日。年も開けて間もない冬の雪の中で。

庭の片隅に小さく顔を覗かせた春の欠片をそっとすく

い上げ、亡霊の姫はまるで季節の中に溶けそうになりながら、妖夢に言ったのである。

『……ねえ妖夢。

西行妖は、どうすれば咲くのかしらね』

ほつ、と。庭師の白い息が夜の中に溢れ、消える。

最後の深呼吸吸とともに、ゆるやかに思考が冷え、体の熱が去ってゆく。

春雪異変。幽々子の言葉に端を発した大異変は、解決に乗り出した巫女たちの活躍で食い止められた。妖怪桜を咲かせるため集めた春度も全て失われ、季節はいつも通りの巡りを取り戻した。

けれど。あの時。

幽々子の冷たい手に触れて、受け取った春の欠片は、今も妖夢の胸の奥に暖かく残り続けている。

師の面影を、遠い背中を思い描き、妖夢は思う。

たとえ、人を死に招く妖怪桜とだとしても。

それに触れることが禁忌であるとしても。

あの桜は、これかれも永劫に、あの悲しみの中に、春の訪れない冬の寒さの中に、色なき墨染に染まっていなければならぬとしても、言うのだろうか。

「……違う」

それだけは間違いないと、妖夢は思う。

妖忌はおそらくその長い歳月の中で、冥界と、白玉楼と、幽々子に対し、妖夢よりもずっと多くのことを理解し、その上で沈黙と共に西行妖を見守り続けてきたのだろう。

でも、今。ここにいるのは祖父ではない。

何も分からずとも、力及ばなくとも。白玉楼の庭師は、自分なのだ。自分の胸に手を添えて、妖夢は歯を食いしばり、懊悩を振り切る。

だから、これは。

惨めだろうと、無様だろうと。こうして、諦め悪く繰り返し、拘泥し、迷い、悩もうとすることは。全部、全部、全部。



「私の、我儘だ——」

静かな瞑目と共に。

妖夢の手はしっかりと双剣を握り締めていた。



年が明け、新雪がそこらじゅうに降り積もり、幻想郷に一面の冬が訪れてからもなお。妖夢は毎日のように冥界を出ては小傘の元へと通った。

顔が煤けるのも構わずに轡を手に炉を熱し、一心になつて槌を振るい、顔中を汚しては磨きに精を出し、疲れて泥のように眠る。

幾度となく失敗し、挫折し、なお諦めずに立ち上がり。ひたすらにそれを繰り返す。

あるいはこの冬は、妖夢にとってどんな鍛錬よりもなお激しく厳しい毎日であったかもしれない。

多くの失敗作を打ち上げ、また一から繰り返す妖夢にはじめはいい顔をしなかった小傘も、やがて何も言わな

くなった。それが妖夢の決意であることを悟ったからだ。せめて人の役に立つようにという忘れ傘の思いから、市場によく斬れる包丁や鉈が並ぶようになったのはこの頃からである。

朝から晩まで、忙しく働き、修行も手を抜かず、白玉楼と人里を往復する毎日。妖夢の姿は里の花屋や稗田邸、鈴奈庵にも見え、時には里のはずれの古道具屋や、博麗神社にも向かうこともあった。

走り回る彼女の姿は、人里だけではなく、竹林や妖怪の山、果ては地底でも、酒の肴に、井戸端会議に、口の端にのぼるささやかな噂話となっていた。

——そして。

長く続いた冬が明け、凍りついた湖の畔、氷精と雪妖が別れを惜しむように寄り添い始める三月の早春。長く世話になった工房に、正装に着替えて深く頭を下げる庭師の姿があった。

「……行くんだ」

「はい。長い間、お世話になりました」

掃き清められ、火を落とされた工房の中。弟子のまっすぐな感謝に照れながら、小傘は片目をつぶって舌を出す。

「そっか。満足のいくものは、作れた？」

「……はい」

右の腰裏、革鞆に納まり履帯に吊るされた『それ』に触れて、妖夢は静かにうなずいた。

ひと冬を越え、落ち着きを増した庭師の顔に確かな成長の跡を認め、小傘は眩しそうに目を細める。

「ありがとうございました。それじゃ——」

「あ、待って」

再度小傘に頭を下げ、工房を後にしようとした彼女を呼び止め。小傘は取り出した火打石を妖夢の背に向けて切った。

紅く散る火花は、これから困難へと向かう弟子へのはなむけだ。

もう一度。礼を言って飛び立つ庭師の背中を——

小傘は、茄子色の傘と共にじっと見つめていた。

## ▼ 五

その日、冥界は雨であった。

雲交じりの冷たい雨が降りしきり、さあさあと梢を揺らす中。傍らに覚えた寒さに寢床で身を起こした幽々子は、がらんとした邸内を見回して首をかしげる。

「……妖夢？」

広い屋敷は、その実従者と彼女の二人暮らしのようなものだ。冥界には多くの霊が住むが、彼等は転生を待つ者たちであり、強い執着や我欲を持たない。ゆえに形を成したり声を上げたりすることも少なく、いつもふよふよと辺りを漂っているばかりなのだ。

「ようむー？」

従者の名を呼びながら、幽々子は勝手、台所、居間、縁側と順に邸内を見て回る。しかしながら、そのどこにも庭師の姿は見つからなかった。

「どこに行っちゃったのかしら」

縁側の障子を開いた幽々子は、降りしきる雲と分厚い雲に包まれた空を見上げる。

いつか、春を集めさせた時もこんな空だったなと思いつながら、幽々子は灰色の空を見上げた。



細かい雨の中に、視界は白く霞み、遠くを窺うことは遥として知れない。雨に煙る庭の中には鋭い足音が響き、白い息が溶けてゆく。

白い霧雨の中を、泥を跳ねさせ妖夢は走る。

ぬかるんだ地面を奔る靴先は汚れ、疾走と共に跳ねた飛沫は靴下にまで染み入る。足の指を凍えさせるほどに冷たい雫は、しかし少女の内に滾る熱に触れ、すぐに溶けていった。

胸の奥に感じる確かな春の残滓。その暖かさを力にして、半人半霊の庭師はまっすぐに駆けた。

そうして——しばし。白玉楼、二百由旬の広大な庭を横切るその先に、見覚えのある姿を認め、妖夢は疾走の脚を止める。

一息、大きく白い吐息がこぼれ、また氷雨の中に消えてゆく。

「——やれやれ」

木々の狭間、空の開けた小さな広場の端、降りしきる雨に濡れた赤毛を面倒そうに弾いて、小野塚小町は大きく肩を竦めてみせた。

「酷い雨だねえ、もう春も終わりだってのに」

地面に広がる大きな水溜り、幾つもの波紋の上に立つて、小町は参った参ったと笑みを覗かせる。その服装はいつもと違う黒一色。腰には帯の上から忌縁取りの夜摩代行証が止められている。

証の花紋は鍾馗水仙。花言葉は「弔意と追想」。

それは、彼女が私用ではなく、是非曲直庁の公務として、幻想郷の最高裁判長の権限を委任されてここにいることを示すものだ。

「ま、おかげで楽に入ってこれた。……元々幽霊とは顔見知りみたいなもんだから、気にするほどのこともなかったけどねえ」

いつも通りの軽い調子の小町に、妖夢は静かに相対し、左手に持った楼観剣の鞘をわずかに手元へと引き寄せる。小町もそれに応じるように、脇に立てかけていた大鎌を持ち上げた。柄だけで七尺、刃も含めればその倍近い巨大な死の刃を、赤毛の死神は軽々と振り回してみせる。水面のように、あるいは揺れる炎のように波打つ刃は、地を這うような低い位置にひたりと静止した。

小町はその赤い眼を、妖夢が手で押さえた懐へと向けて、低く呟いた。

「……なあ。そいつをどうするつもりだい？ あたいとしちゃあ、こんな寒い日にかつたるい公務なんかはなしにして、帰って一杯やりたいんだけどねえ」

それは、死神の最後通牒。

これまでの無茶をただの悪戯と不問に付して、もう一度だけ、思い留まる機会を与えてくれているのだと妖夢

は悟る。

(ありがとう——ございます)

口にはせず、心の中で。小町に謝意を示し、しかし妖夢はじつと前を見た。そっと握り締めていた胸元から手を離し、背中へ。

人を死に至らしめ、見境なく惨劇を誘うものを、冥界へと隔離し封じる。それを決めた是非曲直の判断は正しいと、妖夢は思う。

喪ってしまった過去もまた、今の幽々子にあっては不要なものであるのかもしれない。それを取り戻そうとする行いを、彼等は是とはしないのだろうか。

だけど——

「私は、生まれながらの半人前ですので。聞きわけが悪いと良く叱られます」

霧雨の中。しゃりと抜刀されるは、四尺七寸の楼観剣。十夜斬りの大太刀を構え、妖夢は静かに小町を見据える。

それを見、やるせない笑顔と共に、小町は心底面倒臭

そうに大きく息を吐いた。

「執着か。幽霊ってのは難儀だねえ」

「——性分です」

迷いも、惑いも、一切合財全部をまとめて——この刀で斬り拓く。白玉楼を、あの幽明の桜を守る者として。白玉楼の庭師として。

千年の昔より続く冬を、終わらせるために。

「白玉楼庭師、魂魄妖夢。——参ります」

白い息と共にそう言つて、妖夢は地を蹴った。



雨が強さを増してゆく。ぬかるむ水溜りの上、じりじりと距離を取りながら、妖夢はわずかずつ、小町との距離を詰めてゆく。

死神が低く構えた大鎌の曲刃は、踏みこんだ浮き足を払うためのものだった。分厚く重い鎌刃は、迂闊に踏みこんだ脛を払い、容赦なく刈り取るに違いない。

(……遠い)

前髪から落ちる雨雫が、睫毛をかすめて視界をぼやけさせる。眼前の相手の一挙一動を見極め、気を反らさぬよう、妖夢は頭のとっぺんから指先まで、神経を張り詰めさせる。

ただでさえ長大な大鎌は、小町の長身も考え合わせると優に数間の間合いを持つ、妖夢の楼観剣をはるかに凌ぐ長尺武器だ。

小町もそれを十分に理解しているのだろう。地を這うように低く構えられた大鎌の刃で長い間合いを制し、上中下段のいずれにも対応する、後の先を強く意識した構えだった。

表向き、死神の持つ鎌というのは制服のようなものとされている。実用性うんぬんよりも、訪れた先で未練ある魂に『死神でござい』と示すためのパフォーマンスのためのものだ。

が、裏を返せばこの大鎌、きちんと刃の引かれた立派な実用品だ。恐らくは彼岸の名のある鍛冶の手によるも

の。妖夢の目でも解るほどの大業物、軽く撫でられるだけで首のひとつやふたつ、ころんと落ちるだろう

(——付け入る隙があるとすれば、その大きさ)

鎌の刃は内向きであり、それゆえに間合いには大きな制限が生じる。刃の内側で刈り取るように振るわれない限り、刃筋は相手に届かないのだ。

見た目に反し、鎌は攻めに回ることが難しい武器であり、小町もそれは承知の上で、それがゆえに妖夢の攻め手を迎え撃つ定石を取っている。

(なら、それよりも早く——斬るまでだ)

長い間合いほど、内に潜られるのに弱い。捕えられてしまえば成す術がないが、七尺を超える巨刃を掻い潜ることができれば十分に勝機はある。

「先手必勝!!」

受けて立つとばかり、妖夢は躊躇うことなく前へ出た。楼観剣を脇に構え、身を低く、ぬかるむ地面をもものともせず蹴って疾る。

二百由旬の庭を駆け巡って鍛えた庭師の脚力は、彼我

の距離を一瞬で縮める。もはや縮地の域へと達した踏み込みは、跳ね上がった小町の鎌の刃腹を踏み付け、その間合いの内側へと大きく喰い込む。

同時、横薙ぎに繰り出した楼観劍の切っ先が、深々と死神の胴を穿つ——はずだった。

——が。

（——遠い、っ!?!）

必殺の間合いに捕えたはずの小町の身体が、ぐんと遠のく。予備動作もなしに大きく退いた死神に驚愕しつつも、妖夢は即座の反応でさらに深く踏み込みを伸ばし、手首を返す。

跳ねるように深く斬り返された剣尖は、しかしそれでもなお小町の身体には届かない。さらに七、八寸は深く切り込んだはずの切っ先が、むなしく空を切る。

振り切って伸びた上体は無防備に脇腹を晒す。

そこにはいつの間にか、赤毛の死神の姿があった。崩れた庭師の懷へ、容赦なく鎌が振り下ろされる。

「っ、ぐ!?!」

肉に大鎌の刃が喰い込む感触を覚えながらも、妖夢は咄嗟に半霊を使って、自分の身体を斬撃と同じ方向へと弾き飛ばしていた。

どうにか、腹を真つ二つに裂かれるのだけは防いでもの、真横へ跳ね飛ばされた庭師の腹は、熱い衝撃と共に裂け、血を滲ませる。

「斬れぬものなどほとんど無い、だっけねえ？」

耳元で聴こえた死神のつぶやきに、妖夢は戦慄する。たった今、跳躍で稼いだはずの距離を無視して、翻った鎌の刃先が眼の前に迫っていた。

「——ッ!?!」

反射的に身をよじると同時、跳ねあげた楼観劍の鞘が、辛うじて大鎌の分厚い刃を防いでくれた。

斧か何かで叩き斬られたように、半ばほどで折れ飛んだ鞘を目の当たりにして、庭師の背中を冷たいものが這い降りてゆく。

（駄目だ、足を止めるな——）

恐怖を振り払い、妖夢は前を向く。

斜め上から右下。劍術で言うなら逆袈裟の軌道で振り下ろされる大鎌を極限まで引き付け、刹那の見切りで回避。剃刀のような鋭さで前髪をかすめる鎌の刃先をわずかに四半寸で見切る。

「ここ、だっ！」

楼観劍よりなお長く重い大鎌の隙を狙う算段だ。腕を折りたたみ、妖夢は素早く返した大太刀の切っ先で小町の胸元を狙う。

「甘い、ねえ」

死神が嗤う。

直後。わずかな視界のブレとともに、妖夢の眼前から小町の姿が掻き消えた。

(なっ……)

動揺の中、反射的に楼観劍の峰を体の脇に沿わせたのは、ほとんど本能的な動作。研ぎ澄まされた意識が、ひりつくような殺気を身体の右脇に感じたからだ。

楼観劍の鎬に押し当て、支えにした肘を丸ごと砕かればかりに、死神の鎌が振るわれる。

横薙ぎ一閃の魔神の斧。半人半霊の少女はたまらず吹き飛ばされ、濡れた桜の幹に叩きつけられる。

大きく横に振るわれた大鎌——空振りとなったはずの切っ先は、そのままの勢いで旋回し、小町の背後へと移動させられた妖夢を襲ったのである。

「……なあ。お前さん、ひよっとしてあたいが手加減してくれなくても思ってたんじゃないかい？」

——だとしたら、死神も随分舐められたもんだ」

腰の夜摩代行証を弾いて、小町は淡々と言う。

ぞっとするほど冷たい、刃のように細められた視線が、妖夢を射竦めた。対するものの寿命を見抜くという、死神の眼なのだろう。

そこに、サボタージュの泰斗とも評される普段の怠けぶりなどは微塵も窺い知ることとは出来なかった。

「あたいも、地獄の看板背負ってここに来てるんだ。手え抜いてるなんて思われるのは心外だよ」

小町が無造作に鎌を振りかぶったかと思うと、次の瞬間には頭上から巨大な刃が降り落ちてくる。かち上げた



楼観劍が軋みを上げ、防御の上から妖夢は地面に叩き伏せられた。

「っ……ぐ、ッ!？」

まるで、頭上から山脈が叩きつけられたかのよう。ただの一閃で地面を穿ち断ち割る刃は、もはや防ぐ、打ち合うという段階を超えていた。

冷たい泥に伏す妖夢の前に、死神がゆらりと歩を刻む。

「こいつはただの鋼鉄なまくらだから、お前さんの楼観劍物干竿みたいに一振り十殺なんて訳にやいかないが——あたいを誰だか忘れて貰っちゃ困る。幽霊の相手は慣れてるのさ」

鋭さは剃刀に勝り、その一撃は斧よりも重い。氷雨を切り裂き、嵐の如く振り回される大鎌。その根元に括り付けられた白黒の珠が鈍く光る。

悔悟珠。打たれるものの罪を、重さと打撃に変換する、閻魔ゆかりの宝物だ。夜摩代行を許された死神の鎌は、いまやその力を備えていた。

地面を断ち割り、大木を打ち砕くその破壊力は、そのまま相対する妖夢が魂に刻む罪業である。

「さあ。——あんたの罪を数えな」

超重長尺の大鎌を、枯れ木のように振り回し。赤毛の死神がさらなる一步を踏む。地面は泥どろごと跳ね飛ばされ、庭の木々はまとめて薙ぎ払われる。

相対する相手の罪を、防御の上から打ち砕く鎌刃は、さながら地獄の断頭台。妖夢は身体ごと宙に吹き飛ばされ、泥に塗れて激しくせき込んだ。

同時——びしり。柄を握る手に違和感。

「……………っ!？」

咄嗟に受けた楼観劍に、いくつもの刃こぼれが起きているのを見て、少女は戦慄する。

ただの二合。鬼と打ち合い、鶴を仕留め、仏陀の化身と戦ってなお傷一つかなかった、白玉楼を守る堅牢な大太刀は、見るも無残に姿を変えていた。

「どうした？ なにか嫌なことでもあったかい？」

泥に塗れる庭師に対し、死神は容赦なく鎌を振るう。無造作な旋回で軌道にある大岩を両断し、鋭い鎌の切っ先が、死の流星のごとく妖夢に迫る。

これ以上、剣では防げない。首を狙う容赦のない一撃から、反射的に体を仰け反らせ、辛うじて死の切っ先を躲した——かに見えた刹那。

「避けりや済むって話でもないねえ」

ゆらりと軌道を変えた大鎌の先端、波打つ鎌の刃は、鉤爪のように妖夢の服を絡め取った。

鎌の刃先で少女の身体を吊り上げて、小町は叫ぶ。

「そおらッ!!」

力任せの怪力任せ。一本釣りでもするような無造作具合で、死神は大鎌と共に妖夢を振り回した。

雨の地面に、苔むす岩に、枯れた木の幹に。少女の身体は、受け身も取れぬまま次々と叩き付けられた。衝撃に肺の中身を絞り取られ、背中の激痛に息を喘がせる。

「っが……は、っ」

一瞬、手放しかけた意識を、なお懸命に繋ぎ止め。妖夢は半霊を繰り出して小町を牽制。同時に逆手の白楼剣で胸元の服を引き千切って、鎌先の拘束を脱した。

激しく急きこみながら、身を丸め、降りしきる雨の中

を鋭く跳ねて距離をとる。

「それで逃げたつもりかねえ」

そこを狙い澄ましたかのように、小町の大鎌が振るわれた。地を這うように奔る死の刃が、着地の一瞬で無防備となった足元めがけて放たれる。

(まずい……ッ)

地面すれすれを薙ぐ鎌の内側に、折れた鞘をねじ込み、どうにか足首を落とされるのだけは避けるが——小町は鎌先を巧みに操り、刃の軌道を足払いへと切り替えた。泥の波が跳ね、足を払われた少女の身体が宙を泳ぐ。

「そおら、また上がお留守だ」

仰向けに転がされた妖夢の視界に、頭上高く振り上げられた大鎌の刃先があった。

降り注ぐ雨と共に、死の大鎌が振り下ろされる。

起き上がる暇などなかった。加速させた半霊を己の体に押し当て、その衝撃で宙に逃れた妖夢の足元を掠め、大鎌が大地へと叩きつけられる。

幅広の刃は、根元まで残らず地面にめり込んだ。その

威力に戦慄し、妖夢が身を震わせた刹那。

頭上より振り落とされた、巨大な紫の刃が、妖夢を大地へ叩き落とす。

——死符「死者選別の鎌」

断罪の符の宣言は、一泊遅れて飛んできた。派手な泥飛沫が舞い、一瞬遅れて半霊までもが大鎌の餌食となる。

降り注ぐ雨が強さを増し、雨煙が濃く庭園を覆い隠す。濃灰の中、滴る鮮血は緋色に鮮やか。鎌先からぱっと飛び散る血飛沫が、雨の中を彩ってゆく。

肩に大鎌を担ぎ上げ、悠然と立つ小町の前。

深手を負った左手を押さえ、妖夢はもがくようにして身を起こした。

（——強い……）

戦慄と共に口の中に広がる鉄の味。喉にせり上がる悲鳴と激痛を吐き気と共に飲み込んで、少女は懸命に歯を食い縛る。

滲む目元ごと、顔の泥をぬぐい、妖夢は左肩を引きずるようにして、懸命に楼観剣を構えた。

「っ、ああああああー」

これ以上受け手に回ってはいられない。裂帛の気合いと共に踏み込み、右手一本で大太刀を振るう。

雷鳴のごとき横薙ぎ一閃が、降りしきる雨を裂く。

が、小町は無造作に振り下ろした鎌の尻でそれを弾いてみせた。

「……遅い」

罅迫り合いなど無駄とばかり、ぐんと押し込まれた大鎌の峰が圧倒的な超重量で少女を吹き飛ばし、くるんと返した柄が槍のごとくに下腹を打ち抜く。

腹を打たれた激痛に、妖夢はたまらずその場に嘔吐した。反吐を吐きまとも無様に倒れ伏す妖夢に、死神は小さく首を横に振ってみせた。

「鈍い、温い。駄目だ。全然駄目だねえ」

これが、彼岸の——死後の世界を司る、死神。

（……刃筋が、見えない……）

距離を操る程度の能力。

赤毛の死神は、その力をもって戦場に君臨していた。遠近前後を自在に操る死神の前において、間合いなどあってなきが如し。妖夢がどれだけ速かろうと、小町に近づくことはできず、死神の鎌は一切の距離を無視して妖夢に届くのだ。

およそ、あらゆる間合いの外側から、死は無条件に訪れる。

それこそが生者の命に終焉を刻む、死神としての在り方なのだろう。死は多くのモノにとって絶対であり、避け得ぬ運命だ。

彼女達死神の戦い方とは、つまりそういうものだった。

「く……」

焦りと共に、妖夢は剣気を弾幕として前方へ撃ち放つ。距離を取り、体勢を整えるための時間稼ぎだったが、小町は意に介す事も無く鎌の柄尻を地面に突き立てると、開いた左手に、袖の中からじやらりと何かを握り込む。

「宵越しの銭にするにや、ちよいと勿体ないが——」

刹那、変則的な横薙ぎの投擲で、打ち出されるのは古銭の弾幕だった。重い響きを残し、実体を持つ指弾が妖夢の右眼に直撃する。

「っぐ、!？」

強烈な衝撃に頭蓋が揺さぶられ、視界が震える。

遠くなった意識を刈り取るように、立て続けに降り注ぐ金属の雨が容赦なく妖夢を襲う。

その額面は、一銭硬貨四枚と、五銭硬貨一枚の組み合わせ。

「死線四銭と苦戦九銭、幽霊にやそう簡単に越えられるもんじゃないさ」

——半分だけとはいえ妖夢も幽霊だ。三途の河の渡し賃として淨財となった冥府送りの六文銭は、成仏せず留まる幽霊には強い補正効果を持つ。

ただ撃ち、貫くだけの通常の弾幕とは違い、実体を持つ弾幕は掠めただけでも服の裾を絡め、自由を奪うのだ。

銭弾の四連射が胸、頬、顎、左腿をたて続けに撃ち抜いて、強烈な衝撃を叩き込む。弾体の芯に金属を含む小

町の指弾は、通常の弾幕よりも遙かに重く、鋭かった。

「か、ふ」

少女の吐く息に、血の痰が混じる。錢弾の直撃を受けた右眼が見る間に熱をもち、腫れあがり始める。

刀を杖代わりに、倒れ込むことだけは耐えて踏み止まる妖夢。だがその視界を横切るように、ひとつ、ふたと鬼火が灯る。

「さて。いい加減すっかり冷えちゃった。こんな茶番、そろそろ終わりにしようかね」

迷わず生きた人霊、浮かばれない地縛霊、怠惰に生きた浮遊霊。ゆらゆらと青白い光を揺らす、鬼火たちの群れ。紅く染まり、半分だけになった視界の中、霊たちは次々と妖夢の手足に絡みつき、半霊部分から干渉してその動きを封じてゆく。

「……どこに……!?!」

無数の鬼火の向こうに、いつしか小町の姿を見失い、妖夢は焦る。腫れた目を無理矢理開け、慌てて気配を探ろうと周りを見回したその刹那。

周囲一面の地縛霊たちが一斉にはじけ飛び、閃光が少女の視界を灼く。

「っ——!?!」

「人に非ずとも、妖に非ずとも。死の安らぎは、誰にも等しく訪れる」

——その、光の中。

無間の距離を零にして。黒衣の装束を翻し、死神の鎌が音もなく少女の腹を薙いだ。

——薄命「余命幾許も無し」

静かな符名の宣言と共に。

波打つ鎌が、妖夢の身体を断ち割ってゆく。

ざんざんと振り抜かれた刃を追うように、一面の鮮血が森の中に飛び散った。

「……あ、……」

絞り出されるように、声にならない叫びが喉を震わせる。身体だけではない。生命も、気力も、霊髄をも千切

り斬る無慈悲な一刃が、妖夢の全身からぐっそりと熱を奪い去ってゆく。

「だからどうか、畏れる勿れ、死神の名を」

腹を真一文字に薙かれ、泥に塗れて伏す妖夢の耳に。

夜摩代行証を掲げる死神の宣告は、もはや届いてはいなかった。



どれほどの時間が過ぎたのだろうか。

泥の中に倒れ、冷たい雨に打たれるままの妖夢の前で、小町はただじっと、鎌を担いで少女を見下ろしていた。

生死を見定める死神の目が捉えるのは憐憫か、悲哀か。

泥に混じる血は赤く、脈打つ霊髄が少女の体からこぼれてゆく。猛烈な倦怠感と共に、気力までもが流れ出していくかのようだった。

右眼が全く開かない。灼けた顰でも押し当てられたように眼窩が熱く疼き、頭の奥にまで激痛を響かせる。

じくじくと疼く腹の傷からはとめどもなく血が溢れ、泥水の中に鮮やかな徒桜を咲かせていた。

「ぐ、う……」

がほりと泥を吐き出し、濡れた地面を掻きまわりながら、妖夢は懸命にもがく。雨に濡れた前髪が張り付く、左半分だけの視界の向こうには、鍾馗水仙の紋と共に、葬送の装束を纏う小町の姿。

ほんのわずか、手を伸ばせば届きそうな赤毛の死神までの距離が、恐ろしく遠い。

どれだけ走っても、どれだけ剣を振るっても、小町にはまったく届かない。ひたすらに鍛えてきた剣の技が、何一つ小町には通じなかった。

「もうやめな。勝負は付いたよ」

「……………っ……。まだ……っ」

喉元にこみ上げる熱く苦いものを無理矢理嚥下して、妖夢は楼観剣の柄を泥の中に突き立てた。冷え切った身体を引きずるように、剣に縋って起き上がる。

膝立ちになろうとした庭師の少女だが、すぐにその足

を小町の鎌が跳ねあげた。

半分見えない視界では対応などできようはずもない。

綺麗なほどに宙を転び、再び泥の地面に叩き付けられる妖夢は、それでも起き上がることを諦めなかった。

激しく咳き込み、言うことを聞かない膝に拳を叩きつけ、鉛のように重い身を起こす。

(……立て。立て！ 動けっ！ 半人前でもなんでもいい、それくらいしか取り得がない身体なんだ、この程度で諦めるな……!!)

妄執でも、妄念でも、なんでもいい。力になるならなんだっていい。何もかも道半ば、半人前の未熟な自分に行き届くことがあるとするなら、死力を尽くす事だけだ。

未だ道遠く、力の及ばない剣だとしても。ここで膝を折ることは、これまでの己の全てを否定することだ。

折れた手足、いくつもの深手、見えない右眼。激痛と苦悶の中、それでもなお、妖夢の胸にはほのかな暖かさが残っている。

諦めなければ勝てる、なんて単純な話に通じるわけな

いのは解っている。

けれど、勝負において負けなかった者は、すべからず諦めなかったはずだ。

「私は、未熟だから……っ」

動かない足に喝を入れ、懸命にもがく。声を絞り出し、無様に何度でも身を起こす。この胸の暖かさのために。あの日垣間見た、春のために。

『——ねえ妖夢。』

西行妖は、どうすれば咲くのかしらね』

「この剣を。お祖父ちゃんとの、幽々子様との毎日を、無駄だったなんて諦めるには、まだ、修行が足りないんだ……!!」

真っ直ぐに。見えぬ右眼は振り棄てて、動かぬ左手をだらんと下げ、右手の楼観剣を握り締め、妖夢は小町に

相對した。

ばしゃん。泥を跳ね上げ、庭師が走る。

片手一刀。下段からぴんと跳ね上がった楼観劍の刃が、弧を描いて小町の胸元へと迫る。

が、それは死神の予想の中だった。

悠然と二百由旬を薙ぐ死神の一閃が、四尺七寸の大太刀の切っ先を反らし、翻って妖夢の胸元を扶る。

「まだっ!!」

胸の傷をもものともせず、空を斬った劍撃の勢いをそのままに、妖夢は身体を一回転させてそのまま二撃目の斬り上げを打ち込んだ。ぎりりと柄元を握り締め、またも迎撃に振り落とされる死神の大鎌を掻い潜りながら、踏み込みと共にさらに、もう一撃。

「……………ッ!」

だん、と靴底を擦り減らし、深く踏み込むとともに、ひたすりに走る。

距離を操られ、届かないのなら、なお速く。小町が音よりも速く離れるというなら、それよりもさらに速く。

真っ直ぐに追いつき、ぶつかただけだ。

劍の鍛錬に負けないほど、朝から晩まで繰り返した、庭師の務めを信じ、妖夢は駆ける。

(私には、それくらいしかできないから)

見えない目の死角から放たれた迎撃の錢弾が肩を、腿を打ち抜き、妖夢の身体はぐらりと傾ぐ。だが、齒を食いしばり、息を飲み干して、庭師は止まることなく前へ。

「……………!」

はじめ、小町が動揺を露にする。

纏わりつこうと押し寄せる浮遊靈の群れを、白楼劍の一閃が斬り払う。動かない左手の代わり、もう半分の刀を握るのは、庭師の横に追走する半霊。霊と人と、己を形作るそれぞれに背を預け合い、少女は乱れ飛ぶ錢弾幕を弾き返す。

(だから、恐れるな!)

——恐れる勿れ、死神の名を。

そっだ。

死神は、生きることを諦めた者の所へとやってくる。



だから妖夢は、愚直に、ただひたすらに諦めない。

無限に伸びる彼我の距離を、なお全力で。二百由旬を一息に奔り、渾身の踏み込みと共に前へ出た妖夢の爪先が——ついに苦戦と死線を越えた。

降りしきる雨雫が、少女の疾走の衝撃に弾け、飛沫となつて散る。

——転生剣「円心流転斬」

庭師の銀髪は残像すら残さずに、音を置き去りにした。半人半霊、左右に構え交差した白刃が煌き、見開いた妖夢の双眸が、宙に踊る雨の雫の向こうに赤毛の死神の姿を捕えた。

地面に広がる水面に、一際大きな波紋が跳ねる。

「う、おおおおおおおおお!!」

「ちいッ!」

咆哮を轟かせ、妖夢の憐気は実体をもって、左右からの斬撃に変じて小町を襲う。これを打ち払うには一手で

は足りず、小町は鎌の柄を左右に振り、柄頭と鎌尻を渦のように旋回させ、無数の斬撃を弾く。

そこへ半霊の握る白楼剣の切っ先が深々と突き出された。咄嗟にかち上げた鎌の刃が、迷いを断つ刃にぶつかつて硬い火花を散らす。

「く、っ、おおあああああああッ!!」

繰り出される鎌の連撃の中、妖夢は喉から気合いを叫びと共に絞り出し、ありったけの速さで小町の懐へと斬り込んでゆく。

——断迷剣「迷津慈航斬」

練り上げた剣気を纏わせ、自身の刃渡りとなった楼観剣を、晴眼に構え、渾身の力で振り落とす。後を考えぬ大振りの一撃に、小町は幸いと距離を取った。

だが、妖夢の狙いは彼女本人ではない。地面に叩き付けられた楼観剣が大きく地を穿ち、雨に緩んだ柔らかな土砂を巻き上げて、泥の遮幕を生んだ。

「——ちい、っ」

妖夢の研ぎ澄まされた聴覚が、小町の舌打ちをはっきり捕えていた。

距離とはつまり、二つのもの間の間を示す指標だ。狙う相手の姿が見えなければ、そことの距離を測ることはできず、操ることも不可能となる。

反射的に小町が繰り出した鎌の切っ先は、これまでの精度が嘘のように間合いの甘くなつたものだった。土砂の膜に覆われて、目分量で振るわれた鎌の柄を、妖夢はなんなく柄頭で受け止める。

「まづった……!!」

顔をしかめ、錢弾を撒きながら後ろ飛びに退る小町を、妖夢は真っ直ぐに追いかけた。

逃げる小町、追う妖夢。攻守は逆転。もはや戦局を支配するのは、二百由旬を自在に駆け巡る庭師の俊足一つ。

(……っ)

さらに速度を上げる妖夢を見、小町はついに足を停めた。離れても追いつかれると悟つたのか。

大鎌を構える小町に、妖夢は一刀を手に低く踏み込む。痛めた左足の悲鳴に構わず、鞘なき居合の一閃を、黒衣の死神めがけ——

「——そうやって、ッ」

しかし。

刻薄で、残酷で。激しい叱責は、意識の外から妖夢の耳に染み込んできた。

「真っ向真正面、馬鹿正直に斬り込めば、絆されると思つたかいッ!!」

——代理審判「ギルティ・オワ・ノットギルティ」

白黒の暗転に視界が明滅する。

握りしめた楼観劍の柄が、突然に軽くなつたのを妖夢は感じた。直後。

ぱきん。十夜斬、四尺七寸の刀身が、澄んだ音を立てて折れ砕けた。

「……………え？」

二つに折れた冥界守護の大太刀が宙を舞う。死神の胴を真一文字に薙ぐはずだった一撃は、空振りと共に宙を掻いた。

(なん、で……!?)

鬼と打ち合い、明王の打撃を受けても無事だった刀が、なぜこうまでもあっさり。驚愕に目を見開く妖夢の前で、折れた楼観剣は泥の中に沈む。

「無茶させればさせるほど、刀に無理は溜まるのよ」

脳裏に、小傘の忠告がよぎる。

刀の寿命。

小傘によって両手で振るうように砥ぎ直された大太刀を、ずっと片手で振るい続けたことの反動が、ここにきて限界を迎えたのだ。

赤毛の死神は、物の寿命を見る死神の目でこれを察したのだ。長い攻防の中で、これが決定的な瞬間となるよう戦局を見据え、妖夢を懐に誘い込んだのである。

「——ッッ」

ぞわり。背筋を這い上る戦慄に、妖夢は思わず顔を振り仰いだ。

視線の先。赤毛の死神は片手に持った六尺余の大鎌を、風車のように凄まじい勢いで回転させ始める。

降りしきる氷雨がそれに巻きあげられ、大木が梢を揺らせて軋み出した。

たちまち竜巻のようにごうごうと風音を切って、うねる大鎌が、龍のごとき咆哮を上げる。

妖夢は咄嗟に、半霊から白楼剣を受け取って構えようとすが——背後から忍び寄った鬼火が、少女の手を取り巻いて着弾する。

霊撃の威力にふらつくそこへ放たれる痛烈な銃弾幕が、庭師の手から迷断の短剣までをももぎ取ってゆく。

「……………あ」

庭師の誇り。白玉楼を守る双剣を一度に失い、気圧されるように後ずさる妖夢に。

小町は竜巻のごとき旋回の勢いに乗せた、破壊の大鎌

を斜めに振り下ろした。

「終わりだ、妖夢ッ!」

ありったけの力を載せて、二百由旬を薙ぎ払う死神の一閃が、力なき妖夢を前に放たれる。

抗するすべのない半人半霊の少女を、真二つに引き裂かんとする無慈悲な断頭台。

### ——魂符「生者流離の鎌」

絶対の終焉が押し寄せる。

死と生を断ち割り、幽冥を断絶する迫る死の刃に。

妖夢がしたことは、膝を折るのではなく、目を閉じるのではなく。

革帯の腰裏、右腿の鞘に納めていたものへと、手を伸ばすことであつた。

「——、まだ、あッ!!」

激しい戦闘の中でも、片時も離さずに携えていたのは、この一年間、妖夢がひたすらに打ち込んだ執念の具現。

小傘のもとで、己の全てを継ぎ込んで、打ち鍛えた、たった一つの魂魄妖夢の刃。

それは、己の体軀に合わせて打った二尺余寸の刀ではない。

師から継いだものでも、魂魄家に伝わるものでもない。妖夢がこの数年をかけ、悩み、考え、出した答えを信念のもとに打ち上げた刃だ。

迷いを断つ白楼剣と、妖怪を斬る楼観剣。

半人半霊どちらも半分、二人で一つの半人前。

庭師と剣士、冥界守護の要たる二つの役目。

妖夢にとって大切なものはどれも、どちらが欠けてもならぬ、重ね繋がる二枚の刃だ。

ゆえに。妖夢が選んだ形もその具象たる、庭師の双刃であつた。

すなわち——挟。特上の幽蒼鋼より打ち出して、地獄の炎と、庭木の鬼火で鍛えた、幽霊桜を斬る剪定鋏。

右手に握り、突き出した剪刀の切っ先は。

流星よりも疾く空を駆ける、死神の鎌の柄を捉え、狙い過たず両断していた。

「な——ッ!？」

「おおおおおおおおおおおッ!」

刃の根元を断たれ、跳ね飛んだ大鎌の刃が、がらあと地に転がり落ちる。

その時には、妖夢の身体は小町の内懷、胸元へと肉薄していた。

片手片脚の満身創痍を、半霊の脚場で補って。裂帛の気合と共に放たれた折伏無限の柔は、死神の身体を地へと叩き伏せていた。



「……あーあ。参った参った」

力の入らない手足を地面に投げ出し、降りしきる雨に打たれるがまま、小町は小さく息を吐いた。

濡れた前髪を掻きあげて、頬を打つ雨霰に目を閉じる。

命にも関わりかねない深手の手当てもそこそこに、折れた剣を背に括り、深々と一礼して走り去っていった庭師の少女の背中中は、既に霞みの向こうに消えていた。

空はいまだに分厚い雲に覆われて薄暗いが、降り続く雨はもう凍ってはいなかった。

「割に合わないったらないよねえ。妖忌の奴が下手に格好つけるからとんだ貧乏くじだ。今度会ったらただじゃおかないよ。」

……四季様に叱られちまつかなあ、こりゃ」

小さく笑いながら、小町は独白を続ける。敗北のあとだというのにその表情はどこか爽やかだ。

——あるいは、これが彼女の望む結末だったのだとも言つように。

「因果な商売だよ、死神ってのは。……長くやってりややつてるだけ、死んで欲しくない奴が増えちまうんだからね」

特にこの幻想郷じゃ尚更だと、自嘲するよつに微笑ん

で。小町はもう一度、妖夢の走っていった方へと視線を向ける。

「頑張りなよ、妖夢」

もう見えないその小さな背中に、死神はそっと声援を送って、眼を閉じた。



雨はなお続き、二百由旬の庭と共に西行妖を濡らしていた。頬に感じる傷から、血が雫となって溶けだしていくのを感じながら、妖夢は枝を濡らす西行妖へと向き直る。

「……………」

少女の姿と言えば、もはや満身創痍もいところ。楼観白楼の二刀は折れ、全身至る所に刃傷。腫れあがった右眼はどす黒く色を変えはじめ、ロクに開くこともできないままだ。

満足に無事な手足もなく、支える気力もほとんど残っ

ていない。死神との決闘を潜り抜け、深手と濃い疲労の中、走るのもやっとの身体を引きずってここまで辿り着いたのだ。

そこは、冥界二百由旬の庭の片隅。濃い雨の中にも薄れる事のない、強い死の気配が満ちる場所。

千年に渡って冬の中に隔離された桜は、やはり孤独の中にあった。

曇天の下、色を失い、薄墨に塗り込められたかのように黒々と聳える古木を、妖夢はじっと見上げる。

「――」

目に見えぬ怨嗟が咆哮を上げ、人を招き死に寄せんとするかのような威圧感を前にして、庭師の半分だけ人間の身体も悲鳴を上げる。

この桜を、死の象徴としたのは誰なのだろう。

その美しさに魅入られた人々だろうか。怖れて遠ざけた者たちだろうか。望み果てて命を絶った者たちだろうか。遠い春の中に幽明の境を分かった歌聖だろうか。

今は窺い知ることのできぬ古桜の歴史に想いを馳せ、

妖夢は懷を探り、激闘の最中もずっと胸に抱いていた、ささやかな春度を取り出した。

妖怪桜を咲かすには、とても届かぬわずかな春。人里との往復の中、枯れ耐えた木々や朽ちた洞から、ほんの少しずつ集めた春の欠片である。

あの日。幽々子からそっと受け取った、桜を染める春の欠片。胸に残る暖かさと同じ、魂魄妖夢のはじまりの一步。

冷えた指先に暖かさが染みる。ほんのりと色づく春の色合いは、降りしきる霏雨の中では見惚れるほどに鮮やかだ。

「……………」

こくり。静かに頷いて。

妖夢は枯れ聳える妖怪桜の根元へと、その春度をそっと注いだ。季節の断片は雨の中、たちまち暖かな春の灯をともし。

ささやかな春を吸い上げ、旧き墨染の桜はほんのわずか、大きな梢を揺らせたように思えた。

既に力なく震える指に、啞えた晒しをきつく巻き付け。妖夢は己の鍛えた剪定鋏を構える。

「——西行妖」

主と共に千年を優に超えてきた、物言わぬ妖怪桜の名を、敬意と共に呼んで。

「……私も、あなたのそばにいる。だから——」

少女の誓いの言葉と共に、振るわれた庭師の双刃は。妖怪桜の一枝を、鮮やかに斬り落としていた。

## ▼ 六

季節は巡り、いまや五月も半ばを過ぎようとしている。初夏の装いに染まる冥界には、今日も避暑を求めてやってくる顕界の者たちが後を絶たない。

勝手に宴会を始めようとする不埒者への対応に追われる幽霊たちが忙しくそこを走り回る、そんな冥界の片隅。

夏へ移り変わる季節の中に彩られた白玉楼の廊下で、優雅な妖傘を翳した少女の声が響く。

「こんにちは、幽々子」

「あら紫。久しぶりねえ」

春の景色にばかりと空いた深遠なる隙間から、姿を見せるは妖怪の賢者。すきま妖怪八雲紫は、縁側でお茶を楽しむ幽々子の隣へと腰をおろした。

「今年はずいぶん寝坊助だったのねえ」

「途中で何度も起こされたからねえ。二度寝くらいじゃ寝不足よ」

開いた扇に欠伸を噛み殺し、千年来の友人の隣で当然のようにお菓子に手を伸ばす。

「変わりはないか？」

「ええ、いつも通り。藍ちゃんの代わりに何度か可愛い猫式さんが来たくらいかしら」

「ようやくあの子も後継を考えるようになったのねえ」感慨深げにうなずき、紫はふと視線を上げ、幽々子の胸元を飾るリボンに目をやった。

いつもの紺染めとは違う、穏やかな春の桜色。

かわりと春霞みの香りすら漂わせるような、色鮮やかな春の彩りに重ねて、幾重にも桜の花の刺繍も施されている。丁寧な作りは、作り手の丹念な仕事を感じさせた。

リボンの端を淡く墨染めに変える色合いに、紫はふむと眉をよじる。

「いつもとは違う春が来たのかしら？」

「ふふ、いいでしょう。お気に入りなのよ」



幽々子はふんわりと微笑み、細い指でリボンをつまみ、誇らしげに胸を逸らす。

桜は春を前にして、その開花のための色を、枝の中に蓄えるという。その枝を開化の直前に切り落とし、煮出した染液から丹念に灰汁と汚れを除き、糸を染めて作るのが桜の春染めである。

「……………」

さあ、と吹き抜ける初夏の風に、桜染めの春がさらさらと揺れた。そっと自分の髪を払いのけ、幽々子は庭の向こうへと視線を向ける。

背と腰に二刀を、革帯には鋏を納め、難しい顔で庭を眺め。岩を動かし、苔を削り、張った枝を落とし、砂利を掃いて。

くるくると表情を変えながら、忙しく走る小さな庭師。その銀髪を止めるのは、主とお揃いの春色リボン。

小さな背中を愛おしげに眺めながら。春の亡霊の唇が、くすりと笑みをこぼした。

「白楼に　こぞの枝折の　道かへて」

ちらりと視線を向けられ、紫は扇子を閉じて、小さく吐息。

「楼観のもと　花を尋ねむ」

「……お見事」

小さく拍手をする幽々子に、紫は複雑な顔で何かを言いたそうにしていたが、やがて諦めたようにそれを飲み込む。

「いい天気ねえ」

もはや、この冥界に冬はなく。

千年を経て春を待ち続けていた墨染の桜は、冥界の主従二人のもとで、溢れんばかりの春を咲かせていた。

華胥の櫻、墨染の君　（了）

# 「あとがき」

はじめまして、あるいはお久しぶりです。

折葉坂三番地の銅折葉と申します。このたびはお手に取っていただきありがとうございます。

この本、『魂魄妖夢四番勝負』は、白玉楼の庭師・魂魄妖夢が鬼や鶴や仏や死神と、血沸き肉踊る痛快チャンバラスペカ勝負を繰り広げる、当サークル42冊目のSS本となります。

半人半霊、半人前と呼ばれ、ときに空回りしながらもひた向きに進む少女の魅力を、少しでも引き出せていますかどうか。楽しんでいただけましたら幸いです。

今作の表紙は、動画サイトで注目の「演目土蜘蛛」シリーズや、地底の人妖模様につつまれる素敵なお話の作者さんであるサバ缶様に描いて頂きました。決意を前に進む力強い妖夢の後姿という素晴らしいイラストをいただきました事を、心より感謝いたします。

……実は題字もお願いしてしまいました。本当にありがとございます。

さて。続きまして、折角の機会ですので各編についても少し解説を。

## ・「魂魄妖夢鬼退治」

収録作の中では一番古いお話です。何度か改稿していますが、初稿を書いた当時はまだ茨歌仙が始まる前でした（もうそんな昔か……）。

作中、勇儀はかつて大江山にいた当時、茨木童子に惚れていたものの、萃香と茨木が恋仲であることを知って黙って身を引いたという過去を設定していました。彼女は鬼として自分の気持を偽ったことをずっと気にかけっており、地底でのまとめ役を引き受けたり、パルスィを好くようになったりする経緯などに影響しているという設定があります。

お互い本気を出してからの名乗り口上を書くのがものすごく楽しかったのが今でも印象深く、作中を通じても

屈指のお気に入りシーンです。

・「妖夢討夜鳥事」

拙作、ぬえ&源頼政の長編「悲しきかなや身は籠鳥」を書くきっかけになった一作です。妖夢は怪談などが苦手という設定を軸に、正体不明の怪物をいかにして斬るのかを思案するうち、弾幕による命名決闘とはなにかにまで踏み込むお話となりました。相棒として出した鈴仙を銃撃戦もこなせるメディックとして位置づけたく思い、いろいろ苦労した覚えがあります。後になって彼女の愛用の武器は月面製と思われるスペシャルなものだということが分かりましたが、まあ普段は別のモノを使うこともあるよと言う解釈でご容赦いただければ。

このとき小傘を出したのは、妖夢が肝試しの訓練をするためのお化け傘であるからという以上の理由は何もなかったんですが、まさか後に茨歌仙であんなこと(後述)になるとは、実に面白いものです。

・「命蓮寺六道問答」

本書のための書き下ろしです。白蓮と若き日の妖忌が出会っていたというのは、冥界の歴史などを眺めているうちにちょうど同じ「千年前」というワードで思いっきました。

妖忌が庭師になったのは三百年前という中途半端な時期で、西行妖の他にも何か理由があったのではと考えた末、それまでの自分の剣では太刀打ちできなかった相手に勝つため模索していたのではないかと発展していきました。白蓮の人格設定などがすこし極端になったかなと思いつつも、星蓮船での復活した時の公正無私な慈愛の人という印象から、心綺楼で宗教家として人前で活躍する姿を見せ、深秘録ではすっかり幻想郷のテンションではっちゃけるようになったのには、やはり何かのきっかけがあったのではないかと考えています。

なお、個人的に美鈴は今回の最優秀助演ではないかと思っています。彼女の大陸流浪時代の話とかも書いてみたい。

・「華宵の櫻 墨染の君」

もともと、このプロットにおけるお話の初出は「魂魄妖夢鬼退治」と「妖夢討夜鳥事」の間になりますが、その時の内容はかなり今とは変わっていました。初稿では鬼との戦いを経た妖夢が次に戦う相手として小町を生かし切れたとは言えず、今回の収録にあたっての大幅改稿に繋がりました。中盤まではほぼ書き下ろしです。

桜の枝染めのスカーフは実際にこの通りに作られるものということであり、私はこのモチーフが大好きで、いつか西行妖でやりたいと思っていたものでした。

実は改稿前の原稿では最後に桜染めスカーフを受け取った幽々子が、そのまま妖夢の髪に結ぶという展開で終わっており、実は二人の心はすれ違いのまま問題が解決していないという締めかただったんですが、神霊廟での二人の再登場などを元に考えを改め、今回のラストに繋がりました。再加筆にあたってさらに細かいところが変更されております。もしよければ差異をお楽しみいただ

けるとたいへん嬉しい限りです。

さて。長いお話のあとにさらに長々とお付き合いいただきありがとうございます。

本作の執筆にあたりまして、数々の冥界二次創作に影響を受けております。お世話になりました皆様に、この場を借りてお礼をさせて頂きます。

——それでは。

また次の機会にお会いできることを願って。

【第二版あとがき】

この度、番外編頒布に伴いまして組版などを一新し、再版の運びとなりました。

初版時からいろいろ気になっていた後半2話について、いくらか内容を補足、修正等を行っております。毎度完全版商法で申し訳ない限りです。

妖夢を主人公に据えたバトルは書いていたいへん楽しく、何よりも彼女のまっすぐさに救われることが多いように思います。本書を手にとっていただいた方が、少しでも楽しんでいただければ幸いです。

——それでは。

また次の機会にお会いできることを願って。

## 【奥付】

### 「魂魄妖夢四番勝負」

初版:平成29年5月10日 博麗神社例大祭12

第二版:平成29年5月7日 博麗神社例大祭14

オルハザカサンバンチ  
発行 折葉坂三番地

(<http://oruhazaka.dojin.com/infoblog/>)

あかがねおりは  
著者: 銅 折葉(@domioriha)

表紙: サバ缶様(@sabakan8446)

(<http://www.nicovideo.jp/mylist/42099958>)

印刷所: (株)ポプルス

※本作は「上海アリス幻楽団」様の「東方 project」  
の二次創作です。





著：銅折葉／折葉坂三番地  
<http://oruhazaka.dojin.com/infoblog/>

表紙：サバ缶 様  
<http://www.pixiv.net/member.php?id=968206>